

栗田口霑笛竹（澤紫ゆかりの咲分）

栗田口霑笛竹（澤紫ゆかりの咲分）

三遊亭圓朝

青空文庫



## 一

さて今日こんにちから寛保かんぼう年間にございました金森家の仇討あだうちのお話で、ちとお話にしては堅くるしゅうございますから、近い頃ありましたお話の人情をとりあわせ、世話と時代を一つにして永らくお聞きに入れましたお馴染なじみのお話でございますが、ちと昔の模様でございまして、草双紙くさでうしじみた処ところもございます。栗田口國綱あわだぐちくにつなと云う名剣が此の金森家にございます。これはその北條時政ほうじょうときまさの守刀まもりがたなで鬼丸おにまると申します名刀がございました、これと原作でございます。かの國綱の刀の紛失ふんじつから末が敵討かたきうちになります。このお話の発端おこりは、寛保三年正月の五日でございます。昔も今も変りませんのは、御婦人は春羽根まりをつき毬まりについてお遊びなさいます。男の児こは紙鳶いかのぼりといつて凧たこを揚げるといのが春の遊びで、どこともなく陽気なものでございます。一体空を見るのは薬だということで、皆仰向あおのくような遊びでございますから、紙鳶をびい〜と揚げますれば、是非子供は空を見なければなりません。また羽根を突けば必ず空を見る。只今あの皆様が椅子にかゝつてコップで御酒ごしゅを飲あがる時は、仰向あおむいてグーツと飲まなければならんような事になつて居

りまする、つまり人間の健康のために致すことで、アノ羽根を突くのをよく／＼聞いて見ますれば、あれは蚊に喰われまいまじないだと申しました方がございますから、どういう訳かと質ねましたらば、子守が児を負いまして、カチーリ／＼と羽根を突くと云うと、むくれんじの玉の返る処が蜻蛉とんぼという虫に似て居りますから、蜻蛉返りと云つて、くる／＼と返る、蜻蛉とんぼと云うものは蚊を捕り喰う虫だと云うので、赤ん坊の頭を蚊に喰わさんがためにカチーリと羽根を突き、くる／＼と返ると蚊が逃げるんだそうですから、一体は夏つかなければならんものだが、何ういふ訳か正月羽根を突くことになりましたが、昔の羽子板は誠に安っぽいものでございます、只今でも何うかすると深川ふかがわ八幡はちまんの市で売つて居りまするのは、殿さま、かみさま、さんじやさまとか云う昔風の絵が書いて有りませんが、只今は役者の押絵で誠に美しい大きいのが流行ります。近年は羽子板の外へ刀を持つた手などの出たのが有りまして、羽子板の大きさが六尺三寸と云うので、まさか、朝飯前には中々持ち切れません、それでカチーリ／＼と突きますが、能く突けたもので、親おしえの教より役者の押絵の方が大事だと見えて、

女「いえ、これは貸しません、私のは大切な新駒屋しんこまやのだから中々貸されません、似顔へ吉野紙を当てゝしまつて置くのですから」

男「そんな事を云わないで貸しておくれよ、追羽根おいばねをするんだから」

女「顔を汚すといけないからさ」

男「じゃア宜いいい、塵取ごみとりでも持つて来よう」

と正月は必ず追羽根を突きます。丁度其の頃湯島切通ゆしまきりどおしに鋏鍛冶はさみかじ金重かねしげと云う名  
 人がございました。只今は刈込かりこみになりましたが、まだ髻まげの有る時分には髪結床かみゆいどこで使う  
 大きな鋏でございます。鍛えが宜よろしいから、ジヨキリと一ひと鋏はさみで剪きれるが、下手な人の  
 こしらえた鋏で剪ると、バラ／＼に先が散ちぢばつて幾度こいても揃そろいませんから、また剪る  
 と額の処こまへ細こまかい毛がはら／＼落ちて、余りぞつと致しません。金重の鍛うった鋏はジヨキ  
 リと一鋏で真直まつすぐに剪れるので大層に行われました。金重は六十五になりますが、無慾な  
 爺さんでございます。只ただ一人年寄子としよりごでお富とみと云う娘がございましたが極別嬪ごくべっぴんでござ  
 います、年は十八に相成りますが、誠に世間でも評判の好よい娘で、少し赤ら顔の質たちだが、  
 二重瞼ふたえまぶたで鼻筋の通った、口元の可愛らしい、笑うと唇くはと申してちよいと頬に穴があきま  
 すが、どういう器械であくか分りませんけれども、その穴は余程深く、二分五厘有ったと  
 云います、誰が尺を突つ込んで見たか、髪つやの毛の艶が好く、中肉中丈ちゅうにくちゅううぜいで、お臀しりの小さ  
 い、踵かかとの締とつた、横骨の引ひ込んだ上じょうものでございます。一人娘ゆえ秘蔵に致し氣儘きまに遊ば

して置きましたが、日暮方から羽根を突きに往つて帰りません。此の家に恭太郎という弟子がございましたが、親方にも当人にも年の分らない、色気もなく喰い気一方の臍拔な男でございます。金重は大人ゆえ愚なものほど愛して居りました。

金「恭太や〜」

恭「え〜」

金「お富は何処へ往たのう」

恭「表のての字の前で羽根を突いてたよ」

金「往つて呼んで来な、日が暮れるからさつさと御飯を食べてお寐なさいと云つて呼んで来な」

恭「あいよ」

と云いながら外へ出て参りました。その横町を真直に出ると、ての字と云う居酒屋の前が広く成つて居りまする処で、カチーリ〜とお富は友達と羽根を突いて居りまする傍へ恭太郎が来て、

恭「おい、お富さん、お富さん」

富「何んだよウ」

恭「あの親方がもう止せつてえから、羽根を突くのは明日<sup>あした</sup>におしよ、日が暮れると暗く成るよ、お飯<sup>まんま</sup>を喰べないと腹が空<sup>へ</sup>るとき、早く寐ないと眠く成るとき」

富「何を同じような事をいうのだよ、あいよ今直<sup>す</sup>ぐに帰るから少し待つておいで……きいさん上げますよ、宜<sup>よ</sup>うございますか、さア上げますよ」

カチーリとはずれで駈けて突く機<sup>はず</sup>みに通り掛りの人の腮<sup>あこ</sup>をポンと突きましたが、痛いもので、年始廻りの供の歸りが、首に大きな風呂敷を掛け、千草<sup>ちくさ</sup>の股引白足袋に雪踏<sup>せつた</sup>を穿<sup>は</sup>いた小僧が腮を押え泣声を出して、

小「あの娘でございます、突然<sup>だしぬけ</sup>に来て私の腮を払ったので、あいたくくく」

若「宜<sup>い</sup>いや仕方がない、腹ア立つもんじやアないよ」

小「腹ア立つツて立<sup>た</sup>ないツて、人の腮を払って置きながら謝りもしないで、彼<sup>あすこ</sup>処のお飾松の処へ隠れて、そうしてお前さん私を見て居やアがる、あんな奴は有りません、いや此<sup>こ</sup>処へ来て謝まれ」

若「そんな事を云うもんじやアない、笑い顔をしろ」

小「痛くつて笑い顔は出来ません、小言を云つて下さいよ」

若「彼<sup>むこう</sup>方も面目なくつて間が悪いから、慌<sup>あわ</sup>てゝお飾松の蔭<sup>かげ</sup>へ隠れたのだが、若<sup>も</sup>しお前の方

が板で彼方が腮ならばお前が謝らなければなるまい」

小「詰らない事を仰しやる、あたりまいでございます、小言を云っておくんなさいよ、私の腮を払われたから」

若「払われたら目出度いではないか、宅の安兵衛が去年の暮に払われないうつて心配をしてえたが、まだ松もとれないのに払われたら結構じゃアないか」

小「ウーン、掛廻りじゃアありませんし、若旦那はあんなことばかり云ってる、鳶頭小言を云っておくれよ」

鳶「おゝ娘さん冗談じゃアねえぜ、羽根を突くならもつと端ばたへ寄つて突きねえ、人に怪我をさせて何うするんだ、冗談じゃアねえぜ、広え処で羽根が突きたけりやア地面を買つて突くが宜いや」

小「鳶頭これ御覧、腮から鼻から耳へかけて払われたんだ」

鳶「それじゃア、正月の耳鼻腮痛だ」

小「鳶頭まであんなことをいうのだものを」

若「そんな事を云うもんじゃアない、何でも春は心を柔しく持つて賑やかにしてなければいけない」



と宥<sup>なだ</sup>めて居ります。息子の年頃は二十三四で、色のくつきりと白く、鼻筋の通った、口元の締った眉毛の濃い、薄く青<sup>あおひげ</sup>髭が生えて居りまして、つや／＼しい大結髪<sup>おおたふさ</sup>で、けんぼう行義<sup>ぎようぎ</sup>あられの上下<sup>かみしも</sup>に、黒斜<sup>くろななこ</sup>子の紋附を着、結構な金時<sup>きんとき</sup>絵の印籠<sup>いんろう</sup>を下げ、茶柄<sup>ちやづか</sup>に蠟鞆<sup>ろうだま</sup>の小脇差を差して居りますから、年始帰りと見えます。

若「さア／＼往<sup>い</sup>こう、これから腹を立つものじゃアないよ」

と小僧を宥<sup>なだ</sup>めている、物の云いよう男振りと云い、真<sup>まこと</sup>に情の有りそうなお方と世間知らずの生<sup>うぶ</sup>な娘もぞつと身に染<sup>し</sup>む恋風<sup>こいかぜ</sup>に、何処<sup>どこ</sup>の人だか知れませんが好<sup>よ</sup>い息子さんだと思います。初<sup>そ</sup>め、ぼんやりとして後<sup>うしろ</sup>姿<sup>すがた</sup>を見送<sup>みおく</sup>つて居りました。これが因果の始りでございます。

無闇に男振や顔形を見て人に惚<sup>と</sup>れべきものでは有りません。姿形じやア心意気が分りません。心意気を見ないで惚<sup>と</sup>れてはならんと圓朝<sup>えんあさ</sup>が咎<sup>とが</sup>める訳は有りませんから惚<sup>と</sup>れても宜<sup>よろ</sup>しいが、実は何処<sup>ちよう</sup>町何<sup>なん</sup>丁目何番地何<sup>たれ</sup>の誰と云うことを区役所へ往<sup>むか</sup>つて戸籍をあらつて、其の人の身分を調べた上に、智慧が有るとか財産<sup>かね</sup>が有るとか、官員に成つても勅<sup>ちよく</sup>任<sup>にん</sup>にでもなれる人には惚<sup>と</sup>れても宜<sup>よろ</sup>いが、只顔の綺麗なのを見て浮気な岡惚<sup>おかぼれ</sup>をするのは、今開化の世の中には智慧のない話でございますが、そこがそれ恋は思案<sup>しあん</sup>の外<sup>ほか</sup>で、お富は彼の<sup>あ</sup>息子は何処の方とも知らず、只何<sup>い</sup>時<sup>つ</sup>までも立止まつて見て居りました。

恭「おい、お富さん、だから親方が早くお帰りと云ったんだよ、お侍さんの腮などを払つて」

富「お侍さんじゃアないよ」

恭「でも上下かみしもを着て、はさみ箱を担いで、お檜を立てゝ居たぜ」

富「なアにあれば、年始帰りのお人だよ」

恭「早く家へお帰りよ」

富「今帰るよ、きいさん、みいちゃん、左様なら、また明日あした」

と云い捨てゝ宅へ帰つて臥ふせりましたが、何う云う因果か寝ても覺めても現うつゝにも、彼の息子の顔が眼先を離れませんで、漸々だん／＼鬱ふさぐような事に成りましたゆえ、親父おやじも心配いたしましたが、金重はもうこれ六十五でございます、不図風を引いたのが原因もとで漸々病が重くなり、僅わずか二十日ばかり煩わづらつて死みまか去りましたが、江戸表には別に身寄り親類も有りませんが、下総しもふさの矢切村から金重の妹いもとが出て参りました。お富のためには眞実の叔母ゆえ、後懇おねんごろに野辺の送りも済ませてから、丁度七日の逮夜たいやの日に、本郷春木町の廻りの髪結かみゆいで長次ちやうじさんと云う、色の浅黒い、三十二三になる小粋こいきな男が遣やつて参りました。

## 二

長「え御免ねえ、真平御免ねえ」

恭「あい、おいでなさい」

長「兄さんの名は何とか云ったつけ、ポン太さんじゃアねえ恭太さんか、親方にそう云っておくれ、去年の十月<sup>あつ</sup>逃<sup>あつ</sup>らえた二挺の銃はもう出来上ったかつて」

恭「銃は出来やアしないよ」

長「出来やアしねえって、親方が<sup>うけあ</sup>請合<sup>うけあ</sup>ったのだぜ」

恭「請合<sup>うけあ</sup>ったって出来ねえよ、何うしたって出来やアしねえ」

長「困るナア、出来なけれア出来ると云って請合<sup>うけあ</sup>わなけりやア宜<sup>い</sup>いに、困るナア、親方にそう云っておくれ、お老<sup>じい</sup>爺<sup>い</sup>さんは何うした」

恭「何うしたって眼を眠<sup>い</sup>って固<sup>い</sup>くなつて、冷<sup>い</sup>たくなつたから、桶の中へ入れツちまつたのだ」

長「フウーン……じゃアお老<sup>じい</sup>爺<sup>い</sup>さんは死んだのか、これはどうも惜<sup>おし</sup>いことをしたのう、名人を一人なくなしちまつた、日<sup>にっぽん</sup>本<sup>じゆう</sup>中の髪結<sup>ど</sup>が何<sup>ど</sup>のくらい困るか知れやアしない、そう

いう事と知ったら二十挺ばかり誂らえて置いて、後で売れば何のくらい儲つたか知れねえのに、惜いことをした、此の人は、斯う云う氣だから力を落さねえのだな、おいお老爺さんが死んだら困るだろう」

恭「ウ、親方が死んだって哀しくはねえが、親方のいる時分にア何か喰いてえと云えば直に買ってくれたが、親方が死んじやア何も買つて喰えねえから、己も一緒に桶の中へ入れて呉れろつてつたが、生きている中はいけねえつて入れて呉れねえのだ、いけアしねえ」

長「可愛そうに、それが人情だ、娘さんはさぞ力を落したろう」

恭「なにそんな物はおつことしやアしないよ」

長「さぞ泣いたろうね」

恭「毎日泣いてるよ、だからね、矢切村の叔母さんが出て来て、そう泣くんじやアない、今日は精進もんで御飯<sup>おまんま</sup>ア食わせるとよ」

長「そんなら今日は七日か<sup>なぬか</sup>」

恭「なに今日は二十六日だ」

長「は、面白いことを云う人だなア」

と云ううちお富は奥から店へつかくと出て参り、

富「親方おいでなさい」

長「誠に何うも、私<sup>わっち</sup>ア些<sup>ちつ</sup>とも知らなかつたのですが、今恭太さんから聞いて驚いたんですが、あんなに御丈夫でおいでなすつたのにね、とんだ事でござえやした、嘸<sup>さぞ</sup>まアお力落しでござえやしよう」

富「有難うございます、お誂<sup>おつ</sup>らえの鉢はまだ出来ずに居りまして誠に相済みません」

長「どう致しやして、鉢どこじやアござえやせん、実に惜いことをいたしやした、宝物をなくしたようなもので、何<sup>ど</sup>のくらい私<sup>わっち</sup>共<sup>ども</sup>は困るか知れやせん」

小「おい長次さん何うしたんだ」

長「あゝ恠<sup>びく</sup>りした、後<sup>うしろ</sup>から突然<sup>だしぬけ</sup>に突ツついちやアいけねえ」

小「おまえくらい怠ける髪結はないって、大旦那が大層腹ア立っているぜ、嘘ばかり吐<sup>つ</sup>いて丁場を明けたり、若旦那を遊びに誘い出したりして悪い髪結だつて」

長「嘘を吐いて明けるわけじやアねえが、此<sup>こ</sup>家の親方がおめでたく成つたので悔<sup>くやみ</sup>に來たんだが、明日<sup>あした</sup>は屹度<sup>きつ</sup>往きますから宜しく、また濱田へお使いかえ」

小僧はけゝんな顔にてお富を見ながら、

小「おや、この娘<sup>ねえ</sup>さんだ、此の間私が若旦那のお供して年始廻りに歩いた歸りに、私の腮

を払ったのは」

富「おやまあどうも、誠に相済みませんでした」

小「あゝ、この姉<sup>ねえ</sup>さんは口を利く、私は唾<sup>おし</sup>かと思つた」

長「何をいうのだ、それじゃア明日は屹度往きますから宜敷<sup>よろしく</sup>、左様なら、姉さん、あの小僧さんを宜く知つておいでゝすね」

富「なに此の間五日の日に、私が羽根を突きかけて、あの小僧さんの腮を払つて気の毒とは思いましたが、間が悪いから隠れてお詫<sup>わび</sup>もしませんでした、あなた宜くあの小僧さんを御存じですなえ」

長「私の大切<sup>わっち</sup>なお店<sup>だいじ</sup>で、紀伊國屋<sup>きのくにや</sup>という質両替屋です」

富「あなた其店<sup>そこ</sup>へ入<sup>いら</sup>つしやるの」

長「えゝ」

富「そこに二十三で色の白い好<sup>よ</sup>い男の若旦那がいらつしやいますか」

長「え、伊之助<sup>いのすけ</sup>さんと云う一人子息<sup>ひとりむすこ</sup>で好<sup>い</sup>い若旦那でさア、若旦那に済みません事でもございますか」

富「有るくらいでは有りませんの」

長「私は毎日往つて、撫で附けて上げ、一日置きに若旦那の髪を結います」

富「お前さんのような汚ない方が、おや御免なさいよ、あなたが若しその若旦那のお髪をお結いなさるのなら、過日羽根を突いて小僧さんの腮を払った娘がございますが、お詫をしたくも間が悪いのと悔りしたので、御挨拶も致しませんで、誠に馬鹿な娘と思召しましうが、間が悪いのでお詫も致しませんと、宜くあなたからお詫をなすつて下さいまし」

長「若旦那は男が好いから岡惚れをしてはいけません」

富「あら、そんな訳では有りませんが、お内儀がお有んなさいますかえ」

長「えゝ、嫁を探してるんだが、お世話アするような嫁さんがねえんです」

富「おつこちが有りましょうね」

長「そんな事はどうか知りません、だがね堅え子息さんでございますが、此の頃足を近く廊へどんくと花魁を買いに往つても、若旦那が惚れて何うの斯うのと云う方ではない、たゞ浮れに往きなさるが、ほんの保養で、松葉屋の八重花花魁を買つてゝ、これへ時々往くばかりなのさ」

富「花魁などと云うものは本当に仕合せでございますねえ、あんな美しいお方がお金をも

って遊びに来て下さるのねえ」

長「その代り忌いやなのが有りますから埋合せでございましょう、花魁は随分苦しいこともありましょう、傍そばに居るのも忌な客でも一緒に寝なけりやアならないからねえ」

富「本当にそうでございますね、松葉屋の八重花さんと仰しやるのは吉原でございますか」  
長「えゝ、京町でございます」

富「親方少し待つて下さいまし」

と云いながら奥へ這入り、暫くして鋏を手を持ち出て参り、

富「是はアノ宅うちのお父とつさんが鍛うつて置いたお誂あつちえのすえが一挺残つてあるんですが、お役に立つか立たないか知りませんが、お使い料になすつてくださいな」

長「えゝ、これは宅のお爺さんが鍛つた、これは有難い、大切に遣つかいやす、それじゃア若旦那への言附ことづけは八百ばかり云いましょう、大きに有難う、左様なら」

と長次が帰りました。お富は本郷春木町の紀伊國屋という質両替屋の若旦那と初めてわかりましたが、あの若旦那にお目にかゝるのは、吉原の花魁でなければ逢われないことだと不図思い違いをいたしました。何かの本に浮気娘は女郎を羨ましがると云うことが有りましたが、それに父の金重は無慾の人でございますから、娘へ残します処の物とてもござ



いません。少しく借財が残ったぐらいの事で、死にます時の遺言に己も人に知られた金重だから恥かしくない石塔を建てゝくれろと云うので、立派な石塔を建てゝ借財の極りをつけ、是でちゃんと自分の身の立つというように致しますには、金子が入りますことゆえ、お富が叔母と相談して私を吉原の松葉屋へ娼妓に売り、その身代でお父さんの石塔を建てゝ吊い料にして下さいませんか、お父さんの耻になりますからと申しますと、田舎氣質の叔母ゆえ泣いて止めるのを聴入れず、お富は自身に松葉屋へ駈込んで頼みますと、半蔵も感心して、

半「誠に親孝行な事だ、器量と云い姿と云い申分がないから、お前さんの入用だけの金子を上げますが、親類が得心でなければ証文は出来ません」

と云うので、叔母を呼び相談のうえ談がつき、其の頃百二十両に身を売ったと云うから、余程別嬪でございます。身の代は皆な叔母に預け、金子を持たして帰す。叔母は残らず跡の始末を致し、金重の家を仕舞つて下総の矢切村に帰りました。

お話二つに分れて、是も同年正月五日の話でございます。紀伊國屋伊之助の許嫁の娘は、深川万年町に岡本政七という諸侯方のお目利をする小道具屋で、この妹娘が紀伊國屋の息子と許嫁の約束に成つて居ります。此の家に重三郎という番頭が居り

ます。年齢二十七まで奉公を致した堅い人でございますが、御酒の上が悪いので、御酒をたべると様子が違う。酒は謹まなけりやならんから止せと、親にも云われて、弁天様へ願掛をして酒を断りましたが、扱こうなるとまた飲みたいものと見えます。金森さまへ主人の代として年札に参りまして、御馳走にお屠蘇が出ましたが、三合入の大盞で目出度く祝せというので、三杯続けたから三三が九合で、後は小さいお盞と云われたが、屠蘇でも余計に飲めば何んなものでも酔いますが、重三郎も酔いましたが、去年の十一月お下げになりましたお刀をかき入れを致して、二日の研初に研上げも出来ましたから、一度御覧に入れて、それから廿日正月までに、お鞘の塗から柄糸を巻上げますのは間に合いますと、そこは酔つていても商売ゆえ、後藤祐乗の作にて縁頭に赤銅斜子に金の二足のくるい獅子の一輪牡丹、金の目貫は英一蝶の下絵を宗珉が彫りました銘作でございます。鐔は信家在銘で山水に釣り人物で、お鞘に塗は相違なく間に合いますから、柄糸は黒の五分に致しますと申し上げ、お下げになったのを自分が大切に脊負つて外へ出しましたが、屋敷内にいた時は気が張つて居りますから酔が出ませんが、外へ出ると一時に酔が発したから、歩くにも足元が定まらるので、小僧が心配を致し、介抱しながら漸く永代橋を担いで通つた様なもので、佐賀町通りをひよろ／＼参りまして、佐賀町

川岸<sup>がし</sup>から仙台川岸を向うに見て、十間ばかり往くと、番頭は袴<sup>は</sup>を穿き羽織を着たなりでベタ／＼と大地<sup>じびた</sup>へ坐つてしまい、動きません。今と違つて若<sup>わか</sup>春<sup>はる</sup>は余寒<sup>よかん</sup>も強く、松の内は夜<sup>よ</sup>に入ると人ツ子一人通りませんから寂<sup>しん</sup>として居りまして、往來はぱったり有りません。日光<sup>ひかり</sup>風<sup>ふう</sup>がビー／＼と吹来る。

小「番頭さん／＼、もう少しだから往<sup>ゆ</sup>きましょう、番頭さん／＼」

と呼んでも重三郎は正体なく酔<sup>よ</sup>ばらい、まわらぬ舌で、

重「あゝ宜しいよ／＼」

小「宜しくは有りませんよ、其<sup>そこ</sup>処<sup>こ</sup>へ坐つちやアいけません、此<sup>こゝ</sup>処<sup>ち</sup>は家<sup>うち</sup>の中じやありません、表でございます、こんな処<sup>こゝ</sup>に居ては淋<sup>さみ</sup>しいし、寒くつて堪りません、もう少しだからサア往<sup>い</sup>きましょう、直<sup>じき</sup>にお店<sup>たな</sup>でございますよ番頭さん」

重「常<sup>つね</sup>吉<sup>きち</sup>／＼」

小「此処<sup>こゝ</sup>に居ますよ」

重「あゝ有難いナア、今日往つたのは何というお屋敷だか知ってるか」

小「芝の金森さまのお屋敷でございますよ」

重「能<sup>よ</sup>く覚えて置け」

小「覚えていますよ」

重「芝だぞ」

小「知つてますよ、もう少しだから、さアお出でなさいよ」

重「宜いじゃないか、今日は己が旦那に二百兩も三百兩も儲けさせる事をして居るから、少しぐらい酒を飲んで酔つても宜いんだ、有難いことだ、金森さまの御重役で稻垣小左衛門さまというお方は七百五十石お取りなさるお方だ、そのお方がちゃんと上下を着けて己の前へ手を突いてお辞儀をして、重三郎目出度のうと仰しやるから、へえ御意にございます、毎年相変らず主人の代りに手前が参り誠に目出度いナア、へえくお目出度うございます、相変らずどうぞと云うと、手前は主人政七よりも馴染が深いナア、御意にございます、格別のお馴染で有難う存じます、酒を禁ったかえ、禁ちました、そんなら屠蘇を飲め、殿様から拝領の松竹梅の大盞で飲め、己が酌いで遣ろう、へえ有難うございまずと云つて己は三杯飲んだ」

小「お前さんは酒を三杯飲んだろうが、私は待つてる間にお餅を二タ切焼いて呉れたぎりだから腹が空つて仕様がな、もう直に戌刻になりますから早く往きましよう」

## 三

重「こゝに脊負<sup>しよ</sup>つてゐるこれを覚えて置け、刀屋になるのなら是を覚えて置かなければならんぜ、栗田口國綱という勝れた逸物<sup>わざもの</sup>だ、刀屋になれば能く覚えて置け、五郎入道寶<sup>ろうにゆうどうほう</sup>龍齋<sup>りゆうさい</sup>正宗<sup>まさむね</sup>、伯耆<sup>ほうぎ</sup>の安綱<sup>やすつな</sup>、皆神棚へ上げて御神酒<sup>おみき</sup>を供え拜んでも宜<sup>い</sup>いくらいの物だから、よく覚えて置け、あゝ有難い」

小「番頭さん、犬の糞<sup>ふん</sup>の上へ手を突いちやアいけませんよ」

重「なに犬の糞結構有難い目出度い」

といつて動きませんから、小僧も呆れ果てた故、早く歸つて主人へ知らせようと思ひまして、ばたく駈出してまいりました。番頭は何か独り言を云いながら彼方<sup>あちら</sup>へパタリ此方<sup>こちら</sup>へパタリ遣つて参ると、五六間先に一挺の四ツ手駕籠が下りている様子、只今では人力ですが、其の頃は駕籠に乗つて歩いたもので、正月のことゆえ、ちよつと輪飾<sup>わかしり</sup>が後に附いて居ります。駕籠の煽<sup>あお</sup>りをポカリと揚げて中から出た侍は、山岡頭巾を真深<sup>まぶか</sup>に冠<sup>かぶ</sup>り、どつしりした無紋の羽織を着、仙台平<sup>せんたいひら</sup>の袴<sup>は</sup>を穿き、四分一拵<sup>そば</sup>えの小長い大小を差し、紺足袋で駕籠から足袋はだしの儘つかくと重三郎の傍<sup>そば</sup>へ寄るより早く、栗田口の這入った箱へ

手を掛けて無理に取ろうと致します。重三郎は小僧にも持たせず、自分が脊負つて来るくらいですから、驚いて大声を揚げ、

重「泥坊く」

と呶鳴ると、彼の侍は突然腰に帯して居た一刀を引抜く刃の光に、重三郎は堪らんと心得て逃げたが、横へ切れゝば宜いのに真直に往ったから仙台堀へ駈込んだが、暫くして浮み上り、がぶく遣つてゐる処を上からスツと一刀浴せたが、水の中ゆえ鋒鉞が肩へ中つたか何うだか様子は分りません。侍は刀を上げたなりで水面を透して見て居り、暫く経つて後へ退り、懷中から小菊の紙を出して刀を拭きましたが血染もない様子ゆえ、其の儘鰐鳴をさせてピタリと鞘へ収め、刀箱の風呂敷包を解き、中から取出して見ると、しらちやじきつこうがたこさんらん

白茶地亀甲形古錦襪の結構な袋に這入つて居ります。其の儘袋ぐるみ腰に差し、箱も風呂敷も川に投込みまして悠々として後の方へ下りますと、昇夫が一人駕籠の後に肝を潰して小さくかたまり、真青になつて居ります。

侍「これ、そこに居るのは何者だ」

昇「へいく、へいく只今往つて参りました」

侍「おゝ若い者か、小菊や煙草を買つて来てくれたのか」

昇「へえ直に往つて参りますつもりでございましたが、大きに遅くなりました」

侍「いや存じの外早かった、手前先程から其処に居たか、また今歸つて来たか」

昇「へえ今……もう少し先刻のような……今のような、ちよいと廻つて直に歸りました」

侍「何を申す、それでは只今の様子を見たな」

昇「へえ少しばかり拝見を致しました」

侍「これには少し仔細の有る事だから口外して呉れるなよ」

昇「決して他言は致しません」

侍「その代り手前には多分の手当を遣ろう」

昇「なに旦那さま、お手当さえ下されば随分お手伝も遣るくらいで」

侍「中々気丈な奴だ、サ、こゝへ来い、手当を遣ろう、向うの仙台侯のお長家下に二人ばかり頭巾を冠つてゐる奴が居るようだが、氣を附けてくれ」

昇「へえ、二人、何処に」

と、うっかり昇夫が向川岸を見る隙を覗いすまし、腰を居合に捻つて不意に昇夫の胸腹へ深く斬りかけ、アツと声を立てる間もなくドンと足下にかけてから、昇夫はもんどりを打つてドブリと仙台海岸へ落ると、傍に一艘の荷足船が繋いで居りまして、此の中に

居たものは伊皿子台町の俠客で荷足の仙太という人で、力は五人力有って、不死身で無鉄砲という危険な人で、始終喧嘩の仲間をしたり、喧嘩をするので生疵の絶えない人ですが、親父が死んでから余程我也折れましたが、生れつきの俠だから、斯ういう悪人を見ると我慢が出来ません、船の中へザブリと水が跳込んだから苦を上げてもうろく頭巾を冠ったなり、と見ると侍が拔身を提げて立って居りますから、心の中で人を馬鹿にしたりアがる、こんな野郎が此の町中をのそく歩きやアがるんで、夜商人の蕎麦屋だの家台店などは何のくれえ困るものが有るか知れねえから、殴り倒してやろうと思い、手頃の板子を一枚持つて、止せば宜いのに、上潮ばなで船がガツシリ岸へ着いて居りまするから、仙太は身軽にひらりと岸へ飛び上り、彼の頭巾を冠った侍の後へ廻る、途端に向うから提灯を点つけて駈けて来る人があります。

政七「何処だく、常や」

小「何でも此処の地べたへ坐つてたんです」

政「お下げになつた大切な御刀を脊負つてながら本当に何てえことだろう」

小「何でも此処らに違いないんです」

と云いながら提灯を振廻し、うろく方々を見廻す中に、侍が閃つく長いのを持つて立



って居たのを火影に見たから、小僧は驚き提灯を投り出して向うへ逃げ出したから提灯は  
 燃え上る、政七は何が有ったのか分りませんけれども、小僧がキヤーと云つて逃げるに驚  
 いて、無闇にこれも一緒に後から逃げました。荷足の仙太は提灯の燃上る火影に熟々  
 と侍の姿を見済まして板子を取直し、五人力の力を極めて振り冠り、怪しい侍の腰の番を  
 ねら、くるまばねを打砕こうという精神でブーンと打込みますと、悪事をいたすくらい  
 の侍ゆえ腕に覚が有ると見え、ひらりと飛び上りながらスーツとまた長刀を引抜き、仙太  
 郎の鼻の先へ、閃くところの鋒尖を突き附けられ、流石の仙太郎も驚き慌て、船の中へ  
 飛込み、繫繩を解いて是から無闇に船を漕いだが、後から追掛けて来るような心持で川中  
 へ漕出すが、上潮始で楽ゆえ段々漕上つて、よう／＼万年橋の下へ船を突込みました。  
 此の時に彼の刀屋の番頭重三郎は川の中へ投げ込まれたが泳を存じておりますというは、  
 羽根田で生れた人ゆえ少い時から海の中に這入つて泳ぎつけて居ります。なれども、袴羽  
 織に小袖を着て、小脇差を差している上に印籠を下げて居りますゆえ、泳げるものでは有  
 りませんから、がぶ／＼しながら石垣へよう／＼這い上ると、万年の橋詰でございます、  
 河岸へ立上りますに、ブーと吹きおろす寒風に袖も袂もつら／＼のように氷つて、ずぶ濡  
 れゆえ、酔が醒めてみると夢のような心もちで、判然分りませんけれども、お刀は慥か

に己が脊負つてお屋敷から出たに違いないが、河岸縁へ来て、己が正体なくなつて土地へ坐つた時に、常が往こうくと云つた事は微かに覚えて居るが、泥坊が脇差を抜いたから驚いて己が川へ駆け込んだのか投げ込れたのか些とも分らないが、お刀を脊負つて来たに違いないのが、無いからには取られちまったのか、あゝ飛んだ事をしちまった、これが小僧の使いじやアなし、三十近い年をして、お大名からお下げになった大切なお刀を泥坊に取られると云うは、災難とは云いながら、お屋敷さま御伝来の大切な御宝刀で有るぞよと、稻垣さまが仰しやつた事を慥に覚えてゐるが、これが紛失するとお屋敷の方も大騒ぎになるだろうし、また主人へはお屋敷から何んな難題がかゝつて来るか分らない、こりやア迎も生きてゐる事は出来ないで、面目ないから寧ろ一思いに死ぬより外に仕方がない、寧ろのこと身を投げようか、いや己は身を投げてでも死ぬゝえや、斯ういう時には生じに泳ぎを知つてゐるのはいけないナア、首を縊つて死のうかしらん、併し能く往来中の松の樹の枝などへぶら下つてゐるのが有るけれども、随分さまの悪いもんだ、己の耻を曝らすばかりじやアない、主人や親までの恥になる、困つたなア……あゝ好いことがある、この橋の欄干に帯を縛つてぶら下れば、船で通る者ばかりしか見られない、船頭などに見られたつても構わないから、此処からそうしよう、併しナア正月五日に首を縊ることになろうとは思わ

なかつた。と云いながら羽織を脱ぎ、袴を取り、帯を解き、真田さなだの下締したじめを締めまして、黒くろ紬つむぎの紋附を着たなり欄干へ帯を縛り付け、脇差や印籠を一緒にして袴の上へ取捨とりすて、片手にて欄干へ捉つかまり、片手にて輪にしたる帯を首に巻き付け

「あゝ己の死ぬのは心柄だから仕方ねえけれども、己が此処で死んだという事を、羽根田にいる親父が聞いたならば嘸さびつく悔りするだろう、虫が知らせたのか去年の暮の二十日だっけ、久し振りで親父の処へ尋ねて行き、一両小遣を遣つたらば、何で己に小遣をくれるのだ、己は梨子なしを一荷担かかついで歩き、幾籠売つても一両の金は儲からないのに、己に一両も小遣いを呉れられるような身の上に成つたは、御主人さまのお蔭だから、御主人を大事に思うなら、好すきな酒だから飲むなじやアないが、手前が己いっきだち立になるまでは酒だけ止めてくれろよ、と手を突いて頼むと云われたから、お父さんとつ、そんなら私は羽根田の弁天様へ酒を禁たとうと云つて、親父と手を引合つて弁天さまへ参詣して願掛がんがけをしたが、酒を禁やっぱりつて置きながら味淋でも呑んで酔えば同じことだ、味淋酒というからこれも矢張酒だ、どうぞ堪忍しておくんない、どうも済みませんが、災難で、これも皆約束事と諦めておくんない、先立ちます、また万年町の御主人も嘸にく悪い奴と思おぼしめ召しましう、後あとでお屋敷から難題が掛つて来たら、何どのくらい御立腹になるか知れませんが、どうも私には致いたしかた方かたはご

ありません、その代り私が死にましてもお刀の処は私が幽霊になって尋ね探し、御難儀のかゝらないように致して：お係りの稻垣様のようなおやさしい御重役を、しくじらせるような無調法ぶちようほうを致し、事に依つたら切腹でも仰付けられるようなことが有つては済まない、あゝ何んと云つても酒からだ、意見を云われても是だけが止まないからだ、何たる因果なことだなア」

と男おとこ泣なに後悔して居りましたが、また氣を取直し、何程思つたつて悔くやんでも返らない事だ、仕方がない南無阿弥陀仏くと口の中にて念仏を唱えながら、スーツと手を放す、途端にグツと縊くびれるものだそうで、行やつて御覧なさい、何のくらい苦しいか知れますまい。

#### 四

すると、橋の下に繋いでいた船の舳みよし端はたに立つて居ました男が、此の体ていを見て、重三郎の腰を抱えて、

男「おい、これさ待ちねえ泡ア喰くっちゃアいけねえつてば」  
重「お放しなすつて、どうぞ殺して下さい」

男「おい、そう動いちやアいけねえと云うに、まア氣を落着けて己のいうことを聞きねえ」  
と云いながら首ツ玉へ巻き附けた帶を解き、船へ下し、

男「どうせ死のうとするからにやア種々事情が有つて能々の事だろう」

重「へえ、どうしても生きては居られませんが、種々深い訳がございしますので、お止めなすつても中々一通りの訳じやアございません、みんな私の不調法から多数の人の難儀になる事ですから、どうかお殺しなすつて」

男「これさ、お前が独で悔んで居たのを皆な聞いたが、泡を喰つちやアいけねえぜ、死ぬのは何時でも死なれる事だ、斯うやつてお前を助けて置き、そんなら死になさいとは云えねえじやアねえか、膝とも談合という事があるから、まア着物でも烘つて温けえ物でも喰いながら緩りと話をするが宜い、慌てゝも仕様がねえ、己が屹度お前の助かるようにして遣つたら宜かろう」

重「そう致しますには肝腎の紛失した物が出なければいけないのでございます」

男「だからよ、※物が出るように己がするから、それまで己の云うことを聞いてくんな、炭団の頭を叩つて見な、まだ少しは火が有るだろう、泡ア喰つてまた川の中へポカリをきめちやアいけねえよ、そんな事をする苦へふん縛るよ、宜いか、紛失した物が出るよう

な工夫をするから、その相談をするまで待つてくんな」

と船を漕出し、永代橋を越して御浜沖へ出て、あれから田町の雁木へ船を繋けまして、

男「エ、コウ潮時が悪いもんだから滅法界に遅くなった、なににしても寒くつて堪らねえから何処かで一杯飲ろうか」

重「いえどう致しまして、私は御酒と聞くと敵でございます」

男「違えねえ、そんなら温けえ御飯でも喰いな」

と口の利きようは粗いようだが真実の男で、手を引いて馴染の夜明しの居酒屋へ這入つてまいり、

男「お爺さん」

爺「いや親方大層遅く、今夜は深川へお泊りのような話だったが」

男「泊る積りだった<sup>けえ</sup>が帰つて来た、爺さん其の衝立<sup>ついたて</sup>を二重に建てゝおくれ、そうして火を沢山入れて、火鉢を二つばかりよこしてくんな、何か温かい物が出来るかえ」

爺「蛤鍋が出来ます」

男「それアいけねえ」

爺「独活鱈<sup>うどたら</sup>が出来ます」

男「そいつは強氣だ、他に何か出来るかえ」

爺「柱豆腐」

男「そりやア結構、それから熱くして一本燗けて来て呉れ、兄さん此方へお這入り、己がお前をマア／＼と云つて無闇に船の中へ押込んで漕ぎ出したから何処へ連れて行くのかと思つたかも知れねえが、己ア伊皿子台町にいる仙太と云うもので、船も五六艘あり、野郎共も宅に居て、何うやら斯うやら暮して居るものだが、餓鬼の時分から喧嘩ツ早く、無法で随分親父に苦勞をさせたが、彼処の喧嘩の中、人に這入つて謝つてくれと頼まれ、中え這入り、出刃庖丁でジョキ／＼遣られた事も有つて、何のくれえ親父が苦勞をしたか知れねえが、三年あとに親父が死ぬ時に、短慮功を為さずと遺言され、それから些とばかりおとなしくなつたが、氣の暴えのは性、質だから止まねえのよ、今日高輪から乗合船で客を送り、深川へ上げて佐賀町の友達の処で用を達し、仙台河岸へ船をもやつて一服喫つてると、船の中へザブリと水が跳ね込んだから、何だと思つて苦を撥ねて向うを見ると、頭巾を冠つた侍が長えのを引抜いて立つて、投げ込まれたのは昇夫のようダツけ、斬つて投げ込んだのだかどうか様子は分らねえが、何しても斯んな侍を打棄て置けば、多勢の人の難義になると思つたから、板子を持つてそツと其の侍の後へ廻り、どや

そうとすると、ひよいと飛びやアがつて引つこ抜いたから、驚いて船へ逃込み、慌てゝ川中へ漕ぎ出しながら、と見ると船の中に財布せえふが一つ有った、縞の財布よ、其の中に金が三両二分に端たが些とばかりと印形いんぎようが這入へえつてたから、遺し主へ知らせ遣りたいと思つて、万年の橋間はしまで船を繫もやつて、また一服喫つてるとお前が上でよめえ言を云いながら帯を首へ巻き附けて、了簡違えちげをしたので、屋敷の役人は腹ア切るとか、主人に何んな難題が掛るとか、親父が恟びつくりして死ぬだろうとおろゝ泣いていると、その落る涙が己の額へポタリゝ中あたつたので、あゝ気の毒な人だ、己も腹一杯親に苦勞をさせたが、此の人は嘸さぞマア困るだろうと思つて、いらざる事だが無理にお前を助けたのだ、お前の物を盗んだ奴は己が打ぶん殴ろうとした侍だ……此の財布は事に寄つたらお前が落したもんじゃアねえか」

重「はいゝゝ」

と云いながら手に取上げて見ました。

重「誠に思い掛けない事でございます、この財布の中には印形に金が三両二分と二百五十文這入つて居りますので」

と打返し見て、

重「これでございます、あなたがこれをお拾いなさるというは誠に不思議なことでござい



ます」

仙「そればかりじゃアねえ、よく聞きねえ、その侍を打ん殴ろうとしたから侍の姿形なりは悉す皆つかり知つてゐるから、宜いいかえ、お前が幽霊になつて刀の詮議をするよりか、生きていて知れりやア死ぬにやア及ぶめえ、刀せえ出れば死しななくツても宜いんだろう、己も乗り掛つた船だ、殊に侍の姿を知つてゐるんだからお前と二人で方々詮議に歩こう、その刀は滅法に善い刀だという事だから、無闇と質に置いたりする事は出来めえと思う、また質に置けば斯ういう品が何うとか、質屋へ、着物ならば古着屋へお触が廻るから、売ることも質に置くことも出来ねえに違ちがえねえから、その侍は当分自分の差料にして居るだろうという考えだ、違つてゐるか知れねえがお前と己と二人で手拭で鼻ツ冠りをして、矢ツ張己のようないなせな股引腹掛で、半纏はんてんを引掛けて人繁さがしい処を歩いて、もし怪しい侍が居たら、己の方からポカリと突つき当あたつて置いて悪体あくていを吐くと、怪けしからん奴だ斬ツちまうと云う隙ねらを覘つて、その刀を挽取もぎとつてお前に渡すから、紛失なくした刀だと思つたらそれを持って何処へでも逃げちめえねえ、己は後あとで其の侍と喰い合おうと死に合おうと構わねえからよ」

重「へい、それは誠に御親切な事で有難う存じますが、あなたがまたお怪我でもなさるような事があると誠に相済みませんが」

仙「なに己アふじみだから二寸や三寸斬られても痛くねえという妙な性<sup>うまれつき</sup>質だから、無法に喧嘩を仕掛ける心底<sup>しんてい</sup>だ、お前<sup>めえ</sup>が死んでしまえば役人<sup>やくにん</sup>に主人<sup>しゅじん</sup>にお父<sup>とつ</sup>さんにお前<sup>めえ</sup>と四人<sup>よにん</sup>が死なゝけりやアなるめえから、己が一人死んでも四人<sup>よつたり</sup>助かる方が割じやアねえか、だから己の云う事を聞いておくれ」

重「でも見ず知らずのあなたに御迷惑を掛けては相済みません」

仙「見ず知らずだッて宜<sup>い</sup>いから己に任せねえ」

と云つてゐる処へ表から昇夫<sup>しょうぶ</sup>さんでございましょうか、十二分に酔つてヒヨロ／＼しながら這入つて参り、

昇「お爺<sup>とつ</sup>さん今晚は」

爺「いや安<sup>やす</sup>さん、おくれ仕事でたんまり有つたね」

昇「甘<sup>うめ</sup>え仕事もねえのサ……親方御免なせえ……お爺<sup>とつ</sup>さん熱くして一本酩<sup>つ</sup>けておくれ、お爺<sup>とつ</sup>さん、カラどうも酔<sup>えい</sup>が醒めちやア生地<sup>いくじ</sup>がねえんだ、寒い時<sup>こえ</sup>と怖<sup>こえ</sup>え時は酒でなくツちやア凌<sup>しの</sup>げねえから、熱くして一本酩<sup>つ</sup>けておくれ」

爺「大分<sup>だいぶん</sup>御機嫌ですな」

昇「親方どうも大きな声をしてお八釜<sup>やかま</sup>しゆうございます、え、おいお爺<sup>とつ</sup>さん、己ア此処迄

に四度飲<sup>よたび</sup>んで来たが、直ぐに酔<sup>よ</sup>が醒めるんだ、醒めるから又居酒屋へ飛び込んで飲<sup>や</sup>つて来たが、丁度五度目<sup>たびめ</sup>だよ、慄<sup>ふる</sup>えて仕様がねえから、もつと熱くしておくれ、肴<sup>しな</sup>ア何か一品ばかり摘<sup>つま</sup>んで持つて来ておくれ、何でも宜<sup>い</sup>い、塩気さえ有れば宜<sup>い</sup>いやア、おいお爺さん、今日<sup>とち</sup>のう寅の野郎と己と二人で新橋に客<sup>きやく</sup>待<sup>まち</sup>をしてえると、え、おい駕籠に乗る人担<sup>か</sup>ぐ人と云うが、おらッちは因果だな、若<sup>わ</sup>え旦那が通ったから御都合まで廉<sup>やす</sup>く参<sup>めえ</sup>りましようとう云うのだ、辻駕籠の悲しさには廉くつても仕事をする方が割<sup>わり</sup>だぜ、オーそうだと云う訳だ、え、おいお爺さん、頭巾を冠<sup>かぶ</sup>つた侍が来て、おい若<sup>わ</sup>衆<sup>しゆ</sup> 深川の木場までやれ、へい畏<sup>かしこ</sup>まりました、駕籠賃はいくら遣<sup>や</sup>ろう、御如才<sup>ごじよせえ</sup>はござえますめえが、此処から余程ありますから六百遣<sup>や</sup>つて下せえ、もつと沢山<sup>たん</sup>遣<sup>や</sup>るから氣を附けるよ、有難<sup>ありがた</sup>いッてんで……おい此方<sup>こつち</sup>を向いて聞<sup>き</sup>きねえよ面白<sup>おもしろ</sup>え話だ、そうするとお爺さん、ピョココ担<sup>か</sup>いで靈岸<sup>れいがん</sup>島<sup>しま</sup>まで往<sup>い</sup>くと、鰻で飯を食<sup>く</sup>うから駕籠<sup>おろ</sup>を下せと云うから、旦那大黒屋は疾<sup>と</sup>うに売切れて有りません、春は早く仕舞<sup>え</sup>いやすというのに、宜<sup>い</sup>いから下せ、ヘーッてんで下すと、その侍が鰻屋へ這<sup>へ</sup>入ると、此の通り売切れ申候という札が出してあります、存<sup>ぞん</sup>じて居<sup>お</sup>る、貴様の所の鰻は宜<sup>い</sup>いから態々<sup>わざ</sup>来たのを、己に食<sup>く</sup>わせんと云う事はあるめえ、手前<sup>てまえ</sup>の家<sup>うち</sup>になれば外の鰻屋から買<sup>か</sup>つて来て割<sup>さ</sup>いて焼<sup>や</sup>いて出せ、望<sup>のぞ</sup>みだと云うと、侍でおつかねえもんだから大黒屋の

番頭がそれから奥へ通した、若衆は縁側へ廻れというから縁側へ廻ると、彼家あすこの事だから井は出来ねえや、あれえのを焼いて酒を一本ずつ出してよ、待たして気の毒だから待賃まちゝんを二分ずつ遣るつてえんだ、え、おいお爺さん、辻駕籠に出てよ駕籠賃が六百で祝儀が二分宛ずつツてえのは無えや、寅が目度めでてえ正月だという訳だ」

と一口飲み

「もう少し好い酒を売れば宜いに、少し悪くなつたな」  
とまた飲みました。

## 五

安「お爺とつさん、そうするとね、其処へ一本差した海鼠襟なまこえりの合羽を着た侍が這入へえつて来てね鰻を食いながらコソ／＼話をして、その侍が先へ帰けえちまつてから飯を食つてサ、若衆しゅや遣れ、へえ畏かしこまりましたッてんで、ヒヨロ／＼担いで永代橋えいたえを渡つて、仙台河岸の手前の佐賀町から河岸の方へ廻つて往くと、若衆駕籠おろを下せ、大黒屋の床の間の側の棚わきへ紙入を忘れて来た、金は沢山たんとじゃア無えが、書物かきものが大切だいじだから取つて来いよ貴様、へえッ

てんで此方こつちは取りに帰けえつて、これ／＼というと、若衆飛んだ云い掛つたことを云うな、有ればちゃんと取つて置くよと云うから、そう仰しやるが外ほかのお客と間違やアしませんか、売切れ申候という札を出して置く処へ無理に上つたのだから、他にお客はねえ馬鹿野郎、そう御免ねえ、初手から小言をいわれに帰つたようなものだ、佐賀町河岸へ歸つて見るとお前めえ、その侍が長いのを抜きやアがつて棒組の寅の野郎をポカリーと斬りやアがつて、川ん中へポンと投ほうり込んだから、フウというわけだ」

爺「フウーンそれはとんだ事だね」

安「飛んだにも跳ねたにも、己おらア転がっちゃつた、え、おいお爺さんとつ、初めツから怖こええ侍ならば油断をしねえが、やさしい声で若衆や氣を附けて遣つて呉れツて、鰻屋で一本酩つけて二分の祝儀だ、畏りましたと云うと、金は宜いいが書附でえじが大事だ、棚へ上げて来たから取つて来いよ、へえツてんでお前めえ往つて、これ／＼という大黒屋でえこくやでは飛んでもねえ事という、大黒屋の名前なめえに障るから、そんな物が有れば取つて置く、何んだ、へえと云つて仕方がねえからピヨ／＼歸けえつて来て、佐賀町から河岸へ廻つて往くと、おいお爺さんじい、その侍が鼻の先へ長いのを引つこ抜いて、ポカリと寅の野郎を斬つて、川の中へ投ほうり込んだから己あウンと云つて這ツちまつたよ」

爺「怖かつたろうねえ」

安「それを云うんだ、怖え時と寒い時は酒でなければ凌げねえから幾度も飲んで来たんだ、  
思え出して身毛立つようだ、最初から胡散な侍だと思えば気を附けるが、やさしく若  
衆や砂打場……じゃアねえ、ナニ木場まで遣つてくれ、御飯は食わせるよ、へえ有難  
うござえやすツてんで、二分ずつの祝儀だからうめえと思つてると、大黒屋へ紙入を忘  
れて来て、金は宜いが書附が大切だと仰しやるから、帰つて来てそう云うと、お前冗談い  
うな、へえと小言を云われに来たようなもんだ、詰らねえと思つてヒョロ／＼帰つて、仙  
台河岸へ廻ると、おい其の侍がスーツと長いのを鼻の先へ」

爺「それはもう度々聞いたよ」

安「嘘を吐きねえ、これからさきを知つてるか」

爺「さきは存じません」

安「それ見ろ、ポンと寅を川ん中へ投げ込んだ時にやア、己あフーツてつて這ツちまった、  
あの長え永代橋を四ン這に這つて向うまで渡つて、箱崎の鐵爺さんの屋台店へ飛び込  
で、一杯／＼と云つてグーツと引掛けたが、銭がねえんだが馴染の顔だからね、これ／＼  
の災難に逢つて布団の間へ財布を忘れて来て、取りに往く事が出来ねえから明日の晩ま

で貸しておくれという、安さん何時でも宜<sup>い</sup>ってえから安心して飲んで、酔って見ると気が強くならア、何んでえ籠<sup>べらぼう</sup>棒<sup>さむれえ</sup>め侍<sup>さむれえ</sup>が何んでえという訳だ、外へ出て酒が醒めるとまた思<sup>おもえだ</sup>出して怖くなるからまた飲みくして、丁度五度<sup>たび</sup>目だ」

爺「さぞ怖かつたろうね」

安「だからよ、それを云うんだ、酒を飲めば凌<sup>しの</sup>がアさ」

爺「そうだろうね」

という話を此方<sup>こちら</sup>で聞いていた仙太郎が重三郎に向い、

仙「えゝ重さん、妙な事があるもんだね、刀は出るぜ、おい若衆<sup>わかしゅ</sup>」

安「へえこれは何うもおやかましゆうござえやす」

仙「今聞けば飛んだ災難<sup>せなん</sup>だったね、おゝ初々<sup>はつく</sup>しく飛んだひどいめに逢ったね」

安「へえひどいめに逢いやした、寅の野郎は川ん中へ投<sup>ほう</sup>り込まれて、慥<sup>かええそう</sup>然でござえやす、嬖<sup>か</sup>アが泣くだらうと思うと慥然でね」

仙「うん、併<sup>しか</sup>しお前<sup>めえ</sup>が斬られ無<sup>ね</sup>えのがめつけもんだ」

安「へえ命の助かつただけが此方<sup>こつち</sup>の儲けもんでござえやす」

仙「その侍は初<sup>はじめ</sup>ツから頭巾<sup>かぶ</sup>を冠<sup>かぶ</sup>つてたかえ」

安「えゝ冠つていやした」

仙「そうか」

と云いながらいくらか金を紙へ包んで前へ差出し、

仙「これは誠に少ねえんだが縁起直しに上げるから一杯遣つておくれ」

安「これは誠に有難うござえやす、宅のお爺さん、此処においでなさる親方さんは何処の親方さんか知らねえが、わっちのような者に金を呉れるてえのは何だか危険だ」

仙「ハゝゝ、なに危険なことはねえ、大丈夫だよ、若え衆己は伊皿子台町にいる荷足の仙太だよ」

安「えゝ仙太親方だえ、こりやどうもお見それ申しやした、道理で一両呉れたと思った、御免なすつて下せえやし、私は初音屋にいる安てえ者ですが、此の土地にいて親方を知らねえと云うのは本当に外聞の悪いいくれえのもので、吉原でも日本橋でも何処の川通りだつて、荷足の仙太と云やア随分名代の無鉄……ナニ誠にその剛い人だと云つて誰でもお前さんは知つてやす、いつか五十軒で喧嘩の時に、お前さんが仰向に寝て、サア殺せと仰しやツた時は誰も殴てなかつたとね、仕事師手合が五十人許り手鍵を持って来たが、打てなかつたくれえだから組合の者が皆なそう云つて居やす、あのくれえな無法……ナニ誠



に氣丈な人だつてね、これはどうも誠に有難うござえやす」

仙「時に少し聞きたいが、今の侍の容さむれえ なりかたち貌は何ういうのだえ」

安「袴はア穿はいて、大でえし小しょうを差して、羽織を着て、頭巾を冠かぶつてたから顔は分りやせん」

仙「成程頭巾を冠かぶつてちやア顔は見えめえ」

安「だが私わっちは縁側へ腰をかけて居たが、侍さむれえが鰻を喰う時にやア頭巾を取つて喰いやした」

仙「違ちがえねえ、些ちつとは覚えてるか」

安「ちつと処どこじや有りやせん、あの侍さむれえの面は死んでも忘れねえ」

仙「こいつアどうも有ありがて難え……いゝ事がある、兎も角今夜は己とけの処え来て泊んねえな」

安「親方の処とけえかえ」

仙「少し話があるんだ、御馳走するぜ、頼みてえ事も有るから一緒に往つてくんねえな」

安「私わっちなどは宅うちの無ねえものだから、へえ有難うござえやす、じやアどうか願ねげえやす」

仙「お爺おとうさん、此の若わえ衆しゅさんの勘定も一緒に取つてくん……なに、つりはいらねえよ」

と是から仙太郎が駕籠屋の安と重三郎の二人を連れて我家わがやへ立たち歸かえりました。此方こちらは岡

本政七は翌朝早く重三郎を捜しに出ますと、万年の橋詰に袴印籠脇差と羽織が脱ぎ捨て、  
あり帯が欄干に縛り附けて有りますから、これは大方重三郎が、大切なお刀を取られ、言

訳なくして身を投げて死んだに相違有るまい、なさけない事である、死んだ記に衣類を脱ぎ捨て帯を縛り附けて置いたものだろうと、旧来奉公していた者ゆえ、主人始め家内も娘も皆心配致し、涙をこぼして捜しましたが、何うしても大切のお刀ゆえ何うしたら宜かうと氣を揉んで居りました。すると翌六日の夕方、稲垣小左衛門という粟田口國綱のお係りの役人が、年頭のお歸りがけと見えて、麻上下の上へどっしりとした脊割羽織を召し、細身の大小を差して、若党草履取をつれて岡本政七の宅へ参り

「頼もう」

「どなたさま……稲垣さま」

と云うので驚いて廻り縁から奥の座敷へ通し、茶煙草盆を出し、政七も出て参り下座に坐り、慇懃に両手を突き、

政「へえ新年御目出度う存じます、旧冬はまた何かと段々お引廻しでございまして、お屋敷の方を事無うお勤めを致しましたのも、偏に旦那さまのお蔭さまと蔭ながら申暮して居りました、当年もまた相変らずお願い申します」

小「はい新年で誠に目出度い、旧臘はまた相変らず歳暮を自宅の下の方までへ心附けくれられて、誠に有難い、また相かわらず重三郎を其の方の代としての年頭で、年玉

の品々を忝かたじけのうござる」

政「何う致しまして……え、まア〱お天気も続いて宜しく、夜よに入いつては寒いようでございますが、先ずまア誠に善よい春でございます」

小「はい左様で」

と云つてゐる処へ出てまいりましたはお雪という政七の妹いもとむすめ娘でございます。正月の事ゆえこつてりと化粧おしまひが出来、結構な着物を着て居りますから猶更美しく見えます。尤も近辺でも評判の娘で、しとやかに遠山台とおやまだいを持つてまいりまして、小左衛門の前へすえて、挨拶をいたします。

小「ハ、ア政七、これが其方そちの妹か、ウーン成程美しい器量だ、慥たしか本郷辺の紀伊國屋という質両替屋とかへ縁附ける約束になつて居おるとかいふ事を、ちらりと番頭から聞いたが、嫁入盛りだの……はいお目出度う……就つてはソノ火急な事であつて嘸さぞ困つたろうが、昨日番頭が國綱のお刀を持つて歸られたろうな」

政「へえ」

小「二十日正月までに拵こしらえる事に相成つたが、彼の國綱は存じて居おるであらうが、鬼丸同作であると云うは、北條のもとめによつて國綱山城やましの粟田口より相州山そうしゅうの内に来きたり、

時頼ときよりの為に鍛きたえたる鬼丸、其の時に二一口打ふたふりつたるを、一腰ひとこしが鬼丸にて、一腰が今御  
当家にある國綱なれば、どうか鬼丸作りに致せとの仰せなれば、至急の事には相成るまい  
のう、政七」

政「へえ、成程先達せんだつて集古しゅうこ十種と申す書物で見ましたが、一端たんかき入れを致して其の  
上を栗色の革にて包みまして、柄はかば糸にて巻き、目貫めくわは金壺きんつぼ笠がさに五三の桐でござい  
まして、鰐袋もやはり栗色革、裏は浅桐絹あさぎりぎぬの切きをつけ、紫紐は一尺九寸でございました  
と存じます」

小「成程其の道とは申しながら詳しく存じて居いるのう、それに付今一度取寄せる様にとの  
仰せゆえ至急取りに参つたが、是へ出してくりやれ」

政「へえ」

と云いましたが、忽たちまちに面おもて色いろが真青まつさおになり、おど／＼口もきかれません様子。

小「何う致した政七」

政「へえ……」

小「イヤサ、早く是へ出してくれよ」

政「へ……」

小「コレ政七、昨夜重三郎はお刀を脊負<sup>せお</sup>つて帰ったか」

政「サ……左様でございます」

小「それで安心致した、それなれば早く是へ持つて参れ」

政「へい、何ともハヤ申上げようもございませんが、重三郎は余りお屠蘇を沢山に頂戴致しまして、前後も分りませんように酩酊<sup>めいけい</sup>致しましたが、お屋敷に居<sup>お</sup>るうちは氣が張つて居りましたから、御<sup>おかたな</sup>刀は丁稚にも持たさずに自分が脊負<sup>せお</sup>つて参りましたが、途中から酔<sup>え</sup>いが出て頓<sup>とん</sup>と歩かれませんようになり、漸く佐賀町の河岸まで参ると正体なくなりまして、地びたへ坐つて仕舞い動きませんので、小者<sup>こもの</sup>が駈<sup>そ</sup>けて来て知らせましたから、私<sup>わたくし</sup>が直ぐに駈<sup>そ</sup>付けましたが、重三郎の行方は知れませんが其傍<sup>そば</sup>に怪しい侍が拔身を提<sup>ひ</sup>げて立つて居りましたを見て、小僧は驚き提灯<sup>ていとう</sup>を投<sup>な</sup>り出して逃げ出しますから、私も驚き、共に逃げ歸りましたが、今朝程万年橋の上に重三郎の衣類脇差印籠<sup>いろう</sup>などが取捨<sup>と</sup>てゝございまして、行方が知れませんが、重三郎は大切な御刀を取られて申し訳なく、万年から入<sup>じゅすい</sup>水したものと見えます、誠に相済みません事で」

小「これは怪<sup>け</sup>しからん、これ政七、余<sup>よ</sup>の品とは違い、当家伝来<sup>ごほうけん</sup>の御宝剣<sup>ごほうけん</sup>を失つて只相済みませんでは置かれんぞ」

政「へえ、誠にどうか致そうと存じまして、種々心配致して居りまするので、此の上と  
もまた何の様な詮議も致しまして、お刀を見出して、お屋敷へ持参致す心得でございます  
からどうか切めて一月もお日延が出来れば願いたいものでございます」

小「ウン：それは紛失したもので有るから日延を願つて見まいものでもないが、一月经つ  
うちに其の國綱が出れば宜いが、若し出ん時は何う致す」

政「へえ」

小「必らず出るといふ目途はあるまい、慥に認めた処はないのだろう」

政「へえ、確かにした認めはございません」

小「何うも当惑致したなア……いや是は私が悪い、この稻垣が行届かなかったのだ」

政「いえ、何う致しまして左様でございません」

小「いや左様でない、禁酒致しおる重三郎に、祝酒とは云いながら屠蘇を勧めたは私が悪かった、又酔つておる者に大切な物を持して歸し、殊に夜中なり、何うも私が過だ、  
重三郎はお刀を失い申訳なき為め万年橋から入水したと上へ届をした処が……重三郎は如  
何にも気の毒な事だ……飛んだ災難であつたが、屋敷からまた其の方に何の様な御難題が  
掛つて来まいものでもない、それで済めば宜いが、私は係り中の事ゆえ何の様なお咎めが

あるか、切腹仰せ付けられるか、お手討になるか、癩癧の強い殿様だから軽くいつても追放仰せ付けられるには相違ない……これは斯う致そう、兎も角も屋敷へ歸つて私から家老までへ斯様に申し入れよう、稻垣小左衛門小屋に於て賊が忍び入つて紛失したと、私人の越度<sup>おちど</sup>にして、貴様や重三郎へ迷惑の掛らない事にしよう、何の道しくじる稻垣、致し方はない、私が家事不取締不埒至極という厳しい御沙汰<sup>ごさた</sup>を受けて切腹仰せ付けられるも知れないが、それより外に致し方はない、誠に困つたが<sup>よんどころ</sup>抛ないから宜しい、其の趣<sup>むき</sup>に届けるから、屋敷から何んな問合せがあつても、お刀はまだ此方<sup>こちら</sup>へお下げにはならんと言ひ張れ、そうせんとまた宅<sup>うち</sup>に障るばかりでなく、親の代から年来の出入も差止められたら難儀をするだろうから、左様心得ろ」

と云い渡され、政七は氣の毒が一杯にて漸く顔を上げ、  
政「貴方さまお一人へ御迷惑をかけましては済みません」

小「掛けても致し方がない、それまでの事だ、マア宜<sup>よ</sup>い、年来馴染であつたが、これがもう手前<sup>てまい</sup>の顔の見納めになるかも知れん……どうも仕方がないから直ぐに歸りましょう」

と心ある侍ゆえ少しも荒い小言も云わず、覺悟を極<sup>きわ</sup>めて屋敷へ歸りまして、是からお届けになるという、一寸<sup>ちよつと</sup>一息吐<sup>つ</sup>きます。

## 六

引続きます、粟田口國綱の事からして主人の難儀になると思い、入水致して相果てようとした重三郎を仙太郎が助け、舁夫かこやの安吉を連れまして宅へ帰り、其の晩二人を泊めましたが、仙太郎の女房お梶かじには何事だか頓と分りません。翌朝よくあさになりますと、舁夫の安さんは知らん処ところへ泊つてきまりが悪いから早く起き、寝衣ねまきのまゝで水を汲んだり表を掃いたり、掃除の手伝を致して居ります。

梶「ちよいとあにさん、昨宵泊ゆうべつた人は何なに」

仙「あれか、一人は深川の万年町の刀屋の番頭さんだ」

梶「あの、もう一人の裸体はだかで働いてる人は何に」

仙「あれは辻駕籠の安という者だ」

梶「あの人は水を汲んだり板の間を拭いたり、キョト／＼間の悪そうな顔をして働いてるよ……申し安さんとか、もう宜いいから足を洗つて此方こつちへお上んなさいなねえ」

仙「おい安さん此方へ来ねえ」



と云われ、安吉はおず／＼上つて参りましたが、窮屈そうに頭ばかり撫でながら、

安「こりやア誠にどうも姐さんでござえやすか、碌々御挨拶も致しやせんで、へえ昨夜は喰え酔つてやしたから、何う云うわけで此方へ泊ったか分りやせん、目が醒めて見るときまりが悪くつてね、へえ何か乱暴でもやりやアしねえかと心配でござえやす」

梶「なにも済まない事は有りません、甲斐／＼しく骨惜みをしないで宜く働いておくれで、お気の毒だから良人のに聞いてた処で、まアお休みなさいよ」

安「へえ有難うございやす」

仙「番頭さん、重助さん……じゃアねえ重三郎さんかえ、此方へおいでよ／＼」

重「へえ」

と立つて参り、仙太郎の前へ坐る。

仙「お梶、此の人がソノ刀屋の番頭さんの重さんと云うのだ」

梶「おやそうかい、お初にお目にかゝります、昨夜おいでなすつて碌々御挨拶を致しませんで、何にもお構い申しません、何んだか酷く鬱いで、隅の方へ引込んで考えてばかり居なさるが、何ういう訳で」

仙「これには種々深い訳のある事だ、重さんマア心配しずに此方へおいでよ」

重「へい、昨夜は出ましてまだ碌々御挨拶も致しませんが、此の度はまた何ともお礼の申  
そうようはございませんが、親方のお言葉に甘えて飛だ御厄介に相成り、誠に有難う存じ  
ます」

仙「そんなに丁寧にしちやアいけねえ、ぞんぜえ者だから……安兄い此処え来ねえ、此の  
人がソノ、万年町の岡本という刀屋の番頭さんで此の芝のお出入り屋敷へ……重さん何と  
かい屋敷だつけ、ウン金森さ、其の屋敷へ年始に往った処が、帰りにお誂えの刀が下つ  
たのだ、それが先祖から伝わりとての滅法に好い物なんだ……すると、此の人は酒嗜き  
で、酒を禁されてる処へ無理に屠蘇を勧められて、一升許りなぐったのだ、屠蘇だつて沢  
山飲めば酔うからね、酷く酔つちまつて、佐賀町川岸で動けねえ処を怪しい侍にその刀を  
ふんだくられちまつて、宅へ帰る事も出来ず、主人や親に済まず、お屋敷へも言訳が無え  
からつて、万年橋の欄干へ帯を掛けて首を縊ろうとする処を、己が思え掛けなく助けて船  
へ入れ、お連れ申して来たのだ」

安「そりやア初々しく飛んだ御災難でお気の毒様な」

仙「安さん其の刀を盗んだ侍は、昨夜のう己も佐賀町河岸で見たが、お前がソノ新橋から  
乗せたという頭巾を冠った侍だ」

安「えゝ、それは驚きやしたねえどうも、ソノ寅の野郎をポカリと斬ったのも其の侍だが、侍と聞くと身の毛がよだつようだ、フーン成程」

仙「己も番頭ばんつさんを助けて何うしたら好よかろうと云うと、その取られた刀が出なければ何の道言訳がねえから死ぬと云うので、己も困ったが、一旦助けたからにやア何うかして其の刀の所在ありかを詮議をして、刀を此の人へ戻して遣り、万年町の店たなへ歸して遣りたいので、段々其の刀の事を聞いて見れば、大層名高なだけえものだから、何処どこへ売つても直じきに知れちまい、世の中に少すくえものだから、当分質に置くことも、売ることも外ほかへ預けることも出来ねえ品で、預けたところが直に足が附くから、己の思うには当分は自分の差料にするより外に仕様がねえ、そこでその侍の形恰好は己が知ってるが、安さん面つらア知ってるだろうな」

安「知つてゐるぐれえじやア有りやせん、酔つてゝも忘れやせん」

仙「お前めえが見知人みしりにんよ、姿形は己が知ってるし、刀の目利めきは此の番頭ばんつさんが自分でなくしたのだから知ってるから三人で人ざかしい処を歩いて、お前は侍の面さむれえつらを知ってるんだから、あの侍だと教えてくれゝば、己は咬かぶりついても差してる刀をふんだくるつもりだ、もし長ながえのを引ひこ抜きやアがれば、自身番へ引摺ひきずつて往ゆく、また頭巾を冠かぶつてやアがれば、此方こつちから突つき当あたつて、なんでえ太ふてえ奴だと喧嘩を吹っ掛けて、其の侍と喰やい合つても刀をふん

だくつて番頭さんに渡して遣れば、後で死に合うとも何うしても宜いのだから、番頭さん  
もいなせな袴こしらえでゴテくをきめて、鼻ツ冠りで人ざかしい処へ刀の詮議に歩くが好い、  
安さんは日に幾らになるか知らねえが、日当たちめえは己が払うから、駕籠を休んで己と一緒に  
刀の詮議に往つてくんねえな」

安「こりやア驚いた、そいつは御免なせえ、いけやせん」

仙「いけねえッてお前めえが喧嘩アするんじやアねえ、己がするのだ」

安「ですがね親方の乱暴……ナニ強いのは知ってますが、侍さむらいに此方から突当るんだから親

方怪我アしやすぜ」

仙「大丈夫でえじょうぶだよ、性うまれつき来不死身だから斬られても大丈夫でえじょうぶだよ」

安「ですがね私わっちは不死身じやアねえから」

仙「教おせえてさえくれりやアお前めえは逃げてても好いんだ」

安「そう旨く逃げられりやア好いが、昨夜ゆうべで覚えおべが有りやす、懊びつくりして、どんと腰が抜け

ちまつて、あの長え永代橋ええてえを這い続けに這つて逃げたくれえだからね」

仙「己が斯う遣つて力を入れるのは、この人の命が助かる許りじやアねえ、主人や屋敷の  
役人みんなまで皆都合が宜くなる事だ、己だつて見ず知らずのもんだ、みんな人の為だぜいやだ

と云えば了簡が有るぞ」

安「なに出掛けますく」

と仕方がないから請合いました。番頭重三郎は気の毒に思いますから、

重「申し親方、何卒そればかりは勘忍して下さい」

と云ったが聞きません。女房も心配だから小声で、

梶「ちよいとく何ういう訳なんだえ」

仙「なにイもつと大きな声して云え」

梶「お前まア宜く考えて御覧よ、お父さんが死ぬ時に何と云ったえ、短慮功をなさずと云われて、彼れからはお前も懲りて喧嘩のけの字もしないように成ったが、人の為と云ったッて今聞けば侍へ此方から突当つて喧嘩アするとお云いだが、そんな事をしては死んだお父さんの位牌に済むまい」

仙「生意気なことをいうな、己が酔興でするんじやアねえ、此の人の命が助かる人の為に  
するんだ」

重「どうぞ親方姐さんだッて御心配でございますから御尤もで」

仙「そんな事はいけねえ、云い出しちゃア聞かねえ」

と何うしても聞かず、仕方が無いから重三郎も安吉も仙太郎の跡に従いて歩きましたが、重三郎は着つけない襦袍どてらを着、股引はを穿き、手拭を鼻ツ冠りにして仙太郎の跡から従いて歩きますが、心配な事で、なれども更に似た侍も見当らず、空しく尋ねて歩いて居りました。お話二つになりました、粟田口國綱の刀紛ぶんじつ失致しましてから重三郎の行方知れず、主人も心配致して居りまする処へ稻垣小左衛門が参りましたが、重三郎の罪を身に引受け、別に厳しゅう咎めもなく屋敷へ帰られました事で、実に岡本政七方では一通りの心配ではございません。また此の重三郎の親父は梨子売を致す重助と申す者で、川崎在の羽根田村に身貧に暮して居りますが、去年の暮から年の故せえか致して寒氣さむさに中あたる、疝氣せんきが起つたと見えまして寝て居ります。丁度正月の七草の事でございます、独身ひとりもの者ゆえ看病人も有りませんが、近所の人が来ては看病をしてくれますが、万事宜ゆきとぎ届かん勝でございます、なれども田舎氣質かたぎのものは親切でございますゆえ、村方の者が代かわる／＼来ては世話をいたしてくれます。

重「申しお婆アさん、もう宜いいから帰けえつておくんなせえ、もう大概てえげえで宜いよ」  
婆「なに心配しんぺえしねえでも宜い、私ア帰けえつてまた後あとから金右衛門きんえもんどんこの婆アさまが来ると云ったが、お前めえも老とる年じやアあるし、大切でえじにしなけんばなんねえからね」

重「はい有難う、こう遣つて代りく御親切にマア皆様が来ちやア、やれこれ云つておく  
 んなさるので、はい、誠に有難うござえます、私も定命より余生生き延びて居りま  
 すから、もう死んでも惜しくねえ身体ですが、只た一人の倅がマア堅えもんでござえまし  
 て、万年町のお店へ奉公に遣つて、永く勤めて居りますが、来年は年が明けるから、店  
 を出して下さると御主人さまが仰しやるから、そればかり楽しみにねお婆さん、私も重え梨  
 子を担いで其の日を送りますが、ナニまだ死ぬ簡もねえけれど、斯うやつて年イ老つて  
 煩らうとねえ心細えが、定命より十五年も生延びてるから、何時死んでも好いような  
 ものゝ、若しもの事があつて死に目に逢わねえと倅が後で愚痴イ出ようかと思えますのさ、  
 イヤハヤもういけませんかね、ちよつくらお暇を戴きに與吉どんを頼んで遣つたが、まだ  
 歸らねえが、不断とは違い正月はお忙しいから、倅にお暇を下されば好いが、下さるめえ  
 とは思うが、あゝ云う行届いた旦那さまゆえ、親の病氣と云つて遣つたんだからお暇を下  
 さるかも知れねえのさ」

婆「お前んとこの息子どんはおとなしくつて仕合せだが、おらの宅の新太の野郎なんざア、  
 ハア放蕩べえぶつて、川崎べえ往つてハア三日も四日も宅へ歸らねえで困るが、お前ん処  
 の息子どんは本当にやさしげで仕合せだよ」

重「ハア誠におとなしくして居ります、去年の暮などは忙しい中を態々来てくれて、私に小遣を一両呉れましたが、それも是も皆な御主人さまのお蔭だから、御主人さまの御恩を忘れねえで奉公を大切にしろと云いつけて遣りましたよ、もう使は帰りそうなものだ」  
婆「いまに帰るべえ」

と話をして居る処へ歸つて来たのは、此の村の人で、年齢二十三になる男で、尻を端折り、寒さをも厭わずスタ／＼歸つて参り

男「爺いさま案じて居さしたろう、大きに遅くなつただアよ、店へ往つた処が重さんは一昨日の晩出たきり歸らねえてえ、何処え往つたか知んねえかと聞いて見たが、何処え往つたかいまがに知んねえから、方々捜し廻つてゐるが、解らねえから今日宅のお内儀さまが川崎の大師様へお参りながら此方へ寄るツてつたから、いまに来れば分るだろう」

重「はい大きに有難う、誠に遠ツ処に御苦労さま、婆アさま腹ア空つたろう、何もないが  
お飯ア喰つて往くが宜い」

婆「己ア帰るからお前大切に申しなせえよ」

重「お婆アさん誠に有難う、大きに御苦労さま、癒るとお礼をしますよ」

婆「なにそんな事を心配しなえでも宜うがアす、また後に来るだろう」



と出て行きました。

重「親切に宜くまア毎日めえにちく来ておくんなさる、有難いことだ、それに付けて重三郎が出たぎり帰けえらねえと云うのは、道楽でも始めやしねえか、そんな奴ではねえが、なにしろお内儀さんが入らつしやるくれえでは、先きまでも能よく々案じなさる事が有つて相談に入らつしやるんだろうが、何ういう失策しくじりをしたか知らん、併しかしおいでなすつても己が塩あんべ梅えが悪いから、お茶も上げる事は出来ねえから、水気は抜けてるが、へえしでもむいて上げよう」

と云いながらよう／＼床から這い下りてへえしという圀い梨の這入つた籠をそばへ引寄せる途端に表へ下りたのは、其の頃の山駕籠でございます。駕籠の脇に連添う一人の老女は、お高祖頭巾こぞずきんを冠り、ふつくりと綿の這入りし深川鼠三ツ紋の羽織に、藍あゐの子もち縞あゐの小袖りようづまの両ねずみがいき襟おんなきやはんを高く取つて長襦袢を出し、其の頃ゆえ麻裏草履ゆわを結い附けに致しまして、鼠甲斐絹ねずみがいきの女脚半おんなきやはんをかける世の中で、当たゞいま今ならば新橋の停車場すてえしよんからピーと云えば直に川崎まで往いかれますが、其の頃は誠に不都合な世の中で、川崎まで往ゆくのに、女の足では一晚泊りでございます。小僧さんが風呂敷包みを脊負くたびれあしつて草臥足あとで後から参りますと、駕籠から出たのは娘でございます。これもお高祖頭巾を冠り縞縮緬のはでやかな小袖

に、上には寒さ防けに是も綿入羽織を引掛けて居ります。

母「お前何うした、草臥れやしないかい」

娘「いゝえ、お母さんこそお草臥れでございましょう、あなたはお寒かろうと存じまして、お代り申しまじようと云つても、お代りなさらないで、歩いて入つしやいましたから」

母「いえ、わたしは歩くから寒くはないが、お前は駕籠の中だからさぞ寒かろう」

と云いながら後を振かえり、

母「常吉や重助の宅は此処かえ」

小「へえ私は一遍お使いに参りましたから存じて居りますが、此処でございます、誠に汚ない宅で」

母「これ、そんな事を云うもんじやないよ、御免なさい、重助さんの宅は此方かえ」

重「はい、どうぞ此方へ、お跡は私が閉めますから、お閉めなさらないでも宜しゅうございます、戸がガタピシ致しますから、さア此方へどうぞ、マア宜くこんな汚い処へ入らして下さいました、おやゝお嬢さんも御一緒でござえますか、どうぞ此方へ、おゝ

ゝ小僧さんもか、どうか其処へ腰をお掛けなすつて、さアゝ此方へ」

と上座へ据え、慇懃に両手を突き、

重「まことに御無沙汰を致しましてござえます、私もたいした事でもござえませんが、去年の暮の押詰りに寒さを引込みまして、少し疝氣が発って腰が痠りますので、商売にも出られませんが引込んで居りますので、春はお忙しかろうと存じますが、塩梅の悪いので彼に逢いたいと存じまして、重三郎を少しの間お暇を願いに遣りました処、一昨日出たぎり帰らねえとの御沙汰で悔り致しました、ヒヨツとして道楽でも始めてお店を明けるような事が有りますりやア私が合点致しません、何だつて十二の時から大恩を受けた御主人に御苦勞をかけるような事が有りますりやア、私は只ア置かねえと、そう申して居りましたので、おやまだ御挨拶も致しませんで、まず明けましてお目出度う存じます、旧冬は何角有難う存じます、私もまア一寸ねお歳暮に上ろうと存じて居りますうちに煩い付きました、毎年二十八日に上るんでございますが、お歳暮にも御年頭にも出られません、礼が欠けますと何だか氣になります、折角お出でなすつてもお茶も上げられませんような訳で」

母「いえもう構っておくれでない、お前も案じて居るだろうが、お前の処から人が来たので、政七も心配してね、どうぞ往つて話をしなければならぬが、人頼みの口上ではわからない事、他の者は出されないと云うので、私が来たのだが、重三郎は一昨日の晩出たぎ

り帰らないのは何うした事かと思つて、私も心配して諸方を尋ねたが、居ないのだが、重三郎は主人の代に毎年芝の金森様のお屋敷へ年始に往くのだが、一昨日も其のお屋敷へ往くのもお誂えのお刀を下拵えをして御覧に入れたのが、またお下げになったのを、其のお刀を持ったなり帰らないから、忤も心配していると、此の常吉が遅く帰つて来て、小僧の云うには、お屠蘇を戴き過して動けないように酔つて仕舞い、常吉の手に合わないから、仕方なしに重三郎を佐賀町河岸へ置いたなりに宅へ知らせに來たと云うから、政七も驚いて駈けて往くと、其処に重三郎は居なくつて、怪しい侍が頭巾を冠つて刀を抜いて立つて居たから、驚いて逃げ歸つたような訳で、すると翌朝万年橋の上に重三郎の袴や帶脇差と印籠が捨てゝ有つたから、重三郎はその侍に大切な御刀を取られ、言い訳なさに万年橋へ目標を残して身を投げて死んだらうかと云うのは、此方の鑒定だよ」

重「へえ、あの野郎……あの野郎、誠に申訳もございません、何んとも飛んだ事になりましてございます……重三郎の死骸は何処へ上りましたか」

## 七

母「死骸はまだ知れないから、屹きつと度身を投げて死んだと極きまった訳ではないけれども、何処を捜しても行方の知れない処を見れば、多分身を投げたろうという鑒定だが、お前が聞いたら嘸さびつ悔りするだろうと思うと、誠に云うのもお気の毒だけれども、云わない事は分らないが、お係りのお役人さまも其のお刀ゆえに御切腹になるかも知れない程の事、また私の方へも何どんな難題がかゝつて来るか知れないから、重三じゅうざが死んでも申し訳の立つ訳ではないのだから、実に宅うちは転覆ひっくりかえるような騒さわぎで、それに丁度政七も重三じゅうざ郎も厄年やくねだから、川崎の大師さまへ参つて護摩をあげて厄除やくよけをし、どうぞ一刻も早く重三の行方の知れるようにお願い申そうと思つて、私が娘を連れて大師さまへお参りをし、お籤みくじを戴かきながら来て、お前に知しせる訳なんだよ」

重「はい、そんな事とは些ちつとも存じませんで、お店もお忙がしかろうけれども、私わたしも老とし年のことだから、ポツクリ死ぬような事が有りますと、あの野郎が後で死目しにめに会わなかつたと思痴ちでも出ちやアならねえと思ひまして、虫が知らせたのか急に会いたくなりましたから、お忙がしい処とは存じながら、お暇を取りに使いを頼んで遣りましたので、お内儀かみさん毎度申します通り、彼あれが四才よっつの時に母おふくろ親が亡なくりましたが、乳吞ちのみ盛りでございますから、私わたしが梨を両方の籠へ入れるのを、一方の籠の梨を少し減へらしまして、それへ

彼奴あいつを載せ、悴わたくしと梨とを私がこう担かついで、乳を貰いながら商売を致して、何うやら斯うやら十二の年齢としまで丹誠して、お店へ奉公に遣りましても、種々御丹誠下さいましたから、段々と私わたしなどより物も覚え、来年は暖簾のれんを分けてやると仰しやうと申しますから、私わたくしもそれを楽たのしみに毎日重い梨を担いで歩き、六十の坂を越しながら斯うやってわく／＼して居りますのは、仮令たと何んな死ぬ程の事が有つても、これ／＼の訳で死な／＼しなければならいと言ひとことぐらい相談に参つても宜いのでございます、親を残して先立ちます其の上、御主人様へ御心配をかけ、自分は死んでも追付おっつかないような事をして、姿の見えないような事を致しましたは、誠に親不孝な奴で、皆さまへも何ともハヤ申そうようのない不忠でございまして相済みません、今朝も七草粥を祝おうと存じますとピシリと箸が折れましたゆえ気にかけて居りますと、隣の婆アさんが箸は木で拵えたものだから、折れることも有ろうと申して、祝し直してくれましたが、矢張やっぱそれが前表ぜんびようで虫が知らせたのでございましょう」

内「私も少ちいさい時分から丹誠して、悴と同じように生い立ったもののゆえ、何んな事が有つてもお内儀さん何うしたら宜かろうと云うのも、私に云い難にくい事は雪に云いさえすれば相談になるものを、併しかし彼あれはお酒をたべるとどうも御酒べしゆの上が悪いが、不断は猫のようなお

となしい男だから、思案に余つて軽はずみな事でもしたかと思つたと可愛相だから、私も娘も実に心配して居るのだよ」

重「はい、<sup>わたくし</sup>私は他に子はございませんから、若し彼の野郎が身でも投げて死んでしまえば定命より十五年も生き延びた私故、直ぐに身でも投げるか首でも縊つて死ぬより外に仕方はございません」

内「あれサ、そんな事を云つては困るよ、重三は死んだか生きたか分らない内に、お前が軽はずみな事でもした後へ、<sup>あと</sup>ひよつくり重三が歸つて来て御覧、それこそ却つて嘆きを掛けるようなものだよ、時節を待つておいで、私も出入の者に頼んで川筋を捜さして見るから、余り心配して身体に障つちやアいけないよ」

重「はい、自分の申す事ばかり申しまして済みません、旦那様へお目に懸つてお詫びごとも致しませんが、あなたさまから宜しく仰しやつて下さいまし」

内「私も永く話をして居たいが、気が急<sup>せ</sup>くし、まだ是から川崎の大師さまへお参りに往くのが遅くなるから帰りましょう、遅くなつたら新田屋へ泊つて帰ろうと思います、お前身体を大切<sup>だいじ</sup>におしよ、重三の事も案じずにおいで、出入の者へ頼んで置いたから、多分死ぬような事も有るまいと思うよ、大方面<sup>めんぽく</sup>目ないので何処かへ身を匿<sup>かく</sup>して居るかも知れない

よ」

雪「重三が帰ってさえ来れば私もお母さんと共々にお兄<sup>あに</sup>いさまの方は願ってお詫<sup>わ</sup>びごとをして上げるから、余り氣を揉まないでおいでよ」

重「はい誠に有難う存じます、実に何ともお詫<sup>わ</sup>の申<sup>まう</sup>そう様<sup>よう</sup>もございません、何うぞあなた……左様でございますか、お歸りで、誠に何もお愛想もございませんで」

と云いながら梨の籠<sup>ひき</sup>を引よせて、

重「これでも剥<sup>む</sup>いて上げましようと存じましたが、私<sup>わたくし</sup>のような汚い手で剥くのは何でございますから、小僧さん是をね、お土産にお持ちなすって下さいませんか」

内「おゝゝ有難う、折角だからお貰<sup>もら</sup>い申します、沢山は要らないがお珍<sup>めづ</sup>らしいから少し貰<sup>もら</sup>つて参りましよう」

重「かこいゆえ味はわるうございまいましようが、素性<sup>すじ</sup>の宜<sup>よ</sup>いのでございますから、小僧さんお前さんは重うございまいましようが、持つて往<sup>い</sup>つて下さいまし、お前さんにも二個<sup>ふたつ</sup>上げますから」

小「これは有難う、歩くと喉<sup>のど</sup>が渴<sup>か</sup>くから袂<sup>たもと</sup>へ入れて咬<sup>かじ</sup>りながら往<sup>い</sup>きます、この風呂敷は大<sup>お</sup>きいから大丈夫、宜<sup>よろ</sup>うございます」



内「じゃアお前氣を附けておいで、駕籠やさん、どうぞお頼み申しますよ」

雪「お母さま少しお代り遊ばせな」

母「私は歩きたいから歩いて往くが、おまえ寒くはないかえ、海端だから風がピュー／＼吹くから、宜いかえ」

と云いながら重助に向い、

母「左様なら、じゃアお前どうぞ今云つた通り身体を大切にしなければならぬよ」

重「はい有難う存じます、どうぞ旦那さまへ宜しく仰しやうて下さいまし、お嬢さま御機嫌宜しゅう、若い衆さん氣を附けて下さい、小僧さん御苦労さま」

小「へい、お辞儀をしようとして屈むと梨が転がり出しますから頭を下げませんが、ちゃんと心の内でお辞儀をして居ります」

内「そんな事を云うじゃアないよ」

と云いながら出て行くのを、重助は上り端まで這い出して見送る。昇夫はトットと急いで参る。母親と小僧は後から心を附けて、すたくと羽根田の弁天の方へ参りますと駕籠を見失いました。

小「駕籠が見えなくなりましたよ」

内「見えなくなる訳はないが何処へ往つたろう」

小「あの昇夫はいけない奴だと思ひます、全体宅うちから連れて来れば宜かつたんですが大森から乗つたもんですからいけないんです、悪口計ばかりきいて居ましたよ、皆みんな一緒に駕籠へ乗つてくれゝば宜いいに、女や小僧の足と附合つて一緒に歩くんだから本当に担にぎ難にくくツていけねえ、それも祝儀でも沢山呉れゝば宜いいが呉れねえツて忌いやな奴です、人の悪わるそうな奴でしたよ」

母「宜いいから急いそぎなよ、羽根田の弁天さまの武蔵屋むさしやに居るに違ちがひないから、先へ立つて急いで往いきなよ」

小「へい宜いしゆうございます」

と小僧は梨を脊負つたなり駈けて参ります。突当りは海で、一かた方は磯馴いそなれまっ松の林の堂、手前に武蔵屋と云うちよつと小料理を致す家が有ります。正月は大師さまへのお参りは有りませんから客を致しませんので、表はピタリ障子たが閉ふつて居ります、処へ小僧が参り、

小「御免なさい、真まっぴら平御免下さい」

女房「はい蛤を上げますかえ」

小「なに、あの、駕籠へ乗った嬢さんが此方へ来やアしませんか」

女房「今においてなさいましよからマアお掛けなせえましよ、蛤を上げますかえ」

小「蛤などは何うでも宜いが、お高祖頭巾を冠つて羽織を着たお嬢さんが来やアしないか」  
女房「まアだおいでなせえませんが、まア明けて一服お吸いなせえましよ、蛤を上げますかえ」

小「このお内儀さんは蛤に取附かれて居るか知ら」

母「此処へ来ないたつて一筋道じゃアないか」

小「だからへんてこらいな昇夫だと云うのです、お嬢様を何処へ連れて往きアしませんか」  
母「まさか道を間違える事も有るまい」

と云いながらスツと中へ這入り、

母「お茶を一杯おくれ」

女房「蛤を上げますかえ」

小「私が来ると蛤々ツてえますが、可笑な内儀さんだ」

母「蛤も御酒もようございます、何も喫べたくはないが、私は駈けて来たので恐ろしく草臥れたよ、したが大森の山本で逃えてくれたのだから、まさかに間違いは有るまいが、草

臥足ゆえお茶でも呑んで待つて居よう、今に来るだろう」

と云つてると、表はピッタリ障子が閉たつて居りまするが、障子越きこに聞える一節切で、只今は流行はやらんが、其の頃は大層流行致しましたもので、既に日光様のお吹きなさいましたのをまむちと申し、里見義弘さとみよしひろの吹きましたるを嵐山と名付け、一休禪師の所持を紫と申し、文屋康秀ぶんやのやすひでの持ちましたる一節切を山風と申します、其の頃は太いに流行りましたが、田舎に参りまして一節切を吹くのは稀で、其の音ね古雅にして、上手な人が吹きますと修行者じやとは思われませんような音色でございます。

## 八

母「これ常吉や、あの修行者に私は手の内を上げましょうよ」

女房「通つてお呉んなせえよ、銭は出ないよ」

母「いえ私が上げますから」

と云いながらお捻ひねりを拵こしらえて小僧に渡す、小僧はこれを持って参り、障子を明けると鼠無地の道行振みちゆきぶりのようなものを着て、下は木綿つむぎか紬つむぎか分りませんが、矢張やつぱり鼠無地の小袖

でございます、端折はしよりを高く取つて木剣作ぼくけんづくりの小脇差を差し、二十四節ふしの深編笠を冠り、合切がつきいぶくろ囊はすを斜に掛け、鼠の脚半に白足袋に草鞋で、腰に大きな包つみを巻き附けて居ります、極く人柄の好い服装よりなりの拵え、品格のよろしい修行者でございます。

母「何うぞ其処から上げておくれ」

小「へえ、お修行を上げますよ」

とお捻りを手に渡すと、修行者は手に報謝ほうしゃを受けながら、笠の内から暫く覗いて居りましたが、お捻りを懷に入れて編笠を脱ぎ、右手めてに提げながらズツと中へ這入つて来たのを見て驚きましたというは、此の人は金森家で四百五十石頂戴致した稻垣小左衛門の嫡子こさぶろう小三郎と云うもので、とつて二十三歳、色白くして鼻筋通り、口元の締つた、眼のきりツとした立派な人ですが、服装なりが變つて居りますから岡本の内儀は肝を潰して、

内「誠に思い掛けない、何うして、斯ういう処でお目にかゝろうとは存じませんでした、何うもお見掛け申したとは思いましたが、貴方さまとは気が付きませんでした」

小「私わしもおまえが此処に居ようとは思わなかつた、一昨日重三おと、いがお屋敷へ参り、災難とは云いながら誠にお氣の毒な事に相成つたから、早速右の次第かみを上へお届けをした処が、家事不取締り以ての外と云う厳しい御沙汰ごさたで、父親は百日の間謹慎つしみを仰付けられ、百日間

に國綱のお刀の出ん時には父は切腹仰付けられるか、追放仰付けられるか知れん、それゆえに重役渡邊外記と相談のうえ、実は少々心当りの事も有つて、美濃の群上へお刀を捜しに参るのだが、私は常にこの羽根田の弁天を信心致すからこれへ参つて、刀詮議のため今晚は此の弁天堂へ通夜をして、祈念を致す心得で参つたが、これへ来ると図らずお前に逢つたが、誠に思いがけないことで」

内「どうも重三郎の不調法からあなた方さまへとんだ御苦勞を掛けまして、立派な御方さまが修行者のお服装に成つて遠国へ往かッしやる事になりましたのも、皆な彼が不調法からでございます、私も実は重三郎の親が此の羽根田に梨売をして居りますから、それへ重三郎のことを知らせる心得で、政七も厄年でございますから、厄除に川崎の大師へ参詣ながら参りましたのでございしますが、娘を駕籠へ乗せて連れて参りましたが、昇夫が何処へ担いで参りましたか見失いましたので、今に参ろうかと存じまして此処に待受けて居りまするので」

小「ふーむ、娘を乗せた駕籠を、羽根田から川崎へ渡る渡口より北に当る梨畑の下で一寸見掛けたが、お前の娘の乗った山駕籠には、上に百合形更紗の派出な模様の風呂敷包が結い附けては無かつたか、駕籠の中には頭巾を冠つた婦人が一人居る様子であつたが、

顔は分らなかった」

内「あれまア、それでございます、渡の方へ参りましたか」

小僧「だから彼は<sup>あれ</sup>いけないと云うので、危険<sup>けんのん</sup>な奴ですよ、強請<sup>ねだりごと</sup>言ばかり云つてましたから、お嬢さんが勾引<sup>かどわか</sup>されるといけませんぜ」

小「お前は川崎の大師へ参詣して宿屋は何処へ泊る積りだ」

内「はい、新田屋でございます」

小「それでは新田屋の方から名主へ掛り、手を以て尋ねれば知れん事も有るまい、私<sup>わし</sup>も又見当ることが有つたら新田屋まで送り届けるから急いで往<sup>ゆ</sup>くが宜<sup>よ</sup>い」

内「はい、有難う存じます、種々<sup>いろく</sup>お話もしようございますが、娘のことも心に掛りますから御免を蒙<sup>こうむ</sup>りまする、常吉や、さア急いで往<sup>ゆ</sup>きな」

常吉「こんな時に梨なぞをくれるから重たくつて駄<sup>か</sup>けられやアしません」

と云いながら二人とも一生懸命に駄<sup>いっこく</sup>けて参りました。するうちに日は段々と暮れかゝつて参りますると、田舎の人は頑固<sup>いっこく</sup>でございますから、

女房「お気の毒でござえますが、困りますから外へ出て往つておくんなせえましょ」

小「大きいお邪魔を致した大分<sup>だいぶん</sup>早く暮れて来ましたな、宜しい／＼今出ますよ、決してお

邪魔は致しません」

と云いながら其処を立ち出で弁天堂へ参りまして、包みを下し、賽銭を上げ、頻りに心の内に弁天を祈念して、何卒粟田口國綱の刀一刻も早く手に入りまして、親父の百日間の謹しみの速かに免れるように、弁才天女の御利益を以て粟田口國綱の行方の分るよう守らせたびたまえ。と頻りに弁天を念じて居ります内に、日はトツプリと暮れ切りました。あゝ今夜は此の弁天堂へ通夜をして、夜が明けたれば出立しようと心得て居ると、どうノツと松ヶ枝に中りまする風音、どぷりくという春の海では有りますけれども、岸へ打付ける海音高く、時はまだ若春のことで、人ツ子一人通りません。すると裏手の松林の中で、

「ヒー人殺し」

という金切声、何うも女の声のようだが、人殺しと聞いては捨てゝ置かれんことだと云うので、荷物を其処へ置いて木剣作りの小脇差を帯したなりで、つかくとして出て来て見ると、文身だらけのでツぷりと肥った奴が、腰の処へ襦袢様なものを巻き付け、一人は痩せこけては居るが骨太な奴と二人で、一人の娘を松の根株へ押え付け、

甲「娘さん泣いても騒いでも仕様はねえ、此の浜には船一艘繋いで居ようじやなし、人ツ



子一人通りやアしねえ、なにを泣くのだ、ぐずぐずしやアがると殺してしまうぞ、さ命が惜くば己つちのいう事を聞け」

乙「この名物□□を賞翫しようか、ギヤア／＼泣いても仕様がねえ」

と云いながら一人が娘の□□□□り、既に□□めにかゝる様子を見て、小三郎は驚き、いきなり飛かゝって、娘の上に乘し掛つてゐる奴の禪の結び目と領首を取捕まえて後の方へ投ると、松の樹へ打附けられ、脊筋が痛いからくの字なりになつて尻餅を搗き、腰を撫つて居ります。一人が

「おや」

と見る所を草鞋穿の足を上げてドンと腮を蹴つたから

「アツ」

と云いさま後へひっくりかえる。

乙「こん畜生、やい何処から出やアがった、ヤア安、起ろよ、やい、手前何処から出やアがった此ん畜生」

小「不届至極の奴だ、軟弱い娘を斯様な淋しい処へ連れて参り、辱めようと致す勾引だな、許し難い奴なれども修行の身の上だから何事も神仏に免じて許して遣る、殺しても宜い奴

だが其の儘許して遣るから、さつさと往け」

甲「おや此ン畜生、生意氣な事を云やアがる、出し抜けに出やアがッて何んだろう」

乙「先刻羽根田の商人家の前で笛を吹いてた乞食だ、生意氣な此の野郎殴れ」

と原文に三島安という東海道喰い詰めの奴で、息杖を取って打って掛つたが、打

たれるような人じゃ有りません、真影流の奥儀を極めた小三郎なれば、少しも騒がず左

右から打込んで来る息杖の下を潜りながら、木剣作りの小脇差を引抜いて刀背打ちに一人

の肩口をしたゝかに打つ、打たれて一人は斬られたかと心得、ドツと前へのめるようにし

て逃出す、これを見ると一人は驚いて息杖を投り出し、同じく跡からパラ／＼と逃げ

出す。

小「不埒至極な奴だ、これ女中嘸驚いたろう」

娘「はい何方のお方様か存じませんが、危い処をお助けくださいまして誠に有難う存じま

す」

小「お前のお母さんは川崎の新田屋に参つて居るから、心配なく私と一緒に往きなさい、

私は怪しい者ではない、私は金森家の侍で、親父はお前の宅へ往つてお前の親御とは馴染

の事だから心配なく、まア／＼一緒に往きなさい、私が新田屋まで送り届けて上げよう」

とはから小三郎がお雪を新田屋へ送り届けると、母も小僧も大きに悦び、

母「思い掛けないことでお助け下さいまして、お礼の申そうようはございませんから、お餞別代りに聊かではございますが」

と金子を差出したが、小三郎は金子を受けませんで、

小「何うか私が国から帰るまで丈夫で居なさい、私は直に立ちますゆえ、此処から早く三人共に帰るように」

と申し残して出て行く。翌日に相成ると早々母は娘のお雪を連れて万年町の宅へ帰りました。これから稻垣小左衛門は百日経つてもお刀が出ません処からお暇が出ると云う、稻垣小左衛門浪々のお話でございします。

お話二つに分れて、松葉屋に抱えになりました鋏鍛冶金重の娘お富は、まだ目見え中ではございますが、目見え中と云うものは主人が内所に置いて様子を見ます。

主「何うも女は美しいが歩きつきが悪いな、ちと屈む癖があるから反らせるが宜い、お前烟草を人に付けて出すのに、それでは色気がない、斯うすると宜い」

と教えて貰う。種々主人が様子を見て、親族得心の上で印形を致しますのですが、其の頃の証文というものは何うしても損のいかないうような手堅いもので、証文が極まると二

階の大きい花魁<sup>おいらん</sup>のお世話になると云う、大きい花魁と云うのは其の家の職<sup>しよく</sup>とか二枚目とかいう立派な仲<sup>なか</sup>の町張<sup>ちやうば</sup>りの花魁が、若いおいらんを突出<sup>つきだ</sup>しますので、抑<sup>そも</sup>突出しの初めからという文句が有りますから、大きい花魁が万事突出し女郎<sup>しんぢむろ</sup>の支度まで皆その大きい花魁が致します。夜具布団<sup>しかけ</sup>から襦袢<sup>あたま</sup>の飾のものから、新造<sup>しんぞう</sup>禿の支度まで皆その大きい花魁が致します。主人は一両でも出しません。主人と云うものは徳なもので。若<sup>わか</sup>緑<sup>かみどり</sup>という二枚目の花魁がお富の世話を致しますが、誠に親切なもので、お富は時々内所へ来て小さくなつて居ります。愈々<sup>いよく</sup>証文が極つて、此の三月の宵節句と節句の二日の内に突出して、五町<sup>ちやう</sup>を廻らなければならので心配致して居ります。処へ縁と云うものは妙なもので、彼<sup>か</sup>の紀伊國屋の伊之助が髪結の長次を連れて、八重花<sup>やえはな</sup>と呼ぶ花魁のところへ浮<sup>うか</sup>れに参りました。新造「若旦那お風呂に這入なまし」

と云うので長次と一緒に下の廊下を通ると、内所の暗い処にぼんやりして居たお富がふいと見ると、伊之助ゆえ飛立つように思いましたが、おぼこゆえぐずぐずして居るのを長次が見附け、

長「もしく若旦那く」

伊「えゝ」

長「あの暗い処にいる娘は鉄鍛冶金重という上手な爺さんの娘ですが、親が死んで石塔料の為に自分から此家へ駈込んで身を買ったと云うことです」

伊「美い器量だのう」

長「余程美い娘です。何かお前さんに物云いたそうに此方をジロ／＼見てモジツカして居ますが、お前さんに余程惚れてますぜ、なに本当の事さ、私を追かけて来て鉄を一挺呉れて、どうか若旦那に宜くお詫をツてんで、どうも余程惚れてますよ、私が浮世の義理に一寸逢つて来ますから、あのなに、花の香さん、若旦那をお連れ申しておくれ」

と云いながら長次はお富の傍へ遣つて参り、

長「お富さん」

富「おや親方、まア面目次第もございません、私は斯んな処へ這入りました」

長「面目ない処じやアない、皆なが誉めて居やす、錨床の鐵が来て、あの娘さんのような感心なものは無え、親の為に自分から駈込んで身を買るといふのは実に感心だ、世間には浮気をして茲へ来るものは多いが、親の為に来る者は少いッてね、口の悪い野郎だがお前さんには驚いて居やすよ」

富「有難うございます、あの今親方と一緒においでなすつたのは紀伊國屋の若旦那でござ

いますか」

長「忘れねえネ、八重花という花魁と馴染んで遊びにおいでなすったんですが、若旦那の方では惚れも何もしないが花魁の方ではポツと来ているくらいだが、若旦那は堅いから、ツンとしまつて居て、時々私が合わっち口あいくちだもんだから、長次往いこうと仰しやつてお供で来るけれども、何うかすると日暮ひくれ方から来て戌刻よつめえ前に帰けえる事もあるし、夜来れば翌朝よくあさは店を開けねえ内に帰けえらねえと大旦那の首尾が悪いのだが、大番頭さんが粋な人で合図をしてくれるから、斯うやつて時々来られるのださ」

富「親方私はあなたに少しお願いが有りますが叶えてくださいますか」

長「なにを私わっちに」

富「あのね、私は此の三月のお節句から何うしてもお女郎じようろうに成つてお客を取るようになるのでございます」

長「フン、へえ結構でござえやす」

## 九

富「どうも始めてお客を取る時が怖くっていけないから、私が始めて出ます時に……あのね……若旦那が……私を可愛相と思召して……買って下さる事が出来ましようか、貴方願つて下さいませんか」

長「紀伊國屋の大将をかえ、それはいけねえ、どうして嚴ましい、茶屋へでも知れた日にやア大騒ぎだ、それはいけねえ、私共が登る処のチョン／＼格子なら、あのお多福と見立替という事が出来るけれども、只玉を二つ払えば宜いという訳にはいかねえから、それはいけねえ」

富「どうぞお願いですからそうして下さいな、私は本当に怖くっていきませんから、後生ですから願つて見て下さいましな、其の代り私の身が立ちますと屹度お礼をしますから」  
 長「お礼ツたつて、それは私にはいけねえから、若旦那のお気に入りの幫間の正孝に談をして見ますから、待つておいでなさい」

と慌てゝ立上り柱へ頭をコツリ、  
 長「あゝ痛い何うも」

と座敷へ参り、

長「大きに遅くなりました」

伊「強氣に長いな、馴染の女とたかいぜ」

長「お前さんのお蔭で大黒柱へ才槌頭を打付けやした」

と云いながら伊之助の耳元へ口を寄せ、

長「大変な訳です、素人の時分からあなたに岡惚で、此の三月の節句から仲の町へ出ると云うんで」

番新「あら長次はん、何んだねえ若旦那へ智慧工付けてさ、憎らしいよ、花魁が心持が悪いよ、大きな声で云いなましなね」

長「大きな声では云われんことだ、質店の若旦那だから」

と瞞かしながらまた小声で、

長「後生お願いだから後で何んな御馳走でもしますからってヤイノくでしよう」

番新「なにを智慧工附けるんだよ、長次はんコソく話などをして」

と云つてゐる処へ櫻川正孝という幫間が襖を明けて這入って参りました。

伊「いや師匠待ってたよ」

長「正孝さん遅いじゃアねえか」

正「これはどうも、へい、花魁御早く御上りなさいまして、前夜は仲通りさんの相変らず



の癖でしょう、大きいので続けて五杯遣つたので大變に酔つちまつて、大きに失礼を致しました、そろ／＼何か取掛りやしようか」

長「なに師匠ちよつとこつち一寸此方へおいでよ」

正「若旦那此の間此の親方が、旦那遊びをするつてんで、安尾張やすおわりか稲弁いなべんへ往いこうというのですが、可笑おかしい何んだツて、長次さんの踊を始めて見ました、変な形の踊りでしたが、あのぼつてりしてえるのは余程よつほど親方に初会惚れですぜ」

長「そんな事は宜いいから此方こつちへ来ねえ」

と云われ正孝は長次の口元へ耳を差附け、

正「え……なに……何んだか小声でさつぱり分りません……くすぐったいね、他聞はきを憚かる儀ですと……ウン成程……へえ／＼それはいけません……へい成程……フン……それはいけませんや、何うしたつて是れはどうもいけません、お取持をした事が知れた日にやア私が直すに茶屋をしくじり、二階を止められるぐらいは仕方がないが、そんな事をすればどうしたつて正孝の首が三つ有つても足りないから、是はどうもいけません」

と極ごく小さな声で云うと、

番新「花魁見なましよ、長次はんがまた正孝はんを捕つかまえてコソ／＼話をしてえるよ、横

着ものだよ」

正「いえなに長次さんが正孝に岡惚と来てえるんで、正孝此方へ来いってんで、こう傍へもたれ掛り、幫間と耳こすりをしたいってんで」

と云い紛らし、また長次に向い低声にて、

「八重花花魁が此の月末にはお目出度スーツとお身請になりますから、花魁が素人に成つちまつて、後へ下のがニューツと出る処を突出の初日からなんすれば、何も障りがなくて宜しい、其の時にはそれはまた心得て居やす」

番「あれ見なまし、じれつたいよ、何時までもコソ／＼話をしてさ、正孝はん傍へ往きなますな」

正「いえ此方が親方に岡惚てるんで、こう親方の膝へ手を突いて見たいんで」

と瞞かして其の場は済まして帰りましたが、成程此の月末になると八重花は身請になりましたから、お富は若草と改名して、翌月の宵節句から出ましたが、突出しの夜から伊之助はお富の若草を揚げましたが、初会惚れ処ではないのでございます、素人の時分から思い染めている伊之助でありますから真実に致しますこと一通りでない。仲の町の花魁の見識で、お客に烟草をつけて遣るなどということは余程馴染にならなければ出来ませ

んが、初<sup>はじ</sup>りから伊之助の足袋の洗濯までもしようと云う真実ゆえ、伊之助も悪<sup>にく</sup>からず思い、足を近く来ますので、此の事が仲の町にぱツと致しました。若草さんは外のお客に出ない花魁、まるで紀伊國屋の伊之助さんのお内儀<sup>かみ</sup>さんのようだ、御新造<sup>ごしんぞ</sup>だという噂が立ちましたから、別に買いに来る客も有りません、稀<sup>たま</sup>にあつても座敷切りで、お客へは出ないという書附を伊之助と取合つた仲でございます事がぱツと致しますと、芸妓<sup>げいしや</sup>幫間<sup>たいこ</sup>に仕着<sup>しきせ</sup>も出さなければならず、総<sup>そう</sup>羽織<sup>ぼおり</sup>を出すと云うので、廓<sup>さと</sup>の金には詰るが習い、伊之助も漸<sup>だん／＼</sup>々<sup>うち</sup>家の方も不首尾になり、金に手支<sup>てづか</sup>えて参りました。すると九月になり、節句前の事でお父<sup>とつ</sup>さんの耳へ這入つたから、固い人ゆえ中々承知致しません、何んでも勘当をしなれば許<sup>いいなすけ</sup>嫁の万年町の岡本へ対して済まないから、久離<sup>きゆうり</sup>切つて勘当をするというので、番頭の安兵衛は粋な人ゆえ、兎に角私<sup>わたくし</sup>に預けて下さいまし、当分懲<sup>こち</sup>しめの為に二階住居<sup>ずまい</sup>をなさればそれで宜しい、私<sup>わたし</sup>が見張<sup>みはり</sup>つていて外へ出さんことに致しますと云う事になりましたが、伊之助は番頭に向い、

伊「どうぞお願いだから、もう一遍遣つておくれ、これつ切に往<sup>い</sup>かないから昼遊びだけ許しておくれ、黙つて往かないで居ては少し義理が悪い事がある、紀伊國屋の伊之助と云やア仲の町でも知られた顔だから店のひけるまでには屹度帰つて来るが、後生だから昼遊び

だけ遣つてくれろ」

と頼むので、番頭の安兵衛が幾らか金を工夫して、

安「これだけ上げますが、其の代り店のひける前に帰つて入つしやらないと、もう私は決してお詫びごとを致しません、御勘当に成つても知りませんよ」

伊「宜いとも、屹度帰つて来る」

とはから金を懷中して髮結の長次を誘い、遊びに参りましたが、若草は勤めの中で懷妊して五月目いつつきめでござりましたが、是れは滅多に無い事で、余程よつほど惚れなければ身重になる事はございますまい。若草は素人臭く懷妊したとも云い兼かねて居ります。伊之助は別れの遊びでございますから、どうも賑やかにはいきません、何を見ても可笑しく無いから早く切上げ、伊之助と若草は屏風の中へ這入りましたが、伊之助はぼんやりして居ります。

若「申し若旦那、伊のはん」

伊「えゝ」

若「どうしてもこれつきりしか来られないの」

伊「そうサ三百七十両という大穴を明けた処七十両だけは安兵衛が償つて呉れたが、あと  
の三百両だけの始末の出来る間、二階住居すまいをして居て、流れの質や両替の方でどうか工夫

をして、穴を埋めるようにして上げますと安兵衛が親切に云ってくれたから、親父の方の首尾はおつ着いたが、今日は番頭に頼んで何んでもかんでもひけ前には屹度帰るからと云つて、漸々暇を貰つて来たくらいだから、もう三年ばかりは何うしても来る事は出来ないのだ」

若「おまはん茲で金が出来て、お父さんの首尾さえ附けば、今までの通り主が来られるよな事になりんすか、そうなら私がお金を才覚しようじやア有りまへんか」

伊「その金は何うして出来るんだえ」

若「外に出来る目途もないけれども、仲の町の井桁伊勢屋から来るお侍の、青髭の生えた色の白い丈の高いお客は、来てく来抜くが、わちきは厭やでなりまへんから、碌々気休め一つ云いまへんが、あの客を取留めれば三百両や四百両の才覚は出来ますから、そうしてお金を拵え、三百両だけ主に上げるから、身の立つようにして呉んなまし、主の来られないものを無理に来てくれると云うと、却つて主の身に障りんしうから、月に三度ずつは屹度逢いに来てくんなまし、茶屋まで来て顔だけ見せて呉んなまし」

と云われ、何と思つたか伊之助は急に気色を変えました。

伊「此方だつて月に一遍か二遍忍んで逢いに来たいが、来られるか来られないか知れない

から、その井桁伊勢屋から来る色の白い美しい男の客をお取りな」

若「主の身の立つ事だし、月に三度ずつも逢われる事なら、そのお客を取留めて見ようじやア有りまへんか」

伊「取留めるとも取留めないとも御勝手におしな、私も紀伊國屋の伊之助だ、お前に深く買い馴染んで、持物のようになってるお前が、外の客を取って、それから金を引出して私の身を立てる様な見つともないことは出来ないが、そのお客を取りたいならお取りな、是迄も他のお客は取らないと云っておいたって、内々取ってたか何だか分るものか、お取りな、何うせ女郎の千枚起請という譬の通りで、屏風一重中で云った事は、皆反故同様だ」

とあら／＼しくいう伊之助の顔を若草は怨めしそうに見て涙声になり、

若「あら伊のはん私もたゞならぬ身の上に成っていますから、月に一遍ずつでも主の顔を見るのを苦界のうちの楽しみにしているのぎますから、年に一度でもようございますから、顔でも見せておくんなましな」

伊「顔を見せ度くつても三年ばかりはもう来られないのだ、今日も無理に來たくらいなのだから、そんな事を云われちやア心持が宜くないじゃアねえか、末は夫婦と仮にも誓紙まで取り交した仲だのに、そう云う簡では仕様がなから、私はもう是ぎり逢わねえとし

て帰<sup>けえ</sup>るから、お前は其のお客を取るが宜<sup>い</sup>い、善<sup>い</sup>いお客だからお取りよ、私が馬鹿だから是まで誑<sup>だま</sup>されてたんだ、帰<sup>けえ</sup>るから羽織を出しておくれ」

若「あゝいう事を云いなます、おまはんが帰るつたつて帰しまへんよ」

伊「帰<sup>けえ</sup>さねえつて帰<sup>けえ</sup>らなければならぬのだよ」

若「帰<sup>わちき</sup>るんなら私<sup>みじよう</sup>の身<sup>き</sup>を極めてつから帰<sup>き</sup>んなまし」

伊「お前の身上<sup>こつち</sup>どころか此方の身体が極らねえのだ、二階<sup>ずまい</sup>住居になるか勘当をされるか分らねえのだから、お前は勝手に其の客をお取りな、仲の町の花魁<sup>ど</sup>が何んなお客を取ろうが、毎晩替る枕<sup>かりそ</sup>だもの、お客を取つたつて此方で何んとも云えない訳だから仕方はないが、苟<sup>かりそ</sup>めにも書いた物を私に渡して置きながら、それを反故にして……反故にされても何んともいうことは出来ないから、あの客を取るが宜<sup>い</sup>い、結構だ、子供が出来たというのも誰の子だか分りやアしない、疾<sup>と</sup>うからあの客を取つてるのかも知れやアしない、私は帰るよ」

と云い放ち立ち上る。若草は泣きながら、

若「申し若<sup>わか</sup>浪<sup>なみ</sup>はん、若旦那がお帰りだと云いますよ」

番新「あい何うしたんだね」

と屏風をあけて、

番新「何うしたの、帰るの、お戯ふざけなますな、坐まんなまし」

伊「坐まれませんよ」

番新「そんなことを云わずに寐ねて往いきなましよ、花魁けい何を腹はらア立たしたの」

若「あの井桁伊勢屋の客衆しゆの事を若旦那に話したら腹はらを立て、これぎり来ないと云いなますから悲しくつてなりまへん」

番新「そう、若旦那それは斯ういう訳なんです、花魁けいがおまはんの事を心配して泣いて騒いでいます、他ほかの座敷の花魁とは違い、おまはんの胤たねまで出来て、他のお客へは出ないから、主人の首尾も悪いが、これまで随分主人の為にも成なつて居るけれども、どうも極りが悪いから、それにまたおまはんの身の上、金でお詫わが出来るなら、何うかして拵こしらえて上げたいが、馴染なじんで来るお客は無し、困こつたものと心配して居なますから、主の為なら仕方がないから井桁伊勢屋から来る客をお取留とどめなましと、私わちきが花魁けいに勧めたのぎますのサ、前から取とつて居るの何んなんのつて、そういう心この花魁けいか花魁けいでないか大概分わりそうなものものがいますね」

伊「合あいづちち槌つちを打うつて旨旨く云いつて居る、花魁けいと番頭新造は極きつて居るぜ」



## 十

番新「あゝいう事を云うんだもの、本当におまはんは花魁殺しだよ、時々おまはんは花魁を打つて帰る事があるが、他の花魁なら只是置きまへんが、座敷の花魁ばかりは些とも逆らわずに泣倒れて、打たれながらも嬉しがって、おまはんが帰った後で何時でも癪を起し、わちきが介抱するんですが、五日か六日も経つとおまはんが来ると癪が治まるんですが、今度は三年も来られないとお云いますなら、三年の間癪が治りまへんと、世話アするのは私一人、辛うぎます、素人の嬢さん見たような花魁に世話ばかり焼かして苦労ばかりさせて、本当に悪らしいよ、床へ這入って緩りと寐物語りをして、相談ずくにしていきなましよ」

伊「いやだよ帰るよ」

番新「仕様がなないね、あの、長次はんを呼んで来なよ、あの娘や、何んだって今ツから居眠りをしているんだよ、いけねえ餓鬼だよ、長次はんを見て来て呉んなましよ、喜勢川はんの座敷に居なますよ」

禿「あい、長次はんくく」

長「おい／＼何んだ、どうしたの、え、申し若旦那何んだってお帰んなさる」

伊「お前は遊んでおいでよ」

長「お前さんが帰るなら私も一緒に帰りやすが、亥刻までに帰れば宜いんでしょう、何うなすつたのです」

伊「何うなすつたッてお前は遊んで往きなよ、喜勢川は真物だから泊って往きねえ」

長「真物も何も有りやアしません、あなた何をそんなに腹ア立つたの」

伊「何んでも宜い、己は帰るよ」

長「若旦那そう癩癩を起しちやアいけねえ、若浪さん、なにを……ソレお氣に入りの正孝さんと呼んで来なよ」

番新「あい、あの娘や、ちよいと正孝はんを呼んで来てくんまましよ」

と正孝を呼びに遣ると、他の座敷に居りましたから直に飛んで参り、ピョコ／＼しながら、

正「若浪さん何ういう訳で……フーン、それはいけません、若旦那先ずトロリとお寝みなさい」

伊「トロリも何もいらないうや」

正「何ういうお腹立か知りやせんが、私は誠にお歸し申し度くない、実はな、あれが何時もの通りまた十日か五日目においでになつてお顔が見られるなら何んですが、三年も来ないといやると此方は島流しにでも逢つたような心持ですから、お歸し申したくない、花魁も泣いて入らつしやるから、ちよいとおよつて入らつしやい、花魁の心を安めてからお歸りとなさい」

伊「何んでえ、仲の幫間だから花魁の鼻肩をしねえな「幫間ドラを打たして陣を引き」と云う川柳の通りで、己が勘当にでもされたらば唾も引掛けやしめえ」

正「是は恐入りやす、貴方が御勘当になれば私はあなたをベロ／＼甜めますよ、あなたが御勘当になれば揚屋町の裏辺の小粋な処へ世帯をお持たせ申して、私が仕送りをして御不自由はおさせ申しませんで、万事お世話を致しやしよう」

伊「己は歸る、己の足で己の宅へ歸るに何も無理に引止める訳は有るめえ」

正「お引止め申す訳では有りませんがあの通り花魁が泣いて入らつしやるから」

番新「申し若旦那をお歸し申すと聞かないよ」

正「若旦那が歸る／＼と仰しやるのは何う云う訳なんです」

番新「ナニ井桁伊勢屋のお客の事からさ」

正「これはどうも、これは恐入った、若旦那それでは貴方まるで花魁を苛めるようなもので、花魁が可愛相です、あのお客に花魁が惚れるのなんてえことがありますものか、彼奴は何処ともなしに女に嫌われるように生れ附いてるんでしよう、女除けのお守りでも持つてるのか、変に色が白くつて、じゞむさくて妙でげす、ハ、それはあなたが無理でげしよう、そんな事を仰しやるようではまだお遊びがお若い」

と云われ、伊之助は勃ツとしていきなり扇で正孝の頭をピシヤリ。

正「ア、痛い」

伊「どうせ己は遊びは知らないから、馬鹿にされて斯んな目に逢ったのだ、帰るツたら帰る」

と止められると猶歸るといふが見得の場所の習いで、ドン／＼と梯子を駈け下る、若草は本間の方へ泣き倒れる。番頭新造は泣きながら跡から追いかける。正孝も長次も続いて参ります。

番新「藤助どん、お願いだから若旦那の履物を出すと聴かないよ」

伊「早く履物を出せというのに」

若者「へい」

番新「出すときかねえよ」

伊「出しねえというに」

と無理やりに履物をひつたくつて表へ飛び出し、無闇に駈出して大門おおもんを出る。跡から続いて正孝と長次が追いかけて、

長「若旦那く」

正「これはどうも恐入った、大変にお飯まんまたを喰べ過ぎて居るから駈けると横よこ腹こつぱらが張つて堪らない」

伊之助はズン／＼土手の方へ参る。兩人はドシ／＼追掛おいかけて田町へ下りずに先の方へ無闇に駈出しましたから、

正「若旦那何処へ行くのです」

伊「何んだツて一緒にくツついて来たんだよ」

正「でもあなた、花魁が前からあの侍を取留めて居るならお断りは致しませんが、客にして居るだろうとお疑りでありましょうが、あの花魁に限って決してそんな事の無いというは正孝が知って居ります」

伊「惚のろけをいうようだが互に書附まで取交とりかわして、私は決して他の客へは出ないから交つきあ

際でも他へ登あがつてくれるなど云うから、己も他へは登ったことはありやアしない、互に斯う云う書附まで取替とりかわせて置きながら、他の客を取りたいと云うから、勝手に取れと云うのだ」

正「花魁が何んで彼あんなお客に惚れましょう、私は大嫌い、あの屁つぴり侍の屁ツチヨロな、彼のくらしいやなお客は有りません、あの屁つぴり侍」

と云つてる後うしろに頭巾を冠つてどつしりした羽織を着、大小を落し差しにした立派なお侍がいきなり正孝の袖を取り、

侍「屁びつ放り侍とは何んだ」

正「オヤ、これはどうも、イエ誠に恐入りました、御免遊ばせ」

侍「コレ屁わきつ放り侍とは何んだ」

正「イエ殿様、貴方の事を申したのではございません、他に屁わきツチヨロの様な人が有りますから、貴方が後に入つしやる事とも知らず、つい申しましたが、お侍さまで入つしやるから貴方の事を申したと思召おぼしめしましうが、決して左様ではございませんので」

侍「イヤ、己のことを云わんにしろ武士は相見互いだ、貴様は吉原町の幫間たいこもちじゃアないか、客の機嫌きげん氣き棲づまを取つて、祝儀を戴き、其の日を送る幫間たる身の上でありながら、何んだ

屁つぴり侍とは、不埒な奴だ」

正「どうぞ御勘弁遊ばして」

侍「幫間の分際で武士に悪口あつこうを申す不届奴ふとぎやつ、勘弁相成らん、打ッ放ぶばなしちまう」

と云われ正孝は真青まつさおに成つて謝つて居りますから、伊之助も心配し長次も驚いて居りました。

伊「おい長次や、お前ちよつと詫ごとをしてやんなよ、正孝が可愛相だから」

長「ですがね、連だつれと云つて私も一緒わつちにやられると詰らねえから」

伊「それだから往來の通りがりの積りで詫に這入るが宜いいじゃねえか」

長「大事おおごとですね、あなたが出て来たから、こんな事になります」

と云いながら遣つて参り、

長「へーく」

侍「何んだ手前は」

長「へえ、私はホンわっちの往來の通りがりの者でござえやすが、へえ、何か此の者が殿様に對して不調法を申し上げて、御立腹を受けまして驚き入りまして、見兼て仲へ這入りまして訳柄わけがらでござえやすが、へえ、どうか御勘弁を願いたいもので」

侍「ナニ往来通りがゝりのもので連でないと申すが、兩人で悪口して居たのを存じて居る、兩人ともに捨置かれん手打ちにするから参れ」

と云われ二人ともかたまつてしまい、口も利けません。すると日が暮れてまだ間がない頃でございますから、追々人が出て参り、忽ち黒山たちまのようになりました。

甲「何んですく」

乙「何だか侍が幫間たいこもちを斬ると云つてゐるんです」

甲「何を不調法したんです」

乙「何でも幫間がソノ何ですね、お客さまに屁工放ひつ掛けたとか云うのが始まりで」

甲「へえお侍に屁を放つ掛けたんですとえ、酷ひどいぞんざいな事をしたもんですね、おならをお侍に放つ掛けたんですか」

丙「いえ然そうじや有りません、お侍さんの方でおならを致したので」

乙「へえ」

丙「幫間は口が悪いもんですから屁放へつり侍と云つたので、侍が後あとへ歸つて来て、何だ出もの腫れものだ、したら何うした、屁放り侍とは何だと斯ういうのが喧嘩はじまの初りで」

甲「理不尽な、自分でして置きながら何も斬るほどのことはない、たかがおならじゃア有



りませんか、酷い奴もあるもんですね」

丁「ナニ然うじやアない、もと居た奉公人だそうで、あの幫間ちゆうげんが旧時もとあの侍の処に奉公した仲間ちゆうげんで、それが何か持逃げをしてパイと居無くなつたのが、幫間に成つて居るから、捨置かれん、何故なぜ己の事を蔭で悪くいうと怒おこつてるので」

戊「然うじやアないそうで、酷い事をするもので」

甲「何でげす、何したんです」

戊「ナニあの侍の物を取りに掛つたので、幫間の振ふりで掏摸すりをしたんで」

甲「そう此方こつちへ押しちやアいけませんよ」

巳「何でげすく、転覆ひっくりかえたのかえ、もう燃え出したかえ」

庚「何です」

巳「鍋焼なべやきうどん餛飩おろが荷を下し始めた処で転覆えしたと云うから」

辛「もう生れましたかね」

壬「何だえ」

辛「何だか乞食が産をしてるツていうことを聞きました」

と何だか解らずにごた／＼して居りまする処へ、通りかゝつたのは、昇夫かづやの安吉と重

三郎を連れて荷足の仙太郎が刀の詮議に土手へかゝつて参ると、ひとたち人立が有りますから、  
仙太郎も立止り覗いて見て、

仙「安、安」

安「へえ」

仙「あの侍は仙台河岸せんでえがしの侍に似てえるようだが、何うだろう」

安「へえ……あれじやアありますめえ」

仙「誰を見ても怖がつて彼あれじやアねえ〜と云やアがる……何うしたんですエ……幫間が

……、成程、悪口わるくちを利いたんで……安、己があの侍に喧嘩ア吹ツかけて、あの頭巾をふん

だくるから、汝てめえ遠くで面ア見てえて、仙台川岸せんでえがしの侍だったら、大きな声で其そいつ奴だアと嘸

鳴れ、そうしたら己が咬かぶり附くから、重さん、しツかりしなくツちやアいけねえぜ」

と云い捨てゝ、

仙「え御免ねえ〜」

とおおぜい  
と多勢おおぜいの人を掻き分け侍そばの傍へ摺り寄り、

仙「えお侍、訳は知りませんがこれは仲の幫間で、一人は通り掛りの者だ、弱よええ町人を捕つら  
めえて御詫ごたくを云わなくツても宜かろう、エお侍」

侍「汝<sup>われ</sup>は何だ、何をいう」

仙「私<sup>わっち</sup>は通りがゝりのものだが、見兼たから仲<sup>なけ</sup>へ這<sup>へ</sup>入<sup>え</sup>つたのだ、弱<sup>よえ</sup>え町人を斬<sup>は</sup>るの殴<sup>なぐ</sup>るのと仰<sup>おほ</sup>しやるが、弱<sup>よえ</sup>えものを助けるのが本<sup>ほん</sup>当<sup>とう</sup>のお侍<sup>さむらい</sup>だ」

侍「なにをいう、怪<sup>け</sup>しからん奴<sup>やつ</sup>だ、汝<sup>てまえ</sup>は此<sup>こ</sup>の者<sup>もの</sup>の詫<sup>わ</sup>に這<sup>へ</sup>入<sup>い</sup>つたのか、何に這<sup>へ</sup>入<sup>い</sup>つたのだ、此<sup>こ</sup>の者<sup>もの</sup>どもは悪<sup>あつこ</sup>口<sup>くち</sup>を申<sup>まを</sup>して無<sup>む</sup>礼<sup>れ</sup>を働<sup>はたら</sup>いた故<sup>ゆゑ</sup>、捨<sup>すて</sup>置<sup>置き</sup>かれんから手<sup>て</sup>打<sup>うち</sup>にするんだ、汝<sup>な</sup>は何<sup>なん</sup>だ」

仙「エ、色<sup>いろ</sup>里<sup>り</sup>へ来<sup>き</sup>て塗<sup>ぬり</sup>箸<sup>ばし</sup>見<sup>み</sup>たような物<sup>もの</sup>を一本<sup>いっぽん</sup>半<sup>はん</sup>分<sup>ぶん</sup>差<sup>さ</sup>して、斬<sup>き</sup>るの殴<sup>なぐ</sup>るのと威<sup>い</sup>張<sup>は</sup>つて、此<sup>こ</sup>の頃<sup>どう</sup>道<sup>どう</sup>哲<sup>てつ</sup>へ来<sup>き</sup>て追<sup>お</sup>剥<sup>はぎ</sup>をするのは手<sup>て</sup>前<sup>まえ</sup>かも知<sup>し</sup>れねえ」

侍「此<sup>こ</sup>奴<sup>やつ</sup>棄<sup>す</sup>置<sup>置き</sup>かれん事<sup>こと</sup>を申<sup>まを</sup>す」

仙「棄<sup>す</sup>置<sup>置き</sup>かれんなら己<sup>おのれ</sup>を斬<sup>き</sup>れ、サア拔<sup>ひ</sup>け」

と云<sup>い</sup>いながら後<sup>うしろ</sup>を見<sup>み</sup>返<sup>かへ</sup>り、

仙「オー重<sup>しげ</sup>さん拔<sup>ひ</sup>くぜ、安<sup>やす</sup>や宜<sup>い</sup>いか」

侍「イヤ余<sup>あ</sup>程<sup>ほど</sup>白<sup>しろ</sup>痴<sup>ち</sup>け<sup>た</sup>奴<sup>やつ</sup>だ、強<sup>し</sup>いて斬<sup>き</sup>られたいというならば斬<sup>き</sup>つて遣<sup>や</sup>る」

仙「サア斬<sup>き</sup>れく」

侍「宜<sup>い</sup>しい、望<sup>のぞ</sup>みに任<sup>まか</sup>して斬<sup>き</sup>つて遣<sup>や</sup>る、命<sup>いのち</sup>がないから左<sup>ひだり</sup>様<sup>さま</sup>心<sup>こころ</sup>得<sup>え</sup>ろ」

仙「サア拔<sup>ひ</sup>けく」

と身体を摺り附ける。

侍「無礼至極な奴だ」

仙「汝うぬの方が余つ程無礼だ、己が仲人ちゆうにんに這入ったのに頭巾を冠って、挨拶ええさつをするつ

てえ事が有るか、頭巾を取れヤイ、面ア出して見せろヤイ」

侍「其ほうの方は棄置ほうかれんが兩人は助けて遣る」

と突き離され、長次正孝の兩人は悦び、実に竜たつの口くちを免のがれたような心地にて、

正「有難うぞんじます、何処のお方か存じませんが、この御恩は決して忘れません」

と二人は厚く礼を云い、伊之助を引ひばつて連往つれゆきます。伊之助も怖いから三人で漸だん／＼

々、逃げて、また大門を這入つて松葉屋へ登ありました。それなら出て来なければ宜いいに。

あとに仙太郎は侍の傍そばへ摺り寄つて来ました。

侍「望みに任して斬つて遣るから覚悟をしろ」

仙「サア斬れ／＼」

侍「此奴こいつ棄置かれん」

と云いながら刀の柄へ手をかけました。是から刀を抜くという詮議の処でございます。

## 十一

さて引続きのお話は寛保三年九月二十日の晩に、吉原土手で荷足の仙太郎が頭巾目深の怪しの侍に出逢いまして、どうも仙台河岸で見た侍に似て居るからと云うので、無法に喧嘩をしかけたが、たとい人の為でも、侍に喧嘩を仕掛けて刀の詮議をしようと云うのは実に剛胆な事でございます。左様な男達という様な馬鹿らしい人は近年開けてなくなりまして。今侍は刀の柄へ手を掛けて抜きにかゝりましたが、仙太郎の身構えが如何にも気象な奴でございますから、心の中にて此奴中々尋常の奴ではない、少し何か心得て居る奴であろう、殊に胆力の据わった者、生じいな事をして耻を搔いてはならんと、心有る侍と見えまして、

侍「イヤ町人免してくれ、これは私が悪かった、成程お前のいう通り吉原土手の色里へ参つて長い物を差して、斬るの殴るのと云つたは、酒興の上とは云いながら大きに私が悪かった、其の方の云う処は至極尤だ、此の通り手を下げて詫るから免してくれ」

仙「ナニ免さねえ、手前抜くと云つたからサア抜け、武士に二言は有るめえ、抜くと云つたら抜かずにやア居られめえから、サア抜け」

侍「私が悪いから何うか免してくれ、酔が醒めて見れば白刃を振って町人を嚇かし、土地を騒がしたは私が悪いから謝まる」

仙「いやだ、抜くといったら抜きねえナ、エオイ、武士に二言は有るめえ、ナニ免してくれと膝まで手を下げて詫るといふなら、コレ頭巾を冠って謝まるものもねえもんだ、本当に詫言をするんなら頭巾を取って詫びなせえ、頭巾を取れ」

と頭巾くくと云われるだけに彼の侍も無気味になったと見えたか、大声にて、

侍「免せ」

と云いながら袖を打つ払って雪踏を脱ぎ捨て、跣足の儘駆け出す。

仙「此の侍」

と云いながら追掛けて往くと、野次馬が大勢居りますから、

野「あの侍逃がすな」

と後からバラ／＼付いて参ります、侍は土手下へ駆け下りましたが何処を何うしたか見失いました。仙太郎は大門を這入り、仲の町から京町揚屋町と段々探しましたが、残念ながら見失なってしまうましたが、何でも出るに違いない、吉原に這入ったからにや、女郎屋へ登ったろうから、明日の朝は大門を出るに違ひねえと、五十軒の武蔵屋へ泊って

侍の出るのを附けて居りましたが、取逃がしたか見失なつたか知れませんか、仙太郎は空しく立歸りました。伊之助は其の晩また松葉屋へ登りあがましたが、一旦喧嘩をして出た跡ゆえ、向むこうでも容易には歸しませんから遅くなり、遂に大引け過ぎまで居りましたから、伊之助不図氣が付き、

伊「サア遅くなつた、店が引けるまでには屹度歸る、そんならと云つて来たんだから」

と長次と二人とも慌てゝ外へ出ました。

伊「ア、飛とんだ事をした、店の引ける前に歸ると云つたのに、斯んなに遅く今時分歸つたら、番頭が腹を立てて、親父に此の事を告げれば勘当になるかも知れない、それとも今夜の内うちに歸るかゝと首尾をして置いてくれたか、何にしてももう仕方がないから、堀へでも往つて駕籠へでも乗つて歸ろうか、何うしようか」

長「番頭さんの方は余り遅くなりましたが、何しろ駕籠へでも乗つていらつしやいな、先さき刻つきあなたは腹を立てたからいけねえんです、侍の事で詰らねえちんゝなどを起したから、斯んなに遅くなつて仕様があらやアしません、あんな侍などに何んで花魁が惚れる訳は有りやアしませんや」

伊「己もまさか惚れる氣遣きづけえは有るめえと思うが、これッ切り来られねえもんだから、ツ

イチン／＼を起して、無理な事を云つたのよ」

長「そんなら駈出さなければ宜うござえやすに、私も一遍見やしたが、忌な侍で、本当にあんな馬鹿侍は有りやアしません」

という、後で

「馬鹿侍とは何んだ」

と云われ、二人は恟りして道哲の方へ無闇に逃出しましたが、跡から侍が追掛けてまいるので、己が足音か跡から追掛けて来る侍の足音か分りませんが、何だか傍へ来たような心持がいたしますから、急いで道哲を駈下りる時に、運の尽きか髪結長次が転んだが、伊之助は跡へ帰って助けることは出来ないから無闇に逃げて往くと、後の方でバタリ、キヤーと悲鳴を上げましたから、若しや長次は斬られやアしないかと思いましたが、あとへは帰られませんから、一生懸命に堀まで来て、竹屋の家を叩き起して、侍に追いかけられたから泊めてくれるという、内儀がそれは飛んだ事でございます、御心配なしにお泊んなさいと云うので、其の晩は泊つて、翌朝小船で帰りましたが、本郷の宅では大騒ぎで、翌朝になると髪結の長次が斬殺されて居るというので、女房が紀伊國屋へ泣声で参り、



「若旦那のお供をして参りましたから斯様な目に逢いましたので、御檢死沙汰から何や角や貧乏の中で仕様が有りませんから、私は死ぬより外に仕様が有りません」

とキヤ／＼狂氣のようになつて騒ぐゆえ、捨置かれんから、お店から多分の金子を出して長次の死骸を引き取り、葬式まで出して遣るような事でございますから、世間に對して伊之助を捨置くわけには参りませんゆえ、久離きつて勘当するというのを、番頭の安兵衛が宥めて、

「只た一人の若旦那ゆえ、私が氣を附けて外へお出でなさらないように致しましょう、またお母さまも御心配な事でしようから、懲らしめの為に当分のうち窮命なさるよう、私が万事計らいましょう」

と云つて堀切村に別荘がございますから、伊兵衛という固い番頭を附けて、伊之助を堀切の別荘に押込めて置きましたが、今まで遊んだ子息さんが押込められて、頑固な番頭さんが附いて居るのでございますから、只吉原の事ばかり案じて、若草は何うして居るか、九月が腹帯だと云つたから、来年の二月は臨月だが、首尾好く赤ん坊が産れるか、まだ己の此処に押込められてる事は知るまい、切めて手紙でも遣りたいと硯を引寄せ、筆を取り上げ文を書こうとすると、

伊兵衛「若旦那、何をなさるのです」

伊「そんな怖い顔をしなくつても宜いじやアないか、私が悪ければこそ斯んな淋しい処に来て、小さくなつてるので、余り徒然だから発句でも詠ろうと思つてちよいと筆を取つたのだよ」

伊兵衛「そんなら宜うございますが、吉原へ文でも贈る思召かと思ひまして、心配いたしました、あなたお句が出来ましたら拝見致しましょう」

伊「止しましょうよ」

伊兵衛「若旦那どちらへいらつしやる」

伊「何処へ往くつたつて些と庭でも歩かないと毒だろうじやアないか」

伊兵衛「御一緒に参りましょう、生垣が低うございますから、跨いで逃出してもなさると私がしくじりますから……若旦那何処へいらつしやる」

伊「あんまり退屈だから本でも出しに蔵へ往くのだよ」

伊兵衛「お蔵へ御一緒に参りましょう」

と世の中のことを知らない人間だから、何を見ても分らんで仕様がありません。芝居の櫓を見て烟突と間違えるような人で。

伊兵衛「若旦那どちらへいらつしやる」

伊「便所へ往くのだよ」

伊兵衛「御一緒に参りましょう」

と便所まで附いて行くといううなわけで、伊之助は段々鬱々致しまして、これが病氣の原因に相成り、どツと寝付くような事になつても、看病人が有りませんから手当が行届きません事で、幾ら可愛い息子でも懲しめのために押込めて置くのですから、お母さんにも看病は出来ません、何うしたら宜かろうと心配をすると、番頭の安兵衛が、

「好い事が有ります、幸い万年町の刀屋のお嬢さんを若旦那の枕元へ呼んで、看病をおさせ申せば、若い同士ゆえ手がさわり足がさわりして、若しそう云う事になりますれば、吉原のことも遂に去るもの日々に疎く、忘れるような事になりましたようから、早く御新造をお持たせ申すが宜うございます、万事私にお任せなさい」

とこれから安兵衛が万年町へ参り、政七に面会し、伊之助は病氣のところ看病人が無いので困りますから、嬢さまを貸して下さいと云えば、政七も義理でございますから、お連れなさいというのでこれから娘が来て看病をいたしました。

## 十二

お雪の看病は真の看病で、手当の行<sup>ゆきとゞ</sup>届きますこと一通りでありません。一体看病というものは婦人に限りますな、どうも男ではいけません。看病婦と申して、どうも婦人の方が手当りが宜しい、男の骨太の手で抱き上げられると痛い、婦人の嫺<sup>しな</sup>やかなむツくりした手や何かですと余程心持が宜いと云います。殊<sup>こと</sup>に許<sup>いいなずけ</sup>嫁<sup>めかけ</sup>の嬢<sup>しやう</sup>さんで、年齢<sup>とし</sup>は十八でございまして、別<sup>べつ</sup>嬢<sup>じやう</sup>ではあるし、譬<sup>たと</sup>えにもいう通り饑<sup>ひも</sup>しい時のまずい物なしで、お腹<sup>はら</sup>の空<sup>す</sup>いた時においしい物が来たようなもので、若旦那がめしあがる事に成ったが、素<sup>もと</sup>より許嫁だから誰<sup>たれ</sup>憚<sup>げん</sup>らずめしあがっても、何も仔細は有りません。漸<sup>だん／＼</sup>々々病氣も癒<sup>なお</sup>り、遂にこのお嬢<sup>おじやう</sup>さまがぼてれんと成りましたが、吉原の若草は九月<sup>くがつ</sup>帯<sup>おび</sup>と云う時に別れたぎり、嬢<sup>じやう</sup>さんが来て翌<sup>よくげつ</sup>月身重になりましたから、両人<sup>ふたり</sup>ながら身重に成りましたが、自然と吉原の方は忘れがちになるような事で。若草は左様なこととは知らず、伊之助の音信<sup>おんしん</sup>のなはいは春木町の二階<sup>ふたまい</sup>住居に成ったことか、切<sup>せ</sup>めて髪結の長次さんでもよこしてくれゝば宜<sup>いい</sup>いと、世間の事を知らん花魁<sup>けい</sup>でございますから、伊之助の事を思い細る内に、漸々病氣になりますと、松葉屋の主人<sup>しゅじん</sup>は粹<sup>すい</sup>な人ゆえ、

主「花魁決して心配おしでない、気から病が出るといふがお前の病気は気から出たのだが、来年の二月は屹きつと癒いるから心配しずに山谷さんやの別荘に往ゆつて緩ゆつくり養生をするが宜いい、若浪や（番新の名）詰きらないものを食い合あわして、身体に障さるような事ではならないよ、喰たべ物に氣を附つけて遣やんな、輕かはずみな事をしてはいけないよ、伊之さんの顔を潰つぶすような事はしないから、安心して養生をしな」

と云うは墮胎藥おろしぐすりなどを飲のんで身体あたに中あたるような事が有あつてはならんから、産み落おした暁あけには伊之助さんの方こどもへ小兒こどもを渡わたして、お前の身の立たつようにしてやると云わぬばかりの謎めで、若草、若浪も嬉うれしく思おもいましたから、その儘山谷の別荘に参まゐりまして、養生をして居ゐります。とフト耳みみに這入はいつたのは、堀切の別荘に伊之助さんが押込おしこめられて窮命きやうめいして居ゐると聞ききましたから、お可愛かわいそうだと思おもいましたが、吉原の者を頼たのんで遣やつては、却かえつて若旦那の身の為ために成なるまいから、誰たれが宜いかろうというと、若浪が

「私の考かんえでは矢切村やきりむらの叔母おばさんを遣やんなまし、叔母おばさんを遣やんなますと、あゝいう堅かた氣きの叔母おばさんが往いくんですから、先方むこうでも訝おかしく思おもわないで、却かえつて事が解とけりましうよう」

と是こゝから急に手紙てがみを書かいて下しも総ふさの下矢切村しもへ出でし、どうか伊之助さんの方はなしへ談はなしを附つけてくれろと云うので、早速矢切の叔母おばさんが出でて往ゆきました。これが間違まちがいの始はじめで、解とけ

る人ならば相談の埒が明きますが、分らん人で、お釈迦さまから渡を越えんと直に向うが下矢切村でございますけれども、江戸へとは十六の時に来た切で、浅草の観音さまを其の時初めて拝んだという人で、供に附いて来た男は、鋏鍛冶金重の宅に居た恭太郎という馬鹿な奴で、先方は奉公中一晩でもお店を明けたことのない頑固な番頭さんがちゃんと扣えて居ります所へ掛合いに参ったのでございますから、余程面倒で、

叔母「恭太や、少し其処え待ちて居ろよ、はい御免なせえましよ、紀伊國屋の伊之助さんの別荘は此方でござえますか」

伊兵衛「はい入らっしゃいまし、何方さまから入らっしゃいました」

叔母「はい私は下総の矢切から参りましたが、伊之助さんがの別荘は此方でござえますか、あの矢切村のおしという婆アが参ったとそう仰しやって下せえまし」

伊兵衛「左様でございますか、下総の矢切などという処には別に御懇意なお方はないわけ」

しの「マア御免なせえまし」

と上へあがり振反って、

しの「恭太や、其処え腰イかけて待ちて居ろよ……能く天気イ続きます」

伊兵衛「手前は紀伊國屋 宗十郎そうじゅうろうの手代伊兵衛と申すもので、若主人伊之助は昨年より

少々不首尾なことがありまして、只今まで斯様に淋しい処に押込められて窮命に成つて居りますから、誰方がおいでも若主人にはお逢わせ申しません、手前が預つてゐる事でございますから、斯様な次第で有ると一々私に仰せ聞けられますれば、また私から若主人へ申し聞けますから、私がお取次を致しましょう」

しの「左様でござえますか、始めましてお目にかゝります、私は矢切村のおしのと云うやぐざ婆アでござえますが、幾久しくお心安く願えます」

伊兵衛「はい、お茶を持つてお出で、へー何に御用で」

しの「私は吉原の松葉屋の若草の真実の叔母でござえますよ」

伊兵衛「へえ、これは飛だ事で、花魁の叔母さんが何しにおいでなさいました」

しの「はい私も暫く音信も致しません、また参りもしませんが、此の夏の植付頃うゑつけごろに一度其の話の事に就て参りまして、伊之助さんがにもお目に懸つたこともござえますが、此度ア手紙が来て、叔母さん、ちよつくら来てくしろ、相談ぶちてえ事が有ると云うから、参つて見た処が、若草は吉原には居ねえで、松葉屋の寮とかいうのが山谷にござえまして、其処え這入つて、塩梅あんべえが悪くつて打ッ転がつて寝て居るでござえますから、私も魂消たまげて

塩梅が悪いかと尋ねますと、叔母さん面目ねえが勤めの中で赤子が出来したよと云うから、私も魂消て、何うして赤子を出来たかと尋ねると、伊之助さんと夫婦約束をして、他のお客へは出ねえから、素人同様の身体ゆえ赤子が出来たが、主人の慈悲で養生しろつてえから、こうやつてゐるが、来年の二月は臨月だアけれども、子を生んだ暁にやア伊之さんは赤ん坊の父親だから引取つて貰わなければならねえのだが、伊之さんも堀切の寮で窮命してゐるというから、私も案じられて、焦れて塩梅が悪くなつたくれえだが、他の者を使へには遣れねえが、叔母さんは堅気だから往つて貰えてえが、伊之さんの処へ往つて、子供を引取つてくれるか、私の方で里へ遣るか、他へくれようかという処は、伊之助さんがお目に懸らねえば分らねえこんだし、それが極らぬ内は産む事も出来ねえし、伊之助さんの様子も案じられるから、塩梅が悪くはねえかと尋ねながら、相談をぶつて来てくんろつて頼まれて参つたのでござえますから、どうか伊之助さんに逢わしてお貰え申し度いもので」

伊兵衛「それは怪しからん事で、何うもお前さんの様な物の理合の解らん御方は有りません、若主人は全くその若草花魁のために斯んな淋しい処に窮命して居る身の上ですから、その花魁は若主人のためには敵です、悪魔でございます、その何うも花魁が身重に成つた



つて、毎晩替る枕の勤めの身でありながら、きつと伊之助の子と定きまった事がありますまい、貴方は此方こちらを大家たいけと心得て入らしたか知りませんが、今の伊之助も前々まえくの身の上ではありません、只今にも勘当をされる次第に成つて居りますから、息子株では有りません、今にも追出され、ば乞食になるかも知れませんが、こゝへ何百両とかいう金を出して、斯う云う事にしようと言ふことには、只今の身の上では三文も出来ません、へえ何う致しましてへえ、只今では伊之助も後悔致して、吉原のよの字も若草のわの字も忌いやだと申してへえ、驚ろいて居りますへえ、何う致しましてへえ、何うぞお歸りなさつてへえ」

しの「いえ私わしは無理に金を貰もれえに來た訳じゃねえから金はいらねえが、他ほかのお客には出ねえ若草だから、伊之助さんの児こと定きまつてゐるが、産み落した暁にお前の方で育てる事が出来なければ己おれア方で里に遣つても大えくするが、それともお前の方で引取るとも、金を附けて他わきへくれて父ていなし児ごにするのは不便ふびんだが、伊之助さんの為にならねえなら、仕方がねえから、その金も己おれの方で出すが、その相談だから伊之助さんに逢わなければ相談が出来ねえのでござえます」

伊兵衛「それが解らんじや有りませんか、どうか他わきへ遣つて呉れろ、里に遣つてくれろと伊之助の言葉が掛れば伊之助の児こと定きまりましょう、伊之助が春木町に居た時分に、お前さ

ん一人に惚れてるとか何とかいう欺しに乗り、それが為に斯ういう窮命をして居りますのに、そんな強請騙り見たような、へ：変な事を云つても三文も出来ませんへえ、手前が此処に居りますのは、吉原から左様な事を申してくるかと思つて、それが為に附け置かれる身の上ですへえ、何う致しまして、只た今お帰りなすつて」

と云われおしのは少しく気色を変え、

しの「何んだツて、強請騙りとは何んだえ、己ア矢切村でハア小畠の一段も持つてゐるものが、堀切くんだりまで強請騙りには参りませんよ、そんな人情の解らねえ事をいつても駄目だ、伊之助さんのことを心配して、塩梅は悪くはねえかと、若草は瘦こけて煩つてゐるくれば伊之助さんのことを思つてゐるのに、伊之助さんは若草のわの字も吉原のよの字も忌だといえた義理じゃあんめえ、慥かに夫婦約束の書附まで取替わせた間柄だから、何も無理に金を貰いに來たわけじゃねえよ、お前さまのような人には何を云つても話が解らねえから、伊之助さんがに逢わなけりやア私は帰しませんよ」

伊兵衛「オヤ、此の狸婆アぐず／＼いうと表へ突出すぞ」

しの「さア突き出せ、このけつめど野郎」

伊兵衛「なにを云やアがる」

と訳の解らんものは仕様がありません。おしの婆さんを表へ突き出そうとすると、供に  
来たのは馬鹿の恭太郎ゆえ、いきなり草履下駄を脱いで、

恭「此の野郎見ろ」

と番頭の頭を殴つ、番頭も怒り出し、無茶苦茶に胸倉を取って表へ二人を突出し、ポン  
と掛金をかけてしまう。叔母は地べたへ転り、

しの「ア、若草は斯んな事とは知らないで、伊之助のことを思つて病み耄けるが、伊之  
助は吉原のよの字も若草のわの字も忌に成つたような不人情な心だから、自分が逢わない  
で物の解らねえ奉公人を出して、己を外へ突出しやアがつて、斯んな疵まで出来しやアが  
つて」

と口惜涙に泣き沈む。

恭「叔母さんお泣きでないよ、今己が柿を買つて遣るから」

しの「なにをいう此の馬鹿野郎」

と立上り、杖について漸く若草のもとへ帰り、右の一伍一什を煩らつてゐる若草に話  
すと、そんなら伊之助さんの心がかわりはしないかと思ひ詰め、カツと逆上せて熱い涙を  
こぼし、身を震わして騒ぐのを見て、

番新「花魁間違いだよ、伊之はんはそんな方ではないが、あゝいう人だから奉公人任せにして置くから、訳の解らない奴が出て何か云ったんでしよう、腹も立ちましようが叔母さん間違いますよ、お前さんが其様にいうと猶々花魁の病気に障ります、花魁今云った通り伊之助はんは決してそんな人ではありません」

と云い宥め、<sup>なだ</sup>叔母には小遣を持たして帰しました。跡で若草は<sup>いよく</sup>弥々伊之助の事が心配になり、クヨクヨ思うから、<sup>だん／＼</sup>漸々と御飯も食べられないようになりました、永煩いゝ処へ食が止ったゆゑ若草は次第に瘦せ衰え、ホンと云う息遣いが悪うございまして、泣いてばかり居ります。若浪も心配して種々<sup>いろく</sup>な事を云つて慰めるけれども聞入れません。間違いの出来ます時にはいけないもので、<sup>たいこもち</sup>幫間の正孝が若草の処へ見舞に往こうと云うので、ちよつと<sup>べにいろざ</sup>紅更紗の風呂敷に<sup>ふたばや</sup>二葉屋の菓子折を包んだのを提げて山谷橋へかかりました。

### 十三

其の時此方<sup>こちら</sup>から来たのは表<sup>ひょう</sup>徳<sup>とく</sup>と云う人で、表具屋の徳兵衛さんというのですが、誰<sup>たれ</sup>いうとなく表徳と呼び、<sup>たいこもち</sup>幫間でもないのに幫間の真似をして、世間の人にはひろく交

際が有る、有名な人は皆知つて居る、此の間芝居見物のとき成駒屋なりこまやの部屋で鰻飯を喰つて昼寝をして来たなどと嘘ばかり吐ついてる人で、酷ひどく酒に酔い、向むこうからヒョロ／＼やつてまいり、正孝を見て、

徳「イヤ大師匠おおしきよう」

と言葉をかけられ、正孝は誰だツけ、顔は二三度見たが名が分らねえと考えながらも、

正「相変らず大景氣おおけいきで」

徳「師匠誠に暫らく、お忘れかえ」

正「イヤどうも忘れる処どころじゃアねえが、誰だツけ、強氣ごうぎと不器用だからチヨイと胴忘れを

したが、お前の名前は」

徳「イヤお忘れかえ、表徳だアね」

正「ウン表徳さんよ、違ちがえねえ、相変らず、何処へ」

表「今日は五名にんばかりで善四郎ぜんしろうさんへお飯まんまア喰いに往かねえかというから、有難ありがたえツ

てんで往つて見ると、一杯に塞ふさがつてゝ上も下もいけねえと云うので、是れから上手うわてへ往

こうというのだが、腹へが空つて堪らんから、ちよいと底を入れようというので重箱へ往

て、鯰なますで飯を喰つたが、あとの連中は上手へ往つて、柳橋やなぎばしのおちよと千吉せんきちを呼んで

浮れる訳だが、表徳は御免を被<sup>こうむ</sup>り廊<sup>なか</sup>へ往つてチョン／＼格子か何かで自腹遊びをする積りで御免を被つて師匠に逢おうと思つてると、此処で出<sup>で</sup>会<sup>くわ</sup>すなんざア不思議でしょう」

正「今日は強<sup>ごうぎ</sup>気と野暮に（折を上げて）アノそれ売出しの若草花魁の病氣見舞に往<sup>ゆ</sup>くのです」

徳「師匠一緒に往<sup>い</sup>こうじゃア有りませんか」

正「君は若草花魁を知つてゐるのかえ」

徳「存じませんよ」

正「知らなけりやア往つても無駄だぜ」

徳「ナニネ、お客のお供をして二階でも通る時に花魁から表徳さんとでも声をかけられ、ば強<sup>わっち</sup>気と私<sup>こけん</sup>も沽券が宜しいじや有りませんか、だから師匠が往<sup>い</sup>くなら後<sup>あと</sup>から従<sup>つ</sup>いて往つてサ、師匠から聞きました<sup>だ</sup>が花魁は御病氣だそうで、お大<sup>だい</sup>切<sup>じ</sup>になせえツてナことを云えば宜<sup>よ</sup>いんでしょう、是非御一緒に」

と云うので正孝も荷になります<sup>が</sup>仕方がありませんから、

正「そんならば連れて往<sup>い</sup>くが神妙にしくつちやアいけねえぜ」

徳「宜しい心得た」

正「さア此処だ、へえ御免なさいく」

寮番男「おやおいでなさい、お上りナ」

正「新助どん誠に御無沙汰を致しました、実は桐生<sup>きりゆう</sup>へ往<sup>ゆ</sup>きまして、一昨日<sup>おと、い</sup>帰りまして、新八松屋で聞いて驚きましたが……これは詰らないものですがお土産に」

と差出すを男が受取り、

男「少し待つておいで」

と云い捨て、奥へ這入る。と間もなく番頭新造の若浪が出て参りまして、

番「おや能く来なましたネ、上んなましよ」

正「佐羽<sup>さば</sup>さんに誘われて慾張り<sup>かた／＼</sup> 旁々<sup>かた／＼</sup> 桐生へ往<sup>ゆ</sup>きましたが、一昨日<sup>おと、い</sup>帰つて松新で聞きま  
すと、花魁が御病気で山谷のお寮に在<sup>い</sup>つしやるといふ事ですから、早速お見舞いに出ま  
したので」

番「やつぱり一件の事だから仕方がないの、九月の一件から段々と病氣になツちまつて、  
本当に可愛相に、他の花魁と違つて素人も同じ事だから、一時<sup>いちじ</sup>に思い詰るのは尤もだが、  
氣の晴れることは些<sup>ち</sup>ツともないんぎますよ、まア正孝はん上んなましよ、彼<sup>あすこ</sup>処に立つて  
人は何」

正「あれは途中でヒヨイと逢ったんですが、大変な奴なんで、ズボラな酷い奴で、先方から慣々しく一緒に連れてツて呉れるというからお前花魁を知ってるのかえと云うと、お目には懸らないが、ちよいとお目に懸つて置くと、廊下でお目に懸つても沽券が宜いツてんで無理に従いて来たんで」

番「宜うぎますよ、淋しい処だから呼びなましよ」

正「中々大変な奴で、御病気の処なぞへ呼ぶ奴じや有りやせん、変なやつなんで、表具屋徳兵衛とかいうので、表徳というんだそうで」

番「宜うぎますよ、此方へ上んなまし、ちよいとヒョットコさん、おや御免なまし表徳さん這入んなましよ」

徳「へえ御免なさい、誠にどうも、今山谷橋で大師匠に逢つて聞いてすっかり驚いちまつて、只アーツと云つて鬱いじまつて、小さくなつて師匠の後から従いて来るくらいな事で花魁の御様子を伺い、お脈を拝見したいというわけで」

正「そんな大きな声をしてはいけないよ、花魁は鬱ぐ病だから、チト神妙にして、少し待つておいで」

徳「好い屏風だね、金地に牡丹の花があつて、赤い尾を振り舞してるのは猩々でげす



かえ」

正「ナンノ石橋しやつきようだよ、え御免なさいまし」

番「此方こつちへ這入んなまし、花魁正孝はんが来たの、そこへ這入んなましよ」

というので、通つて見ると、病間は入側いりかわ附きの八畳の広間で、花月床かげつどこに成つて居ります。前に褥とこを取り、桐の胴丸形がたの火鉢へ切炭きりすみを埋いけ、其の上に利休形の鉄瓶てつびんがかゝつて、チン／＼と湯が沸たぎつて居ります。十一月の事で寒いから二つの布団の上に小蒲団を敷き、藤掛鼠ふじかけねずみの室着へやぎの上へ縫ぬいもようの搔卷かいまき袍とてらを羽織り、寒くなると夜着よぎをかける手当てあてが有ります。床とこには抱ほう一上人いっしやうにんの横物よこものはとりまして、不動さまに道どう了りさまと塩竈しおがまさまのお輻ふくと掛け替り、傍そばに諸方から見舞に来た菓子折が積したづみんで有りますが、蒸菓子の方は悪くなるから先へ手を附け、干菓子の方は下積したづみに残のこつて居ります。其の他道た了りさまのお丸薬に帝釈さまのお水が有ります、此方こちの唐木からきの違ちが棚いだなには、一切煎茶の器械が乗つて居りまして、人が来ると茶盆が出る、古染附ふるそめつけの茶碗古薩摩こさつまの急須に銀瓶が出る、二ツ組の菓子器には蒸菓子と干菓子が這入つてありますという、万事手当が届いて居ります。若草は藤掛色の室着を羽織り、山繭やまゝゆの長襦袢ながじゆばんに、鶉ときいろ色のしごきを乳の下から、巾広にして身重の腹を締めて居ります。髪は乱れたのを結び直して、また毀こわ

れたので鬢<sup>びん</sup>の毛が一杯に顔から襟に掛つて居りますが、美人の煩<sup>わづ</sup>つてるのは酷く美しいもので、色の青い上に少し黄ばみが有ります、身重になりますと、いやアに生白くなりますもので、黒檀<sup>こくたんえ</sup>柄の火箸を一膳火鉢の中へ突入れて之を杖に額を当てゝ、只伊之助の事ばかりくよく〜と思ひ続け、泣いてばかり居ります。

番「花魁アノ正孝はんが来なましたよ、松新で花魁の病氣のことを聞いて、好<sup>すき</sup>なものを持つて来なましたから起直<sup>ちっ</sup>つて、些<sup>ちつ</sup>と氣の紛れるようにしましよ、花魁お起きなましよ、そう遣<sup>のほ</sup>つて居ると火氣が顔へ当<sup>あ</sup>つて逆<sup>さか</sup>せ上るから顔を上げなましよ涙で灰がかたまるざますよ、正孝はん此<sup>こつち</sup>方へ這入<sup>はい</sup>んなましよ」

正「へえ花魁誠に御無沙汰を致しやした、斯んなにお悪くはないと思ひましたが、大層お悪い御様子で、時々お起きなすつて、斯う遣<sup>のほ</sup>つて坐<sup>ま</sup>つて入らつしやるのですか」

番「しようながないの、おまはんは知るまいが、本<sup>ほん</sup>当<sup>たう</sup>に腹の立つ事があつて花魁の病氣も重<sup>おも</sup>るだらうと思ふ事があるの、あのね此の間田舎の叔母さん<sup>おばさん</sup>を呼<sup>よ</sup>んで向<sup>む</sup>へ遣<sup>のほ</sup>つた処<sup>ところ</sup>が、突<sup>つ</sup>転<sup>てん</sup>ばして返し、吉原のよの字も若草のわの字も忌<sup>いや</sup>だと云つたとかいふ事を、叔母さんは

正直だもんだから其の通り花魁に話したから、それから些<sup>ちつ</sup>ともお飯<sup>まんま</sup>がいけないの」

正「若旦那の堀切に入らつしやる事を些<sup>ちつ</sup>とも知りませんでしたが一昨<sup>おととい</sup>日歸<sup>かへ</sup>つて間もなく

桐半<sup>きりはん</sup>で聞いたくらいの訳で、お見舞に往<sup>ゆ</sup>きたいと思つてますが、そんな奴が這入つて、詰らねえ事を云うから困るんです、尾に尾を付け、輪に輪をかけて事を大きくするようなもので」

番「花魁、正孝はんが面白い人を連れて来なましたよ、ヒヨットコさんとか何とか云うお酒に酔つて、面白いことを云うの、正孝はん呼びなましよ」

正「あれは此処へ入れる人間じゃございません、花魁の御様子を見ます所では中々入れられませんから止しましょう」

番「這入んなましよ、アノ、チヨイと表徳さん這入んなましよ」

徳「へいこれはどうも、御免を蒙ります、これは始めまして表徳で、只モウお酒が好きだから、表徳<sup>ひょうとく</sup>大酒のお開帳が始まりましたくらいのもので、花魁の御病氣の御様子を聞

いて……お医者さまをと仰しやれば、私は余程名医を知つて居りますから、佐藤先生でも橋本先生でも浅田先生でも、直<sup>すく</sup>に往つて来いと仰しやれば、ヘーッてんで直に先生の手を持つて引張<sup>ひっぱ</sup>つて参ります……これは驚きました、これは大変な御病氣で」

正「神妙にしてくれなくツちやアいけねえぜ、御様子が是れだから」

徳「これはちよつと驚きました、両国の花火で船と川ばかりで」

正「詰らねえ洒落を云つてはいけねえ、若旦那は堀切へ押込めにおなりでも、お宅がお宅だから何うかなりそうなものですよ」

徳「堀切へ押込められたという若旦那は、紀伊國屋の若旦那かえ」

正「イヨ是れは感心く、だ、公は紀伊國屋の若旦那のことを知つてゐるのは感心だ」

徳「師匠、エお前は知つてゐるのかえなど、云われるくらい強氣と詰らねえものはないがネ、私も紀伊國屋の若旦那を知つてゐるところじゃアない、紀伊國屋は幫間の方ではないが、経

師屋の方でお出入だ、あの十疊の広間は、表徳当月の二十八日までに天井を凸凹なしに

遣つてくれ、へえ、宜しい心得たというので遣つたが、あのくらいな若旦那は沢山ない、

男が美くつて厭味が無くつて、身丈恰好が好くつて、衣服が本場で、持物が本筋で、声が

美くつて、一中節が出来るといふのだから女はベタ惚れ、うツかり外を歩くと女が打突

つて来て女の瘤が七つも一緒に出来るといふくらい若旦那だが、済して、其様に安く売

る身体じゃアねえと云つてゐるくらいのもので」

正「実に若旦那の事を知つてゐるのは感心だね」

徳「あのくらいな若旦那を押込めたのは解らねえので、併しお父さんは固いから大切にしている処へ、芸者だか何んだか知らないが惚れた奴が出来て、其処へスタくコラくを始

めたゆえに堀切へ押込められた処が、心持がわるいもんだから塩梅が悪くなり、看病人は誰が宜かろうという、深川の刀屋のお嬢さんは許嫁だからと云うので、これが看病人に来た」

正「イヤこれは何うも驚いた、饒舌家だから直にすつば抜きをして困る、大変なものを連れて来た、表徳さん下がろう」

徳「花魁に聞かし度いねえ、若旦那の飯の喰ッ振が気に入っちゃった、鰯のお肴か何かの時は其の許嫁のお嬢さんが綺麗に骨を取って肉をむしって、若旦那私がむしって上げますと云つて、丁寧(とうとう)にむしって出すのを、甘えくと喰うくらいの事じゃねえ、余り仲が好過(よす)ぎてネ、遂々(とうとう)赤ん坊が出来た」

正「おや大変くお出でよく」

と無闇に外へ連れ出し、

正「恐入ったネ表徳さん、主は困るじゃア無えか、主は伊之さんの事を知って居ながら花魁の事を知らずかえ、伊之さんと花魁とは夫婦同様の仲で、勤めの中で伊之さんの胤(たね)を宿してるのに、伊之助さんから何とも音信(おとずれ)が無いので、花魁は煩(わづ)つてるのだ、公酷(きこく)いネ、許嫁のお内儀(かみさん)が来て居るばかりではなく、御飯(おまんま)の喰ッ振から赤ん坊の出来たなどは余り

手酷いじゃないか」

徳「これは恐れ入った、そういうこととは知らずに云ツちまったが、これは驚いた、もう一遍往つて云い直して来ようか」

正「猶悪い」

とよう／＼二人が表へ出た跡で、若草は事の間違いより伊之助を怨み、伊之助のところへ若草の怨霊が出ますというお話でございますが、一寸と息吐いて申し上げます。

## 十四

幫間の正孝と表徳が歸つた跡で、若草は伊之助が許嫁の女房を呼んで、我物顔に楽しんで居る、それゆえ叔母さんが往つた時にも、自分が出て逢おうでもなく、不待遇をしたうえ、叔母さんの胸倉を取つて表へ突出し、疵まで附けて歸すような不実な人とも知らず、生涯をまかせようと力に頼んだは私の過り、主人にも朋輩にも義理の悪いようになつたは、皆な私が思い違いであるが、そればかりでなく、七月になる胤まで妊したは情ない、何うしたら宜かろうと、胸に迫つて只身がこうブル／＼と顫えるほど口惜しかったと見え

ます。若浪は真実に介抱を致します。番頭新造というものは只今ではございませんが、前には有りましたもので、この若浪は花魁の為に身を粉に砕いて心配を致します真実なものでございます。

番「申し花魁、おまはん今あの話を聞いて嘸口惜しかろう、あの正孝も正孝だよ、くだらない奴を連れて来てサ、いけ騒々しいベラ／＼喋べって、彼様な奴を連れて来たからいけねえのだ、悪らしいよ、花魁ばかりでなく私も本当に腹が立ったの、能く考えて見なまし、これまで伊之はんの事で気を揉んでいるのも知らないで、許嫁の女房を自分の傍へ引寄せているということを聞けば、誰だッて腹の立つのは尤も致します、私もしみじみ腹が立ったから、花魁伊之はんのことをフツツリ諦めてしまいなまし、伊之はんの事を諦めて、胸にさえ思ふ事がなければ、おまはんの病氣は癒るとお医師様がそう云ったじやア有りまへんか、兎も角も身二つに成ツちまって、病氣も癒り、元のように仲の町へ出てサ、おまはん善い人を取留めて立派なお客に身請をされて、あんぽつにでも乗り、黒鴨を連れて紀伊國屋の前を是見よがしに通つてやんなまし、本当に口惜しいんぎますが、おまはんのようになさうクヨ／＼してえると身体に障るばかりじゃないよ、たゞの身体じゃアないから、確かにしておくんなましよ、花魁、何うしたの、しっかりおしよ……花魁……花魁」

と云われ若草は苦しい様子で、

若「あいよ、私は本当に馬鹿に成つたの、能く素人は女郎はお客を誑すなど、私も素人の時分には云つたけれども、私ばかりはお客に欺されて、主人にも朋輩にも済まない義理になり、其のうえ斯んな身重に成つて、今更何うする事も出来ない身の上に成つた者を振棄て、許嫁のお内儀はんを自分の傍へ呼んで置き、私の方へは文一本遣さずに、そのお内儀はんと楽しんでゐる伊之はんの心がしみ／＼怨めしい、私は考えれば考えるほど口惜しゆうぎます、伊之はんに欺されたのが口惜しゆうぎますよ」

番「ア、そうとも、本当に可愛相ぎますよ、本当におまはんは口惜しかろう、だが彼様な人は諦めておくんなましよ、確かにしましよ、おまはんも親族兄弟もなし、私も親族兄弟がないから、お互に素人に成つたらば姉妹になろうと、おまはんがいいなました時には嬉しいと思つていたんぎますよ、済まないがおまはんを妹のように力に思つてゐるのだから、伊之はんの事さえ諦めておくんなはれば、おまはんの病氣も癒るのだよ、身体が達者にならないと身二つになる事が出来まへんよ、お願いぎますから確かりしておくんなまし……花魁何うぞしなしたかえ……花魁、花魁」

若「あい……思えば／＼不実な……怨めしいは伊之助はん」



と四辺あたりにを見れば腹の立つは、伊之助と若草の比翼紋ひよくもんの附いた物ばかり、湯吞から烟管の彫ほりから烟草入たばこいれから、傍そばにころげて有る塗ぬり枕まくらの金蔴きんまきえ絵の比翼紋を見て、

若「ア、此の比翼散ちらしも徒いたずら事になつたか、怨めしい、それほど不実の人とは知らず、勤つとめの中うち一夜でも外ほかの客かへは交かわさぬ枕」

としけ／＼枕の紋を視詰めて居ましたが、火鉢の中へ黒檀こくたんえ柄の火箸を突込み是を杖にして居た故、力が這入つて火の中へ這入り、真赤まっかに焼けて居おる火箸を取つて、

若「おのれ伊之助さん、譬たとえ許嫁の女房でもおめく添そわして置こうか、怨めしいのは伊之助はん」

と塗枕の比翼紋の、男の紋の方へ火箸をあて、ジーツと力に任せて突ツ通すと、プーと烟けむが顔へかゝりました。若草は鬢びんはつ髪を逆立て、片膝を立て、怨めしそうに堀切の方を延のびあが上つて見詰めた時の凄しみいこと、実に生いきながらの幽霊でございます。

番「申し花魁しゅ、確しつかりしなましよ花魁……何うしなましたの、確しつかりしなましよ花魁、そんな姿になつて気でも狂つたら何うしなますえ、しツかりして呉くんなましよ花魁……エ、あの娘こや、何うしたんだねえ、御嶽山おんたけさんのお水を持っておいでよ、なにをグズグズしてゐるんだよ、今ツから居寝いねむりなんぞしやアがつて、花魁、しツかりしなましよ、サこれを呑

で気を付けなけりやいけまへんよ花魁」

若「あい〜」

若浪は若草を抱き上げ、湯呑を口に宛てがうとゴックリと一口水を飲み、フ〜とい  
う息遣いでございます。暫くして、

若「若浪はん、私は伊之さんのことは、今日からフツツリと思い諦めたから、サバ〜し  
たんざますよ、今夜はとけ／＼と寝られようかと思うんざますから、少し脊中を撫さすつて  
くんなまし」

番「宜うざます、少し落着いて寝てくんなましよ、落着くとおまはんの病氣もなおるんざ  
ます」

若「じやア枕に着いて横に成りましょう」

番「然そうしなまし、私わちきが附そいてるから大丈夫ざます」

と慰めながら若浪が頻しきりに撫つて居ります内に、次第〜に若草はスヤ〜と疲れて寝  
る様子ゆえ、伊之さんの事を諦めて能よく寝てくんなますかと若浪も心嬉しく、看病疲れに  
グツスリと寝附くと、真夜中に若草そつと起上つて匿かくしてある手箱の中から取出したは、  
親鋏鍛冶金重が鍛えたる、小刀には大きい短刀には少し小さき、金重と銘の打った合口

で、金重の歿みまかるときに、女の嗜たしなみだから、これを形見にとて譲られた合口を持ったなり、褥とこをいざり出て、そつと音のしないように雨戸を明け、室着へやぎの儘で裾すそを敷いたなりで、そろ／＼と飛石とびいしづた伝いに、敷松葉しきまつばの一ぱいに敷詰めて有る横庭に下りると、余り大きくは有りませんが、葉のこづんだ赤松が一本有りまする処まで参り、ホツと漸く息を吐ついて、鉢前のゴロタ石を拾つて左の松ケ枝に合口を宛あてがい、片手には石を持ち、若「口惜くちおしい伊之助はん、人に怨みが有るものか無いものか、今に思い知らせる、覚えて居なまし」

と云いながら打附うちつけると、若草は病に疲れて居りますから其の儘コロ／＼と敷松葉の上に転がつたが、また松ケ枝に掴つかまって漸く起き上り、石を持ってまた打うちつけて伊之助を呪いのる、精神の恐ろしいことには、伊之助は瞬また、まく間に左の足が痛んで来るといふ怪談の処あとは後に致して、此処でお話が二つに分れて、稻垣小左衛門は百日経つても國綱の一刀の行方が知れず、手掛りが頓とないので、家事不取締り、不埒至極の至りで有ると云うので、追放仰せ附けられ、致し方がないから旧来居りまする家来は残いとまらず暇を出し、諸道具は知る者の処へ預けたり、要いらん物は皆売りました。すると丈助じょうすけと申す新参ではございますが忠義な家来が有りました、

丈「私は貴方のお傍は離れません、若旦那のお帰りまではお傍にお付き申します、何うぞお連れ下さいまし」

小「連れて往きたいが何処へも往く処がない」

丈「私の在所は葛飾の真間の根本ゆえ、明家が有りましようから往かつしやいまし」

小「私は商いを仕様とも、日雇取をいたしましても、あなた御一人だけはお過し申します」

というのでこれから、入用の手荷物だけを船へ積んで、真間の根本へ参りますと、幸い明家が有りましたから、名主へ話をして店を借りましたが、其の頃は武家というのでお百姓は驚いて居りますと、鎗が来たり鎧櫃が来たりするから、近辺では大したお方だと尊むことで、小左衛門は金も沢山持つて居りましたろうが、坐して食えば山も空しの喩えでございますから、何か食い続きの出来るようなことは有るまいかと云うと、丈助が私が商いをいたしましょう、少し店を直せば宜うございますと、是から大工を呼んで来て模様替の造作をして、商売の出来るように致しました、この丈助は男でありながら煮炊をしたり、すゝぎ洗濯までいたします。夜は御老体ゆえに腰などを撫って上げるといふ、実に忠義一筋なことでございます。商売を致しますところが、勝手を心得ませんが、稻垣小

左衛門は重役のことで困らん方ゆえ、丈助や商いをするなれば高く売ってはならんぞ、廉う売れ、そうすれば買う者も助かり此方も益になるのだ、何でも身体に骨を折って施しと心得て廉う売れと言付かり、滅法安く売るので、諸方へ知れて方々から買いに参ります。市川新田、八幡、船橋、国分村、小松川、松戸辺から買いに來ます。大した繁昌で、田舎の店では種々な物を売ります、酒、醬油、味噌、飴菓子、草履、草鞋、何となく売ります、末には丈助は朝から晩まで手廻らないように売れますと、近辺の商人が売れなくなつて困るところから、寄合を附けました。

甲「帳元さん、マア何ういう考えか知んねえが、先方へ往つて話いたとこが、元侍だから駄目だよ、商売などはしたくはねえが、食ひ続きが出来ねえからするんだ、廉く売つたツて、なにもお前等の方で咎める理合はあんめえてエいつて掛合に往つたつて駄目だハア」

乙「お侍でも仮令百姓でも理合に於て二つはねえ、おらツちが商売をするツて、えらア田地イ持つてるものはねえから、世間並に売れば宜いに、法外に廉く売るもんだから、己の方が暇になるのだから、何も商売を止めるじやアねえが、仲間入をして帳元並みに売つて貰えてえといつたら解ろうに」

甲「それを云つたがだめだよ、廉く売つたつて己おらを咎める理りええ合は有んめえ、何で咎めるかサア返答ぶて、斯う云う、己さむれえア元侍だ、百姓風情が兎や角こう咎めだてをすれば打斬ぶちきつてしまふと脅かすだア」

丙「だからよ商売あきねえを止めるじゃねえが、仲間入をして世間並に売つて貰もれえてえて云うに、打斬ぶちきるてえ理りええ合は有んめえ」

甲「此処でそんなに吠鳴がなつても先方まで聞えねえ、作右衛門さくえもんどん、お前めえさんは年寄では有るし、月番だから先方へ往つて言ことやわらふ柔かに話をぶツて来て貰もれえてえが、往つて来ておくんなせえな」

作「先方せんぼうへ往つて話をするんだがネ、元は侍さむれえだが食い方に困るから商売しょうべえをするツて、それを咎める理りええ合は有んめえと云う処を押して、此方こつちで兎や角こういえば殺されると云うんだ」

と評議の永い事滅多に押附おツつきません。作右衛門は頼まれたから仕方なく遣つて参りました。

作「ハイ御免なせえ」

丈「入つしやいまし、何を上げますナ」

作「買物買いに来たのじや有りませんが、少し旦那様にお目に懸はなつて、お談し申してえ事が有つてめえりました」

丈「なる程、何方どちらのお方で」

作「ハイ当村で酒渡世を致します作右衛門と申すものでござえます」

丈「左様でございますか、旦那さま村方のお方がおいででございます」

小「そうか、さア／＼此方こつちへ御遠慮なく」

作「先ず天氣イ続きます」

小「ハイ私は新参もので、当所不慣ゆえ何かと又村の衆には御厄介になります事もございましょう、幾久しゆう御別懇に願います、只今では改名して稲垣屋小助いながきやこすけと申す、慣れない商売をいたしまするもの、何かとまたお指図を願います」

作「ハイ今こんにち日ひ出ましたのは他ほかの訳でもございせんが、ソノマアお前めえさま様はお侍さむれえのことで商売あきねえのことは御存じも有りますめえが、江戸しょうばいの商売と違ちがえまして、田舎では商人あきんどの仲

間に帳元あきねえと云うものが立つて居りやして、その帳元へ寄より合ええをして、何処どに市が有ろうとも十夜じゅうやが有ろうとも、皆帳元の方から、何の品物は幾どらに売れと云う割わり合ええを持つて出る訳で、帳元へ這入らねえと商あきねえは出来ねえ訳でござえますが、それを御存じねえから、成なる

たけ<sup>やす</sup>安く売るので、遠くから買いに来るようになったので、村方の小<sup>こ</sup>商<sup>あきな</sup>売<sup>ない</sup>をするものにも田地をえら持つてるものは有りませんから、おらア方へ買<sup>け</sup>えに來ねえで誠にハア食<sup>く</sup>い方にも困るような訳でござえますから、何うかマア商<sup>あきんど</sup>人並に仲間入りをして、其の上で何うか帳元並に売って御<sup>も</sup>貰<sup>れ</sup>え申せば宜<sup>い</sup>いので、帳元が立つて居りますから、私<sup>わし</sup>と一緒に直<sup>すぐ</sup>においでなすつて、商<sup>あきんど</sup>人の仲間入りを願<sup>ね</sup>えてえで、帳元總<sup>そう</sup>代<sup>でえ</sup>に作右衛門が出てめえりました訳で、どうか何分御聞き済みを下されば、誠にハア皆も悦ぶこととござえます」

## 十五

小「至極御尤もなことで、イヤモウそうで御座いましょうが、とんと手前<sup>てまい</sup>商いのことは知りません、家來がやると申すので始めましたのだけれども、廉<sup>やす</sup>う売<sup>う</sup>るのを咎<sup>とが</sup>めるのは些<sup>ち</sup>とおかしいように心得ます、私が物を廉く売ると申して無闇に廉く売<sup>う</sup>るのでは有りません、多分に買<sup>か</sup>い出すと廉くなる上に、多分の利を見ずに廉う売<sup>う</sup>るので、諸方より多<sup>たにん</sup>数<sup>ず</sup>買<sup>か</sup>いに来るから、骨は折れますが、斯ういたせば買<sup>か</sup>うものも益になれば、私も益になります次第、それを悪いとおツしやれば、それは商<sup>あきんど</sup>人の仲間入もしたいが、ちと致<sup>いた</sup>しにくい、何<sup>なぜ</sup>故と



申すに、商人の仲間入を致しては何うも私が古主へ帰参の妨げになります、今にもお召返しになれば鞍置馬に跨り、槍を立て歩く身のうえ、然るに食い方に困って十夜や祭の縁日なぞに出て、香具渡世の仲間入を致したといわれては、何うも同役の者に聞えても恥るわけなれば、仲間入の儀は平にお断りを申します、あなたも安く売るときつと売れますよ、高く売れば品は沢山出ない、たま／＼一か二つ出ればそれで沢山儲けて沈着いて在らつしやるが、私どもはガチ／＼して安く売つて、利を数で見居ります、あなたの方でも安く売れば屹度売れますから安くお売りなさい、だが仲間入の処は平にお断り申す、何うぞ帳元へ宜しく」

作「ハア駄目だア」

と仕方がないから立歸つてこの由を話すと、皆な腹を立て、これは捨置かれん、何うしたら宜かろうと云うと、国分村に萩原束という浪人が居りまして、貸金の催促方なぞに頼まれて掛合に往きまして、長柄へ手を掛け、威かして金を取つて参りますから、調法ゆえ百姓が頼みますので、萩原さんを頼んで掛合に遣らうと云うところから多分の鼻薬を遣わしたので、

束「宜しい、武家と申してお百姓を威かし不法な事を申す、手前掛合つて仕儀に依つては、

素首<sup>すこうべ</sup>を打ち落して見せる」

とはから萩原束が真赤<sup>まっか</sup>に酔つて、耳のあたりまで真黒<sup>まっくろ</sup>に頬髭<sup>ほひげ</sup>の生えている顔色<sup>がんしよく</sup>は、赤狗<sup>あかいぬ</sup>が胡麻汁<sup>ごましる</sup>を喰つたようでごいます。盤台面<sup>ばんだいづら</sup>の汚い齒<sup>は</sup>の大きな男で、朴齒<sup>ほうば</sup>の下駄<sup>は</sup>を穿き、脊割<sup>せわり</sup>羽織<sup>ばおり</sup>を着て、襷<sup>ひだ</sup>の崩れた馬乗袴<sup>うまのりばかま</sup>をはき、無反<sup>むそり</sup>の大刀を差し遣つて参り、

束「御免下さい」

丈「入らっしゃいまし、何を上げますな」

束「買物<sup>かいもの</sup>買ではない、御主人へ会いに来た、国分の萩原束と申すものである、宜しく」

丈「旦那さま、国分の萩原束とかいう浪人ものがお目に懸りたいと申して、真赤な顔をして、袴を穿いて、長いのを差して、居合抜き見たような方が参りました」

小「此方<sup>こちら</sup>へお通し申せ」

というので丈助は出て参り、

丈「此方へお通りなさい」

束「御免を蒙る」

小「さアどうぞこれへ、好<sup>よ</sup>うこそのおいで、手前<sup>てまい</sup>は稻垣屋小助と申す小商売を致すも

の、此の後とも御鼻屑に御用向を仰せ聞けられますように」

東「ヤア是は始めまして、手前は国分に居る萩原束という浪人の身の上で、其の日の食い方に困る、それが為に実は御繁昌な商人へ無心に参るので、あなたは夫して御繁昌で、実に何うもお忙がしい事で、それゆえ御無心に参つたのだが、何うか浪人の身の上を憐れふびんと思召してお恵みを願いたい、お聞済み下さい」

小「ハ、ハ、ハ、左様でございますか、併し何う致しまして、人さまへお恵み処では有りません、自分の食い方に困るところから漸く小商売を致しますくらいで、自分の腮が干上りますくらいの訳ゆえ、外の又御繁昌なお商人へ往つてお頼みが宜しい」

東「イヤ是非とも願ひ度いネ、何処の店でも店開き当日には先方から手前方へ頼みに参り、間違ひでも有つてはならんからと、店番をして呉れろと云つて、拙者は何処へも頼まれて往く、と申して酒が貰いたいという訳ではないが、貴公は村方の帳元へ一言の談もなく、勝手次第に竊んで来るか知らねえが、方外の廉売をするので、村方の商人一同迷惑を致して居るくらいだから、是非とも願う、お思召を下さい」

小「左様なら心持で宜しいか」

東「宜しい」

小「これ丈助」

丈「へえ」

小「錢<sup>ぜにぎる</sup>筈の中から錢を三文持つて来い」

丈「へえ」

と持つて来ましたのを態<sup>わざ</sup>とからかいに小左衛門は東の前へならべて、

小「甚だ輕少ではござるが、ホンの心ばかりで」

といわれ萩原東は怒氣面<sup>おもて</sup>に現われて、

東「此奴<sup>こいつ</sup>愚弄致すな、此の方も武士でござる、イヤサ拙者を三文や四文の錢を貰いに参つ

た乞食と心得て居<sup>お</sup>るか、宿無じやア有るめえし、三文計<sup>ばか</sup>りの錢を出すとは無礼至極な奴だ」

小「でござるから只今承わつたので、心持で宜<sup>よ</sup>いと仰しやツたから、私の上げたい心持は

三文で、モウ五文とは進<sup>あ</sup>げられん心持で、それゆえに多分のことは出来んと前々からお掛

合申したところ、心持で宜いと仰しやツたから出したが、それが悪くば其の余はなりませ

ん」

東「黙れ、これ手前<sup>てまい</sup>は錢<sup>ぜにかね</sup>金を無心に参つたのではないが、村方の商<sup>あきんど</sup>人が難渋を致す処

から再度掛合に参つても侍を権にかい、土民輩<sup>ばらあなど</sup>と侮<sup>あなど</sup>つて不法な挨拶をして歸すので、村方

の商人が難渋致すによつて、拙者に掛合つてくれろと申して参つたから出たのだが、こんに今日から商人の仲間入をして帳元並に売ればよし、左もなくば三文出して束を乞食扱いにしたから容赦は致さんぞ、拙者も武士だ、免さんぞ、浪人しても萩原東大小を質には入れん」

と云いながら眼を怒らし肩を張り、長刀を引附ける。

小「ハ、ハ、ハ、それじゃア何んですかね、侍は浪人を致すと皆大小を質に入れて、お前さんばかり質に入れんと云うので、貴方は鼻高々と然う云われるか知らんが、手前も元は侍、今は浪人して斯く零落の身に成つても大小は未だ質入れは致しません、幾口もございます、先祖伝来の品もござる、御覧に入れましょうか、鎧櫃も有る、鎗も是に懸り居ります、傍らにはこの通り種子ヶ嶋の鉄砲に玉込もして有る、狼藉者が来てゴタ／＼致す時は、止むを得ずブツ払う積りで、火縄を附ければ直に射てることに成つて居る、それが如何致した」

と束の胸先へ狙を附けましたから驚いて、

束「暫くお待ち下さいまし、手前喰酔つてまいりまして、兎や角、御無礼を申し上げ、お氣に障ったかも知れませんが、其の段は幾重にもお詫をいたしますが、暫くお待ち下さい、

何ういう機<sup>はず</sup>みで玉が出まいものでもない」

小「いえく狼藉者が参つて兎や角<sup>こう</sup>申せば、この引金をガチリと押せば玉がパチンと出て、貴方の鳩<sup>みぞ</sup>尾<sup>おち</sup>辺<sup>あたり</sup>へ中<sup>あた</sup>るように……」

束「マアく暫く、何ういう機<sup>はず</sup>みで玉が出まいものでもない、拙者喰酔つて参り御無礼を致した段は幾重にもお詫び申すからお氣に支<sup>さ</sup>えられませんかように危いと申すに」

小「左様なら拙者が心ばかりの三文を持つて往つて下さるか」

束「へえ頂戴致しますく、有難いことで、何<sup>い</sup>れまた出ます、鉄砲は危ない、怪我<sup>いざ</sup>という事がありますから」

と萩原束は真<sup>ま</sup>青<sup>つさお</sup>になつて帰りました。

小「丈助<sup>どつち</sup>何方<sup>どつち</sup>の方へ歸つたの」

丈「国分村の方へ歸つて往<sup>ゆ</sup>きましたが、馬鹿な奴ですナ」

小「村方の商<sup>あきんど</sup>人に頼まれて来たんだの、悪い奴だ」

丈「来た時には真赤な顔をして来ましたが、歸る時には真青になつて歸りました、逃げて歸る時には刀の長いのは見つともないもので」

小「馬鹿な奴を玉込もしない鉄砲でおどして遣つた」

と此の事は稻垣小左衛門が勝つて笑つて居りましたが、さて物は負けて置きたいもので、これが稻垣小左衛門の災難の始まりで、遂に命を落す程の事になるという、あだうち仇討の端緒こぐちでございます。

## 十六

さて引続いてお聞に入れました松葉屋の若草は、伊之助を咀のろいまして、庭の松の樹きへ小刀を打ち付けるといふ処まで弁じましたが、この小刀には金重と銘が打つてございます。これは若草の親の作で、女の身みだしな嗜みだと云つて、小刀には余程大きい、合口には些ちつと小さいが作物さくものでございます。是を形見として娘お富へ呉れましたのを打ち付けたので、先せん達も福地先生から承うけりましたが、大宝令たいほうりょうとか申しまして、文武天皇さま時分に法則も立ちまして、切物きれものは仮令たとえ鋏でも小刀でも刀でも、我銘わがを打つ事に致せといふ処の法令で、是だけは、只今漸だん／＼々世の中が開けまして、外国の法に成りましたけれども今に残り居りますのは、鋏でも、ちよつと十錢ぐらいの小刀さすがのようなものでも銘が打つてございます、二千年も昔から幾世將軍いくせの代る度たびに法則は変りましたが、こればかり今に

残り居るといふのは誠に妙なことでございます。此の若草が松ヶ枝に金重の銘のある小刀を打付け、精神を凝こらして呪のろいましたが、丁度廿一日目の満願の日に当って、伊之助の足の左の親指が痛み始めてまいりましたが、酷ひどく痛み出し、堪こらえ兼かねます程でございます。親父も一人息子の事だから心配致し彼方あちらこちら此方から名医を頼んで来て見せましたが、其の頃はまだ医術も開けません時分ゆえ頓と分りません、是も敢あえて若草が松の木へ小刀を打ち付け、伊之助の足を呪のろつたためでもございますまいが、或あるお方は理が有ると仰しやいました、樹きと云うものは逆さまに立つて居るもので、根の方が頭で、梢こずえの方が足だと云いましたが、そうかも知れません、根の方で水氣すいきを吸い揚げ、漸々手足へ登るように枝葉の繁りまするので、人間も口で物を喰い、胃でこなし、滋養分は血液に化して手足へ循環致すと同じことで、相そうという字は木篇に目の字を書きますが、坐相ざそう寝相ねそうなどゝいいまして、相の字は木へ目を附けた心だといいますが、御婦人の寝相が能くなくつてはいけません、男の坐相の宜よいのは立派なもので、お立派な方が坐ると、ウンと両膝を開き、下腹を突き出し、腰を据えていらつしやりますから、山が揺ゆり出して来たようで、押おしても突いても動かんように見えまするは誠にお立派なもので、私わたくしどものように膝を重ねて坐り、ヒヨイと触つても仰あ向おもむにひツくりかえるような危い形は余り好く有りません、又御婦人の寝相は至って大切



なもので、お嫁に入らしつてもお寝相が悪いために追い出される事が有りますから、夏なつむ向きなぞは寝相を能くしないといけません。悪くするとお母つかさんからお前枕まへまくらを頭へ結い付けて置きな、足を結しばつてお寝なぞとお小言こごが出ますが、これは誠に感心致しませんもので、伊之助は何ういう訳だか左の足が痛み出しましたが、これは若草が松の枝へ小刀を打ち付けたのが感じましたものか、また、然そういう病が発する時節になったのかも知れませんが、一通りならん痛みでございますゆえ、名医が来て段々これを診みると、脱疽だつそという病で、其の頃脱疽の療治などは長崎へ往ゆかなければ見ることは出来んそうで。

医「先ず是はどうも極難症ごくなんしやうで、脱疽に相違ない、至極の難症にして多く鬼籍に入るを免れずと医書に有る、鬼籍きせきというのは過去帳のことで、仏さまの過去帳につくを免れずと云うのは死ぬより他に仕方は無いが、最初の内に早く切断法を施せば全治ぜんぢを万一に見ることが出来よう」

と、種々いろくむずかしい講釈が有りましたれども、切るのは否いやだから、神信心を致したり伺うかぎを立てたり、種々な事を致しますと、何処どこで伺を立て、も御鑑みかん判断けんぱんをして貰つても死霊いきりようと生いきり霊との祟りだと云われて見れば、神経だから家うち中ぢゆうが心配致し、事によつたら吉原の花魁が怨んでは居ないか、遊女というものは能く人を祈るなどというから、祈つた

のではないかと大番頭の安兵衛、伊兵衛始め一同心配して居ります事が、チラリと耳に這入りましたから主人も気にし始めると、トロリとすると夢に見る。また伊兵衛という番頭は若草の叔母を突出つきだしたので、一層心の中で怖うちこわつて居りますと、二階から毛が落ちて来たから手に取上げて見ると、ねばくねばと血が附いて居たなどというは、女中が室へやから下へ落したのかも知れませんが、然うなると、する事為す事怪しいことばかりでございます、翌年の二月になつても何うしても伊之助の足は切らんければならんと云うので、御名匠が恐ろしく能く切れる刃物を持つて参り、御親類立合でなければならんと云うのですが、当た今いまなぞは切るのは造作もございせん。順天堂の佐藤進先生は切るのは御名人でいらつしやいます、先達せんだつて私わたくしがお宅へ上りました時に、鼻を高くして貰いたいと云うお方が来ましたから、無理なことを仰しやると思つて見て居りますと、高く成つたから不思議で、何うなさるかと思うと、額の肉を殺そいで鼻へ附けて、段々高くしたんですが、飴細工みたようで、少し腫物できものが痛いいたと云うと、フと斬つて、イヤ癒なつたらうと云うのですが、自由自在な事でございます。なれども昔は開けませんから苦しんで居ります、今親類立合と云うので、仕方がないからお父さんとつも出て来るようなことに成りまして、皆心配して居りますと、吉原の櫻川正孝という幫間ほうかんは親切な男ゆえ、菓子折を持つて、其の頃のことだ

から小舟で見舞に堀切の別荘へ来ましたが、<sup>たいこもち</sup>幫間なぞというと、<sup>ごく</sup>極堅気の宅では嫌う者ゆえ、正孝は来は来たが、<sup>あが</sup>昇つて宜いか悪いか知れませんか、<sup>そ</sup>窃つと覗いて見ると、<sup>かたく</sup>頑固な番頭の伊兵衛さんが上り口の次の間に坐つて居りますから、こわ／＼に門の中へ這入り、

正「へえ御免、御免下さいまし」

伊兵衛「ハイおいでなさい」

正「えゝ本郷の春木町の、えゝ紀伊國屋の伊之助さまの、えゝ御別荘は慥か、えゝ、<sup>こちち</sup>此方でございますか」

伊兵衛「へえ紀伊國屋の別荘は<sup>こちち</sup>此方でございますが、あなたは<sup>どちち</sup>何方から入らつしやいました」

正「へえ<sup>わたくし</sup>私は、へ……<sup>なか</sup>廊の<sup>ほうかん</sup>幫間でございまして、櫻川正孝と申しまするもので、若旦那様には種々<sup>いろく</sup>御鼻屑を戴きましたから、疾うにお見舞に上りませんければなりませんのでございですが、斯ういう身の上でございしますから遠慮致しまして、是まで伺いませんでしたが、<sup>だいふ</sup>大分お悪い御様子だと承りましたから、一寸<sup>ちよつと</sup>御病間で、お顔だけでも拝見して帰りたいと存じまして<sup>あが</sup>参りました、これは誠に詰らないものではございますが、旦那様はお嗜<sup>すき</sup>

で入らっしゃいますから、少々ばかりですが、ホンのお見舞のしるしまでに」

伊兵衛「ハア左様ですか、これは何うも、お名前はほんと仰しやいますえ」

正「廓の幫間で櫻川正孝と申します」

伊兵衛「少々お待ち下さい」

と伊兵衛が折を持って病間へ参ります。嫁のお雪が十畳の広間を往ったり来たりして不動さまへお百度をあげて居りますと、其の内だけ伊之助はトロ／＼寝ねむられますから、寂しんとして居る処へ伊兵衛が参り、

伊兵衛「若旦那様おやすみでございますか、若旦那さま、若旦那さま」

伊「あい／＼、あゝ今少し寝付いた処だのに、大おおきな声をして起しちやア厭いやだよ」

伊兵衛「何だか吉原から法印さまが入らっしゃいまして、御祈祷をして上げたいと仰しやいます」

伊「法印さまなぞを呼んじやア厭だよ、枕元でガチャ／＼お加持をするので、尚お逆のぼせ上つて痛くつていけねえから止してくんな」

伊兵衛「何だかお見舞の印にお供物くもつを少々計りだが、有難いものだから差上げると申しました」

伊「吉原から法印さまの来るつてえのは変だの、坊さんかえ、総髪かえ」

伊兵衛「いえ、それがどんずり奴やつこなので」

伊「何んと云うお名だえ」

伊兵衛「正孝院さまとか云いました」

伊「ハ、ア分つた、お前は世の中のことを知らない人間だの、それは吉原たいこもちの幫間の正孝が来たのじゃアねえかえ、幫間たいこもちの事は幫間ほうかんというぜ」

伊兵衛「ハイ左様でございますか、一寸往つて聞いて見ましょう」  
ちよつと

と云いながら出て参り、

伊兵衛「へえ只今ツイお名前を伺いそくありませんでしたが、あなたは法印さまでいらつしやいますか」

正「へえ、これは何うも恐れ入りやしたネ、法印さまと間違えられたのは始めて、尤も法螺を吹くから法印の形は少し有りますが、私は櫻川正孝と申しますわたくし幫間たいこもちでございます」

伊兵衛「へえ道理で、そんな事を仰しやいました、まアお上りなさいまし」

正「御免下さいまし」

伊兵衛「さア此方へ」  
こつち

と案内して廊下伝いに病間へ連れて参りまして、

伊兵衛「申し若旦那、正孝院という御方が入らっしゃいました」

伊「此方へお這入りく」

正「これは何うも大変にお悪いんですナ、其の後は誠に御無沙汰を致しました、一寸  
ちよつと  
お見舞に上りたいと存じながら、斯ういう身の上でございますもんですから遠慮をするだ  
け御無沙汰になりましたが、今日はお顔だけ拝見して、御病気の御様子を伺う心底で出  
こんにち  
ました」

伊「正孝能く来てくれた、幫間も多い中で来てくれたのはお前ばかりだ、己も足を切ると  
たいこもち  
云う訳だが、皆道楽をして親に苦勞させた罰だと思つてゐるがネ、能く来てくれた、緩り  
みんな  
遊んで往きねえ」  
ゆ

正「御足を切るといふのは強氣といけませんから、切らずに御全快になるような事をお  
おみあし  
話し申したいんですが」  
づうき

と傍に人の居るを憚る様子を眼で知らせました。  
かたわら  
はゞか

## 十七

伊「伊兵衛や彼方<sup>あつち</sup>へ往つてお茶でも入れて菓子<sup>い</sup>の好いのを貰ったのがあるから、あの甘味で茶<sup>い</sup>の佳いのを持って来てくん、用が有れば呼ぶから……ピツタリ襖を閉めて行つておくれ……師匠、もつと傍<sup>そば</sup>へ寄りな」

と云われ、正孝は前へ摺寄り、伊之助の足の腫<sup>はれあが</sup>上りし様子を見て、

正「これはどうも大變な色に御脚<sup>おみあし</sup>が腫れましたね」

と云いながら四辺<sup>あたり</sup>を見まわし、小聲になりました、

正「時に若旦那お話を致しますが是れは御脚を切るにやア及びませんぜ、若旦那、あなたは松葉屋の花魁がおなくなりになったことを御存じないのでしよう」

伊「え……若草が死んだかえ」

正「ホラ、御存じない、それだから知らないことぐらい仕様のないものは無い、知らずに居ればボヤ、もえ出しますからね、何ういう行間<sup>ゆきまち</sup>違いか知りませんが、花魁はあなたのお胤<sup>たね</sup>を宿して、も、あなたが此方<sup>こちら</sup>へ御窮命になりましたから、日文矢文<sup>ひぶみやぶみ</sup>を送りたくつても、そうもなりません処から、花魁がくよくよ思い詰め、お塩梅<sup>あんばい</sup>が悪くなりました、て

もなく恋煩いで、あなたの処へ人をよこしたくつても無闇のものを出されないから、堅気の田舎ものが宜かろうと云うので、下総の矢切村にいる花魁の叔母さんを寄越ししました、堅い叔母さんですが、全体若浪さんの思い付が悪いんで、その田舎の叔母さんを此方へよこしたのが間違いの種で、叔母さんが談はなしを付けにまいると、此方の奉公人が出て、強談ゆすりに來たとか云つて、御門の外へ投ほうり出したので、顔を摺剥すりむき、叔母さんが大變に怒おこつて花魁に焚ゆき付けたのが始まりで、する事なす事がみんなへまに成るもので、私が花魁の病氣見舞に往ゆく積りで出掛けると、途中で表徳に出ツくわし何んでも一緒に連れて往つて呉れるというから、荷にして山谷の御寮へ往くと、其奴そいつが詰らない出語でがたりをしやアがつて、伊之助さんはお内儀さんを持つて、赤さんまで出來たなぞと喋ったもんですから、花魁が貴方を怨み出し、夫婦仲好く楽しんで居るから、それで手紙も寄越さないのだな、余あんまりな不実な人だ、口惜くやしいと口へ出しちやア云わないが、腹うちの中で火の燃える様に思うつてる中に、この二月臨うみづき月の時なぞは、一通りならねえ口惜くやしがりようで、矢切村の叔母さんが花魁の枕元に坐つて居て、紀伊國屋の伊之助のお蔭で斯んなになつたのだから、死んだら屹度取殺きつとせよ、己も祈り殺すぞよという、花魁はそれでなくつても貴方を取殺そうと思つて居へ、叔母さんにけしかけられたもんですから、むつくりと病褥とこの上へ起き直り、利かない



身体で膝へ手を突いて、此方こつちを睨にらんだときの顔つきというものは、若浪さんが然そういいま  
 したが、恐ろしい顔をしましたつてネ、叔母さん永い眼で視ておいでなさい、屹度私は伊  
 之助さんを取殺すよというと、叔母さんが取殺せよ、取殺すよ、取殺せよと掛合にいうの  
 だから恐ろしいじやありませんか、其の儘にお前さん花魁ひきつが引附けかゝる時にオギヤア  
 と産れたのは貴方のお胤で、可愛らしい男の児こだったと云いますが苦しみの中で産れた赤ね  
 子くさんだから育つわけはありません、一ふたこえ声ばかり泣くとそれっ切り息が絶えたので、花魁  
 はそれを見ると直すくに血が上あがつておめでたく成つちまったんですが、その死んだ花魁に死ん  
 だ赤子ねさんを抱かせて、早桶はやおけへ入れる時には、実に目も当てられない始末で、叔母さん  
 が紀伊國屋を絶やさないで置くものかと云つて、船で其の早桶を持って田舎へ帰つたとい  
 いますが、それからというものは氣味が悪いので、あの美いい花魁のお座敷が明いて、も誰  
 もいやがつて這入らないと云うは、花魁が床の間の処にチャンと坐つてるんで、私も此の  
 間座敷を勤めて遅く廊下を通ると、こんな大きな顔が出たから、驚いて尻餅つを搗うきながら、  
 能く見たら台屋だいやが大台を持つて歸つて往ゆくのをお化ばけと間違えたのですが、一切そういうも  
 のが見えるようなわけで、余程よつほど怖いんですが、そういう訳ですから、私の考えますには、  
 貴方足などを切るより、何でも其の田舎の叔母さんの機嫌をスツカリ取つちまつて、重々

濟みません、どうか堪忍しておくなさいつて、叔母さんを此方へ抱き込み、親類に成つちまつて、お前の云うことは何んでも聞く、頬<sup>ほッぺた</sup>辺でも甜<sup>な</sup>めさせるから堪忍してくれろと雖<sup>すが</sup>り附いて、機嫌を取つて、花魁の御法事御供養をなさい、お金はかゝりますが、仕様が有りません、藤沢寺の遊行上人<sup>とうたくじ ゆぎやうしやうにん</sup>か祐天和<sup>ゆうてんおしやう</sup>尚でも弘法大師<sup>こうぼうだいし</sup>でも有難い坊さんを大勢頼んで来て、大法事か何かして、花魁が成仏<sup>とくだつ</sup>得脱さえすれば、貴方の御病氣は癒るんですぜ、この事を早くお知らせ申すのは知つてますが、鈍<sup>どん</sup>刺<sup>ずり</sup>奴<sup>やつこ</sup>がピョコ／＼参るのも何んとか思われるだろうと御遠慮をして居るくらい苦しいことは有りません」

伊「そうかえ、実に有難う、然う云えば師匠夢ともなく現<sup>うつ</sup>ともなく、この月始まりから若草が私の傍<sup>そば</sup>へ来て、黙つて夜中に坐つてゐるが、その時は私の足が痛い事は酷<sup>ひど</sup>いよ」

正「これは御免を蒙ります、話を聞くとぞつとします、早く帰りましょう、船で来ましたから」

伊「まあ宜<sup>い</sup>いじゃアないか、日が暮れたからお飯<sup>まんま</sup>でも喰<sup>た</sup>べて往<sup>い</sup>きねえな」

正「まあ御免を蒙りましょう、本当に驚きましたナ、叔母さんが掛合に來たときに、突<sup>つッ</sup>倒<sup>ろ</sup>ばして歸すような、頑固<sup>かたくね</sup>なものを飼つて置くから、貴方の御病氣を引出したんで、貴方にも似合わねえ、其<sup>そん</sup>様な奉公人を置いてはいけませんよ」

伊「その番頭は今取次に出た伊兵衛というものだ」

正「道理で私わたくしを法印と間違えました、これは突つぎとば飛ばしましょう、彼あの様子では、あんな奴をなぜ飼つて置くのです、早く追ひ出しておしまいなさいまし」

など云つてるところへ伊兵衛が出て参りましたから、正孝は驚きながら、

正「これは入らつしやいまし」

伊兵衛「誠に遠方の処わざく々々お訪ね下され御真実なことで、私わたくしは伊兵衛と申しますもので

ございますが、只今お次で残らず御様子を伺いました」

正「これはどうも大變私わたくしは直いとまにお暇をいたしましょう……ナニそれはソノ何んで、本ほん町の伊兵衛さんと同じ名が不思議ですな」

と間が悪いからごまかしてピョコ／＼帰りましたが、伊兵衛も怖いから大番頭の安兵衛とも相談して、早く花魁の御法事御供養をしようと云うので、これから伊兵衛安兵衛の二人は、下総の下矢切村の若草の叔母の家うちを尋ねてまいりまして、此処だと思い、と見ると生垣が有りまして、這入口はいりぐちに大きな榎えのきが有り、土間も小広うございます。安兵衛が生垣の外から怖こわ々々覗いて見ると、金重の弟子の恭太郎という馬鹿な奴あがが上り端はなに腰を掛けて、足をブラ／＼やつて遊んで居ります。奥に叔母のおしのが居ります。

安「伊兵衛どん、お前少し其処そこに待っておいで、お前が不調法をしたんだから、私が中へ這入って、一通り詫わびごとを云ってからお前を連れて往ゆくから」

と云い捨て、中へ這入り、

安「御免下さいまし」

恭「何だえ」

安「え、若草さんという花魁の叔母さんのお宅は当方こちらですか」

恭「おいらの叔母さんは彼処あそこに居るよ」

安「イエ松葉屋の若草花魁の叔母さんのお宅は当方ですか」

恭「おいらの叔母さんは彼処に居るつてえに」

しの「恭太郎や何んだよ」

恭「何んだか知らねえが、おいらの叔母さんだ」とよ

しの「どなたか知りませんが、馬鹿野郎で取次一つ出来ねえもんですが、何か御用が有らば此方こつちへ這入へえつておくんせえましよ」

安「左様なら御免なさい」

と怖々安兵衛が上り端へ手を突いて見ますと、叔母さんは夜なく祈ると見えまして、

祈り<sup>つか</sup>勞れたか小鼻も落ち、眼も窪み、頬肉も殺<sup>そ</sup>いで取ったように落ちてしまい、胡麻塩まじりの髪が領<sup>えり</sup>のところへ纏<sup>まと</sup>い付きまして、瘦せた手を膝へ突き、息遣いが悪く、ハツ／＼と云いながら、

しの「さア此方<sup>こつち</sup>へお上んなさいまし私は少し塩梅<sup>あんべえ</sup>が悪くつてネ、其処まで立つて往<sup>い</sup>くも苦艱<sup>くげん</sup>でござえますから、何うかあんた此方へ這入つておくんなせえましよ」

安「ハイ／＼」

と中へ這入り、丁寧に辞儀して、

安「あなたが松葉屋の花魁若草さんの叔母さんで入らっしゃいますか」

しの「はい私が若草<sup>わし</sup>の叔母でござえますが、あんたは何処<sup>どこ</sup>から」

安「ハイ手前は本郷春木町の紀伊國屋宗十郎の手代安兵衛と申します、主人の忤伊之助の事に就いて、今日<sup>こんにち</sup>わざ／＼御当家様へ出ましたわけで」

というより叔母は氣色<sup>けしき</sup>を変え、

しの「何だと、本郷春木町の紀伊國屋の番頭<sup>おち</sup>が己<sup>うち</sup>ア宅へ何しに來た」

安「これまでとんと花魁のおかくれになりました事を存じません、と申すは、若主人伊之助が放蕩致しました事について、堅気な家でございますから奉公人の示しにもなりません

し、本家や親類の前へ対しても捨置かれんと申して、堅い氣象の主人でございますから、悴を堀切の別荘へ押込めて、窮命させて置きましたので、花魁の方へ手紙一本上げる事も出来ないわけで、すると昨年しゆもつの十一月から伊之助が業病ごうびように取附かれまして、その足へ腫物しゆもつが出来まして、どうも痛んで堪えられないばかりでなく、放棄うっちゃつて置くと漸々だん／＼腹の中まで腐れ込むと医者いやくが申しますで、種々いろくと加持祈祷も致しましたが、どうも思うように全快致しませんから、愈々いよく不具かたわになるまでの事と諦めまして明日あしたは切る、明後日あさっては切ると医者の方はいい延べて置きました」

## 十八

安きゆう「昨日きのう吉原町たいていこもちの幫間きんまがまいりまして、だん／＼の話の末全く花魁おもういの念そで然ういうことになったのだから、足を切るには及ばない、叔母さんに詫わかして、花魁の御法事御供養をして上げたら宜よろかうと、真実まことに教えてくれましたゆえ、伊之助も其の時始めて花魁のおかくれになったことを聞いたので驚おどろきました、私わたくしは些ちとも存ぞんじませんわけで、花魁は御懷妊お懐妊になつておいでなすつたという事でしたが、私が存ぞんじて居おれば何うにでも成りまし

たものを、そんなことは心得ませんで、堀切の別荘を預かつて居ります伊兵衛と申すものが、叔母さんのおいでの際に何か不調法を致しましたそうですから、さぞ／＼御立腹でございましょうが、一図に伊之助を守つて居りまして、他の者がまいつても若主人へは逢わせんようと、大主人おおしゆじんから云いつけてございますので、訳の解らん人間ゆえ、一図に主人大事と思い詰めましたところから、叔母さんに怪けしからん御無礼なことを致しましたという事ですが、どうか一つ御立腹でもございましょうが、幾重にも私がなり代りましてお詫をいたします、あなたのお心持も解け、花魁の御法事御供養をいたしますれば、伊之助の病氣も癒りますわけゆえ、実は伊之助が参るべきですが、何分駕籠でもまいられんくらい、それがため私が出ましたが、何うか御勘弁をねがいたいもので、私がなり代つてお詫を申し上げますから」

しの「なにお詫をするつて、今になつて魂消たまげてそんなことをいつて来てもだめだよ、若草は勤めの中うちでも他ほかのお客へ出て肌を触ふらねえ、汝工家われうちの伊之助を亭主ていしと思つて、夫婦約束の書付まで取替わせた仲だから、伊之助が押込められたてえことを聞いて、ハア気の毒なことだと思つて心配しんべえぶつてだん／＼塩梅が悪くなり、殊ことに勤めの中で赤子ねづこまで出来でかして居るだから、己おれも可愛相だと思つて掛合かけあひに往いけば、ムシヤクリ出しやアがツて、己

の身体へ傷までつけて帰す<sup>けえ</sup>ような事をしたアだもの、若草だつても此の怨みを霽<sup>はら</sup>さずに置くものか、若<sup>も</sup>し此の儘に死ねば三日経たねえうちに伊之助を取殺すと云つて死んだから、伊之助は足ぐれえ腐れましようよ、足どころじゃアねえ今に頭迄腐れますべえよ、気味ア宜<sup>い</sup>いだよ、おれも今に見ろ、伊之助の宅<sup>うち</sup>へ草を生やさずには置かねえと思つてくるくれえだから、若草の念<sup>おも</sup>いでも其のくれえのことは有りましようよ、今更死んだ者の心の解けようも機嫌の直りようもねえから、とやかく云わずに早く帰<sup>けえ</sup>れ」

安「どうも重々御尤もでございますが、何うか其処を一つ幾重にもお詫をいたしまして、叔母さんのお身の上がお便りのないお方ならば、伊之助の方から何<sup>ど</sup>の様<sup>よう</sup>にもお手当を致します、引取られるのが否<sup>いや</sup>と仰しやるのならば、田舎でいらつしやツても、月々のものでも差上げて、叔母さんを伊之助のお母<sup>つか</sup>さん同様に御孝行をつくしたいと申しまして、へえ」しの「駄目だよ、伊之助から何を貰つたつて快く口へ這<sup>は</sup>入<sup>え</sup>るかえ、今になって兎や角そんなことを云つて来やアがつても駄目だ、サツサと帰<sup>かえ</sup>れ、今に取り殺して遣るから、其の時になつて魂消るな、兎や角云えば汝<sup>われ</sup>も只は置かねえぞ、早く帰<sup>けえ</sup>らねえと此の薪割を叩き附けるぞ」

安「いえ何うぞ御勘弁を願います……困りましたナ、御立腹は御尤でございますが、私<sup>わたくし</sup>も



子供の使じやアなし、主人の代りにまいりましても、御立腹が解けませんで、へえ然うでございますかと云つて此の儘は帰られませんから、切めて花魁のお墓参りでもいたし、お花でも手向けて帰りませんでは、私の参りましたかどが立ちませんから、御立腹でもございましょうが、花魁のお寺さまだけ教えて下さるわけにはまいりませんか」

しの「伊之助の手から線香一本手向けて貰つても、若草は嬉しくは受けめえが、お前は何にも知らねえで使に來たんだから、汝がには氣の毒だから、寺の名前だけ教えてくれる、中矢切の法泉寺といいやす」

安「へい／＼有難うございます」

と慄えながら外へ出て参りまして、伊兵衛に向い、

安「おい伊兵衛どん、お前が往かなくなつて本当に宜かつた」

伊兵衛「どんな様子でした」

安「実に驚いた、アー怖い、田舎氣質の叔母さんが思い詰めて祈つてるに違いない、実に怖い顔だったよ、不思議だね、何うも何処で見ても死霊と生霊の祟りだという処は中つてゐるじゃアねえか、私を突出しやアがツてつて恐ろしく怒つて、私に薪割を打付けるといったが、お前が這入れば大変だった」

と話しながら往く後から、だしぬけに、

侍「ヤイ、これヤイ」

伊兵衛「ヘイ、真平御免下さいまし」

侍「不埒至極の奴だ、何と心得る、エー江戸市中とは違うぞ、かゝる田舎の反圍中で侍に突当る奴が有るかえ」

伊兵衛「へえ、うっかり此方こちらを向いて話をして居りましたものですからツイ……何うも誠に相済みません、何うぞ御勘弁を願います」

侍「勘弁相成らん、侍たるものへ突当つて」

安「旦那さま御立腹でございましょうが、私の連でございます、二人で怖い話をして、此方こちらを向いて参りましたゆえ、つい旦那さまに突当りましたか知りませんが、何うか御勘弁を願います」

侍「イヤ勘弁罷りならん」

と云いながら二人の胸倉を取り、

侍「サア兩人とも己と一緒に矢切山へ往け、斯う押えたら雷が鳴っても放さん、暫く人を斬らんが、丁度幸い新刀が手に入つたから試して遣るから、己と一緒に矢切山へ往け、両

人ともに首を打落<sup>ぶちおと</sup>してやる」

と云われ、二人はワナ／＼慄<sup>ふる</sup>えて居りますと、此の時矢切の渡場<sup>わたしば</sup>へ舟を繋<sup>つ</sup>けて上<sup>あが</sup>りましたのは荷足の仙太でございます。人のうわさには金森家の浪人が八州のお捕方<sup>とりかた</sup>を斬<sup>きつ</sup>ば払<sup>はら</sup>つて、矢切山へ隠れたという噂を聞いて、刀の詮議の手掛りにもなろうかと、仙太郎が重三郎と舁夫<sup>かこや</sup>の安吉とを船に載せて、矢切の渡口<sup>わたしぐち</sup>へ船を繋<sup>つな</sup>いで、三人上へ上り、仙「何だえあれは、喧嘩かえ、お百姓さん何だえ」

村の百姓「何だか知んねえが、侍<sup>さむらい</sup>が町人を打<sup>ぶ</sup>つ斬<sup>き</sup>るてえだよ、あの二人は成田参<sup>めえ</sup>りかも知んねえが、通りがかりに侍<sup>さむらい</sup>へ往<sup>ゆ</sup>き当<sup>あ</sup>つたとかいので、侍<sup>さむらい</sup>が腹<sup>あは</sup>ア立つて、侍<sup>さむらい</sup>に往<sup>ゆ</sup>き当<sup>あ</sup>たるてえことはねえ、兩人とも打<sup>う</sup>つ斬<sup>き</sup>るから矢切山へ歩<sup>あゆ</sup>ベツてえんだが、可愛相<sup>かわいさ</sup>でがんすネ」仙「乱暴な奴だな、あの侍<sup>さむらい</sup>は何<sup>な</sup>だえ若衆<sup>わかしゅ</sup>」

甲「あれは国分村の萩原束という浪人もので、方々の人を打<sup>う</sup>つ斬<sup>き</sup>る／＼ツてえやアがツて嚇<sup>おど</sup>かしたり、何処の料理屋へ往<sup>い</sup>つても、銭なしで酒をクン呑<sup>の</sup>じまツてから、国分の束を知らねえかと威張<sup>い</sup>るおつかねえ人だよ」

仙「然<sup>さ</sup>うかえ、安<sup>やす</sup>ヤイ、あの侍<sup>さむらい</sup>は顔<sup>かほ</sup>ア出<sup>で</sup>してやアがるが、あんな奴では有<sup>あ</sup>るめえ」

安「エー、まるで變<sup>へ</sup>つて居<sup>い</sup>やす」

仙「新身の刀を試すといつて居やアがるから、ヒヨツとして彼様な奴が持つて居めえもんでもねえから、己が一番あの侍のところへ飛び込み、殴り付けて、あの刀をふんだくるから、重さん逃げてはいけねえよ、日外の怪しい侍の手下かも知れねえ」

重「親方まるで違いますからお止しなさい、怪我でもなさるといけませんぜ」

仙「ナニ大丈夫だ、エ御免ねえ、ヤイ侍、大概にしろ、殴るぞ、ヤイ」

侍「何だ手前は」

仙「己は通りがりのものだが、弱い町人を掴めえて嚇しやアがって、長えのを振り廻わし、斬るの殴るのツて、ヤイ此の侍、殴り付けるぞ」

侍「イヤこれは何うも怪しからん奴だ、侍たるものに向つて無礼を働くと、この兩人と共に手前も手討にいたすぞ」

仙「ナニ生意気な事をいうと殴り付けるぞ」

侍「オヤ此奴無礼至極免し難い」

仙「免し難ければサア己を斬れ、其の新身の刀を引ツこ抜け、侍」

侍「斬らんでウヌ、兩人は免して遣るから往け」

と突放されて、安兵衛も伊兵衛も悦びまして、栗林の間へ逃げ込みましたが、吉原土

手で仙太郎に逢った侍は心有るものゆえ、振ッ払<sup>はら</sup>つて逃げましたが、国分の東は心がないから、いきなり引ッこ抜くが早いか、仙太郎は少しく起倒流<sup>きとうりゅう</sup>を習つて居りますから、飛び込んで侍の足柄を撈<sup>すく</sup>つて投<sup>ほう</sup>り出すと、バタリと仰向けに倒れる上へ乗しかゝりましたので、萩原東は組み敷かれ、苦しそうな声で、

東「御免を蒙る」

仙「黙れ、ウン」

東「これは痛い、御免……ア、痛い、参った」

仙「こんなものを振り廻わしやアがッて、重さん逃げちやアいけねえ、何処へ往ったんだ、安ヤイ」

安「オーイ」

仙「あんな処<sup>ところ</sup>に居やアがる」

といううち、安吉も出て参り、

「親方しツかりなせえ、わツちが居るから大丈夫だ<sup>でえじょうぶ</sup>」

仙「重さん物は試しだ、これを見ねえ」

と東の刀を投り出すを受取り見て、

重「これは蹈めません、鈍<sup>なまくら</sup>刀で、稍<sup>ようや</sup>く一兩二分ぐらいなものでございます」

仙「こんなものを差しやアがッて、斬<sup>は</sup>るの殴<sup>なぐ</sup>るのッておどしやアがッて畜<sup>ちき</sup>生<sup>しょう</sup>め、此の村には己の親類があるから、向後<sup>こうあ</sup>暴<sup>あら</sup>すときかねえぞ、てめえの面<sup>つら</sup>を見覚えのために印を附<sup>つ</sup>けて置<sup>お</sup>こう、刺<sup>ほり</sup>青<sup>もの</sup>をして置いて遣<sup>はな</sup>るから然<sup>しか</sup>う思<sup>おも</sup>え、重さん、矢立<sup>やだて</sup>を差<sup>さ</sup>してゐるなら此<sup>こ</sup>処<sup>ところ</sup>へ出<sup>で</sup>しねえ……斯<sup>あ</sup>う十文字<sup>じゅうもんじ</sup>にして、汝<sup>てめえ</sup>の根性<sup>こんせい</sup>は曲<sup>ま</sup>つてゐるからまた……斯<sup>あ</sup>う三角<sup>さんかく</sup>なものを刺<sup>ほ</sup>つて置いて遣<sup>はな</sup>る」

東「これは御免<sup>ごめん</sup>を蒙<sup>まか</sup>る、御丁寧<sup>ごていねい</sup>な御挨拶<sup>ごあいさつ</sup>で」

仙「これで宜<sup>い</sup>いからサツサと往<sup>い</sup>け」

と突放<sup>つてはな</sup>されて、侍<sup>さむらい</sup>はホウ／＼の体<sup>てい</sup>で逃<sup>に</sup>げて往<sup>ゆ</sup>く。これから仙太郎<sup>せんたろう</sup>は重三郎<sup>じゅうさぶろう</sup>を連れて矢切<sup>やぎり</sup>山<sup>さん</sup>へ乗<sup>のり</sup>込み、刀<sup>や</sup>の詮議<sup>せんぎ</sup>をいたすという、一寸<sup>ちよつと</sup>一息<sup>いそぎ</sup>致<sup>いた</sup>しましょう。

## 十九

諸<sup>さて</sup>も稻垣<sup>いながき</sup>小左衛門<sup>せうざゑもん</sup>は、家来<sup>けらい</sup>の丈助<sup>さけのすけ</sup>と共に葛飾<sup>かしかし</sup>の真間<sup>まゐ</sup>の根本<sup>こんぽん</sup>へ参<sup>まゐ</sup>りまして、荒物<sup>あらいもの</sup>渡世<sup>わたりよ</sup>をいたして居<sup>ゐ</sup>りまする内に、其<sup>その</sup>の年も相果<sup>あひは</sup>て、翌<sup>あした</sup>年の二月<sup>にがつ</sup>になりますると、真間<sup>まゐ</sup>の藤梅<sup>ふじばい</sup>も散<sup>ち</sup>り、

桃や桜がそろ／＼咲き初めましたが、小左衛門はとんと外出を致しませんで、奥にばかり引籠り、うつ／＼致して居りまするので、家来の丈助も心配でございますから、

丈「もし旦那さま／＼」

小「あい」

丈「あなたはお野掛けがお嗜でいらつしやいましたが、此の程はさっぱり野歩きもなさいませず、河岸端へもいらつしやいせんが、些と御保養を遊ばしては如何でございます、あなたのお案じも私は能く存じて居りますが、さっぱり若旦那さまの方からお音信がございません、昨年から引続き満一年の余になりますのに、お手紙一つまいりませんから、お案じは御尤と存じますけれども、屹度若旦那さまからの御書面は芝のお上屋敷へ届いて居るに違いありますまい、大旦那様はまだお屋敷に居らつしやると思つていらつしやるに違いありませんから、渡邊さまの処に御書面が滞つて居ましようと考えますが、私もお上屋敷へは参られませんが、買出しかた／＼江戸へ参り、お出入の八百屋にでも頼んで、渡邊さまへ御手紙が届いて居りましたらば戴いてまいりましようと思ひますが、あなた余りく／＼と若旦那様の事をお案じ遊ばして、御病氣にでもお成りなさいますと、実に私は心配でございますから、何うか貴方些と御保養遊ばしてお氣の散じますようにな

すつて、お身体を養つて下さいますのが何よりでございます、今日こんにち是からお野掛けは如何で、私がお供を致しますから」

小「あいゝ、丈助誠に忝かたじけない、旧来居つた家来共も皆暇いとまを取つて別れゝになれば、私が此処おに居ることを知つて居るものも有ろうけれども、一人も訪ねてくれる者も無いに引替え、手前は新参でありながら、主しゆうじゆう従苦楽を共にして、斯様な処に来て、商いの買出しから、殊に男の手で濯すぎ洗濯までもしてくれるので有難い、手前がいなければ小左衛門は実に困るのだ、誠に忝かたじけない、家来とは思わない、今予わしは家来に助けられて居いるが、時来きたつて失つた國綱のお刀がお屋敷へ返るような事になれば、手前には何どの様ようにも此の恩返しをせんければならんノウ」

丈「ア、旦那さま、勿体ないことを仰しやいます、何う致しまして、私わたくしは旦那さまの御高恩を戴いて居りますから、身体で出来ます事なれば、何の様な事でも致しまして、旦那さまお一人だけの事は御苦勞を掛けません心得で居りますが、若旦那さまは御氣象が御氣象でいらつしやいますから、お煩いは有るまいとは思いますが、何分お案じ申し上げますゆえ、旦那さまは猶なほ更御心配なごさしでいらつしやいましょうと存じます」

小「あい、忤も慣れぬ旅をしたのだが、あの氣象だから山に掛るとも峠を越そうとも、何



の様な者が出て、是まで丹誠して置いたゆえ、武芸は一通り心得居れば、五人や八人狼藉者が討つて掛つても驚くような腕前ではないが、悴の留守中に追放を仰せ付けられたから、斯様な片田舎住居ずまいをして居る事を、悴も知らずに居るかと思うと、こゝが親子の情で、雨に付け風に付け案じられて、今頃は何処に居るか、こう云う雪の降る時には何処の宿屋で冬籠ふゆごもりをして居ることか、それとも難所なんじよを越えて雪中に病でも求めなければ宜いかと存じて心配するが、お前にまで心配させてはならんから、今日は氣を変えてブラ／＼と八幡の八幡宮へでも参詣致そうか」

丈「へい、それが宜しゅうございましょう、左様なれば彼のお蔭絵のお瓢箪へ、宜いお酒が参りましたが、高くつて売りにくうございますから、あのお酒を入れて参りましょう、多量たんとは召上りませんが、私はお下物拵かずごしをいたしましょう」

小「それじゃア兎も角野掛けの支度をしておくれ」

丈「へえ畏りました」

とこれから丈助が種々の物を拵えまして、小左衛門は野掛装束しょうぞくになり、丈助を連れて八幡の八幡宮へ参詣をして、ブラ／＼市川新田いちかわしんでんを帰り路になりましたが、菜の花が盛りでございます、彼の市川新田の出外れの処に弘法寺と深彫のある一の石塚が建

つており、あれから右へ曲ると真間の道で、左右が入江になっており、江には片葉の芦が生えて居りますが、あれは何処にも生えて有ります。其処に真間の継橋つぎばしという名高い橋がありますが、立派かと思うと、板と板と両方から継つぎあわ合せたから継橋というのだそうで、何にも面白く有りません。東の方は手児名の社てこなやしろ、その後は瓶うしろかめの井いより水が流れ、これより石坂を登ると、弘法寺の堂の前に二葉の紅葉もみじ、秋の頃は誠に景色の好い処よでございます。小左衛門は丈助を連れて入江に付いて一筋道をやって来ると、今船から上つたというような姿で、人足が法被はつぴを腰に巻き付け、小太い竹の息杖を突き、胴中どうなかを細引ほそびきで縛つた長持を二人で担かつぎ、文身ほりものといつても能い文よりではございせん、紺の木綿糸を噛んで吐き附けた様な筋彫すじぼりで、後あとからギシ／＼やって参りますから、細路ほそみちゆえ二人が避よける、人足がよろけるとたんに丈助の持つて居た蒔絵まきえのしてある瓢ひやくへ、長持の棒ぼうばなが当りましたから堪りません、瓢は碎けて酒がこぼれる。すると丈助は屋敷に居りました見識あきんどが商人になつても失せませんから横柄に、

丈「ヤイ人足待て、怪けしからん奴だ、旦那さまに相済まん、一番結構なお瓢箪へ長持を打ぶつ付けやアがツて、毀こわしちまつて、不埒至極の奴だ、氣を付けて歩け」

人足「ナニ、安おろヤイ下せ、生意氣なことを云うな、汝てめえツちは酒を喰くらつてヒョロ／＼躑よろけ

て歩くから悪いんだ、其の瓢箪が百両百貫するもんか知らねえが、手前が打つ付けて置きやアがッて何を云やアがる」

と云いながら打ち掛る。

小「これは怪しからん、乱暴なことを申す、余程酷い奴だ、粗忽だから物を毀すも宜しいが、自分で不調法をして置きながら打つてかゝるという事が有るか、不埒な人足だ、以後たしなめ、此の度は免すからサツサと往け」

人足「ナニーこの老爺殴つてしまえ」

と原文に三嶋安という東海道喰い詰めの悪党ですからきゝません、いきなり息杖を押つ取り、左右からブーンと風をまいて打つて掛る、

小「おのれ」

と云いさま後へ飛び退りながら細身の刀を引抜き、刀脊打に原文の肩をドンと打ちましたが、腕が冴えておりますから余程応えた見えまして、アツと云つて転りながら横道へバラ／＼と逃げる。

安「この野郎」

と打つてかゝる処を、ひッ払つて腕を打つ、打たれて三嶋安は斬られたと心得、キャッ

と云いさま同じく細道へ逃げ込んでしまうのを、追い掛けもせず跡を見送りながら、

小「悪い奴だからチト懲こらしてやらんといかん」

丈「不埒至極の奴でございます」

小「それは御用の長持ではないか、会符えふでも立って居おるか」

丈「酷ひどい奴でございます、私わたくしは虫が知らせましたので、このお瓢箪あんまは余り宜いいから持つて出まいと存じましたが、本当にいけない事をいたしました、継ぎ合すことは出来ませんまいか」

小「粉に欠けたものが何うなるものか、捨て、置けく」

丈「デモ勿体なのうございますから……」

小「何故大地ちびたを甜なめる、汚ならしい、塵ごみでも這入つてるといかないから止せ……御用の会符でも立って居おるか見ろ」

と云いながら長持の傍そばへ寄ると、長持の中でヒーと女の泣声がいたします様子。

小「丈助」

丈「ヘイ」

小「長持の中で婦人の泣声がいたすようだが、あんな悪い奴らだから、事に寄つたら女で

も勾かどわか引して担いで来たかも知れんぜ」

丈「なんとも云えません、ヘイ……この蔦の葉の処が、大きく欠けましたんですから、是だけ何うかしたら直りそうなもので」

小「瓢箪はもう大概にしろ、仕方がないワ、早く此の縄を解いて見ろ」

丈「へえ」

とはから丈助が縄を解き、蓋を明けて見ると、長持の中には一人の娘が縛られて、猿さるぐ

轡つわと申して口の中へ何か小さい片布きれを押込み、其の上を手拭しほにて堅く結び、島田鬚もろこしはガ

ツクリと横に曲り、涙が伝わつて襦袢の半襟が濡れて居ります。着物は黄八丈の唐もろこし

手での結構な小袖に、紫繻子むらさきじゆうすに朱の紋縮緬の腹合せの帯でございますが、日暮方ひくれがたゆ

え暗くつてはツきり様子は解りませんが、誠に上品な器量の宜しい娘でございまする。

小「私は通わしりがりのものだが何も心配せんでも宜しい、礼は後あとでも宜しい……ナニ勾かどわ

引されたと……成程こういう娘を勾引するような奴だもの、人の物を毀して無闇に打つて

かゝる処どころじゃアない……何しても娘むすめ子怪我が無くつて宜かった、丈助長持は其処へ捨

て放しにして置いて宜しい」

とはから娘を連れて宅へ帰り、行灯あんどうを点けて娘の様子を能く見ると、年齢十八九にもなりましょうか、品の好いよ、おんもりとした世にも稀な美人でございます。

## 二十

小「いえもう其様そんなにお礼を仰しやらんでも宜しい、先ずマアお怪我がなくって宜よった、御両親は嘸御心配をなすつたでしょう……ナニ江戸から勾引かどわかされたとえ」

娘「はい、私は浅草田原町わたくしあさくさはらまちのものでございます」

小「うむく浅草の田原町で」

娘「この下総の矢切村に私の乳母が居りますとのことゆえ、それを尋ねてまいります道で、帝釈さまの手前の土手のところに駕籠屋が居りまして、しきりに乗れくと勧めますので、供の老爺おやじが申しまするには、足も疲れたろうし、まだ道も余程有るから乗ったが宜あかろうと申しまするゆえ、私も彼のような悪い者とも存じませず、家来の老爺も並の駕籠屋と存じまして、うっかり乗りましたのでございますが、駕籠の方は早いものでございますから、供の老爺が幾ら駄けても追附かれんように昇夫かこやが急ぎますので、私も駕籠の中

で心配致して、供の老爺が来るまで少し待つておくれと申しまして、聞き入れませず急ぎまして、私を森の中へ担ぎ込み、予て企んだものと見えまして、森の中に長持がございまして、その蓋を取つて私を高手小手に縛めて中へ入れられました。其の時は殺されることかと存じて居りますと、それから私を船へ乗せる様子は長持の中でも存じて居りましたが、実に現のうつつ、のような心持で参りましたのでございましたが、貴方さまのお助けで、思ひ掛けなく危い処を免れまして、誠に有難う存じます」

小「それは、御家来が嘸案じて居られるでしょう、お前さんはお器量が宜いから悪い奴らが企んで、左様な事をしたのであらう、どうも誠にお前さんはお人柄で、御尊父様も嘸案じて居られましょうから、私が送り届けて上げるから宜しいが、御尊父は何御商法をなさる、何うも人柄の好い嬢さんだ」

娘「はい、親父は町道場を出して、剣術の指南を致しますものでございます」

小「フン、劍客先生かえ、道理でお人柄が好いと思ひました、私も嗜の道だから随分懇意なものも有りますが、何流でござるか」

娘「はい、一刀流でございます」

小「今流行だからね、一刀流の名高いお方には随分知る人も有りますが、失礼ながら親

御の尊名は何と仰しやるな」

娘「はい、石川藤左衛門いしかわとうざえもんと申しまする」

と云われて小左衛門は驚き、

小「エ、石川藤左衛門……ウー左様ならお前は其の娘のみゑかえ」

みゑ「はい貴方は何うして私わたくしの名を御存じでいらつしやいます」

小「是は何うも実に不思議だ、忝小三郎と許嫁いいなずけの約束を致した嫁とも知らずに助けた

が、石川のみゑかえ、これ丈助、石川のみゑじやと……エ、モウ瓢箪はよいにして置け、  
予かねて話した忝の許嫁の娘であるぞ」

丈「それはお目出度い事でございました」

みゑ「はい、誠に思い掛けない事でお嬉しゆう存じます」

小「それは実に図はからざる事であつたが、まアく宜かつた、私わしは稻垣小左衛門だよ」

みゑ「あれまア伯父さま、貴方さまをお尋ね申して、芝のお屋敷へ参りました処が、御浪  
人なすつたとの事で、方々お尋ね申しましたよ」

小「左様か、私わしも御尊父をお尋ね申したいと心には思つて居たが、只上州じょうしゅう鳥川からすがわの  
辺へんに住むとのみ聞いて、確しかとした処を存ぜんことゆゑ御無沙汰に相成つたが、私も不図し



た事でお暇には成つたものゝ、お前は少い時分ちいさから小三郎に許嫁をしたもの故、お父様とつさまが浪人しても、忤の方へお前を貰おうと、其の相談もしたいと思つて居つたが、江戸においでいでの事は知らなかつた……ナニ浅草の田原町へ町道場を出して……彼のあ、フン、あのくらの腕前の人は当今余り無いテ、私も今では見らるゝ通り斯様な荒物渡世をして、何うやら斯うやら其の日を送る身の上と成りました、栄枯盛衰は浮世の習いとはいいいながら、実に変り果てたるわけだて、御尊父は御壮健かえ、誠に壮健な方だが、相変らずお酒も飲あがるかえ……ナニ泣くか、何うした、其様に泣かんでも宜いよ、何うした、何か間違でも有つたか」

みゑ「はい、昨年十一月三日の暮れ方でございまする、王子の権現さまから歸り掛けに、お父さまとつは何者とも知れず、日暮ヶ岡にて鉄砲で撃うち殺ころされました」

小「エ……イヤそれは何うも……ウン遺恨だネ……ウン尋常に遣つたら中々五人や八人掛つたつて討たれる様な石川氏ではないが、飛道具では何うも致し方が無い、併し卑怯しか至極な奴だ、何でも夫れは知つて居る奴に遺恨を受けたものだね、併しお前は幼年の折にお母さまつかがおかくれに成つてしまい、親一人子一人の石川氏が然うそいう事に成つては誰たれを力に致すか」

みゑ「はい伯父さまも御存じでございましょうが、旧く居ります勇助と申す老爺が、たとえお父さまがおかくれに成つても、稻垣さまと許嫁のお約束になつて居りますから、お連れ申すと申しまして、芝のお屋敷へ参つて伺いますと、伯父さまも旦那さまも御浪人なすつたとの事ゆえ、何う致そうかと存じて泣き明して居りますと、勇助が氣を取直してくれまして、そう心配しない方が宜しい、この矢切村にしのと申しまして私に乳をくれました婆が居りますから、その乳母を使つて参ります道で災難に遇いましたが、思い掛けなく伯父さまにお目通りをいたしましたは、全く親父が草葉の蔭から守ってくれたのでございましょう」

小「至極左様、大きにそうかも知れない、併し心配するな、私は殿様から預り中に、御家御伝来のお刀を紛失致し、それがために忤は少し心当りがあつて美濃へまいつた、尤も手掛りが無ければ、何時帰るか知れんと云つて出たが、今に音信は無いけれども、遠からず帰国致そうが、そうすれば小三郎のためにも舅の仇たる悪者を尋ね探して、必ずお前の怨みも石川氏の怨みも晴させる、私の眼の黒い内は力になるから心配せずにおいで、丈助御馳走は兎も角、早々百姓を頼んでナ、これの家来の勇助がウロ／＼探して居るだらうかな、早速近辺のものを頼んで、手分をして勇助の行方を探させろ」

というので方々探しましたが、一向知れません。五日の間頓と手掛りがございませぬ。すると五日目の日暮方にお百姓が一人這入つて参り、

百「御免なせえまし」

丈「イヤー清助さんおいでなさい」

百「此間鴻の台を見たいという話だからお寺へ頼んだ処が、何んだか浪人者が山へ匿ねたとか云うんで、八州さまが調べに来て八ヶましいので、知んねえものは入れねえだが、おらが納所へ頼んでネ、真間の根本にいるお侍さんで、商えをして居る、固え大丈夫の人が山を見てえと云うんだがと頼むと、そんだら連れて来うと斯ういうわけで己ハア先方へ頼んで置いたから、私イ案内して連れて往くべえと思つて来たアだ」

丈「それは有難う存じます、今仕事をしまったのかえ」

百「只た今野辺仕事をしまつて来たばかりだ」

丈「旦那さま、予てお頼みの清助さんが参りまして、総寧寺さまへ頼んで案内をして上げようと申して来ましたが、これから貴方いらつしやいませんか」

小「それは何うも御親切な事で誠に有難う存じます、私も壮年の折に一度見たこともあつたが、実に絶景の処で、何うかもう一度見たいと思つていたが、それは誠に有難い、丈助

お前それじゃ留守を頼むよ」

丈「わたくし私は此の土地に生れながら灯台下暗もとしで鴻の台はとんと存じませんから、何うか御同道を願います」

小「左様か、それでは、みゑ、お前は留守居をして、若し買物買かいものかいが来たら、今日は余儀ないことで他出致しました、御用向がございますならば明日願みょうにちいますといつて……宜いいか」

と是から瓢箪に酒を入れ、残菜入ざんさいいれに有合せありあわせのものを詰め、身支度をいたし、清助という百姓の案内で、少し遅くなりましたけれども真間の根本をなだれ上あがりに上あがつて参ると、総寧寺の大門だいもんまでは幅広の道で、左右は大松おおまつの並樹なみきにして、枝を交えて薄暗きところを三町ばかりまいりますと、突当りが大門でございしますが、只今はまるで様子が違いました、其の頃は黒塗の大格子おわこうしの大門の欄間は箔置はくおきにて、安国山あんこくさんと筆太に彫りたる額が掛つております、向つて左の方に葷酒くんしゅさんもん不許ふきょ入山門いりさんもんとした戒壇石かいだんせきが建つて居ります。大門を這入ると、半丁ばかりは樹木は繁茂致して、昼さえ暗く、突当りに中門ちゅうもんがございしますが、白塗りにて童宮の様な妙な形の中門で、右の方はお台所から庫裏くりに繋つなつており、正面は本堂で、曹洞派そうどうはの禅林ぜんりんで、安国山総寧寺と云つては名高い禅寺でございます。

百姓「玄堂さんく、此間頼んで置いた根本の荒物屋の老爺さまを連れて来たから、

玄堂さん案内して上げておくんなせえ」

玄「イヤ勝手に這入って往きなさい」

百「案内は出来ねえかえ」

玄「案内は出来ねえ」

百「わしらも時々枯枝を取りに来て道イ知ってるから、私が案内をしますべえ、サア参りましょう」

小「何うか願います」

と是从だんく山手へ附いて参ります。

小「若い時分に一度見たことは忘れんもんだ、これは太鼓塚……これは夜啼石とて里見在城の折に夜なく泣いて吉凶を告げたという夜啼石だ、これは要害の空濠で、裏手の処は桜ケ陣と申して、里見在城の折には搦手で在ったという、何うも実に好い景色の処だ」

と云いながらだんく山手へ附いてまいりますと、鐘ケ淵という処に出ます。

小「オ、見覚えがある、これはその鐘ケ淵といい、これは鐘掛の松と申して、里見在城の

折にはこれへ陣鐘を吊して打鳴したという、其の時北條が攻め入って松を斬落したので、陣鐘が此の淵へ沈んでしまい、今に此処に其の陣鐘が沈没致して水中に存して居る（お）ようで、  
黄門光圀卿が毛綱でこれを引揚げようとしたが揚らなかつたという、鐘ヶ淵と唱える処だ、或は（あるい）豊島刑部左衛門秀鏡の陣鐘にして、船橋（ふなばし）の慈雲寺（じうんじ）の鐘なりともいう丈「へい成程」

小「此処が大見堂（たいけんどう）という二代の上様が大いに見るといふ額を掛けられた処である、御府内一目に見ゆる処と仰しやつた故、摺火打（すりびうち）で煙草を吞む事はやかましい場所じや」

丈「へえ、誠にお精（くわ）しいことで、実に好い景色（よ）でございますナ、何だか鴻の鳥が巢を喰つたから鴻の台と申すとかいふ事を聞きましたが、本当でございましょうか」

小「いや、是は国府の台で、千葉之介常胤（ちばのすけつね）舎弟國府五郎胤道（こくふごろうたねみち）の城跡であると申すを、此の国府の台を訛（なまり）つた伝（つた）えて鴻の台と申すのだらうが、慥（たし）か永祿の七年甲子（きのえね）の正月七日八日の戦いは激しかつたという、向う葛西領の敵手（むこう）は北條氏綱氏（ほうじょううじつなうじやす）康父子（かうふち）が陣を取り、こつち（こつち）は里見安房守義弘（さとみあわのかみよしひろ）、太田新六郎康資（おおたしんろうやすもと）おなじく（おなじく）美濃守資正（みののかみすけまさ）入道（いんどう）三樂齋（さんらくさい）など（など）此方（こち）は頗（すこぶ）る処（ところ）のものが籠城（ろうじやう）をして居（お）る、其の頃は鉄砲（てつぽう）が流行（は）らんから矢戦（やせん）であつたが、此方（こち）は遂（つい）に矢種（やさね）が尽きたゆえ矢切村（やぎりむら）と申す、其の時に鴻の鳥が浅瀬（せんせ）を渡つたという、これは虚（うそ）か実（じつ）

分かるが、川幅は広いけれども鴻の渡るを見て北條の軍勢が浅瀬を渡って、桜ヶ陣より  
 一時いちどきに取詰めた処から、かゝる名城たちまも忽ちにして落城したというが、時節ときだのう、其の  
 日は恰ちやうど今日こんにちの如く夕暮で、入日いりひの落るを見て北條が歌を詠じたと云う……えゝ何とか  
 云つた……オゝ……「敵は打つ心間まなる鴻の台夕日な詠めしかつ浦の里」と詠よんだと申すて」  
 丈「へえ成程、お精しいことでいらつしやいますな、誠に好い景色の処でございますな」  
 百「おらアはア時々木を切りに来るが、斯んなハア詰らねえ処を何だつて江戸者は銭つイ遣つか  
 つて見に来て、焚火イなどして酒工くん飲んで帰ける人なんぞが有るけれど、考かんえると可笑  
 しいだよ」

小「酒といえは瓢箪ひょうたんを持って来たろう、一杯めしあがれな」

百「私わしは酒大嗜でえすきで」

小「お嗜すきなら沢山たんめしあがれ」

百「お前さまが此方こつちへ越してから荒物屋を始めたが、酒でも干物でも廉やすいんで大評判おおだよ、  
 調法だつてよ、仕入が皆江戸物もんを買かつて来るだから好いいでや、此間こねえだの干魚ひものなぎア大層てえそう  
 うまかつたが、チト甘過るだ、己おア方では口のツン曲るようでなければ喰くつたような心持  
 イしねえんだ、あんたの処とこの酒は宜いうがんすねえ……これはお酌有難うござえやす、へえ

私は酒大嗜でござえやす」

小「沢山召上つて下さい、丈助モット大きな物へ入れて来れば宜い」

丈「貴方は沢山召上りませんし、それに三合入と申しますが、この瓢箪は中々這入るもので、大丈夫四合は這入りましょう、清助さん、これを摘んでみなさいよ」

清「はい、これは何うも、何んだえ日光唐辛かえ」

丈「ナニ伽羅路で、まア上つて御覧じろ」

清「……これは塩ツ辛くつて宜うがंस、貴方の処に一節切という看板が掛つてるから買つて見ようと思つてゐるのだが、あれは鮪のスキミだろうね」

小「ハ、アあれは一節切という笛の名でな、私は少しばかり指田流の笛を吹くから、ひよツとしてまた心有る人が習いに来ようかと思つて看板を出して置くのサ」

清「イヤ笛なら駄目だ、村の蒙に幾らも上手が有るよ、上の又七郎などが、鎌倉から小点から段々と大間へぶツ込んで往くとこなぞは実に魂消たもんだぜ」

小「私のは馬鹿囃の笛とは違うのだな」

丈「旦那様一曲お調べ遊ばしましては如何でございます」

小「何んぞ遣ろうかの、吾妻獅子のような長いものはいかんが、夕空の曲でも調べようか



の

丈「へい何うか願います」

小「今日は丁度霞立つてゐるから、水面を見ながら、向うは葛西領、此方は山風の一節切、これは文屋の康秀が吹いた笛で、先殿飛騨守さまへ笛を御教授申したところから拝領した品だが、私は何処へ往くにも首へ掛けて放さんが、昔鴻の台の城主里見安房守の吹いた笛は嵐山と申す、今此の方が此処で山風の笛を吹くというは誠に妙だな、面白い、昔乗宗という一節切の名人が有つて、谷に臨んで吹いたらば、猿が笛の音を聞きにまいつたというが、殿さまへ御指南を致すとき水に向つて吹くと誠に好い音色が致す、久々で忘れたために一曲調べましょうか」

と云いながら笛を取り出し構えましたが、小左衛門は松の根方へ足を掛け、歌口を沾して吹き出しましたが、その音色は尺八よりは一際静かで、殊に名人の吹くこと故に、心ないお百姓まで心耳を澄まして自ら頭を下げて聞くことになると、夕霞は深く立つて、とんと景色は見えませんが、穏かな好い日でございます、新利根川の流に響いて何とも云われん能い心になり、興に入つて頻りに夕空の曲を調べて居りますと、大見堂の後よりソツと出でたる侍は、黒い頭巾を目深に冠り、ドツシリした無紋の羽織着流しで、四分一

ちごしら  
拵 えの大小を落し差しにいたし、つか／＼と小左衛門の後へ忍び足でまいり、興に入  
つて笛を吹いて居る稻垣小左衛門の腰のあたりをドンと出し抜に突くと、小左衛門は不意  
を打たれたから堪りません、逆トンボウを打って鐘ヶ淵へドブーンと陥りました、落ち  
ながらも剣術の上手な人ゆえ油断が有りません、グルリと体を捻り、彼の侍の頭巾の上か  
ら髻をムツと捕えて放さぬゆえ、其の機みに頭巾の紐が切れましたが、切れなければ俱に  
引摺り込まれる処を、彼の侍は誠に運の好い奴でございします。松の根方へ片手を掛けて  
身を引く途端に落ちて往く様子を見ると、小左衛門は左の手に一節切を持ち、右の手に頭  
巾を持ったなりモンドリを打って高嶺から市川の流へドブリと落入りしましたから、丈助も  
百姓も惻りしてかたまつてしまい、彼の侍の様子を見ることが出来ません。暫くして丈助  
が怖々ながら首を上げて様子を見ると、頭巾が取れたから顔はあり／＼と見えます。年齢  
三十五六にして色白く、鼻筋通り、口元の締った眉毛の濃い、青髭の生えた大髻で、  
二十日も剃らない月代頭でございします。漸く起上つて膝に付いた泥を払い、大小の抜  
けかゝつたのを揺り上げ、松の根株へ片足を掛け、小左衛門が落入ったかとお見おろしまし  
たが、夕霞が深く立ってはツきり見分りませんから、彼の侍が鐘ヶ淵の水面を覗き込む、  
途端に安国山総寧寺の夕勤めの鐘の音が、微かにコーン／＼と聞えました。この侍は何者

か、一寸一息つきまして申し上げます。

## 二十一

彼の稲垣小左衛門を突落した侍は、金森兵部少輔の家来で、百六十石頂戴致しました大野惣兵衛と云うものでございますが、幼年の折から何うも心掛けが善くないため、遂にお屋敷をお暇になりました。斯く追放仰付けられたのも、稲垣小左衛門が殿さまへ申し上げたことがあるに依つて、己がお暇になつたと、飽までも稲垣を怨んで居ります。これを遺恨に只今稲垣を鐘ヶ淵から突落しましたが、小左衛門の死骸が市川へ落入つたか落入らないか夕霞が深く立つて、頓と分りませんから、膝に付いた泥を払いながら跡へ退ると、百姓が慄え上つてブル／＼して居りまするを見て、

侍「これ、これ」

百「ハイ真平御免なせえ」

侍「其の方は先程からそれに居つたか」

百「ハイ先刻から此処に居りました、真平御免なせえまし、ハイ」

侍「イヤ何うもしやせん、少々遺恨有つて斯く致したことであるが、必ず此の事を口外致すな」

百「ハイ口外致しません」

侍「コレく一寸と此処へ来い」  
ちよつ

百「ハイく」

とブルく慄えながらまいる。

侍「其の方は泳ぎを存じて居るか」  
お

百「ハイ、ここ此の村で生立ちましたから、少けえ時分から新利根川へ這入つちやア泳ぎ

ましたから、泳ぎは知つて居やす」

侍「左様か、もう少し傍へ来い、少し申し聞けることが有るから」  
そば

百「ハイ」

と何心なく侍の傍へ寄るや否や、侍が腰を捻つて抜き討ちに百姓の肋へ深く斬り込む。  
あばら

百姓はキヤーと悲鳴を上げる間もなくドンと足下に掛けたから、百姓もモンドリを打つてドブンと落りました様子を見て、懷から小菊を取出し、大刀の血を拭つて鐘ヶ淵へ投げ込み、ピタリと錨鳴りをさせて鞘に収め、悠々と安国山の大門を出て往きますから、家

来の丈助も跡からそつと見え隠れに大門を出て左へ切れ、細道の処まで附けて参り、

丈「申し／＼大野さんえ、旦那エ、旦那」

大「オ、丈助、早速の伝言で首尾好く往つた」

丈「へえ宜い塩梅でございます、あなた國綱の刀を佩しておいでなせますか」

大「シイー、他へ預けることも出来ん程の名刀で有るから困つて居たが、丁度拵えが合つて居たゆえ、斯の如く差料にして居るから、他へ知れる氣遣いはない、大丈夫だ」

丈「旦那さま、石川の娘は中々伶俐でしっかりして居りますから、容易にお手に入れることは出来ませんぜ、併し私が何うか工夫をして見ますが、腕ずくで抱いて寝ようとすれば、舌を噛み切つて死んでしまうくらい小三郎に情を立て居ますから、私が甘く工夫をし、旦那のお手に入れるようにしますが、其の時にはしッかり御褒美をおくんなせえ」

大「宜しい、これはホンの心ばかりだが、褒美の印だ、取つて置け」

と幾らか金子を紙に包んで丈助に渡す。

丈「ハイ／＼今は褒美も何も入りません、小左衛門さえ死んでしまえば、彼処のものは縁の下蜘蛛の巣まで皆な私の物だ、石川の娘の極りが附けば、またお前さんの処へ御沙汰を致しますぜ」

大「何分頼む、骨を折ってくれ」

丈「ハイ大丈夫でござえます、当季何処においでなせえます」

大「<sup>てめえ</sup>手前の方の事の極りが付くまで、国分の萩原束の処に居る心底だ」

丈「彼奴は喰い酔ッてばかり居てお喋りだから、うツかりした事は云えませんよ、ハイ左様なら」

と兩人別れましたが、悪い奴は悪い奴で、此の丈助は大野と共謀になり、表に忠義と見せかけて小左衛門を鴻の台へ引出す手筈をいたしたので、かゝる悪人とも知らず、忠義なものど心得て目を掛けたが過まりで、情ないかな稻垣小左衛門は四十九歳を一期として、一節切と頭巾とを持ったなり落りました。只今は川岸の土が崩れて余程平坦になりましたが、其の頃は削りなせる断崖で、松柏の根株へ頭を打付け、脳を破って血に染つたなり落ると、下を通りかゝつたは荷足船で、彼の仙太郎等三人が松戸へ刀の詮議に往つたが、手掛りがなく空しく帰って参る船の胴中へ、小左衛門の死骸がドンと落ちましたから、重三郎も安吉も肝を潰して、

安「ヤア大変だく」

仙「何んだ、立って騒ぎやアがつて」

安「だつてサ血だらけな老爺おじいさんが降つて来たからサ老爺さんの降るような天気じゃアねえのに」

仙「ナニ馬鹿なことをいう……オ、〳〵鴻の台から落おっこちんだナ、喧嘩をしたか遺恨か知らねえが、老爺さんを酷ひどいことをしやアがる、組打ちでもしたか相手の奴の冠り物をしつかり握つて居るが、指を折らなけりやア中々取れねえくれえ一生懸命に押えて居るが、妙な真黒まっくろの頭巾だなア、相手は侍さむらいか知ら、誂おかしな物を持つてる、笛か知ら、重さんお前は知つてるだろう、これは何だえ」

重「これは一節切と申しますが……オ、是れはお屋敷へ出たとき拝領の山風と云う一節切だと仰しやつて、御自慢で二三度お見せなすつた笛だが」

と云いながら死骸をよく見て肝を潰し、

重「ウー稻垣の旦那さま」

と死骸に取とりすが紐ひもりました。

仙「オイ重さん何うしたんだ」

重「エ、親方、これは稻垣小左衛門さまと仰しやつて、金森さまの御重役で、國綱のお係りのお役人でございますが、其の刀の為にお咎めを受けて、御浪人なすつたと云うことは

微かに聞きました、何処にいらつしやることか御様子も知らずに居りました……誰が旦那さまを殺しましたか」

仙「フーム……それは何にしても飛だ事だった……お前この頭巾に見覚えが有るか、誰のだか分るか」

重「誰のだか分りませんが見覚えは有ります、お屋敷の御重役がお揃いに、あの芝口の紀善の善という袋物屋へ誂えてお揃えに成った頭巾でございます、御覧なさい、此処に印が押して有るのは見聞の時に大勢が同じような頭巾だから解らなくなるといけないと云うので、裏に白羽二重のきれを縫いつけて、それへ各々の朱印を附けて有るのですが、誰のだか分りません」

仙「能く見ねえ、誰のだか分りそうなものだナ」

重「私が見ちや分りませんが、これは此の小左衛門さまの御子息の小三郎さまという方が御覧なされるか、また御重役方に聞きますれば分ります」

仙「フン、何にしても死骸の遣り場に困ったな」

安「これが親方と私ばかりだと、係り合になるといけねえから投り込んでしまふ処だが、重三さんが乗っていたので死骸の分るというのが不思議です……ア、また向へ一人落ち



て来ました、今日は滅法界めつぼうけえに人の降る日だ」

仙「ハ、ア此の鴻の台は上矢切だ、此辺こゝに悪い奴が匿かくれて居るのかも知れねえ、何か手係りになる事も有ろうから、船を市川口へ繋つけよう」

というのを重三郎と安吉が止めましたが聞きませんで、詮議に山へ上りましたが、何の手係りもなく空しく帰る事になりましたが、小左衛門の死骸の遣り場がないから船へ乗せて、仙太郎が伊皿子台町の宅へ帰って参りましたが、屋敷へ知らせて好いいか悪いか知れません、と云って何時まで斯う遣つても置かれないと云うので、直ぐに白しろ金かね台だい町まちの高こう野寺でらへ頼み、仙太郎の縁類みよりの積りにして葬式も立派に致しましたから、小左衛門の死骸のことは誰たれにも知れんわけでございます。お話二つに分れまして、丈助は空そら涙なみだを零こぼしながら根本の宅へ帰って参りますと、おみゑは案じて居ります。門口から、丈「嬢さま只今帰りました、申し工嬢さま只今帰りました」

みゑ「あい、明きますよ」

と云いながら紙燭てしほしを点つけて土間へ下りてまいり、直すぐに戸を明け、みゑ「お父とつさまもお帰りになりましたか」

丈「はい」

と座敷へ上り、

丈「お嬢さま、何とも何うも申し上げようはございません、さぞ嘸あなたさまもお驚きだろ  
うと存じますけれども、申し上げんことはお解りにはなりますまいが、旦那さまは鴻の台の  
鐘ヶ淵から何者とも知れず突き落されて、川の中へ落入りました」

みゑ「えゝ……それはまア何うした訳で」

と次第を聞くと、丈助がなまぞらを遣つかつて瞞ごまかしました。佞弁ねいべんは甘くして蜜の如しと  
いう譬たとえの通りで、誠しやかに遣るのは丈助の得手でございますから、おぼこ氣ぎのおみゑは  
眞実まことの事と思い、

みゑ「ア、情ない、お父さまは去年の十一月、何者とも知らず鉄砲に撃たれ、非業の死を  
遂げ、稻垣さまのお宅へ参ると間もなく、舅しゅうとこ御さまも亦斯ういう非業な死をなさると  
は何たる事か、私のような因果なものは世にあるまい何うしたら宜かろう」

と声を惜しまず泣伏しますから、丈助は腹の中でしめたと思いましたが、表面は眞実しんじつそ  
うに、

丈「私わしも御当家へ奉公致し、及ばずながら忠義一図に勤めて居り、今日こんにちもお供をして参  
りながら、旦那様が斯ういう事になりましたは、実に何んとも申訳がございませんから、

その悪侍の跡を追いかけてましたが、侍は桜ヶ陣の繁みへ逃げ込み、遂に影を見失いどうもお嬢さまに顔向けが出来ませんから、一思いに腹を切って死のうかと存じましたれども、私の死ぬのは厭いませんが、あなたが入らしてまだ五六日しか経たないのに、旦那さまの死骸が知れなく成った其の上に、私が腹を切って死にますれば、何の為に帰らんかと、西も東も御存じのないあなたゆえ、嘸お困りだろうと存じますると、私は死ぬにも死に切れませんから、兎も角若旦那さまも程無うお帰りでしょうから、若旦那の仰せに任せて、手前は主人の供をしながら、当の仇を見遁すとは怪しからん奴だから腹を切れと仰しやるか、手討にすると仰しやるか知れませんが、何と仰しやってもそれまでと覚悟を致して、惜しくもない命を生延びて帰りましたが、私を悪いと思召しますなれば直に斬って下さいまし」

と空涙を零して巧く遣りました。

みゑ「今更外に力と頼む人が無いから、若旦那のお帰りまで待つておくれ、何にもお前の不調法というでも有るまい、皆前世の因縁事だろうから待つておくれ」

と死を止めるを幸いに丈助も其の晩は寝んでしまい、翌日に成りますと、おみゑが不図考え、山を越すと矢切村だが、大方家来の勇助が乳母の処を便つて往つて居るかも知れな

いから、連れて往つて呉れと云うので、是から丈助が供をして上矢切、中矢切、下矢切と段々山を下りてまいりますと、這入口はいりぐちの榎の有る家を見て、

みゑ「此処だよ」

丈「此処があなたの乳母の家ですか、思いがけない事でございますナ、此処は私の生れました家でございますが、私は若い時分から道楽を致しましたので、父親も母親も田舎氣あしづみ質の固いものでございますから、久離切きゆうりつて勘当され、今では生れた家でも足踏あしづみをする事が出来ませんので、私の母親は屋敷奉公をして来たという話を聞いて居りましたが、私は此家こゝへは這入れません」

みゑ「あらまア丁度宜いいやアないか、お前が乳母の子なら縁えん繋つなりの処へ奉公して、忠義に固く勤めたというので、舅御さまもお悦び遊ばしてのお話が有ったから、私が乳母に詫わかして上げるから決して心配せずにおいでよ」

丈「へえ、それは有難うございますが、中々に固くつて寄せ附けますまい、わるく固うございますから」

みゑ「私が詫わかして上げると云うに、宜いいからおいでよ」

と中へ這入り、

みゑ「お前少し其処に待つておいで……ハイ御免よ、私に乳をくれたおしのの宅は此方かえ、乳母の家は此方かえ」

恭「私の叔母さんの家は此処だよ……叔母さん何だか綺麗な女が来て、私に乳をくれつて……お前大きな形をして乳を呑むと味噌ツ齒になつちまうよ」

しの「誰方だか知りませんが、どうぞ此方へ這入つてお呉んなせえまし、塩梅が悪いから立つて往けねえでがんす」

と云うから、おみゑはずつと上へ昇り、

みゑ「何うもまア見違えるように、お前年を取つたねえ、私だよ」

しの「はい、何うも眼悪くつて日暮方ははつきり見えませんが、誰方でがんすかえ」

みゑ「石川のみゑだよ」

しの「おやマア何とまア見違え申しやすように大くおなんなすつてマア、何処においでなせえましたかえ、五六日前に勇助どんが己ア家へ駈込んで来ましてネ、お嬢さまは此方へ来ねえかと云うから、イヤ来ねえと云うと、それはえれえことに成つた、駕籠へ嬢さまを乗せたら何処かへ担いで往ツちまつて解らねえんだ、ハテ何うしたら宜かろうと云うから、随分道も能くねえが、悪い駕籠屋が嬢さまは器量好いだから勾引しやアしねえかと云つ

たら、勇助どんが男泣に泣くてや／＼、魂消てハア斯う遣つては居られねえって駈け出すから、マア待ちなせえと、名主どんも有る村だから、名主どんへ届けて、お役人さまの手を借りてお探しなせえって、それから毎めえにち日松戸流ながれやま山から小こがね金ツ原げらまで探しちゃア帰けえつて来て、知んねえつては泣くだよ、私わしもハア心配して神信心して居やしたが、何処に、エ……あれまア真間の根本といえ山を越せば直ぐだよ、知んねえと云うのはどう云うわけだか……おゝ自分の申す事ばかり申してまだ御挨拶ごえさつも致しませんで、先ず御機嫌好ようござえます、誠に御無沙汰ばかりに成りました、私もハア段々年は老とるし、旦那さまは御浪人なすつて上州の方へ往いかしたとべえで、お宅うちが知んねえもんだからお尋ね申す事も出来ねえんでがんですが、あんたには乳を上げたから何だか我子わがこの様に思われて、定めて大えかくおなんなすつたろう、何うなすつたろうと云つてネ、お案じ申す事がござえますが、ハア見違みちげえるようにおなんなすつてね、まア能く尋ねて下せえました」

## 二十二

みゑ「私は親類便みよりりの無い身に成つたのよ」

しの「そうだってね、お父さまは鉄砲で撃ッ殺されたって、何とハア魂消た訳でがんすな、お便り少ねえ嬢さまゆえ、嘸<sup>さぞかな</sup>哀しかんべえと勇助どんと話しいして居やしたが、実にお気の毒なわけで、何とも申そうようは有りません、あんな好<sup>よ</sup>いお方さまをね…あんたさま、今まで真間の何処においでなせえました」

みゑ「私が勾<sup>かどわか</sup>引されて殺されようとする処を、私の少<sup>ちい</sup>さいうちに許嫁に成つて居る、稲垣小三郎様のお父さまの稲垣小左衛門さまというお方が、御浪人なすつていらしつて、そのお方に助けられて御厄介になつて居ると、また其の小左衛門さまというお方が、昨日<sup>きのう</sup>悪者のために鐘ヶ淵から突き落されてしまい、段々死骸を探したが今に知れないの」

しの「ホイヤ、マア、何とマアたまげますナ、情ねえまア、あんたさまは何とハア御運<sup>わり</sup>の悪いお方だかえ、併<sup>しか</sup>し今に勇助どんが帰<sup>けえ</sup>つて来たら飛ッ返<sup>とび</sup>るように悦びましよう、私も附<sup>わし</sup>いて居やすから御心配<sup>ごしんぱえ</sup>なさらねえでいらつしやいましよ、何うかお供があらばこつちへお入れなせえましよ」

みゑ「乳母<sup>ばあ</sup>や、アノお前に逢うのが間が悪いと云つて這入り兼て、表に立つて居るのだが、何うか私に免じて逢つてやつておくれでないか」

しの「はい、誰<sup>どなた</sup>方かハア知んねえが、お這入んなせえましよ、お嬢さまのお詫なら何<sup>ど</sup>んな

人でも免さねえばなんねえから、まア這入んなせえましょ」

と云われて丈助はきまり悪る氣にオズ／＼しながら這入って参り、

丈「御免なさい」

と云いながら腰に差して居た脇差を抜いて傍に置き、慇懃に両手を突き、

丈「誠にお目にかゝれた義理じやアございせんが、お嬢さまが詫ことをして遣ると仰しやるので、面目ない顔を拭って参りました、ヘエ丈助でございます」

しの「アレ此の野郎……この野郎、汝、何うして此処へ来た、お嬢さま、あんた何うして此の野郎を連れて入らつしやいました、此の野郎、汝、何んだと、面目なくってお目にかゝ

られた義理じやねえと、義理や人情ということを汝工知ってるか、此の畜生野郎め、うぬ、

お嬢さま是れは私には只た一人の忤でござえますが、若い時分から道楽べえぶツて仕様がねえので、あんた、父さまが心配して塩梅が悪く成つたのは此の野郎が二十四の時でござ

えます、婆アや枕元へ来うよと云いますから、何だえ老爺さまというと、忤の丈助は迎も

汝かの力にはなんねえ駄目な奴だから、己ア死ぬと汝工困るべえと思つて金工二十兩貯え

て置いたから、此れでちツとベエ、田地イ買つて己死んでも葬式などを立派にしねえでも

宜いから、汝工食い方に困らねえようにするが宜工と、後の事を遺言しやすから、私泣



き入つて居る中に、能く寝り就いてしまひやすと、この野郎が裏から這入つて立聞いし  
 てえたものと見えて、這入つて来やアがつて、その金工引攫つて逃げ出す音に目工覺し  
 て、後姿を見れば此の野郎でがんすから、魂消て口い明いたつきり、おッ閉ることが出来  
 やしなかつた、すると老爺さまが怒つて早く名主どんのお帳へ付けろ、親の首い縄ア掛け  
 る餓鬼だと云つて久離切つて勘当してしまふと、父さまが口惜しがつて、只た一人の忤だ  
 アが、己ア別に悪い事もしねえのに、何うしてあんなやくざな餓鬼が出来たか、もう縁側  
 の端ツ辺へも寄付けてはなんねえと云ひやしたが、お嬢様が連れて来たアだから逢うだけ  
 逢つて遣るから、サツサと出て往け」

丈「ヘイ、何とも言訳の申そうようはございません、孝行のしたい時分に親はなしという  
 比喩の通り、私が御勘当に成りましてから、お父さまはおかくれに成つたと聞き、一人の  
 お母さまゆえお目にかゝりたいと思つて居りましたが、私が改心を致さなければお詫こと  
 は出来ないから、屋敷奉公をして身を立てようと思ひまして、金森家の御重役稻垣さまへ  
 奉公致し、真鍮巻でも二本差し、奉公大事に勤めて居りますと、旦那さまには御運悪く  
 御浪人なすつて、実は此処へお伴れ申したいのですが、お母さまの前へ対し此方へ足を踏  
 み込むことが出来ないの、真間の根本へ来て居りましたが、商売の買出しから、旦那さ

まの漱<sup>す</sup>ぎ洗濯まで丹誠して、御介抱申し上げて居りましたゆえ、丈助や、手前<sup>てまい</sup>のお蔭で己は助かる、再び屋敷へ帰参することも有れば、屹<sup>きつと</sup>度侍に取立<sup>やりた</sup>つて遣ると仰しやつて入らつしやる事は、お嬢さまも御存じでございですが、昨日<sup>きのう</sup>私がお供をして鴻の台へ参りましたところ、何者とも知れず旦那さまは鐘ヶ淵へ突落され、其の儘死骸は知れず、お嬢さまが乳母を便りたいと仰しやるからお供をして来て見れば、私の実家ゆえ、這入りかねて居りますと、詫<sup>わ</sup>かことをして遣ると仰しやいますから上りましたので、お目にかゝれた義理じやアございせんが、真に善人に成りましたことは、お嬢さまが御存じでございしますが、何うかこれで御勘弁なすつて下されば、これから心を入れ替えて、お側に居て孝行を尽したいと思ひまする」

みゑ「舅御さまも、丈助を家来とは思われんくらいと仰しやるほど辛抱人に成つた事は、私が請<sup>うけあ</sup>合<sup>あ</sup>うから、何うか堪忍してやつておくれ」

しの「はい、汝<sup>われ</sup>は本当に辛抱人に成つたかえ、何んとマア魂消たな年は取ろうもんで、汝はもう幾<sup>いくつ</sup>歳に成る」

と指折かぞえて、

しの「今年はもう三十一に成つたえ、マアどうもネ本当に殿さまが家来とは思わねえと云

うくれえの辛抱人に成ったか、おいま<sup>ほか</sup>他の者が詫ことをしたって勘弁は出来ねえんだが、御主人の嬢さまのお詫ことだから、父さまの位牌<sup>いへえ</sup>へも詫ことをしてやり、名主<sup>どんこ</sup>殿処のお帳も消すようなことにしようが……そう云えば尤<sup>もつとも</sup>らしくなったナ、肩巾<sup>でか</sup>が大きく成つてや、少し様子が死んだ父さまに似て居る、立つて見ろや、少し坐つて見ろ、一廻り廻れや」

という／＼なことを云いまして、親だから直<sup>すぐ</sup>に騙<sup>だま</sup>されました。その内勇助も帰つて来ましたから、丈助は得意の佞<sup>ねい</sup>弁<sup>べん</sup>を以て、是からお前さんと共に忠義を尽しましょう、若旦那さまがお帰になりましたらば、石川さまと旦那さまの讐<sup>かたき</sup>を探して仇<sup>あだ</sup>を報いますよう、及ばずながらお互に若旦那とお嬢さまへお力<sup>ちから</sup>添<sup>ぞえ</sup>をして、若旦那のお屋敷へ御帰参の叶うように心掛けようではございせんかと云うと、勇助は正直な人ゆえコロリと瞞<sup>だま</sup>されて、丈助という人は真実な者と思つて居ります内に、二日程経ちますと、東海道藤沢から稲垣小三郎より父小左衛門へ宛てた書面が届きましたゆえ、披<sup>ひら</sup>いて見れば、藤沢の煙草屋に逗留しているが、刀の手掛りが有ったから段々探すと、去る豪農<sup>かた</sup>の方にお刀のある事が分つたれど、これを手に入れるには金子が二百兩なければならんから何うか早々金子二百兩だけ丈助に持たして届けて下さるように、三日程遅れると手に這入りませんという意味の手紙でございました。

## 二十三

急な事ゆえ只今と違い、二百両という大金の才覚は容易に出来ませんから、丈助も心配して、

丈「己に女房があれば、夜鷹に売つても金の才覚をしようもの……あゝ二百両という大金を才覚のしようは無し、このお刀が手に這入らなければ若旦那は生涯埋れ木にお成りなさるゆえ、此処で取損なうは残念なことだ」

と誠しやかに申します。これはおみゑが小三郎の手筋を知りませんから、窃かに大野惣兵衛と謀しあわせ、小三郎からの書面を拵えて送りましたので、勇助は馬鹿正直の人ゆえ大層氣を揉み、母も心配致しましたが、金の工面が出来ない。するとおみゑが、

みゑ「何うか私を売つて其の身の代とやらでお刀を取戻し、お金を才覚して若旦那へお手渡しをして、其のお刀が手に入るようにしてあげて下さい、併し女子がそういう処へ身を沈めては、亡なられたお父さまには濟まないが、良人のためになる事なれば左のみお叱りもあるまい、のう勇助」

と涙ながらに私の身を廓へ売ってくれろと頼みに、

勇「ハイ、私が附いて居りながら左様の事をおさせ申しては、御両親さまのお位牌に對して私が済みませんが、旦那さまのためには替えられません、左様なら手前が田原町に居りました時に、裏に居た女衞ぜげんのこいち小市という男を存じて居りましたから、これへ参つて談をいたして見ましょう」

と是から勇助が出掛けて参り話をする、丁度山口屋で女子こどもが欲しいといふので、それに小市はおみゑの形恰好なりは精くわしく存じて居りますから、直に承引きすぐ、うけひ、先方でも二つ返詞へんじだろうが、金は幾ら入るのだと聞くから、二百兩入るといふと、兎も角お連れなさいといふので、勇助は立歸り、此の話をして、是れからおみゑは乳母のおしのにも暇いとま乞こをし、駕籠に乗り、泣なきの涙で別れを告げ、丈助勇助が附添ないまして、江戸の田原町の小市の手から山口屋へ参つて話をいたしましたして、玉を見せると、品といい器量といい、起居振舞たちいふるまい裾捌すそさばき、物の云い様ようまで一つも点の打ち処どのない、天然備わった美人で、山口屋の主人もお侍のお嬢さまが夫のために自分から身売りたいといふ心に惚れて、宜うがす、そういう訳なら判代はんだいや金利を引かず、手取二百兩に成るように致ししようと、親類得心の上で相談が付き、証文を致し、二百兩の金子を丈助に渡し、

みゑ「若旦那小三郎さまにお目に懸つたらば能くお伝言ことづけをしておくれ」

と手紙を認めてした小三郎に送る、其の文面にもお刀をお手に入れるために、済まない事とは知りながら、お断りも致さず、私は自儘わたくしじまに泥水に身を沈めましたが、一旦斯様な処へ這入りました身の上ゆえ、たとえ年が明けてもお側に参ることは出来ずまいけれども、親族便りのない身の上を不便ふびんと思召し、お小間使いなりとも、御飯焚ごはんたきなりとも厭いといしませんから、年季が明けた暁はお目を掛けて下さいまし、殊に父藤左衛門を討った仇あだは何者か存じませんが、相手は侍に相違ないと存じますから、とても女子おなごの細腕で仇を討つことは出来ませんから、何うぞお助太刀下さるように是のみ頼み入るといふ処の、細かい手紙でございます。これへ金子を添えて渡すを受取り外へ出ましたが、勇助は氣拔きはきがしたように成りまして、丈助と二人で葛西の柴又の帝釈うしろの後の土手へ掛り、四丁ばかり参つて、なだれに下りると下矢切わたしの渡でございますが、田舎の渡しは滅多に渡る人が無いから、夜に入つては陰々として居ります。勇助は氣拔きはきのしたようになり、

勇「丈助さん、イヤ何うも私は何んだか手の内の玉を取られたと云うのは此の事かと思うよ、お少ちいさい時分からお守をしただけに別れが辛うございました」

丈「然そうだろうね、オイ船頭さん船を矢切へ遣つておくれな、船頭さん」

百「船頭は居ましねえよ」

勇「居なくっちゃア困るな」

百「イヤ丈助さん」

丈「イヤ、これは喜代松さん、船頭は何処へ往つただな」

喜「船頭は曲金まがりかねへ馬鹿囃子の稽古に往つただアよ」

丈「それは困つたが、お前船を漕ぐ事が出来るかえ」

喜「対岸むこうへ往くぐらいは知つてゐるだが、一人で往くのも勿体もったいねえと思つて人の来るのを待つてゐた処だ、丁度宜いからお乗んなせえな」

丈「じゃア勇助さん乗ろう」

とはから船に乗ると、百姓が繫繩もやいを解ほどいて棹さおを揚げて、上手うわての方へ押出し、艀ろくべ杭しめを沽しめしてだん／＼と漕ぎ初めたが、田舎の渡船ぐらい氣の永いものは有りません。

喜「宜い塩梅あんべえに天氣イ能く続くね」

丈「お前は何時までも若いね」

喜「モウ年を老とちまつて仕様がねえだ、若わえ時分に一緒に松戸の樋ひの口くちへ通う時分にやア一晩でも女郎買じよううけえをしねえと氣が済まねえで、一度などは雨が降つた時に簑みのを着て往つ

た事が有ったが、まるで門訴<sup>もんそ</sup>でもするような姿で、お女郎買<sup>めい</sup>に往ったツけが、若え時分というものは仕様がねえもんだね、今じやアお前の婆<sup>めえ</sup>さんが悦んでるぜ、忤<sup>わ</sup>は固く成つて私が仕合せだつて、無えもんとした忤<sup>ね</sup>が帰<sup>けえ</sup>つて来て儲かりましたつてよ、正直な婆さまだからね」

丈「ハア、若工<sup>わけ</sup>時分には散々お母<sup>ふくろ</sup>に苦勞をさせました：勇助さん此の水を御覽なさい、能く澄んでるでしょう、透<sup>すきとお</sup>通つて底が見えるぐらいだのに、旦那さまのお死骸<sup>あが</sup>が何処を探しても知れねえというのは不思議で、其の癖出なくつても宜い百姓の清助の死骸ばかり揚<sup>あが</sup>つたから、私は何うも何んだか水を見ると心持が悪くなりますよ」

勇「然<sup>そ</sup>うだろうね、成程澄んでるね」

丈「ア、あんな大きな鯉が泳いでる」

勇「ドレ何処に」

とうっかり水を見る油断を見済<sup>みすま</sup>し、後から丈助が勇助の腰をドント打つて川の中へ突<sup>つきお</sup>落<sup>と</sup>す。勇助は

「アッ」

と云いながら水中へ落<sup>おちい</sup>りました。一刀流の劍術遣いの家に旧<sup>ふる</sup>く勤め免許をも取った腕



前ゆえ、うちあい討合では敵わんが邪魔になるのは此の勇助、泳ぎを知って居るか聞くと泳ぎは徳利とつくりの仮声こわいろでブク／＼だというから、何んでも水で殺すよりほかに仕方が無いと決心して、矢切の渡場わたしばで喜代松という船頭ぐると共謀ぐるになっているとも知らず、迂濶うっかり乗つた勇助を、川中でドブリを極めたのでございます。

喜「エー、うめえな、斯う云う事でなければ銭儲けはねえな」

丈「早く急いで漕ぎねえ」

と向岸むこうぎしへ急ぎますと、勇助は泳ぎを知らん処どころでは有りません至つて上手で、拔手ぬきでを切つて泳ぎながら、

勇「己を欺いて水中へ落とし入れやアがツて、此の大悪人め、船を返せ／＼」

と追掛けてまいるのを見て、船頭の喜代松は真青まつさおに成り、

喜「泳ぎを知らねえ処か……これは大変だ、上つて来りやア殺されるかも知んねえ、お前めえ能く聞いてから遣れば宜かつたのに」

丈「こん畜生、ナニ汝助うぬけて置くものか」

といううち勇助は遂に船まで泳ぎ附け舷へ手を掛けて船を上ろうとしましたが、上つてまいれば忽ちたちまに勇助のために斬殺きりころされますので、丈助が錆たさび一刀を引抜き、勇助の頭脳あたま

へ割附ける。

「アツ」

と云いさま手を放し沈みましたが、船底を潜つてまた此方の舷へ手を掛け上りに掛るから、今は丈助も死物狂いでございますゆえ、喜代松の持つて居た水棹を取つて勇助の面部を望み、ピューと殴る。其の内船は漸々向河岸へ着きました。が、勇助はまた泳ぎ付き、舷へ手を掛け、船の中へ飛上ろうとする処を、喜代松に水棹を以て横に払われ、バタリと倒れたが、また丈助を狙つて上つて参りまする処を、丈助が狙い打に切つけ、たゞみかけて禿たる頭の脳髓を力に任せて割附ける。

勇「アツ……ア、おのれ丈助、能くも己を欺いて斯る処へ突入れたな」

と云いながら死物狂に成つて上る処を、水棹で払われ、また続いて斬り掛けました事ゆえ、勇助も年が年なり、数ヶ所の手傷に身体自由ならず、其の儘船の中へ軋り込み、身を震わし、それなりに成る、上へ乗しかゝり無茶苦茶に止めを差しました。折から朧月夜ゆえ向河岸まで能く見えます。

丈「オヤ喜代松、気が利かねえじやアねえか、サツサと手伝つて殴れば宜いのに、茫然して居やアがつて間拔だなア」

喜「己だつてハア魂消た、泳ぎを知んねえどこじやアねえ、あのくれえ泳ぐものは此の村にも沢山たんとねえ程上手だから、上あがつて来ればお前めえも己も打ぶつ斬られると思つたら、魂消ちまつて棹を取ることも何も知んねえだよ」

丈「えゝ、大きな声で喋るな、此の血だらけの死骸は他に仕方がねえから、河中へ漕出こぎだして深水ふかんどへ沈めにかけるより仕様は有るめえが、何か重い物を身体からだに巻附けたいと思うが、あの団子よしずっぱりを売る葎簀張とこの処に力ちからもち持ちをする石が有るから、縄も一緒に探して持つて来や」

喜「えゝ、ホウ、実におツかねえたつて何うすべえかと思つてたよ」

丈「愚図々々喋らねえでも宜いいから早くあがれよ」

喜「おゝ」

と喜代松が岸へ上りますと、先程から此の葎簀張とこの処にノソリと立つて居たのは金重の弟子の恭太郎という馬鹿な男で、と見て喜代松は恟びつくり致し、

喜「誰だ、エ、誰だ、そこに居るは誰だ」

恭「おいらだよ」

喜「丈助どん／＼」

丈「えゝ」

喜「おめえら宅うちの恭太兄あすこいが彼処あそこに立つてゐるだよ」

丈「ナニ恭太が、何うして来やアがったか知ら、恭太」

恭「えゝ」

丈「手前てめえ何うして此処へ来た」

恭「己おれらはあの草団子を喰くいてえと思つて叔母おあしさんに銭せんを貰かったから買かいに来たら、日が暮れて夜はねえツてえから塩煎餅せんぺい買つて、先刻さつきから喰くいながら此処あそこに立つてたのよ」

丈「手前てめえ何か見やアしねえか、此の伯父おやじさんと己おれと種々いろく船ふねの中で訳わけが有あったんだが、手前てめえそんな事は氣きが附つくめえのう、何も見たんじやアなかるうなア」

恭「何なんだか己おれア知らねえけど、勇助ゆうすけさんという老爺おやじさんを殺ころした事は知しつてゐる」

丈「馬鹿ばかだつて油断ゆだんはならねえなア」

喜「だから己おれが云いわねえこツちやアねえ」

## 二十四

安「御免下さい……御免下さい」

しの「はい誰方<sup>どなた</sup>」

安「御免下さい」

と上り端<sup>あがはな</sup>に両手を突き丁寧に辞儀をいたし、

安「先達<sup>せんだつ</sup>て一寸<sup>ちよつと</sup>おたずね申しましたが、春木町の紀伊國屋の手代安兵衛でございまする」

しの「おゝ然<sup>そ</sup>うだつてや、誠にお見それ申しましたよマア、構わず此方<sup>こつち</sup>へお上んなせえましょ」

と云われても前に怖氣<sup>おしけ</sup>が附いて居りますから、怖々<sup>こわ／＼</sup>台所口から上つてまいり、

安「先達は御立腹が解けませんで私<sup>わたくし</sup>は何ういたそうかと存じました処、お寺さまのお名前だけ承りましたから、直<sup>すく</sup>に法泉寺さまへまいりまして、私が主人<sup>だい</sup>の代に御法事をいたしました、それで仏さまの御立腹が解けましたか解けませんか存じませんが、主人の心だけの御法事御供養をいたしました事は、定めてお聞及びでもございましょうが、何うかこれで一つ御勘弁を願いたいのでございまする」

しの「はい、村の者が江戸の大尽<sup>でえじん</sup>だか知んねえけど、豪<sup>えれ</sup>えもんだ、田舎には沢山<sup>たくさん</sup>ねえ

法事だつて、村の若えもんや子供を招ばつて餅い撒えたり、錢い撒えたりして、坊さまを夥多呼んで、大した法事だつて、それから二度めに法事いした時には、中山のお上人さまを招ばつて御祈祷をしたてえから、紀伊國屋でも魂消て若草の法事いするような心に成つたかえと思えば、私も少しは胸が晴れやしたよ」

安「誠に有難うございます、就きましては段々と伊之助の足も痛みますので、お医者があるんでも足を切らんければ癒らんと申しまするゆえ、主人も心配致しておりますが、男のことゆえ大主人は諦めまして、只一人の忤の事ゆえ、母親が諦めませんで、叔母さんのお心持が解け、怨みが晴れなけりやア仏さまの怨みの晴れようはないわけだと申しまするので、ヘイ、何うか一つ叔母さまのお怨みをお晴し下されば誠に有難いことゆえ、実は叔母さまが私の方へでも入らして、病人に会つて下さるようなお思召になれば、病氣も全快致しようかと存じまして、続いてお詫ごに出来ましたのでございますが、御勘弁に相成りまするならば何うか一つ願いたいもので」

しの「ナニ、そんなに謝らなくつても宜えよ、先達はお前さんにえれえ事を云いましたが、若草は私のためには一人の姪で、実は私の兄は鋏鍛冶をして江戸の湯島に居やしたが、離れてるから私も近しく行きもしねえけど、其の兄の一人娘で、死ぬ時に私へ遺言して、

汝の娘にしろつてえから、私も彼にかゝつて、死水を取つて貰うべえと思つてゐる只た一人の若草に、あゝ云う死に様をさせたは伊之助ゆえと思うから、私も煮えるように肝が焦れてなんねえだが、お前さんから段々の話で私いだけは勘弁もしようけんど、死んだ若草は勤めの中で伊之助さんより他に男はねえと思え詰め、夫婦約束の書付まで取交せ、末は必ず斯うというわけになつたのに、伊之助が無沙汰で女房を持つて、其の上手紙一本よこさねえで、吉原のよの字も、若草のわの字も厭だというような不人情な心なら、己が死ねば三日経たねえ内に伊之助を取殺すつて、身を振つて口惜しがつたよ、その苦しい中で伊之助さんの胤の赤子を産んだが、そういう中で産れた赤子だから育つわけはねえから、二声三声泣いて直ぐにおツ死んでしまった、それを見ると若草は血が上つておツ死んだから、死んだ若草に死んだ赤ん坊を抱かして早桶へ入れて、此の矢切村へ持つて来るまでと云うものは、私がハア船の中へぶツ転がつて泣くほど口惜かったから、実は私も祈りましたが、おまえの方で法事供養をするくれえに思わば、私は勘弁もしようが、若草は成仏が出来めえから、若草に詫いするならば他に仕様は無えが、若草の浮ぶようにして遣つてくんなさい」

安「へ、何ういうことに致しましたらば浮ぶようになりましょう」

しの「夫婦約束を反古にして、起請というのは己ア知んねえが、熊野の権現さまへ誓を立てると烏ウ三羽死ぬとかいう話を聞いているが、それだから死んだ若草を生きて居る心で、伊之助さんと若草の位牌と婚禮して、若草に沙汰なしで持った嫁子を離縁してくんないまし、影も形もねえけども、口惜いと云う執念は残ってるだから、私から若草の執念を晴らすようにしべえから、若草の位牌と婚禮の盃をしてくれたらば、私も勘弁をしましようよ」

安「ハイ、お位牌と婚禮を致しますかナ……成程、如何にも御尤さまでございますから、何うか工風を致しましょう、兎に角、主人へ話して見ましょう」

しの「兎に角と仰しやつても、また何時あなたがおいでなせえますか知んねえから、私は今でも宜いんですが……」

安「それは誠に恐れ入ります、斯ういう事は早い方が宜しい、実は明日か明後日は是非とも足を切らなけりやアなくなつて居りまする事ゆえ……左様ならば直においでをお願いしましょう」

と是から田舎氣質の律義な婆アゆえ、若草の位牌を脊負つて安兵衛の跡に従いて堀切の別荘へ参りました。安兵衛は直に宅へ連れ込もうかと思いましたが、お雪の兄の岡本政七



が来て居りまするので、極りが悪いから、おしのを隣の家へ預けて置き、安兵衛だけ這入りました。

主人「おや／＼安兵衛御苦労、明日のういよく先生が伊之助の足を切るんだが、親類立合でなければ切らんと云うので、傍で見るのは厭だけれども、仕方がないから船で出掛けて来たが、お前若草のお墓参りにでも往つたのか」

安「へえ、先達てあなたも彼ア云う怖い夢を御覧なさり、また何処で伺つても、御鬩を取つても死霊と生霊という処は怖いように中つてますナ」

主人「本当に怖いようだ」

安「私は現に其の婆さんの怖い姿を見た上に、薪割を打付けるとまで立腹したんですが、その婆さんを一目見たので祈つてゐる事が解りましたよ、婆さんの怨みも死んだ花魁の恨みも晴れさえすれば、若旦那の御病氣は御全快になりましようと思ひ、御足を切らぬやうにと種々考えまして、怖々ながら今日婆さんの処へまいりますと、先達ての大した法事の様子も婆さんの耳に這入つて居りまして、大きに心もちが解けた様子ゆえ、段々と話を致しました処が、己は勘弁もするが、死んだ若草の怨みは晴れないから、若草が生きている積りで位牌と婚禮をして貰いたい、それから若草花魁と若旦那とは夫婦約束の書付

まで取交せた仲だのに、書付を反故にし、若草に無沙汰で他より嫁を貰ったのが立腹で死んだのだから、其の嫁を離縁してしまつて、花魁の位牌と杯さかずきをしてくれたらば、若草が成仏するだろう、私の怨も晴れるというのですが、是は田舎氣質の婆さんだから屹度きつと晴れるかも知れせんよ、お呪咀ましないさえ利きますから、実はその婆さんを一緒に連れてまいりました処、万年町さんが来て居らつしやいますから隣の彌兵衛やへえさんの宅へ婆さんを預けて置きました、御嫁子およめごを離縁なすつて、お実家へお歸しになりますれば、若旦那の御足おみあしを切らずとも御全快になりましようと思ひますが、如何いかゞでしょう」

と云うと、主人宗十郎は氣色けしきを変えて怒りまして、

主「コウ、安兵衛どん、お前は何歳いくつにおなりだ、え、何歳になるよ」

安「へえ、私わたくしは四十五歳」

主「ふざけなさんナ、おまえは十露盤そろばんを取つたり帳面を扱つたりさせれば一いっ廉かどの人間だけれども、人を馬鹿にするも程が有るじやないか、位牌と婚礼をしろつて馬鹿くしい、そんな事を真まに受けて此処まで連れて来る奴もねえもんだ、そんな事はいかねえから矢切の婆さんを帰してくんなよ」

安「へえ……どうもそれが帰すと云うわけにはまいりません」

主人「なにが参りません、安兵衛どん能く考えて見な、万年町のお雪は子供の時分から私の方へ嫁に貰う約束をして置いたものだ、それを忤<sup>あ</sup>が自分の勝手に女郎と夫婦約束をしたのだから、お雪の方で怨<sup>い</sup>んで宜<sup>い</sup>い筋だ、殊に去年の秋から来て居て、彼の通り親切に忤<sup>あ</sup>の看病をするのは何うだえ、まだ年もいかにのに塩<sup>しお</sup>物断<sup>ものだち</sup>をしたり、断<sup>だん</sup>食<sup>じき</sup>をして座敷の内でお百度を踏んで祈念<sup>こら</sup>を凝<sup>てい</sup>す貞<sup>い</sup>信<sup>しん</sup>の心を、神さまも守って下さるかして、あれがお百度をあげる内は伊之助がトロ／＼寝られるという、あんな結構な嫁を何<sup>なに</sup>咎<sup>とが</sup>も無いのに離縁して、影も形も無い位牌と婚禮をするような馬鹿々々しいことを、婆さんに云われたとて、真に受けて帰って来るとは余<sup>よつぽど</sup>程<sup>ほど</sup>間拔な男だ、なりませんから帰してくんなさい」

安「重々御尤もでございますけれども、先達て貴方も夢を御覧なすつたでしょう」

主人「酷<sup>ひど</sup>く疲れた時にやア夢を見ます、怖いと思うから夢などを見るのだ、なりませんよ」

安「只今に成つて婆さんに帰ってくれろと申しますると何<sup>ど</sup>んなに怒<sup>おこ</sup>るか知れませんが、私の喉<sup>のど</sup>笛<sup>ふえ</sup>へ喰い付きそうな権幕ですから」

主人「婆さんに喰い殺されてしまいなさいよ」

安「これはどうも……私も悪<sup>わる</sup>氣で致しましたわけではありません、ねえお母<sup>ふくろ</sup>さま」

母「申し旦那え、安兵衛だつて悪<sup>わる</sup>氣でお婆さんを連れて来たのではありません、先達のお

伺もあゝいう事に出たし、斯うじやないかと私も思つて居りますくらいですし、禁厭も有りまするから、義理をいえば貴方の云う事は御尤もでございするが、禁厭同様の積りで験しに雪の処を仮に離縁として、禁厭に遣つて御覧なさいませんか」

主人「お前までが然ういう老耄したことを云いなすつては困るよ、それだからお前が皆な彼様な道楽者にしたのだ、チビく私に隠して遊びの金までお前が遣んなすつたのだ」母「何んぞというとおあなたは私の所為に成さいますが、当人が病身だと云つて、十九の時にあなたが彼を連れて往らして、あなたが芸者を買つたと云うじやア有りませんか、あなたがお若い時分のお馴染の、柳ばしのお糸という婆ア芸者を呼んだじやア有りませんか」主人「そんなことを今云わないでも宜いから、矢切の婆さんを帰しなよ、そうして斯な詰らん事でお雪を離縁する事が出来るかえ、私の悴の病氣が癒したいからお雪を離縁して、位牌と婚礼させるなんてえ馬鹿くしい事が、好い年をして己の口から万年町の兄に云えますか、私には云えない、本当に馬鹿な話だから、サツサと帰しなよ」

安「へい驚きましたな、帰れと云うのが一番怖いので伊兵衛お前然う云つておくれな」伊「私には云えませんが、何ういたしまして、私が叔母さんをつつ突ころばしたんですからな」主人「ぐずぐず云つてずに早く帰してしまいなよ、誰でも宜いから早くそう云いなと云う

に」

安「誰だツて……困りましたな」

と皆心配致して居りまする処へ、襖を明けて這入つて参りましたは岡本政七でございます。

## 二十五

政「お父さん、誠に御無沙汰を致しました」

主人「おや／＼これは毎度また遠い処を御親切にお見舞なすつて下さり、誠に有難う存じまする、追々陽気になりましたな、船でおいではあるうが、遠い処ゆえ中々容易なことでは有りません、毎度また結構なお土産を有難うございます、何んだかとうとう足を切ると云うので、厭々ながら出て参りました、私は血など出るのを見るのは大嫌いだ、仕方無しに出て参りました」

政「飛んだ御難病で嘸御心配な事でございましょう、少々お父さまにお願いがございする、<sup>わたくし</sup>私のためには只た一人の可愛い妹で<sup>いと</sup>ございますから、伊之助さんのような人に添わし

て置く気は有りませんから、是までの御縁と思<sup>おぼしめ</sup>召<sup>め</sup>しまして、今の内ならば何うでもなりますから、何うぞ御離縁を願います」

主人「へえ……それは何<sup>な</sup>んで離縁をしろと仰しやいます」

政「何うも伊之助さんに添<sup>な</sup>わして置くわけにはいけないので」

主人「それは何<sup>なん</sup>の御立腹で」

政「何の立腹もありませんが、足を切つてしまふ不具<sup>かたわ</sup>の亭主を妹に持たして置くのが厭でございますから、何うか満足の人間を亭主に持たせたいのです」

主人「これは怪しからんことを仰しやる、それはお前<sup>あんま</sup>さん余りな事を仰しやりますじやア  
ございせんか、お雪は私の処<sup>よこ</sup>へ遣<sup>よこ</sup>してしまえば、其の家を家とするが女の道で、左様<sup>そう</sup>じやアありませんか、最早貰つてしまえば私の娘だ、たとえ兄<sup>にい</sup>さんでもお前<sup>あんま</sup>さんの勝手に離縁は出来まい、また私の方でもお雪に離縁が出せるか出せないか考<sup>ご</sup>えて御覧<sup>ごらん</sup>じろ、出せないじやア有りせんか」

政「出せないと仰しやつたつて私は嫁に遣したんじやア有りません、只伊之助さんの看病に遣したんです、不具の亭主などを持たしては置かれません」

主人「そんな事を云つたつて世界の人に不具は有りせんか、夫婦に成つてから亭主が腕

を折るとか足を挫くとか、眼が潰れるとかする度に夫婦別れを致しますかえ、私は出しませんよ」

政「出すも出さんもありませんよ、私は連れて参ります、媒介人は有りますが、まだ結婚の取替せも婚礼も致しません、只許嫁の誼みで病氣中看病に遣しただけです、合せ物は離れ物だから私は上げる氣は有りません、是でも私は万年町の名前人だから、私がならんと云えば破縁になるので、当人が何と申そうとも私は上げられません」

主人「イエ私は出しません」

安「まあ／＼宜うございます、旦那さま、まあお静かになさいまし」

政「私は何処までも連れてまいります」

主人「イエ何うしても私は出しません」

安「旦那まああなたは彼方へ、万年町さん、どうも主人は彼の通りの昔氣質の人物ゆえ、無一國な事を申しまして、誠に相済みませんが、どうか一つこの処だけを……」

政「此処の処だけでも何も有りません跛足の亭主などを妹に持たしては置かれませんが、本当にお前さんの処へ縁付けて置くと、親類中に祝儀不祝儀の有った時に、ピョコ／＼跛足を引かれて来られちゃア、私が困りますよ」

主人「簞棒<sup>べらぼう</sup>な……然<sup>そ</sup>ういう了簡なら猶出せません」

政「そんなこと言ッたつて斯んな処には置かれせんよ」

安「まア、彼方へ」

とお父さんが居ては面倒ゆえ宥<sup>なだ</sup>め透<sup>すか</sup>して船へ乗せ、本郷春木町へ帰しました。そこが女親は甘いものでございますから、

母「安兵衛や、お父さんが義理立をするは宜<sup>い</sup>いが、只<sup>ただ</sup>一人の忤<sup>たつ</sup>を不具<sup>かたわ</sup>にしても嫁が出されないと腹を立つも義理でございましょうが、忤<sup>たつ</sup>が死んでも嫁は出せないとお云いだが、忤<sup>たつ</sup>が死んで嫁が入りますか、本当に、併<sup>しか</sup>し私は伊之助に勧めても去<sup>さり</sup>状<sup>じょう</sup>を書かせようと思つてゐる処へ先方<sup>むこう</sup>で連れて帰ると云うのは幸いだ」

と母親は伊之助の枕元へ参りまして段々説得致しますと、伊之助は去状で此の苦痛<sup>の</sup>が免<sup>が</sup>れるなら、百本でも書きたいくらいでございますゆえ、そんならばと云うので三行半ゆえ訳は有りませんから、サラ、と書いて安兵衛の手に渡すを受取り、政七の居る座敷へ出てまいりました。

安「万年町さん、エ、仰せの通り若主人伊之助に御離縁状を書かせて持つて参りました」  
と差出すを受取り、



政「お父さんが出さないと云つても伊之助さんさえ離縁状を書いて下されば、それで宜しい」

安「いえ、何うかはソノ当人の病氣が全快致しますまでのホンのおまじない同様の訳でございますから、当人の病氣が全快致しました上は、又何の様にもお話を附けます事ゆえ、何うか御立腹なく願います、実は当人も出す氣のないところを無理に勧めて書かせましたのですが、是は只仮にホンのモウ反故同様のものです」

政「何をいうのだ安兵衛さん、お前も立派な人じやありませんか、離縁状を取らなければ他へ妹を縁付けることが出来ませんから貰う離縁状、反故には出来ません、冗談云っちゃアいけませんよ、お前さんの方では病氣の癒るまでとか、おまじないの為とか思召しましょうが、当方では真面目に取りますから左様思召し下さいまし……雪や、雪、一寸お出で」

雪「はい」

と広間で不動さまへお百度を踏んで居りましたが、先程からの様子を薄々聞いて居りましたから、涙ぐんで出てまいり。

雪「お兄いさま、お呼びなさいましたか」

政「はいお出で……安兵衛さん妹の道具は後から取りに遣します、船が待つて居りますから直に此の衣服なりで連れて帰ります……雪、伊之さんの処から離縁状が出ましたから直に宅うちへ帰りましょう、其の衣服でおいで、着物を着替るのも面倒だから」

雪「はい……私わたくしは何で御離縁になりました」

政「何だつて離縁状が出たのだ」

雪「何の咎わたくしで私は出されますのでございます」

政「何の咎もないが伊之さんの氣に入らんから出したのだろう」

雪「お氣に入らんと仰しやつても、私わたくしは是まで御看病をいたし、今になって御離縁をされますような覚えはございませんのに、御離縁になりますというは何ういうわけでございすか、悪い廉かしがございますならば幾重にもお詫を致しましょうから、貴方からも若旦那さまへお詫をなすつて下さいまし」

政「詫ごと何もいらない、もう離縁状を取ツちまったから仕方が有りませんよ、去られた家には片時も居られるわけのものでは有りませんから、一緒においでなさい」

雪「イエ、私わたくしは参りませんよ」

政「そんな事を云つては困りますよ、あんな不具かたわの亭主を持たしちやア置かれません」

雪「大きなお世話でございます、不具でも何んでも私の亭主でございます、あなたのお世話には成りません、来年は必ず全快致しますよ」

政「そんな事を云つては兄さんあにが困りますよ」

雪「あなたのお困りなさるのはあなたの御勝手次第で、御離縁をお取り遊ばすなら何故一応私わたくしに話をなさいません」

政「それは重々私が悪いけれどもね、種々世間の義理ということが有りますから、さアおいでよ、不具の亭主なぞを持たして置かれますか」

雪「私わたくしは参りません」

政「そんな事を云つては困りますよ」

雪「困ると仰しやつても、あなた私わたくしが当家へ参りまする時に何と御意遊ばしました、お前は伊之さんのようなあんな善い立派な亭主を持つて誠に仕合せだ、伊之さんは男も美し、才氣の有る人ゆえ、それだけの働りんききが有るから、他に妾ぐるいをなさるまいものでもないが、たとい何んな事ことが有つても愷りんき氣をして離れるような事があれば、二度と再び顔を見ない、紀伊國屋の家を出れば兄妹きょうだいではないとあなたが御意遊ばしたことが有りますし、それに女は縁付かたづいてまいりました家を家とするが女の道だと仰しやつたお言葉を守つて、

私は御看病をして居りまするものを、悪い廉も無いのに去られるわけは有りません、もし悪い廉がございますなら幾重にもお詫をいたしますから、どうか其の御離縁状を若旦那にお返しなすつて下さいまし」

政「書付を返すというわけにはまいりません、もう取ツちまつたんだから」

雪「あなたが御勝手にお取んなすつたので、お父さまも私を出す思召はない御様子なのを、あなたが無理に喧嘩仕掛をして書付をお取んなすつた事を私は薄々存じて居りまする」

政「安兵衛さん、彼方へ往つて下さいよ、お前さんが其処に居ちやアいきません……お前が此処に居ると伊之さんの病氣が癒らんのだよ」

雪「いえ、私は一生懸命で不動様へ御願掛をして居りますから御全快になりますよ」

政「ナニお前さえ此処を出てしまえば、伊之さんの病氣は癒ると云うのだよ」

雪「いえ、私は死んでも此家は出ません」

政「困りますねえ、お前は今まで兄さんの言葉を背いたことはないじゃアないか、第一私の恥にもなり、お母さんも心配なすつて入つしやるから、伊之さんばかりが男じや有りません、立派な処へまた縁附けるから一緒に往つてくれないと私が困りますよ」

雪「参りませんよ」

政「何故そうだ」

雪「今まではあなたのお言葉を背いた事は有りませんが、今度に限って私は背きます、出て行けと仰しやるのは御無理でございますから」

政「困るじやア有りませんか」

雪「困ると仰しやつても私はもう七月に成りますもの」

政「それは知ってるよ、知って、云うんだから、兄さんが重々無理だが、能く考えて御覽、お前が此家に居ると伊之さんの病気が癒らないから、お前を出しちまって、死んだ花魁の位牌と祝言の真似事するとか、婚礼の真似事をすれば癒ると云う事なのだよ、けれどもお父さまは義理が堅いから、仮令伊之助は死んでも嫁の離縁は決して出来ないと言うのだから、お前が何処までも剛情を張って、これなりで居れば、お前は宜かろうが、伊之助さんの病気が癒らないで足を切ったら何うする、お前もそれ程大事な亭主の病気が全快しないではいけませんまい、お前の悪くないことは私も知って居る、寝る目も眠らずに看病をして居るくらいのもに出て往つてくれると頼むのは、実に悪い、私が悪い、けれども、何うしてもおまえを連れて帰らなければならぬ私の義理に成って居るのだよ、お父さまが忤は死んでも出さないと仰しやるからって、私はおまえを置いては往かれませんか、

私のいう事を聞いてくれなければ、宜うございます、兄さんは帰りがけに船の中から河の中へ飛び込んでしまいます、それでも宜いかえ、往っておくれよ、お前は離縁状を取って去られても貞心な立派な嫁だ、私も困るから往っておくんなさい」

雪「はい……まいます、まいます」

と涙ながらに漸と申しますと、政七は態と大声で

政「不具の亭主を持たしちやア置かれなから、サツサとお往でよ……番頭さん」

安「へえ何うも何とも何うも誠にお氣の毒さまな訳でございますが、種々茲に何うもソノ変なことがございますので、実にお嬢さまへは何ともお氣の毒さまな訳で相済みませんが、ホンの当分おまじないを致しまする間と思召しを願います」

雪「どうぞアノお母さまにそう仰しやって下さいまし、痛む方の御足へ斯う枕を取外す時には、何うも男の手では痛いから、女が宜いけれども慣れない中は痛い<sup>うち</sup>と仰しやって、私にばかり仰せ附けでございますが、私が居りません後は、恐れ入りますけれども、今晚からお母さまにどうぞ私に代ってお柔らかにお枕の取替をなすって下さるよう<sup>ことづて</sup>にお言伝を願います、まだ種々申したい事も有りますけれども、哀しくて胸がふさがり、何も申すことが出来ませんから、何うぞそれだけ仰しやって下さいまし」

安「何うも変なことになって居りますのでございまして、何ともどうもハヤ」

政「馬鹿／＼」しい、早くおいでなさい、離縁を取ってしまえば其の亭主の足がおっぺし  
よれようとも構うものか」

と態と暴々しいことを云うのも此処の義理を思うからで、腹の中では不便とは思いました、  
抛なく政七は妹の手を引いて出てまいる。後へ入れ違つて矢切の婆さまが這入つて来るといふ、これから位牌と婚礼でございます。

## 二十六

さて此の度のお囃は位牌と婚礼を致す処でございます。位牌と婚礼を致しました者は天  
下に二人で、其の頃の紀伊國屋の息子と若草という遊女の位牌と婚礼致し、近くは澤村  
田之助が芸者の位牌と婚礼致しましたが、おかしな訳でございます。今田舎氣質の婆さ  
まが正直に若草の位牌を脊負つて這入つてまいりました。

安「さア何卒叔母さん此方へお這入りなさい、御遠慮なしにずツとお這入りなさいまし、  
エ、お内儀さんえ、矢切村の叔母さんがおいででございます」

内「おや、さア何卒此方へ……お初にお目にかゝります、私は伊之助の母でございます、此の度はまた忤が年の往きません故何かと行届かん勝で、安兵衛が、私に打明けて話を致しますれば、斯んな事にも成りますまいものを、皆なお前が行届かないからだつて小言を申して居りました、それにあなたも御立腹なさり、花魁も伊之助の胤まで孕して苦勞をなすつたという事です、それ程までに忤を思つておくんなすつたは、御商売柄には似合わない真実なお人だつてね、私どもが知つて居りますれば、何の一人や二人の妾を置く人は世間に幾らも御座いますから、どうでも成つたものを、誠に惜しいことをしたつてね、後悔致しましたが、今更仕方がございせん、けれども、それがために斯んな病氣に成りましたのですから、あなたの心も解けて御得心の上入らして下すつたのでしようから、私も大きに安堵致しました、何うか幾久しく、これからは伊之助の真実の叔母さんにお成んなすつて下されば、伊之助も又あなたのお力に成りまする心得でございますから、幾久しゅう願います」

しの「これはお初にお目にかゝります、私は矢切の婆アでございます、今度は又飛んだ行違えから伊之助さんがえれえ病になつたと云うは、私どもで怨んでるといふ訳なんで、何とはア諦めの悪い婆アだと思えなさるか知りましねえけんども、若草も実は伊之助さん



の事でいろ／＼辛苦尽して、勤めの中での病み煩い、私も若え時分にア随分苦勞をしたでござえます、がそれも得心の上なんでがんすから愍然げだと思召してね、影も形も無え若草と婚礼しろつてえのは無理な訳でござえますが、それに今承りますれば咎も報も無え嫁ツ子さんが離縁になつて兄さんが小言をいいながら船へ伴れ込むと、嫁さんが私のような詰らん身の上は無えつて、泣きながら船へ這入るのを見て、何んとハアお気の毒なわけだアと思つて、私イお隣で泣いていましたが、死んだ若草に意見の仕様も諦めさせ様も無えから、形も無えものを生きて居る心持で婚礼でもして下すつたら、若草も成仏して、伊之助さんの病も癒ろうかと存じまして、私が参つた訳でござえますから、何分にも何うか婚礼の真似事だけをネ番頭さん」

安「ヘイ宜しゅうございますが、御内儀さん、若旦那様も御病氣の服裝でも何んでしようから、一寸御紋付物か何かのお支度を成さしましては如何です」

内「あれの物は一通り此方の土蔵に来て居るから出して着せましよう」

と黒斜子の五所紋の上へ行儀霰の上下を着け、病毫けて居る伊之助を、褥へ寄掛りを拵えて、それなりズル／＼座敷へ曳摺り出しますと、

伊之助「もし叔母さんおいでなさい、誠に私は行届かない事から、叔母さんにまで御立腹

をかけて何とも申訳が有りません、みんな私が悪いんですから、どうか私の業病の癒るようにお前さん守っておくんなさい」

しの「はい……えらく瘦せたね、誠にお前様を見ると私は思え出しますが、若草もお前様の児まで出来して何うも案じるとも案じねえとも、昼夜お前様の事をいいく泣明しておツ死んだアから、慇然だと思つて婚礼をして遣つてお呉んなせえ、ね番頭さん」

安「へー左様で何でも早い方が宜しゆうございます、伊兵衛や灯火を持って来ねえ、お料理や何かの支度は出来たかえ」

伊兵衛「湯葉の大きいのがございませんのでお平が出来ません」

安「お前何を誂らえたんだ」

伊兵衛「何をつてお料理を拵えますんです、お精進にて」

安「精進じやアない、御婚礼だから蛤のお吸物に尾頭つきでなければ出されません」

伊兵衛「でもお位牌との婚礼ゆえ残らず御精進にいたしました」

安「生きて在らっしゃるつもりでするんだから、本当の婚礼の式でなければいけません、尾頭つきに何かお芽出度いものでなければ成りません」

しの「いえ何でも宜うがす、無駄だから、それに位牌を戴ける机を一脚」

安「ハイ、<sup>かしこま</sup>畏りました、伊兵衛や机を一つ持つて来てくんナ」

伊「へい」

と机に花立や線香を持つて来ました、

しの「いえナニ花立や線香は要りません」

安「生きていらつしやる積りだから、そんな物を持つて来ないでも宜いに」

と是から婆さんが机の上に位牌を飾る、其の内にお料理も出ました。

しの「さア何うぞ番頭さん、あなたが盃を若草から先へ酌<sup>つ</sup>いで遣つておくんなせえまし」

安「へえ此のお盃はお机の上へ載せますか、斯様なことは初めてでございますから何うも勝手が分りません、これへ酌ぎますか」

しの「はい」

安「宜しゅうございます」

と机の上へ据置<sup>すえお</sup>いた若草の位牌の前へ盃を置き、なみ／＼酒を酌ぎました。

しの「ア、宜うございます、これ若草<sup>われ</sup>汝は伊之助さんより他に男はねえと思<sup>おも</sup>え詰めて夫婦約束までしたが、お互<sup>たけ</sup>えに物の間違えから兎<sup>こ</sup>まで出来<sup>で</sup>して、汝え先へ死んだが、今じやア伊之助さんも汝がに済まねえといつてな、義理ある嫁まで離縁して改めて汝と盃いする

ツてえが、此の煩つてる身体で嫁ツ子を出せば何のくれえ不自由だか知んねえのに、離縁して汝と盃いするツてえから汝も是から伊之助さんを、影身かげみに附添うて、何うともして伊之助さんを守らねばなんねえぞ、これで汝の思う心も届き伊之助さんと盃いすれば斯んな嬉しい事は有るめえ、己も嬉しいから汝飲んで伊之助さんがに献さすだアよ若草」

と田舎氣質かたぎの婆さまが、さもく位牌の前ところに若草が、病やみ 耄ほうけた姿でこう首を伸べ、片膝を立て、其の上へ手を載せて生きて居るように云うので、伊兵衛も安兵衛も前々から種々いろく怖い事ばかり引続いて有りますのですから、ぞツと総毛立ちました。

伊兵衛「南無阿弥陀仏く」

安「何だ御婚禮に念仏をいう奴が有るものか」

と云つてると、不思議な事には誰も机の傍へ寄りもしないのに、位牌の前に据えた盃がひっくりかえり、酒が溢こぼれてポタく滴したりました。

安「お盃がひっくりかえつて、お酒が溢れたのは御意に適かなわんのではございますまいか」

しの「ナニ若草が飲んだで御座えましょう、飲んだら汝われえ直すぐに伊之助さんがに献さすだアよ」

安「へえ召上ったのでございますか」

しの「あなた盃を取つて献あげて下せえな」

安「私には何うも取りにくうございます」

と云うは怖いからで、叔母が取つて伊之助に献<sup>さ</sup>し、

しの「酌<sup>つ</sup>いで進<sup>あ</sup>げて下せえよ」

というので安兵衛が酌<sup>しやく</sup>をする、伊之助は痛む方の足を出し盃を口元まで持つて参りますと、不思議な事には軒端<sup>のきは</sup>から一陣の風がドツと吹き入りますと、今まで点<sup>つ</sup>いて居ました灯火<sup>あかり</sup>が一時に消えましたから、伊之助もぞツとするほど身の毛立<sup>いちじ</sup>つて、思わず持つて居ました盃をバタリと取落すと、痛む方の足へ酒が掛りまして、其の染<sup>しみ</sup>る事というものは一通りありませんから、

伊「ア、痛い」

と思わず発した声にまた驚き、

伊兵衛「南無阿弥陀仏く」

安「また念仏を始めた、灯<sup>ひ</sup>が消えたから早く灯火<sup>あかり</sup>を持つて来な」

伊兵衛「へえ」

と怖々出て往つたが慌てゝおりますから、火打を出してカチくうちつけ漸<sup>よう</sup>やく灯火を点けてまいり、座敷の燭台へ移しました。するうちに始まりは大層染みたように思いまし

たが暫く過ぎると前より少しは痛みが去ったようでございます。

伊之助「実に不思議な事だ、大きに凌しのぎよくなつた……兎に角今晚はお泊なさい、芽出度く祝すから」

というのですが、芽出度いとは云い難にくいわけで、すると其の晩は伊之助の足の痛みが大きに軽くなりましたが、枕元には婆アも看病人も附いて居ります。これは只今申しますと神経病とでもいうのでしょうか、あり／＼と若草が伊之助の枕元に坐つて居りまして、伊之助の腰のもとへ来ては細い手を出し、伊之助の腰を撫なで摩さり致しまする姿を見た者が三人有つたといいますが、只今斯様なお話を致しますると嘘うそのようです。これから段々伊之助の足の痛みも一日増しに快方おもむに赴おもむきました処へ、又上手なお医者が来て診察をして此の薬をお用いなさいと云うので、だん／＼全快して参りましたから、叔母には多分の手当をして上げようと申しましたが、堅くつて中々受けませんので無理やり持たして田舎へ歸し、時々泊り掛がけに遊びに来て下さいと親類同様にして歸したから、此方こちの納まりは附きました、詰つらんのは岡本の妹娘のお雪で、咎とがも無いのに離縁なをされ、くよく／＼して親の傍に居り、近処へも出ることが出来んというは、七月なつつきのお腹なかで去られたは何か悪い事でもして来たんじゃないかと、世間の口を思い計りて湯に往ゆくことも出来ませんから、

兄が宅へ湯を立てゝ入れるような事にして居りましたが、歳のゆかん娘氣に思い違いを  
 致し、一層尼にでも成ろうと心を決し不図家出を致しましたが、向島の白髭の傍に蟠  
 竜軒という尼寺がございます、是へ駈込んで参りましたが、其の頃道心堅固の尼が居  
 りまして、名を美恵比丘尼と申して、年齢は五十四でございましたというが、まだ水々し  
 て居りまして、一寸見ると四十一二ぐらいで御座います、誠に若く見えます。木綿では  
 ございますが、鼠の着物に鼠の腰衣を着け、氣力の有りそうなお比丘尼でございま  
 る。大層お弟子も在りまするが皆因縁の悪い者ばかり弟子に成りますのですから、満足の  
 者は一人も居りません、啞頑聾或は悪い病を受けて鼻の障子が無くなって、云うこと  
 が解らなくて、足が歩く度にヒョコ／＼跛足を引いて、時々転んだりするようなやくざ  
 ものばかり居りますが、門番は無いから門を這入り、こわ／＼台所口へ這入った頃は、  
 もう日がトツプりと暮れました。奥の方では看經を致すものもあり、本堂でお經を上げ  
 て居るものもありまして、種々働いて居りまする。

## 二十七

雪「御免なさいまし……御免なさいまし」

尼「はい、何方どちらからおいでだ」

雪「私は誠に因縁の悪い身の上の者でございますから、尼に成りたいと存じまして、態わざ々参りましたもので、何うか尼様へお願いなすつて、お弟子になすつて下さるように、何うかあなたからお願ひ遊ばして下さいませんか」

尼「何方のお人じゃえ」

雪「深川の方の者でございます」

尼「そうですか」

と云いながら奥の方を振向き、

尼「思行しこうさん、妙桂みょうけいさん、アノ一寸和尚ちよつと さん様に告げてお呉れな、深川の方の娘さんじ

やそうだが、十八九に成る方で、因縁が悪いからお弟子になり、剃髪して尼に成りたいと云つておいでだから、一寸和尚様に告げてお呉れえ」

妙「フアイ」

と鼻の障子の無くなつた尼が和尚の居間へ参り、

妙「お師匠ひひょうはん何んひやか深川ふかかわへん辺の者やとひゆうて、十八九ひゅうはつふになる娘で御座おはえまふ



が、誠に因縁ひんねんが悪いはら、尼に成りたいと申ひて来まひたが、如何致いかぶたひまひよう」

美惠「おまえの云う事はちよツとも解りやせん」

と云いすて、暫らく手を膝に置き、眼を閉じて考えて居りましたが、

美惠「イヤ／＼その娘さんは因縁が悪うて尼には成られんから、お歸し、懷妊の身の上で有りながら尼に成つても無駄な話だ、身重の身体で尼に成られるものか、断つて歸しなさい」

と低い声で云うようだが美惠比丘尼の云うことはピーンと台所まで響き、お雪の耳を貫ぬくように聞えましたから、お雪は心うちの中で、

雪「ア、恐れ入つたお智識様、成程わたくし私は身重の身体で尼に成ろうと思つたは迷いで有つた、ア、因縁の悪い身のうえ、一層いっその事一思いに身を投げて死ぬより他に仕方がない」

とおろ／＼泣きながら蟠竜軒を出て、向島の土手伝いに歸つて参りますと、ポツリ／＼

と雨が顔へ当たります。只今は八百松やおまつという上等の料理屋が出来ましたが、其の時分あの辺は嬉しの森と云いまして、樹木の生おいしげ茂りて薄暗うすくろうございます。枕まくら橋はしへかゝると

吾妻橋が一目に見えます。お雪は我家わがやの方かたを向き、

雪「お母つかさま、お兄あにい様、先立ちては済みませんけれども、私わたくしは何の顔下げて何う世間の

人に顔が合わされましよう、伊之さんとは逆も添えない私の不運、不孝者とお叱りもござりましようが、不便の者と思召して下さいまし、南無阿弥陀仏く」

と口の中にて称名を唱え、枕橋の欄干へ手をかけて、ドブンと身を跳らして飛込みにかゝると、後に手拭を鼻被りにした男が立つて居りましたが、この様子を見るより早くお雪を抱止め、

男「姉さん泡を喰ツちやアいけねえ、何だか様子が変だと思った……これサ待ちねえというに……それは何うせ能々のことに違えねえ、何だかわけは解らねえが、マア待ちねえというに、安やい」

安「へい」

男「一寸此処へ来ねえ」

安「何でござえやす」

男「身投だ」

安「エ、出ましたか、気味の悪い」

男「この娘さんだ」

安「ウン、綺麗な娘さんだ」

雪「誠に相済みません」

男「娘さん、そう無闇に泣いてばかり居ちやア仕様がねえ、訳は大概極<sup>てえげえ</sup>つてる、亭主に嫌われて離縁され、世間へ顔向けが出来ねえとか、内証<sup>ねえしよ</sup>に情夫が出来て親に面目ねえんで死ぬのか知らねえが、今の若さで親に先立<sup>さきだつ</sup>て済む訳のものじゃアねえ」

安「本当にそうです、親兄弟<sup>おやきょうでえ</sup>に歎<sup>なげ</sup>きをかけては済まねえ……美しい女ですね」

男「私は斯<sup>わっち</sup>んな胡散<sup>うさん</sup>な形姿<sup>なり</sup>をしてえるから、怪しい奴だと思おうが、私は伊皿子台町にいる船頭で、荷足の仙太郎という者です」

安「本当です、伊皿子の仙太郎親方という恐ろしい氣象の親切なお方だから大丈夫<sup>でえじょうぶ</sup>だ、平氣のへのへで居ねえ」

仙「何だ平氣のへのへてえなア兎も角も船の中へお伴<sup>つ</sup>れ申せ」

安「宜<sup>う</sup>うごぜえやす」

仙「危ねえから娘さんの手を曳いて上げな」

安「私<sup>わっち</sup>がかえ得心<sup>わ</sup>ずくで斯んな美しい娘さんの手を曳いたのは生れて初めてだ」

仙「何だ背中へ手を掛けるな、一生懸命でおいでなさるのに」

と云いながら、枕橋を渡つて、向うの枕橋を渡りにかゝると、又土手ツぶちで首を縊<sup>く</sup>ろ

うとしている者が有りまするのを仙太郎が目早く見つけ、

仙「首縊りがあるぜ」

安「へエ、今夜は滅法界に人の死ぬ晩でげすナ」

仙太郎は首を縊ろうとする男の腰車を担ぎ抱止めて、能々見ると刀屋の番頭重三郎ゆえ恟り致し、二人を同伴して我家へ立帰りましたが、荷足の仙太郎の宅は伊皿子台町でございですが、只今もつて残りおります豆腐屋がありますが、彼の家は草分だと申すことで、旧家でございます。その豆腐屋の一軒置いて隣が仙太郎の宅で、好い家ではないませんが、表には荒い格子が嵌つて、台所には腰障子が嵌めてありまして、丸に仙太というのが角字でついて居ります。鬼の女房に鬼神の譬え、似たものの夫婦でございまして、仙太郎の女房お梶は誠に親切者でございしますから、可愛相な者があれば仙太に内証で助けて遣りました者も多くあります。丁度申下刻に用を終つて湯に往くというので、鳴海の養老の単物といえれば体裁が宜いが、二三度水に這入ったから大きに色が醒めました、八反に黒縹子の腹合せと云つても、山が入つて段々縫い縮めたから幅が狭く成つて居ります、其の上にお召縮緬の小弁慶の半纏を引掛け、手拭糠袋を持って豆腐屋の前を通りかゝると、六十の坂を五つ六つ越したかと思える巡礼の老爺が、汚れ果てた単物

の上に負<sup>おい</sup>笈<sup>ずる</sup>を掛け、雪卸しの菅笠<sup>すががさ</sup>を冠<sup>かぶ</sup>り、細竹の杖を突き、白い脚半も汚れて鼠色に  
 成ったのを掛け、草鞋<sup>は</sup>を穿き、余程旅慣れた姿の汚ない姿で、三十三番の内美濃<sup>うちみの</sup>の谷組<sup>たにくみ</sup>  
 の御詠歌を唄ってまいりましたが、巡礼の御詠歌を唄うは憐<sup>あわ</sup>れなものでございます。す  
 ると向うからガフリー／＼朴<sup>ほう</sup>齒<sup>ば</sup>の下駄を穿き、鉄骨の扇を手を持ち、麻の怪しい脊割羽織  
 を着<sup>む</sup>、無反<sup>むそり</sup>の大小を差し、何処で酒を飲んだか真赤<sup>まっか</sup>に成って、頬から腮<sup>あこ</sup>へかけて一ぱいに  
 髭の生えて居る恐ろしい怖い顔の侍が、ヨロ／＼と跟<sup>よう</sup>けてまいり、巡礼の老爺<sup>じい</sup>さんに突  
 当ったから、老爺<sup>おやじ</sup>が転ぶと侍が其の上を飛び越して向うの泥<sup>ぬ</sup>濘<sup>かるみ</sup>へ転がりましたが、自分  
 で突当って置きながら怒<sup>おこ</sup>りまして、巡礼を捕らえ続け打ちに殴<sup>ぶ</sup>ちましたから、禿頭へ傷が  
 出来ましたが、侍は尚お足を揚げて老爺<sup>じい</sup>さんを蹴返しました、物見高いのは江戸の習いゆ  
 え大勢人が立ちましたが、誰有って止める人も有りませんから、仙太郎の女房が見兼て中  
 へ這入り、威<sup>たい</sup>り狂<sup>け</sup>っている侍に向い、  
 かぢ「まア待つておくんなさいお腹も立ちましょうが」  
 侍「イ、ヤ勘弁相成らん、不埒至極の奴だ、往來の妨げをして、侍たる者の袴へコレ此の  
 通り泥を附けて、拙者<sup>おりかゞみ</sup>の折<sup>おり</sup>屈<sup>かゞみ</sup>を突いたから俯<sup>のめ</sup>ったのだ、勘弁相成らんから八山<sup>やつやま</sup>へ参  
 れ、斬殺<sup>ぶつばな</sup>して遣るから」

かぢ「然うでも有りましたようが、斯んな老耄よぼれた老爺おやじを斬ったって殴ったって仕方がないじゃアありませんか、それは重々悪いから此の通り私が謝りますから、どうぞ勘弁して下さい、斯んな者を斬ったって、なにもお前さんのお手柄にも成りませんじゃアありませんか、成り代つて私がお詫をしますから勘忍して下さいな」

侍「イヤ、了簡相成らん」

かぢ「お前さん何んですね、そんな事をいうと品川の女郎衆じょうろしゅが笑いますよ」

侍「ヘン何を笑う」

と云いながら思わずおかぢを見ると、歳は三十三で小粋な女でございますから見惚みとれて、

侍「これは何うも、お前は感服だねえ、斯様に大層見物もいるが、誰も皆恐れ入って止めに這入るものが無いのに、女の身として聊いささか憶おぼする気色けしきも無く、速すみかにこれへ出て挨拶をなさる御様子といい、御器量と云い実に感心した」

かぢ「感心も何も有りませんから私のいう事をきいて、私にまけて下さればお多福の鼻が高く成りますから、斯んなものにかかわずに、早く品川へでも往らして、顔を見せて、あの娘こを悦ばしてお上げなさいよ」

侍「イヤ何うも感服だね、様子の宜い御家内だ、宜しい全体勘弁を致すわけじゃアないんだが、女の身として侍を恐れず、中へ這入つて挨拶する胆力に感服いたしたから、宜しい勘弁致そうが、お前にお世話に成つて是なりに別れるのも甚だ何うも私の氣が濟まんから何処へ往つて一杯遣ろう、エ、一寸一ぱい」

かぢ「いけませんよ、まア戴いたも同じことですから許して下さい」

侍「宜いじゃアないか、一寸何処かで一ぱい遣ろう、お手間は取らせん少しの間」

かぢ「いけません、困りますもの、後生だから勘忍して下さい、私のようなお多福でも亭主が有りますもの、お前さんのような粹なお侍と差でお酒なんかを飲むと、親指が嫉妬を焼いて腹を立ちますよ、お前さんがもつと男が悪ければ宜いけれども、余り様子が宜いから迷わアね」

侍「一々どうも旨いねえ、そんならば御尊宅へ出よう、お宅で御亭主の前で御家内へ一献差上げたい、斯様々々のわけで御挨拶をして下すつたから、それなりお別れ申しては濟まない、亭主のあるお身の上ということだから、左様なら御亭主の前で飲んだら宜かうという訳でまいつたと申して、御亭主へも面会して、三人で一緒に飲ろうじゃないか」

かぢ「狭くつていけませんよ鼻が悶えて這入られませんよ」

侍「イヤ是非ともお宅へ出よう、何うか先へ立ッてつて下さい、お宅は何処だ」

かぢ「お宅だつていけないの、此の坂を下りてちよいと向うへ曲つて、また左へ曲つて、一廻り廻つて向うの横町に附いて往くと、菓子屋だの蕎麦屋だの種々なものがあるから、其の間を這入つて、突当りが手水場だから、其の傍の井戸へ附いて左へ曲つて、右へ往つて変な処をクル／＼廻つた角でございますのサ」

侍「些とも分らん、篋棒な、それじゃア別れに致そう、左様なら、誠に御無礼」

とガラ／＼高下駄を引摺りながら往きますと、見物が馬鹿ヤイ、助平侍などからかうものが有ります。お梶は巡礼の老爺さんに向い、

かぢ「どうも酷いめに逢つたの、可愛相に大層傷が附いたの」

巡礼「はい、御新造様有難うございます、あのお方が跟けて来て突当りましたから、私の前へ転ぶと、私の上を飛び越して転がったのでございますのに、私を下駄で踏んだり蹴たりなさいました、私は蹴られても踏まれても宜うございますが、負筈には三十三番のお札所を打つてまいりましたから、お札が這入つて居りますゆえ、彼の人の足でも曲らなければ宜いと存じますくらいです」

かぢ「足からも血が出るようだよ」



巡礼「突飛ばされた時に石へ膝を突掛けましたので」

かぢ「おう／＼大層黒血が流れる、私の宅はツイ一軒隔いて隣だが、直に癒る宜い粉薬が他処から貰つて来てあるから宅へおいで」

と無理やりに連れてまいりまして、薬を取出し、老爺さんの膝に振かけて遣り、

かぢ「其の上を手拭で巻きな……そう手拭を引裂いてはいけない、幾らも有るから新しいのを遣るよ」

巡礼「はい有難う、御新造さま、誠に結構なお薬と見えて少し痛みが去りました」

かぢ「宜い薬だよ売り物には無いのだ、お前は芝の新網か橋本町辺から出るのかえ、何処かお前修行に出るところが有るだろう」

巡「いえ、私は世帯を持って居りまして日々修行をいたす身の上では有りませんが、四国の八十八箇所、卅三番へもお札を打ちまして、漸く江戸へ歸って参りましたが、何うか江戸の八十八箇所へもお札を打ちたいと存じ、方々廻り、此の白金の高野寺が打納めでございますから、お詣りをして此処へ来かかりましたところ、お侍に蹴られましたから弘法さまのお叱りではないかと、日々浮ぶ悪い心を思い直して心配して居りますが、誠に有難う存じまする」

かぢ「何処へ泊るのだえ」

巡「別に家もございせんから、お寺様のお台所へ寐かして戴いたり寺中の観音さまのお堂のお縁端へ寐たりいたして、何処と云つて定まつた家はありません」

かぢ「なにか因縁が悪いんだね、今夜は己の家へ泊めてやろう、少し志す仏さまが有るから、お汁に野菜でお飯でも喰べな」

巡「いえ、何ういたしまして、斯んな穢い老爺を」

かぢ「あれサ、宜いから泊んなよ、おらん家の亭主は慈悲深い人だから何も氣遣するにやア及ばねえ、事に依ると単物の一枚ぐれえくれるぜ、遠慮しねえが宜い、親方が帰つたら己が話をして遣るから」

巡「はい大きに有難う存じまする、助かります、お志とあれば頂戴致しましょう」

かぢ「その井戸で水を汲んで、足を洗つて此方へ上んな」

と是从上へ上げ、御馳走をしまして、

かぢ「それじやア疲労れてるだろうから、あの二畳へ往つて木片を隅の方へ片付けて、薄縁を敷いてお寐」

とお老爺さんを寐かしましたが、お梶は貞女でございますから、亭主の帰らんうちは寐

ません。そのうち段々夜が更けてまいりました。

## 二十八

仙「おいお梶」

かぢ「あい、寝やアしないよ、今明けるよ」

と戸を明け、

かぢ「あんまり遅いから何うしたかと案じて居たよ、安さん御苦労」

安「誠にお案じでございましょう、エ、抛ない事があつて、へい」

かぢ「重さんは何うした」

安「宜い塩梅に居たんで」

かぢ「何処に」

安「何処にたつて枕橋で首を縊ろうとしてえたんで」

かぢ「あらまア何うも」

仙「這入つてから云え、立つてゝグズ／＼云わなくつても宜い、重さん此方へお這入りな

せえ」

重「へい」

とオズ／＼這入りました。

かぢ「重さんまア何うしたんだねえ、私は亭主あにいに何んなに小言を云われたか知れやアしないよ、死んでしまうという置手紙が出たもんだから、死ぬ程のことなのに、様子の知れねえことが有るものかつて、私は本当に眼の球の飛び出るほど亭主に小言を云われたよ、そんな軽はずみな事をして」

仙「上りもしねえ内からぐず／＼云うな、まア上ろう、お嬢さん此方こつちへお這入んなせえ」  
かぢ「おや／＼おいでなさい」

仙「お、この嬢さんは枕橋から身を投げて死のうと云うところをお助け申したのだ」

かぢ「何処のお嬢さんです」

安「何処のお嬢さんたツて、親方が此のお嬢さんを助けて来たんです」

かぢ「あらまアどうも、親方が命いのちがけ賭で気を揉んで、お前のために騒いで居るのに、浮気をして心中なぞをするのなんのつてサ」

仙「何をいうのだ、そうじゃアねえ、グズ／＼余計な事をいうな、お嬢さんマア此方こつちへお

上りなさい、お梶此のお嬢さんは番頭さんの御主人さまの、万年町の刀屋のお嬢さんなんだよ」

かぢ「それじやア奉公をしているうちから深い中でいたのかえ」

仙「然じやねえよ、いろ／＼深いわけがあつて身を投げようとする処を助けたんだ、妙じやアねえか、兩人を助けて船へ乗せると、互に顔を見合わせて、オヤ万年町のお嬢さんか、重三郎かというわけで、おつれ申して来たんだ、心中じやない別々なんだよ、緩くり話をしなければ解らねえが、コウ重さんお前も不思議な縁で、去年の正月五日の晩万年橋の欄干で首を縊ろうとするとこを助け、恩にかけるんじやアねえが、宜いかえ重さん、お屋敷へ刀が納まれば宜いと思つて、目途の無い事でもねえというのは、売る事も質に置く事も出来ねえから、当分はあの侍が差料にして居るに違えねえと思つて尋ねて居たが、盗んだ奴の形は己が知つてゐるし、顔ア安さんが知つてゐるから直に知れるだろうと思つてたが、いまだに分らねえから、お前が何時までも己の厄介に成つてゐるのは氣の毒だ、一層死んだら親方に難儀を掛けめえ、苦勞をさせめえと云つて死のうとするんだから、己に義理を立てる積りだろうが、重さんが死んで仕舞えば万年町のお店へ何と云訳が出来よう、人の奉公人を助けたら知らせないと云うことはねえから、無沙汰で番頭さんを引留めて置いた云

訳に、お刀を探し出してお店へ往く積りだったが、お前が死んでしまえば刀の目利をする者がねえ、己にやア分らねえ、然うじやアねえか、こう段々遅れに遅れたんだから、何うでも斯うでも刀を探し出さねえ内は万年町のお店へ往く事が出来ねえんだから、仙太も苦しい身の上に成つたは、よもやにひかされたのだ、番頭さんも神信心をして一生懸命に成つてゐるから、何うか刀が出るだろうと思うんだが、出ねえまでもお前を連れてツて詫ことをしなけりやア己が押付かねえんだから、死ぬのは止めておくれ、そう泣いてたツていけねえ、氣を確りしねえ、男らしくもねえ」

重「はいはい、何とも申し訳はございません、これまで種々御苦勞を掛けた親方へ、何時までも御心配を掛けては相済みませんから、私さえ居ませんければ御迷惑も掛けまいかと思つて、ツイ心得違いをいたしましたが、どうぞ御勘弁を願います」

仙「侍へ喧嘩を吹ツ掛けるなんてえ氣違ひみてゐるが、これも皆なお前のためだ、この嬢さんは他に何んとか云ツたつて、そうく紀伊國屋という滅法に立派な家へ嫁付たのだが、其の若旦那とかいふのが滅法に美しい男なんで、他に情婦が有つて、其の情婦が死んでしまつて怨んで崇つて何うとかして化物が出るとかいふので、此のお嬢さんと夫婦に成つてれば、其の若旦那の病が癒らねえから、仕方なしにお離縁になつたが、大きな腹ア抱

えて世間に顔向けが出来ねえ、外聞げえぶんが悪くつて生きて居られねえツて、枕橋から身を投げるとこを助けて、船へ乗ろうとすると、又重さんが首を縊ろうとしてえたから、また助けて船へ入れると、オヤお嬢さん、オヤ番頭かと云つて主しゅうじゅう従じゅう選せんうというは妙な事ではないか、そこで己の考えには、お嬢さんを万年町のお店たなへ送つてつて上げて、実は番頭ばんつさんを去年助けたが、お刀が出たら〜と思つて、今まで延々のびくに成つたため御沙汰しねえは重々済みませんが、番頭さんを連れて来ましたと、お嬢さんをお助け申した廉かどで、番頭さんがお店けえへ帰れば方々手蔓も有つて、刀の詮議も仕やすかろうと思うから、御主人へ話を付けるまでは、死ぬの生きるのツて輕はずみな事をしちやア困るぜ」

と云つてゐる処へ、二畳の障子を明けて出て来たのは最前の巡礼の老爺じいさんでございすが、ものをも云わず重三郎の襟首を取つて引倒して脊中を打ちました。

仙「何だ〜」

かぢ「この老爺さんは何うしたんだ、寝惚ねぼけたのかえ」

仙「何だ此れは」

かぢ「先刻豆腐屋の前さむらえぶで侍に殴たれていて、可愛相だから連れて来て泊めたんだが、何だよお前」

巡礼「はいはい、これは親方さんでございますか、まだ御挨拶もいたしませんで、此の者を手込に致しまして誠に相済みません」

と暫く泣き沈み、涙を拭きまして、

巡「ヤイ、手前何うして此処に助かつてる、己は手前が此処に居ようとは知らずに居たが、へー親方、私はこの重三郎の親父で、羽根田に居りました梨子売の重助と申すものでございます」

仙「エ、お前が重三さんのお父さんかえ、何うも妙だなア」

重助「ハイ、お嬢さま、後で御挨拶を致します、此のお嬢さまは御存じで居らっしゃいます、去年の正月七草の日に、お嬢さんとお内儀さんが私の処へ入らっしゃいまして、重三郎は大切なお刀を取られてしまい、申し訳なさきに万年橋から身を投げて死んだろう、死骸は知れないがとのお話で御座いますから恟り致しました、私も他に子供もない只一人の忤でございまして、来年の暖簾を分けて下さると云うのを楽しみに、年寄の身で重い梨子を担いで商売を致し、便りに思つて居ります此奴が、身を投げて死んだと聞いた時には、寧ろ一思いに死んでしまいたいと思いましたが、まさかに死ぬにも死なれず、前世の約束ごとゝ思いましたから、家を仕舞つておい筈を掛け、罪滅しのために西国三十三



番の札所を廻りましたのは、ひよつと面目ないと思つて田舎にでも匿かくれて、喰うや喰わずに痩せ衰えて居はしないか、それとも淵ふちかわ川へ身を投げて、観音さまの御利益ごりやくで海辺へ流れついて居やアしないかと思つて、観音さまへ無理な御願ごがんを掛けてよう／＼と四国を廻つて、一年半ぶりで江戸へ歸つて来て、此処で侍に殺されるところ、此方こちうのお内儀さんに助けられ、此方こなたさまの御厄介になつたわけだが、此処のお家いえに手前てめえが助かつて居るとは、実に夢のようなことでございます、はい、今彼処あそこで聞いていれば、親方さんが手前の命を助けて下さるのみならず、命賭けで刀の詮議までして下さる御親切、それを無にして駈け出したということだが、手前のように死にたがる奴はねえ、そんな事をして此方こなたに済むかえや伊」

仙「老爺おじいさん待ちねえ、お前めえの云うことは尤もだが、まア安心しねえ重三さんは去年の二月こつそり羽根田へお前を探しに往つたら、だしぬけに居なく成つたから、大方身でも投げて死んだらう、海へでも飛び込んだかも知れないというので、親父が然ういうわけに成つちやア生きては居られねえつて騒ぐのを止めて置いたんだが、重三さんはお前を死んだと思ひ、お前は重三さんを死んだと思つたのが、互たがへにたすかつて、遇あうてえくれえ目出めで度え事はねえから、何も打ぶつにやアあたねえ、誠に妙なわけだ」

重助「はい、何ともハヤ御親切さまのお心掛け、お礼の申し上げようもございませんが、ツイ腹立ち紛れに手<sup>て</sup>込<sup>こ</sup>めな事をいたしました、どうか御勘弁を願います」

仙「ナニ勘弁も何も入りやアしねえ」

安「親子とも助かつて、無事に遇うてえのは、こいつア妙だねえ、何だつて親子<sup>しゅうじゅう</sup>主<sup>しゅ</sup>従<sup>じゅう</sup>が死のうとして、枕橋でお爺<sup>とつ</sup>さんが首を縊ろうとしたり、お嬢さんが巡礼になったり、重さんが身を投げたりして皆<sup>みんな</sup>助<sup>すけ</sup>つたんだからね」

仙「何を間違つたことを云うのだ」

安「成程<sup>おんな</sup>同じようだから間違えます」

仙「こりやアねエお爺<sup>とつ</sup>さん、斯うしようじやアねえか、丁度宜いことがある、此の詫ごと<sup>な</sup>に万年町に往<sup>い</sup>く時に……こいつア宜い、何<sup>なん</sup>にしよう、老爺<sup>おじ</sup>さんがお嬢さんを助けた積りで往<sup>い</sup>きねえナ」

重助「どう致しまして嘘はいけません、四国を歩きます時なぞに嘘を吐<sup>つ</sup>いては旅は出来ません」

仙「四国とは違わアな、お前<sup>めえ</sup>が枕橋を通りかかつて、お嬢さんを助けたことにしよう、お前口がきかれねえなら己が喋るが、其の廉で己の詫ごとをお老爺<sup>じい</sup>さんがするんだ、それか

ら重さんの詫ことをして元々通りに納まる事にしようじゃアねえか」

重助「何分宜しゆう願います」

仙「なにしても目出度えから一杯爛けねえ、併し明日の朝ではお嬢さんが近所へ対して間が悪いだらうから、日暮までにお連れ申すという手紙を先方へ出して置こう」

と仙太郎の慈悲から図らざることで親子主従が無事に助かりましたが、短夜ゆえ忽ちに明けまして、翌朝仙太郎が子分に手紙を持たしてやり、嬢さまは私が屹度お送り申しますからお迎いには及びません、私が参るまでお宅にお待ち下さいということを書いて送り、日暮から所有の船へ梨売重助とお雪を乗せて漕ぎ出し、万年の河岸へ船を繋つて陸へ上り、

仙「此家かの」

ゆき「何だか極りが悪いようで」

仙「嬢さんも老爺さんも少し待つておいで、工御免なせえ」

小僧「へエ、おいでなさい」

仙「今朝手紙を上げて置きました伊皿子台町の荷足の仙太郎というもんで」

小「へエ」

仙「今朝手紙を出して置きやした伊皿子の仙太で」

小「へエ」

と云つてると、奥の方で主あるじの政七が、

政「常吉や何だえ」

常「へエ、何んだかアノ兎のベンタラコが今朝ほど手紙を上げたって」

政「そんなお名前が有るものか、エ、なに、今朝手紙……伊皿子の親分がいらしたのではないか」

と店頭みせさきへ出て参り、

政「へエ、入らつしやいまし、何方どちらさまから」

仙「エ、お初にお目にかゝります、今朝手紙を上げた伊皿子の仙太郎でござえます」

政「これはくさアどうぞ此方こちらへ、お言葉に従いましてお待ち申して居りました」

仙「少しお前さんに逢い難にくい人が有るんですから、お嬢さんだけ先へお這入んなさい」

政「さア何うぞ此方こちらへ」

仙「そう御丁寧では却かえつて困ります、粗忽ぞんぜえもんでござえますから、へイ、お初にお目に

かゝります」

政「これは始めてお目通りを致します、予<sup>かね</sup>て御高名のお噂は承わって居りまするが、初めまして、エ、此の度<sup>たび</sup>はまた妹<sup>いも</sup>の事に就きまして御真実に今朝ほど細々との御書面ゆえ、仰せに従いまして迎いにも出しませんで、お足<sup>はこばせ</sup>労を受けて誠に恐れ入ります」

仙「そう左様<sup>しか</sup>然らばで口をきかれると強<sup>べつ</sup>氣と困るんですが、未永く何分お心安く願<sup>ね</sup>えます……え、お嬢<sup>こつち</sup>さん此方へお這入んなせえ、お嬢<sup>こつち</sup>さんはお連れ申しましたが、どうか小言を仰しやいませんように願えます、親御や御<sup>ご</sup>兄弟衆は思い過しをして小言を云うもんだが、また駈<sup>が</sup>け出すようなことがあるといけませんよ」

政「御尤でございます」

## 二十九

仙「お嬢<sup>お嬢</sup>さん能く考えて御覧なさい、去られたつて、浮氣をしたの、悪<sup>わる</sup>い事をして追い出されたのでは有りません、云わば亭主のために出たので、些<sup>ちつ</sup>とも恥かしい事はない、殊<sup>こと</sup>に只の体じゃアない、もう是れ七<sup>なな</sup>月という身重の身体でありながら、軽はずみな事をしては、腹へ宿した胤<sup>たね</sup>は紀伊國屋の旦那の胤<sup>たね</sup>じゃア有りませんか、お前さんは兎も角も腹の胤

まで闇から闇へ遣つては去られた御亭主に済みますまい、何にも知らねえ私の様なものゝ  
いう事だから、生意気な野郎と思召おぼしめしようが、何うかきいて下せえ、お嬢さん御得  
心でござえますか」

雪「はい、はい」

仙「じやアお嬢さんも御得心ですから、何にもお小言は仰しやいませんように」

政「へエ／＼仰せに従い何にも申しません、お母さんつかアノ仙太郎親方が」

母「おや／＼これはどうもお初にお目にかゝります、此の度たびはまた段々有難う存じまする、  
もう私は昨晩からマンジリとも寝はいたしませんで、心配致して居りますと、今朝程の

お手紙でホツと致しましたが、近所の者は神隠しにでも逢つたのだらうかと申しましたが、  
まさかそんな事もあるまいが、何ういうわけで出たかと申して居りましたので、誠に有難  
う存じました……お前此方こつちへお這入りよ、何ういうもんだ、私は何んなに心配したか知れ  
ないよ、あのくらい意見をしたのに、何も其様そんなにくよく／＼思うわけは無いじやアないか、

私に相談もしないで黙つて駈け出して」

仙「お母さん、然そう小言を仰しやつてはいけません」

母「イエ何にも申しません、誠に有難うございました」

仙「実はね此のお嬢さんを助けたのは私わっちではない、助けた人が他に有るのです」

政「へエ誰方どなたさままで」

仙「オイ老爺おじいさん、重助さん此方こっちへお這入りよ」

重助「はいく」

と恐るく座敷へ這はいこ込み両手を突きまして、

重助「誠にハヤお目にかゝれた義理じゃございませんが、皆様お達者で誠にお嬉しゅう存じます」

政「オヤ羽根田の重三郎の父親おやじが来ましたよ、お母さん」

母「オヤ呆れますね、身を投げたとか海へ這入つて死んだとかいう者が有つたが」

重助「へい、実は一年半ばかり四国西国廻りをいたしまして、漸ようやく江戸へ歸つてまいり、思い掛ないことで仙太郎親方のお助けを蒙りましたので」

仙「ナニ後あとは己から種々いろくお詫ことも申し上げるから宜いい、お嬢さんが枕橋から身を投げようとするところへ、此の人が江戸へ歸り、通りかゝつてお嬢さんを助けたので」

重助「イエ然ういう訳じゃございません」

仙「余計な事を云つちやアいけねえ、就きまして私わっちがお詫ことをしにやアならねえのは、

全体重助さんに云つて貰うのだが、口が利けねえッていいますから、私の詫ことを私が喋りますが、此方こちらの番頭ばんつさんは去年の正月五日の晩に、刀を取られて面目ねえッて、首を縊ろうとするところを私が助けて、今まで匿かくまつて達者で居ますので」

政「へえーお母さん重三郎が達者で居りますと」

母「フーム、重三じゅうざが達者でおりまするか」

仙「それに就きまして、刀せえ出ますればお詫わことが出来ると思つて、私わっちに少し心当りがありますから、よもやに引かされて今まで延々のびくになりましたが、だんく永くなればな  
るで、尚なおお刀を持つて来なければお前めえさんに顔を合わせる事が出来ねえと、一年半も尋ねあぐんだが知れねえんだけれども、今まで人の奉公人を無沙汰うちで家へ引摺り込んで、匿かくつて置くは、訳の分らねえ奴と御立腹でござえやしよう、重々私ゆきとが行届きません、誠に済まねえが、此の老爺じいさんに免じて何うか御勘弁ねがを願えます」

政「はい、何う致しまして」

重助「それに侍なりの姿も御存じで、手掛りが有るといふので、侍に突当つて喧嘩をなすつて、刀を挽もぎ取つて詮議をなすつて、忤このために命賭の御苦勞をなすつて下さいましたとのことで」



政「それは誠に何うも恐れ入りました、有難う存じます」

仙「旦那え、妙な事が有ります、私が刀の詮議に市川の方へ往くと、高嶺たかねから船の胴の間まへ落ちた死骸は、稲垣小左衛門さまという人で、片手かたぐに一節切を握り、片手には黒羅紗の頭巾を持って血まぶれに成つて落ちたので、重三郎さんが知つてたから私が引取つて、白銀の高野寺へ葬つて、遺物かたみの頭巾と一節切は預かつてあります」

と前の次第を細やかに話しますと、政七は大きに驚き、また親切を喜びまして頻しきりに感心致しました。其のうち酒肴さけさかなが出てまいります。

政「親方何にも有りませんが、一口献あげて兄弟同様の誼よしみを結びとうござりまする」

と酒が始まりましたが短夜みじかよのことゆえ、大きに遅くなりました。

政「今晩は遅くなりましたからお泊お泊なさい」

仙「船を河岸へ繋つけてありますからお暇を致しましょう」

政「でもございましょうが」

と無理に止められて、重助と一緒に店二階へ寝ましたが、人の家うちは何うも寝附の悪いもので、モジツカして居ります内に、段々更け渡り、世界しんが寂しんといたし、聞えるものは河岸あたへ中あたる浪の音、微かすかに茶飯屋と夜蕎麦よそば売の声のみで、寂と更けますると小声で云つても

聞えます。

男「神しんびよう妙びようにしろ、ジタバタしたって仕方がねえ、汝てめえの家にア五百や六百ねえことはねえ、命が欲しけれア金を出せ」

という声が仙太郎の耳へ這入りましたから、これはてつきり下へ泥坊が這入ったな、こいつは大騒動だと思い、

仙「オイ老爺じいさん」

重助「ハア〜」

仙「オイ重助さん起きなよ」

重助「はい〜これは何うも、ツイとろ〜と疲れて寝ました、お早うござい」

仙「早くはねえ、まだ夜中だ、下へ泥坊が這入って、金を出さなけりやア叩ツ斬ると云つてるよ」

重助「へエ泥坊が何処から這入りました」

仙「何処から這入ったか分らねえが、慌てゝ騒ぐといけねえぜ、キヤアとかパアとかいうと斬られるから静かにして居ねえ」

と云いながら四辺あたりを見ましたが、手頃の棒が有りませんから、三さん尺じゃくを締め直して梯

子の上り端<sup>あがはな</sup>まで来ると、上り端に六尺や半棒木太刀などが掛けて居ります。能く商人<sup>あきんど</sup>の家には有りまするが、何の役にも立ちません、煤<sup>すす</sup>掃<sup>はき</sup>の時に畳を叩くぐらいのもので、仙太郎はこれを見て半棒を下<sup>おろ</sup>して片手に提<sup>ぬきあし</sup>げ、拔<sup>ぬき</sup>足<sup>あし</sup>して、そつと梯子を下<sup>お</sup>りて縁側伝いに来ると、障子が閉<sup>た</sup>つて居りまするが、泥坊が舌で穴を明けて覗いたと見えまして、小判なりに平<sup>ひら</sup>つたく穴が明いておりまするから、仙太郎が覗いて見ると、顔を包んだ侍が二人、一人は着流しでございまする、目深<sup>まぶか</sup>に冠<sup>かぶ</sup>り物をして、きら／＼長<sup>ながもの</sup>刀を畳へ突立て。

賊「ジタバタしても役にやア立<sup>た</sup>ねえ、金の有ることを知って這入ったのだ、金工出せ／＼」と云つてる奴は余程胆<sup>たん</sup>の据<sup>すわ</sup>つた者の様子。

政「ハイ／＼只今手元に有合せた金子は有りません、皆<sup>みな</sup>な職<sup>しよく</sup>方<sup>かた</sup>へ渡しまして、手元には漸く四五両しかございせんから、何うか是で御勘弁を願います」

と慄<sup>ふる</sup>えながら云うと、

賊「エ、虚言<sup>うそ</sup>を吐<sup>つ</sup>け、五十や六十の目腐れ金は入らねえ、其処に寝ているのは何んだ」

政「これは母でございます」

賊「島田<sup>あたまた</sup>鬚<sup>あたま</sup>が見えるが美<sup>い</sup>い女<sup>を</sup>のようだが何んだ」

政「これは私<sup>わたくし</sup>の妹<sup>もへ</sup>でございまする」

賊「抱いて寝ても宜かろう」

政「これは亭主のある身のうえ、殊に懷妊して七月に成りまするもの、何うぞ御勘弁を願います」

賊「妊婦か、色氣が無えナ」

乙賊「何うせ役にやア立たねえから、諦らめて、命が欲しけりやア有金残らずサツサと出して仕舞ったが宜かんべえ」

と一人の田舎者が与して居ります、仙太郎は覗いて見ると長いのを政七の眼前へ突き附けて居る奴は余程度胸の善さそうな奴で、後へ下つて居る二人の奴は提灯持と見えまして、手に持った刀の先がブル／＼震えて居りますから、此の度胸の据った侍から先へ殴ろうと思ひ、八角に削った半棒を持ち、五人力の力を極めて賊の車骨を狙つて打込みますお話でございますが、一寸一息。

### 三十

仙太郎が岡本政七方へ泊りました晩に、強盜が三人押入りまして、強談をいたして居り

まするから、仙太郎が欄間に掛つてありました赤<sup>あか</sup>檜<sup>がし</sup>の半棒を取つて、そツと忍んで、二階の梯子段を下り、縁側伝いに來て障子の外から覗いて見ますと、三人ともきら／＼する長いのを政七の鼻の先へ突き付け、頻<sup>しき</sup>りと威<sup>おど</sup>し文句を並べ掛合つて居りますが、其の内に深く顔を包んで上座に居る奴が頭<sup>かしら</sup>で、他<sup>あと</sup>は手下と見えまするから、此奴<sup>こいつ</sup>から先に片付けようというので、仙太郎が五人力の力を半棒に込めて、ものをも云わず飛び込んで、突<sup>だしぬ</sup>然<sup>け</sup>に腰の番<sup>つが</sup>いをした／＼かに打ちますと、パタリと横に倒れました、すると一人の着流しの奴がバラリと身輕に庭へ飛んで下りて逃げ出しました。尤も泥坊は皆逃げ所を明けて置くものだそうで、一人の田舎ツペえのおかしい言葉の泥坊は、提灯持と見えまして、この有様を見ると

「ワー」

と云いながら腰が抜けて動けなくなつてしまいましたから、仙太郎が続け打ちに無闇に打ちますゆえ、政七はこれを見て驚きましたというのは仙太郎が助けに出たのを泥坊が一人殖<sup>ふ</sup>えたのだと思い、ブル／＼慄<sup>ふる</sup>えて居りました。仙太郎は力に任せて二人の賊を続け打ちに打<sup>ぶ</sup>つて居ります。

甲「アイタ… 御免蒙る、全く貧の盗みでござる、命ばかりはお助けを願う、どうぞお免<sup>ゆるし</sup>

お助けを願う、全く貧の盗みで、御免ア、痛い……貧の盗みで」

仙「嘘を吐け、こんな光る物を引ッこ抜いて、人を威かしやアがッて物取をするからにやア人を叩ッ斬り兼ねえ奴だ、ふん縛ッて突出すから然う思ッてろ……旦那何処もお怪我はありませんか」

政「ハイ……有難う存じまする、誰方かと思いましたが仙太郎親方でございますか、実に私わたくしは昨晚とけ／＼寝ませんから、今晚はグッスリ寝ましたところへ、突然に拔刀で頬ほを打たれましたから、驚いて目を覚さめて見ますと、あなた鼻の先へぎらぎら致しまする刃物をつきつけられましたから、私は口も何も利けませんような訳で」

仙「御尤でござえます、庭からでも這入ったんでしょうが、本当に油断も隙もなりやアしません、戸締りを能くして置かなくっちゃやアいけませんぜ、一人逃げやアがッたが、此んちきしょう畜生ヤイ此の野郎」

甲「御免なさい、真平御免なさい、抛まっぴらろなく頼まれて這入ったので」

仙「抛ぬすろなく窃盗ぬすつとうに頼まれて這入る奴が有るか、ヤイ此ん畜生、頭巾を取れ、よう、何処の奴だ、ヤイ侍さむれえ、頭巾を取れ」

と云いながら、無理無体に泥坊の冠かぶつていた頭巾を引剥ひっぐと、面目ないから下を向いて

居りまする。

仙「番頭さん、オイお願えだが縄を持つて来ておくなせえ、縛つちまうから」

と番頭が細引を持つて来るを受取り、二人ともグル／＼巻に縛つて置いて、一人の奴の頭巾を取ると、ちよん鬚頭の野郎で、おなじく下の方を向いて居りまする一人の侍は大結髪で、頭を上げず頻りと下ばかり向いて居りますから、

仙「ヤイ、名前を云え、ヤイ名前を云わねえか、何処の野郎だか所を云えよ、ヤイ」

甲「浪人の身の上で、喰い方に困りまして、悪いことは存じながら、ツイ心得違いをいたし、斯様な邪非道のことに相成りましたが、向後は速かに善心に立返りますから、幾重にも御憐愍をもちましてお見遁しを願います、苟も侍たるものが、何程零落したとて縄目にかゝりましては、先祖へ対し家名を汚し、此の上ない大罪でございますから、何うか幾重にもお助けを願います、向後は速かに改心いたしますゆえ、何うぞお見遁しなすつて、お裏口からそつとお逃しなすつて下さいまし」

仙「誰が逃す奴が有るものか、容易に云わねえな此ん畜生、ヤイ、手前はなんだ百姓だナ、此ん畜生、侍の風かなんかしやアがッて生意氣な奴だ、ヤイ、此の大結髪の奴の名前を手前云え、何」

乙「私はハア抛なく頼まれやして這入ったんだから、何とか御勘弁を願えます」

仙「手前は何うでも宜いが、此奴の名前を云えよ、何処の奴だ、云わねえと打ッ殺すぞ」

乙「へえナニ、申しますく、私は下矢切村の渡場の船頭で喜代松と云うもんでござえます」

仙「ナニ渡場の船頭だ、そうか、シテ此の侍は何か矢張手前の田舎か」

喜「へえ、それは国分村の人でござえやす」

仙「名前を云えよ、名前を云わねえかよ」

喜「どうぞ御勘弁を願えやす」

仙「云わねえな、うぬ、云わねえと打ッ殺しちまうぞ」

喜「云いますく、萩原束という浪人者でござえやす」

仙「一人逃がして惜しい事をしたなア、お爺さん、おい爺さん、もう宜いから下りて来ねえよ、おい」

重助「へえく、家根へでも逃げ出しましょうか」

仙「もう宜いから下りて来なよ」

重助「何処から逃げますか」



仙「逃げるんじやアねえ、泥坊を生捕いけどったから下りて来ねえというんだ」

重助「誠に強いお方でございますな」

仙「泥坊を捕つかめえたから下りて来なよ」

重助「はいくゝ畏りました」

とブル／＼慄えながら二階から下りてまいり、

重助「旦那マアお怪我が無くってマアお目出度う存じます、私わたくしは何処から逃げようかと思つて居りました」

政「親方そう泥坊をぶん殴つて、愁なまじいに殺しては却かえつて係り合になりますから、ふん縛つて突出つきだしたら宜しゅうございましょう」

仙「うん、ナニ国分村の萩原だと、聞いた様な名前なめえだな、此ん畜生ヤイ面つらア上げろヤイ」

と云いながら大結髪を握つかんでグイと頭を引上げると、盤ばん台だい面めんの眉毛ほりものの濃い鼻の下から耳へ掛けて一ぱいの髭で、何ういうことか額の処に十文字の小さい刺青ほりものが有ります。

仙「オヤ此の野郎見たような面だなア」

というと、侍は驚いて

東「これは何うも、誠にどうも、エ、再び御面会致そうとは心得ませんでした、何うかお

助けを願う、重々恐入りました」

仙「此ん畜生：才、違えねえ、手前は此の春矢切の渡場で町人を斬るの殴るのツてつてゐる処へ、己が這入つて手前を殴き倒し、向後斯んな事をすると思かねえツて、見覚えのため

に手前の額へ十文字の刺青をして遣つたが、まだ悪事が止まねえナ此ん畜生め」

束「誠にはや何とも恐れ入りました、再度尊公様にお目に懸ろうとは存じませんでした」

仙「此ん畜生、旦那此の春私が重三さんと安という駕籠舁を連れて、松戸へ刀の詮議に往つた時に出会した侍なんで」

重助「お前さん了簡違いでございますぞ、泥坊をなさるとは何たるお心得違いで、私は四

国西国を歩いて来たが、四国には泥坊と云うものはございませんよ、お泥坊さんお聞きな

さい、弘法さまの戒めで人に物を盗られても必ず旧の家へ帰ることになるという、持つて

逃げてでも矢張り竊まれた家へ戻つて来るといふ、それが弘法さまの御利益で」

仙「そんな事を盗賊に云つたつて仕様がねえ、悪々しい顔面アしてえやがるナ」

重助「才、この侍だ、親方昨日お宅から一軒隔いて隣の豆腐屋の前で、私を下駄で踏んだ

人はこの侍でございます」

仙「ヤイ此ん畜生、何故そんな事をしやアがつた」

東「昨日は誠に失礼、あの折は喰べ酔つて居りまして、だんく御無礼を申しました」

仙「此ん畜生ヤイ」

とまた拳を挙げて打ちました。

政「親方のお打ちなさいますのを私が見ておりますのも心持が悪うございますから、縄を掛けて、裏町に御用聞をする新吉という人が有りますから、早速人を遣つて知らせましょう」

仙「一人逃げた奴が有るが、其奴の名前を白状しろ」

東「それはどうぞ御勘弁を」

仙「何うせ素ツ首の飛ぶ身体じやアねえか、云わねえと打ツ殺すぞ」

喜「あれは己ア村の丈助というもんですが、此処な家は金も有り、家の様子を知ってるから大丈夫だ、己が案内をするから来う、汝と一緒に往つて沢山盗めば、余計に立ち前をくれべえというから、抛なく私は頼まれて参りやしたので」

仙「フーン……旦那丈助と云う奴にお心当りが有りますかえ」

政「親方、なんでございます、稻垣さまの家来に丈助という奴が有りまして、折々私どもへ使いに参りましたが、事に寄つたらば其奴が這入ったのかも知れません」

仙「其の畜生に違えねえ、ふん捕めえれば宜かった、いめえましい事をしたな、ヤイ、丈助という奴は何処に居るか分らねえか、云えよ此の百姓、云わねえかよ」

喜「私がハア村の矢切に居たアだけんど、矢切に帰られねえ訳が有って、些とも帰らねえが、堀切の傍の八ツ橋畠に知ってる人が有って、其処え寝泊りするてえ話だが、はつきり何処に居るか知ンねえだよ」

仙「そいつは手先を頼むも面倒だから私が踏捕めえて遣ろう……モウ寝られもしねえから起ちまつて、もう一遍お酒を戴こう」

と是から酒を飲んで居る内に夜が明けましたから、二人の泥坊は早々南のお役所へ突き出してしまい、仙太郎は船に乗って堀切の傍の八ツ橋畠へ遣つてまいり、だん／＼様子を聞きました、とんと手掛りが分りません。二人は日ならずお調べに相成りますと、束は是まで数度人を害したことも有り、又喜代松は矢切の渡場で丈助と申し合せ、勇助を殺したる事を残らず白状致しましたゆえ、二人ともに斬罪になりましたが、実に悪い事は出来ないので、こゝで仙太郎が重三郎の詫ことをいたし、主人の処へ出這入の出来るようなことになりましたが政七の云うには、却つて私どもに居りますよりは、親父も帰つて来た事ですから、親子の者に世帯を持たして、通い番頭にしようというので、高橋を

曲ると直に二軒目に明家がございまして、幸い造作も附いて有りますから、早速これを借りて、重三郎は日々万年町のお店へ通うことになりました。お話二つに分れまして、紀伊國屋伊之助でございます、追々病氣も全快いたしましたして、歩く方が心持が宜いから、却つて旅なぞをいたす方が病氣も早く癒るであらうと云うので、不動さまへお願掛をしたことも有るから、お礼まいりかた／＼往つて、帰路に中矢切へ廻つて、法泉寺へ往つて、若草の追善供養の法事もし、序でに下矢切へ廻り、叔母にも会つて来ようという積りで、これから吉原のお松という婆ア芸者と、幫間の正孝と、清八という下男を連れて成田へ参詣に出掛けまして、小和田の原へかかりました頃は、日の暮々でございます。

正「エ、旦那え、旦那え」

伊「さツさと歩かなくつちやアいけねえぜ、大變に遅くなつちまったのに、お松にからかうも程が有るじやアねえか」

正「でげすがね、お松が若がつて、余程可笑しいんでさア、両棲を取つて白縮緬の褌をピラツカせて、止せば宜いのに鼠甲斐絹の女脚絆を掛けて、白足袋に麻裏草履を結い附けにして、馬が来ると怖いよーツて駈け出すんですが、馬の方で怖がつてるんで、あのくらいな化物は有りませんや、本当に面白いんで」

伊「そう彼女<sup>あいつ</sup>にからかうなよ」

正「若<sup>わ</sup>がつてるんですから、婆<sup>ばあ</sup>と言われるのを厭<sup>いと</sup>がつてるんで」

伊「今日は船橋の海老屋へ泊<sup>とど</sup>ろうか」

正「あなたは途中でお買物を成すつたので、清八どんですか、大きな釜を提<sup>ひ</sup>げて重<sup>おも</sup>たがつてますぜ」

伊「師匠<sup>あ</sup>、彼<sup>よし</sup>れは葎<sup>すず</sup>簀<sup>づ</sup>張<sup>はり</sup>の茶見世に居た道具屋のハタ師が持<sup>も</sup>つていたんだが、彼<sup>あれ</sup>が真<sup>ほん</sup>物<sup>もの</sup>なら強<sup>べ</sup>氣<sup>つぎ</sup>と儲<sup>も</sup>かるぜ」

正「へえ、なんでございます」

伊「おいらの眼が届かねえか知らねえが、話には聞<sup>き</sup>いてる、これが蘆<sup>あし</sup>屋<sup>や</sup>の姥<sup>うば</sup>口<sup>ぐち</sup>の釜と云<sup>い</sup>つて、織田信長から柴田が拝領したという釜なら、どんな事をして捨<sup>す</sup>売<sup>り</sup>にしても五百兩がものは有る、旨<sup>うまい</sup>くいけば少なくとも何百兩にはなるだろうと思うのだ」

正「へえ是はどうも恐れ入<sup>い</sup>りやしたな、幾<sup>いく</sup>らでお買<sup>か</sup>いなすつたえ……一兩二分で買<sup>か</sup>つたものが五百兩になれば、これは大<sup>お</sup>したことでございますねえ」

伊「真物でなくつても筋<sup>すぢ</sup>が宜<sup>よ</sup>い釜だから屹<sup>きつ</sup>度<sup>と</sup>儲<sup>も</sup>かる積<sup>しほ</sup>りだ」

## 三十一

正「旦那なんざア違いますね、一寸休んで煙草を喫<sup>の</sup>んだり何か為<sup>し</sup>てえる内に、お目が利いてるもんだから、此のくらいな掘出し物をなさる事があるんですが、本当にこれが五百両になれば不動様の御利益ですな、儲かつたら釜の祝いと云つて仕着<sup>しきせ</sup>をお出しなさいな、羽織の紋や何かに釜はいけませんな可笑しい、釜屋堀<sup>かまやぼり</sup>\*の六右衛門<sup>ろくうえもん</sup>さんの家の仕着<sup>しきせ</sup>見たようですが、浴衣<sup>ゆかた</sup>を染めて釜の模様……これも困りますが、何か釜の祝いと云つて……全<sup>ぜ</sup>てい<sup>か</sup>げま<sup>ま</sup>体男娼<sup>たいにやう</sup>を買つて遊ぶのが宜<sup>い</sup>いんですが、何か面白い趣向<sup>しゆきやう</sup>がありましよう」

伊「何うかマア一つ大景<sup>おおお</sup>気な事をしたいから儲かれば宜<sup>い</sup>い、氣を附けて往<sup>い</sup>きねえ」

と云つてるところへ昇夫<sup>かじや</sup>がまいり、

昇夫「どうせ船橋<sup>かえ</sup>へ歸りですが、お廉<sup>やす</sup>く願<sup>ね</sup>え度<sup>て</sup>えもんで、歸りですから一杯<sup>いっぺえ</sup>飲めりやア宜<sup>い</sup>いんで、歸<sup>けえ</sup>り駕籠<sup>がら</sup>でござえやすから、お安く乗つておくんなせえ、まだ船橋<sup>ふねはし</sup>まで余程<sup>よつぽど</sup>有りますぜ」

正「いけねえよ若<sup>わかいしゆ</sup>衆<sup>しゆ</sup>さん、それは御免を蒙ろう、私<sup>わつし</sup>たちは皆足<sup>みんな</sup>が達者<sup>たつしや</sup>で、後<sup>あと</sup>から来る婆<sup>ば</sup>さんの新造<sup>しんぞ</sup>なんざア足が達者<sup>たつしや</sup>で、馬と一緒に駆けて歩くくらいなものだ」

昇夫「御冗談仰しやらずに、お願ねげえですから、ホンの飲のみ代しろが有れば宜いんです、何うせ帰けえるんですからお安くやりやしょう」

正「成田へ来て駕籠へ乗るてえのは強ごうき氣といけねえ、本当ならお前めえたち達二人を駕籠へ乗せて、私わつしたち等二人で担かつぎたいくらいのものだ」

昇夫「ウーン然そうか、担かついで貰もらおう、担かついでおくねえ、船橋まで幾らで担かついで往いくか知らねえが、担かついでツて貰もらおう、サア担かつげ」

正「これは驚いた、コー何をいうんだよ」

昇「何をいうつて、担かつぎてえというから担かつげというのよ」

正「これは恐れ入った、うツかり洒落もいえねえナ」

昇「何うせおらツちア旅たびかこ駕を担かつぐものだ、洒落なんぞ知ってるものか、洒落は知らねえ」

正「若衆、そう突つかゝつて来られちやア困るぜ、吉原にも成田の講こうじゅう中が極しやうつて、正五九月には参詣さんぎに往いくのに、お前達も成田街道で御飯おまんまア喰くつて人間じやアねえか、私わつし

は吉原の幫間ほうかんで、旦那に途中のダレの無いようにお供をして来たんだから、ちよいと担かつごうぐらいの洒落も云おうじやアねえか、それをとツこに取とつて担かつげなんぞと云うのは酷ひどいねえ」



昇「汝<sup>てめ</sup>えは幫間か何んだかおらツちは知らねえ、どうせ昇<sup>かこや</sup>夫だから洒落なんざア知るもんか、おらツち二人を乗つけて担げよ、サア担がれよう、ヤイ担げく」

正「これはどうも驚いたねえ」

伊「師匠、お前<sup>めえ</sup>が悪い、重いものを持つてるもんだから足元を見るのだ、それに女<sup>おんな</sup>連<sup>なづれ</sup>

だからよ、駄洒落などを云うから宜くない、少しばかり鼻薬を遣んなよ」

正「へえ、幾らか遣りましょう、私<sup>わたくし</sup>が言い損<sup>そく</sup>なつたんですから、今日<sup>こんち</sup>は私<sup>わたし</sup>が散財致して旦

那に御迷惑は掛けませんが、誰だツて云うじやア有りませんか、当<sup>あたり</sup>然<sup>まえ</sup>の洒落で……サ

ア若衆さん、私<sup>わつし</sup>が悪かつた、ツイ言い損<sup>そく</sup>なつたのだがお前も氣<sup>き</sup>ぜんの悪い<sup>わり</sup>ところ、此方<sup>こつち</sup>も不

動さまへお参りに往つたんだから、種々<sup>いろく</sup>不同が有るが、お前<sup>めえ</sup>どうか是で一杯飲んで機嫌

を直しておくれ」

と幾らか紙に包んで差出すを見て、

昇「何を云うんだ、おらツちは銭<sup>ぜにかね</sup>金を貰おうと云うんじやアねえ、汝<sup>てめ</sup>ツちが担ぐという

から担げというのだ」

と云いながら拳を固めて正孝の頭をコツリ、正孝は頭を押えながら、

正「オヤこれは、拳骨はひどいね若衆さん、これで不足なら一緒に何処へでも出ようく」

伊「おい／＼何処へ往こうツたつて小和田の原中じやアねえか」

正「だから若衆さん、私が悪いから謝まつてるのに、いきなり拳骨はひどいじやアねえか」

と云うのも聞かず、原文に三島安という東海道喰詰の悪党ゆえ、左右からつか／＼と進

み寄り、物をも云わず一人が正孝の胸倉を取り、一人が伊之助の袖を押えたから、正孝も

伊之助も真青に成る。芸者のお松も原中へペタリと坐つて仕舞い、清八は釜を持ったな

り尻餅を搗いてしまいました。二人の舁夫は、相手は女連れで金も有りそうだし、殊に高

価の貨物を提げてるという事をチラリと聞いたから、間が宜くば暗い処へ引摺込み、残

らず引ッ剥うという護摩の灰の二人で、誠に悪い奴でございます。するといつの間にか後

に立つて居りました人の行装は、二十四節の深編笠を冠り、鼠無地の着物に同じ色の道

行振を着て、木剣作りの小脇差を佩し、合切袋を肩に掛けて、余程旅慣れて居ると見え、

汚ない脚半甲掛草鞋でございます。この様子を見るとツカ／＼と出て来まして、正孝

の胸倉を取つてゐる舁夫の利腕を押えました、舁夫は痛いから手を放すと、

虚無僧「彼方へ往け……御心配なさいますな……悪い奴だ、此の方々は成田の道者では

ないか、手前たちは成田街道で其の日を送る駕籠舁の身の上で有りながら、道者へ対して

無礼を云掛けるとは免されん、捨置き難い奴なれど、修行の身の上なれば免して遣わすか

ら、サツサと往け」

甲昇「此ん畜生、何処から出やアがった、此ん畜生ヤイ、出抜けに出やアがって此ん畜生」

乙昇「此奴は佐倉の町で笛を吹いてやアがった乞食だ、この原中で旨え仕事をしようという中へ這入って邪魔アしやアがって、此の野郎から殴ってしまえ」

と左右から小太い竹の息杖を押取って打って掛りましたが、打たれるような人ではない、ヒラリと身を交わしながら、木剣作りの小脇差を引抜き、原文の持つてる息杖を打払い、踏込みさまズーンと肩口から乳の下へ斬下げる。斬られて原文は其の儘バタリと斃れる。

三島安は此の有様を見て、

安「オヤ此の野郎」

と云いながら息杖を持つて虚無僧の両足を払いますと、虚無僧はヒラリと飛上り、三島安の頭上から力に任せて切込めば、面部へかけて割付けられ、アツと云って片膝突くところを胸腹へ深く斬り込みましたから、二人とも其処へ倒れる、虚無僧は其の上へ片足かけて脊筋から肋へ深く突き通し、鰐元の血振いをしながら落着いて後へ退りました。人を斬って置きながら顔の色も変わりませんのは余程胆の据つたもので、此の時に伊之助も正孝も

危ういところは免れましたが、鼻の先でザクリ、バタリ、プーツと血<sup>ちけぶり</sup>烟が立つたんですから慄<sup>ふる</sup>えて居りました。

伊「師匠お礼を云いなよ、何方<sup>どちら</sup>のお方か存じませんが危<sup>あやう</sup>いところをお助け下さり、誠に有難う存じまする、師匠お礼を云いなよ」

正「何うも斯<sup>こ</sup>んな嬉しい時には何ともお礼の出る訳のもんじゃアございません、ヘイ、何方のお方様か存じませんが、誠に有難うございます、実に命の親で……どうか私<sup>わたくし</sup>はお助<sup>すけ</sup>けを願います」

虚「イエー、あなた方は何うも為<sup>し</sup>やアしません、何しろ飛んだ御災難で、御婦人連れですから、間が宜ければ追剥をしようと為<sup>し</sup>掛<sup>か</sup>けた悪い奴で」

正「全く追剥に相違有りません、私の胸倉<sup>むねぐら</sup>を取りまして懷中へ手を入れて、胴巻<sup>どうまき</sup>が有るかと思つて探した様子と云い、泥坊に違い有りません」

虚「私<sup>わし</sup>は昨年の春彼奴等<sup>あいつら</sup>を羽根田の浜辺で一度見たことが有りますが、一遍は助けて遣わしましたが、向後のために成りませんかと心得斬<sup>きり</sup>つて捨てましたが、悪い奴ゆえ此の儘<sup>まま</sup>いつても仔細<sup>しそ</sup>ありません、届<sup>とど</sup>けにも及びますまい、却<sup>かえ</sup>つて斬<sup>きり</sup>徳<sup>とく</sup>ぐらいのものでしよう」

伊「後<sup>あと</sup>でお係り合になるといけませんから、金子は何程掛つても宜しゆうございますから、

お届け遊ばしては如何いかゞでございます、私わたくしども剥がれますところをお助け下さいましたのでございまして申し立て、決して御迷惑に相成らんよう、何どの様ように金子を遣つても厭いといは有りませんから」

虚「イヤ／＼斬徳で届けるには及びません、手が血染のりじみになりましたが、悪いお手拭いが有りますなら戴きたい」

伊「へい、正孝持つてるだろう」

正「へいこれに」

と差出すを受取り見て、

虚「斯んな結構なお手拭でなくツても宜しい」

伊「ナニ結構でも構かまやア致しません」

正孝は口の中うちで、

「少々高い、エゝなに、アノ花会の手拭でございます」

彼の虚無僧は刀の血のりを拭つて刃に障りはせんかと刃を見て鞘に納め、

虚「決して左様にお礼を仰しやるに及びませんが、少々御無心がございます」

伊「へえ、何んな事でも否いやとは申しません」

虚「実は手前、遠国へ参つて居り、久々にて当地へ歸りました者で、少々心当りの者が有つて此の辺へ参り、成田へも参詣しましたが、此の辺に悪者が忍んで居るといふ噂が有つて、八州の捕方がまいつて厳しい詮議が有るので、一人旅の者は何処の宿屋でも泊めてくれませんので、誠に当惑を致します、就きましては手前は決して胡散の者では有りませんが、姓名は仔細有つて申し兼るが、お連れ下さるまいか、何うかお連れの積りで合宿を願いたいので」

伊「へえ宜敷ゆうございまする、何んな事が有りましたも、私は助けて戴きましたので、其のくらの事はお安いことでございます、おまつや清八は何処へ往つちまツたか知ら、師匠皆んな見えなくなつたね」

正「おいお松さん、ア、原中へピッタリ坐つてまさア、オイ坐つてるだんじやアない、サツサと往かないと斬徳く」

と是から皆々伴れ立つて船橋の佐渡屋へ泊り、お湯に這入りましてから伊之助は、伊「師匠々々是へ来てしみ／＼」お札をいいなよ、旦那さま誠に有難う存じました、嘸お疲れでございましょう」

正「今日のような有難いことは今までには無いので、この旦那さまには年来御最前になり

まして、羽織から着物帯煙草入駒下駄まで残らず拵えて戴いた時も随分嬉しかったが、その時より今度の方が余程嬉しゅうございました、物を貰いたいつてえ幫間の了間は此のくらいのものでございますが、実に今日ばかりは何んだか私はポツとしちまつて、夢中で居りましたが、それではいけねえと、一生懸命になつて歩いてまいりましたが、旦那さまが笠を脱つて、長いお刀へ手を掛けて、御立腹なすつた時には、私も随分お武家方のお腹立にも出会いますが、ちんくの御立腹とは違つて、お顔の色が變つたと思うと、鼻の先でぴか／＼サク／＼は驚きました、へい、私は始めて人殺を見ました、ヌーツという血がブーツと吹き出しました」

虚「あのお話は御内々に」

正「へい、ナ成程斬徳くツてな事に成つてますから、うツかりは云えませんが、私の役は余り宜い役じゃありません、芝居だところばしで家橘が我童小團次どこの役で、今考えると面白いが、旦那は立役で、後から出て笠を脱つて昇夫を投り出して、笠を小脇に抱えてカラーリと見得があれば、舞台上狂言でも立役が出ると宜い心持だから、親玉ア成田屋アと声を掛けたいが、それが当人だから何のくらい嬉しいか知れません」

虚「あのお話は余りなさいませんように」

正「ハイ／＼成る程斬徳／＼ツてえ事に一切なりますんで」

虚「御主人何うか別段に御酒やお肴を沢山御馳走下すってはいけません」

伊「何う致しまして、何にもお構い申しません、海老屋と違つて何にもありません」

虚「御主人あの床の間のお荷物の所に一節切が二管有りますが、あれはあなたがお吹き遊ばすのか」

伊「いゝえ、これはホンの道具を些とばかり掘出しものを致しました時に、込んで買いましたが、笛をお吹き遊ばして居らっしゃるようでございますが、お入用なら差上げて  
も宜しゅうございます」

虚「少々拝見を願いまする、中々好い笛のようで」

伊「へい」

と差出す二管の笛を手を取つて見ますと、一つは響と朱銘で出て居り、一つは初音と銀銘で出て居りますから驚きました。この虚無僧は稻垣小左衛門の忤小三郎でございます。



稲垣小三郎は、これは私が父小左衛門から笛の稽古をする時に、私が響を吹くと親父が初音を吹いて教えてくれた此の一節切、どうして此処に有ることかと驚きまして、

虚「これは何処の道具屋でお求めになりましたか、此の他に何か道具が出やア致しませんか」

伊「へえ、実は私は此の釜が掘出物の積りで釜を見込んで居りますんですが、笛はホンのお供で取りましたので」

と云うから其の釜を見ると又驚きました、というは、先せん殿飛驒守さまから拝領の蘆屋の釜ゆえ、是はどうも思い掛けないことと考え、

虚「これは実は私の家うちに有りました品でございますが、幾らでお求めに相成りましたか知らんが、私に取つては大切な道具でござるが、お求め遊ばしたお直段ねだんを仰せ聞けられますれば、手前から其の価あたを差上げますから、何うか手前へお譲ゆずりを願いたいものでございませす」

伊「へえ、貴方様のお屋敷から出ました品で」

虚「手前は只今は修行者の身の上になり下り零落さがいたしましたはこが、これは親父が上より拝領したもので、替箱かえばこが有り、二重三重の函はこへ箱書付はこがきつけも附いて居たものが、どういふ事

で斯様なことになりましたか頓と分りませんけれども、右の次第ゆえ何うか手前へお譲りを願いたいもので」

正孝は傍から伊之助の袖を引き小声で、

正「旦那、旦那」

伊「えゝ何んだよ」

正「上げてお仕舞いなさい、私どもの命を助けて下さったお礼に上げて下さいな、一両二分と思やしませんぜ、五百両のお礼をする積りで上げて下さいよう」

伊「黙つて居なよ、余計な口を出さねえでも宜い……へい私共は何も此の品でなければならぬと云う訳で求めたのでは有りませんし、お屋敷から出ましたお品なら命を助けて戴きましたお礼に何か差上げたいと思つて居りましたとこゆえ、そんな物で宜しければ残らず差上げたく心得ます」

虚「イヤゝゝ高金の物で有るからたゞ戴くわけはございません」

伊「代は申し上げることも出来ないほど実に安く買いましたゆえ」

正「旦那さま御心配は有りません屁の平気で……屁ということはうツかり云うとしくじりですが、大丈夫ですから黙つて貰つてお置き遊ばせ」

伊「貴方の方では御大切なお品ゆえ何うか御心配なくお受け下さいまし」

虚「左様でござるか、それは誠に有難いことで、手前ことは只今の身の上では仔細有つて姓名を明すわけには参りませんなれども、御尊名を伺い置きまして、手前世に出ますれば御尊家へお礼に出たいから、どうか御尊名の処を仰せ聞けられるように、お宅は何方ぞ」

伊「手前は本郷春木町の、紀伊國屋宗十郎の忝伊之助と申しまする」

虚「本郷春木町の……ア、左様か」

とこれは出入町人岡本政七の妹娘と許嫁だとかいう話が有つたが、さては紀伊國屋の伊之助と云うものは此の男かと思いましたが、はすはにものは云いません。

虚「何れ世に出れば御尊家へお礼に罷り出る」

と約し其の晩は寝てしまい、翌朝は連立ちて出ましたが、伊之助の連は八幡から横に折れて中矢切村の法泉寺へまいり、若草の法事を致し、叔母にも会って帰りました。此方の虚無僧は釜を提げて市川を越え、逆井を渡り、本所に出まして、二ツ目の橋を渡り、深川の万年町へ参り、岡本政七に面会しようと云うので万年町差して参ります。お話は戻りまして重三郎は仙太郎の世話で、高橋を曲ると直に二軒目の明家を借り、世帯を持ちまして昼は万年町の店へ通い、粟田口國綱の手掛りも有ろうかと、仲間の小道具屋を廻り、

また深川八幡へ心願を掛けまして、頻<sup>しき</sup>りと刀の行方を詮索致して居りますが、今に手掛りもございせんことで、或日<sup>あるひ</sup>重助は少し買物が有つて出ましたが、ポツ／＼雨が降り出して来ましたから、番傘を差して横町から出て来ますと、降<sup>ふり</sup>が強く成りました。と見ると向うの家の軒下に修行者が立つて居ります。自分も永らく四国西国巡礼して居りましたから、旅疲れの人を見ると、自分の旅で難儀をしたことを思い出すと見えまして、

重「申し御修行者さん／＼、お前さんは余程遠国を歩いて来たお方と思います、脚半の穿<sup>は</sup>きようと云い草鞋の穿き振りと云い、余程旅で苦労なすつたお方でなくツチャア然<sup>そ</sup>う云うような身拵えの出来るわけのものじゃアないが、余程遠くを歩いたお方でしょう」

小「はい、九州辺を遍歴<sup>へめく</sup>つて余程長旅を致し、久々にて御府内へ立帰った身の上でございます」

重「そうでしょう、私の宅はツイ此処を曲ると直<sup>じき</sup>に二軒目でございますがねえ、幸い心ざす仏さまが有りますが、あなた笛を吹いて修行をして居らっしゃるから、矢張<sup>やっぱり</sup>虚無僧さんと同じような者ですかねえ」

小「まア／＼ぼろんじの流れを汲みますもので」

重助「それじゃア此方<sup>こつち</sup>へおいでなさい、何<sup>なん</sup>にも有りませんが茶飯が出来ましたから、味噌<sup>おつ</sup>

汁けでも温あつためて御飯おまんまを上げたいから。心こざす仏さまへ御回向なすつて下さいな」

小「お志しとあれば御免を蒙まかつて罷まかり出ましよう」

重助「あなた雨具は有りませんか」

小「イエ所持して居りまするが直じきに晴れようかと存じまして見合せて居りますので」

重助「中々大降になりましようよ、今時分の雨は降り出すと容易に止まないから、汚うない家うちですが、まア此方こつちへおいでなさい」

小「それは有難う存じます」

重助「矢つ張笛を吹いて御回向が出来るんでしようねえ虚無僧さん」

小「はい、それは回向の曲、手向たむけの曲と云うのが有りますから、笛で手向おたむけは出来ます」

重助「然うですつてねえ、私わたくしが旅を致しました時に、虚無僧さんと合宿あいやどをしたことも有

りまするが、其の虚無僧さんの話に邪慳じゃけんいつこく一いっ国なことをいう家うちで回向をする時は、笛で

馬鹿野郎ヤイと吹いても知らないから、からかつて遣る事が有るてえましたが、本当ですかね」

小「随分左様なことが無いでも有りません」

重助「然うでございましょうね」

と話しながら我家の門口へ参り、

重助「さアお這入りなさい、四国ではねえ只泊めてくれるのに、修業者しゆぎようじやでも御ごへんどさんあるじと申して、主が足を洗つてくれるが、誠に人氣にんきの穩おだやかな国で、それと云うのも弘法さまが何百年か昔にお戒め置きなすつたからでしょうが、私わたくしは今日は四国の者の積りで貴方の足を洗つて上げましょうか」

小「どう致しまして、それは恐れ入ります、どうか盥たらひへ水を頂戴して自分で洗う方が却かえつて勝手でございまする」

と是から盥へ水を汲んで持つて来てくれましたから足を洗つて奥へ通りまして、重助は仏壇へ灯ともしび明を点けて線香を立て、

重「さア此方こちらへ」

というので小三郎が仏壇の前へ坐る。

重「その真まんなか中に在るお位牌がなんですから、何うかそれへお手向を願います」

小「畏まりました」

重「御回向が済むと後で御膳を上げますよ」

小「誠にお志しの深いことで」

と云いながら懷から取出したのは昨夜<sup>ゆうべ</sup>図らず紀伊國屋の伊之助から貰った初音という一節切でございます。今唄口を濡<sup>しめ</sup>して手向の曲を吹こうと思ひ、ふと仏壇を見ると、隅の方に立掛けて有るのは山風の一節切で、その傍<sup>そば</sup>に黒羅紗の頭巾が有ります、山風と蒔絵をした金銘<sup>とうみょう</sup>が灯明の火影に映じ、金色がキラ／＼見えまするゆえ、小三郎は不思議に思ひまして、

小「御主人／＼」

重「はい／＼」

小「このお仏間に一節切が立掛けてあります、これはあなたの御所持の品かな」

重助「おゝ成程お前さんも笛を吹くから直<sup>じき</sup>にお目<sup>め</sup>が附きますな、これは今日の仏さまの遺<sup>か</sup>物<sup>たみ</sup>でございます」

小「へい、遺物でございますか」

と云いながら手に取上げて見て恠<sup>び</sup>くりいたしました。というのは、先殿飛騨守公から父小左衛門が拝領したる品にて、常々肌身放さず秘藏にいたし、何処へ往<sup>ゆ</sup>くにも首へかけ懷へ入れて歩いたほどの物が、どうして此処に立掛けてある事かと訝<sup>いぶ</sup>しみながら、小「御主人少々伺いますが、此の笛を所持したものゝ命日と被<sup>おつ</sup>仰<sup>しや</sup>って見ると、誠に思ひ

がけないこととございまする、これは他たに少ない品でござるが、何う云うわけこなたで此方さまに有りまするか、とんと手前には分りませんが、この笛を所持いたして居りました人は何と申す人ですか」

重わたくし「私どもには笛の事なぞはさっぱり分りませんが、何でもこれはやかましい物なんだそうで、殿さまから拝領した笛なんだとかいう事を私の忤は能く存じて居りますが、これを持って居たお方は、旧もとは金森様というお大名のお重役で、稻垣小左衛門という方で、そのお方がお吹きなすった笛だそうです」

小「フーム、その小左衛門は何処に居りまするか」

重助「その小左衛門さまと云うお方はね、この笛と其処に在る黒羅紗の頭巾を持ったなりでね、悪い奴にでも欺だまされて突き落されたものか、鴻の台の鐘ヶ淵から逆さかトンボウを打つて血みどり血がいになってお落ちなすって、お亡くなりなすったので」

小「エ、小左衛門がなくなりましたか」

と云いさしさめ／＼と泣き沈みましたも道理で、親一人子一人の小三郎ゆえ、実父おやじの死去した事を聞き、堪こらえ兼ねて男泣きに泣き出し、涙が膝へハラ／＼と落ちまするのを重助が見て、



重助「お前さんお泣きなさいますね、失礼な事をお聞き申すようですが、あなたは稲垣小三郎さまと仰しやるお方では有りませんか」

と云われて驚き氣を取直し、涙を拭つて笑顔を造り、

小「いえく手前は左様な者ではござらん、なれども手前も少々指田流の笛を吹きますが、二と及ぶ者のない名高い稲垣小左衛門が左様の横死を致したかと同流の誼みでござるゆえ誠に惜しい事をしたと思い、見ず識らずの方なれども余り力が落ちましてツイ落涙をいたしました」

重助「いえお前さんお隠しなすつちやいけません、あなたが小三郎さまなら、貴方のお歸りを私ども<sup>わたくし</sup>の忤はお待ち申して居りまする、私どもの忤は万年町の岡本と申す小道具屋の手代で、重三郎と申しまするが不調法をいたしお屋敷の大切なお刀を失したのでお係りの稲垣様が御浪人なすつたばかりでなく、左様な死にようをなさいましたのも皆な私<sup>みんな</sup>が不調法から起つた事と、日々そればかり申し暮して居りまするが、私はその重三郎の親父で重助と申します者でございます」

小「ハイ……左様か、それは何うも思い掛けない、お前が重三の親御かえ」

重「それ御覧なさい、だからお隠しなすつてはいけませんと申しましたので」

小「実は斯様な修行者の身の上になって居ながら、姓名を明かすは父の恥、故主こしゆうの恥と心得て明らさまに申さなかつたなれども、重三じゅうざの親父なら他言は致すまいが、実は手前が稻垣小三郎でござる」

重「はい／＼これは何うもはや」

と云いながら、後うしろの方へ身を摺すり下り、慇懃いんぎんに両手を突き、

重「誠にお初にお目にかゝりまするが、若旦那様がお歸りになって此の事をお聞き遊あそばしたら、嘸さぞお力落しだろうとお噂を申して居りました」

### 三十三

小「手前少々心当りがあつて、一年半ほど諸国を遍歴へめぐり、九州までまいったが、少しも刀の手掛りもなく、少々氣になることが有つて、一先ひとまず江戸へ立歸つて、芝の上屋敷へまいつて聞けば、親父はお暇になつたとの事、尤もそれ程のお咎めもあるまいと思ひ、旅先から再度書状も送つたが、父より更に一本の返事のないも道理、同役の者に聞いて見ると、昨年の春より父は葛飾の真間の根本に居おるということゆゑ、参つてだん／＼尋ねたが、と

んと様子が分らず、帰つて来る途中にて図らずお前に呼入れられ、我親<sup>わが</sup>の位牌と知らず仏間に向つて回向を致し、思わず此の山風が眼に這入つたばかりで不思議に知れたる実父の横死、その命日に当り、此方<sup>こちら</sup>へ呼入れられるとは実に父の引合せで、お前の家<sup>うち</sup>へ来るようなことになったのかも知れん、誠に女々しい奴と思し召すか知らんが、此の度<sup>たび</sup>ほど力の落ちたことはない、誠に残念な事をいたした」

と云いながらまたさめ／＼と泣沈む。

重助「へい／＼御尤もさまでございます……私<sup>わたくし</sup>どもの忤は貴方様のことばかり申して、誠に情ないことをした、私<sup>わたくし</sup>がお刀さえ失<sup>なく</sup>さなければ、チャンとしてお屋敷においでなさろうもの、私が不調法から斯んな非業の死に様<sup>よう</sup>をなすつたと申しましては、毎日仏さまへお線香を上げる度に忤が泣くのでございますよ、昨年の正月五日の晩にお刀を奪<sup>と</sup>られ、申し訳がないつて万年橋で首を縊ろうとする処へ、通り掛つたのは、伊皿子台町の荷足の仙太郎という誠に気丈な親方で、其のお人が助けて下さいまして、其の刀を取った侍の容<sup>なり</sup>恰好も見て居るし、それに見知り人<sup>にん</sup>も有るから何んのお手先を頼むには及ばん、己が探すと仰しやつて、御親切に侍に突当つて刀を挽<sup>も</sup>ぎ取つて、人のために命<sup>いのち</sup>賭<sup>がけ</sup>でお刀の詮議をして下さいましたが、まだ知れませんが、けれどもその仙太郎親方のお蔭で重三郎も私も漸く万

年町のお店たなへ出這入の出来るようになりましたが、不思議な事には、仙太郎親方と  
倅と一緒に松戸へお刀の詮議にまいりますと、船の胴まの間へ落ちたのはお父様とつさまのお死  
骸でございましたが、御浪人なすつて入つしやるからお屋敷へ知らせる事も出来ませんか  
ら、何うしたら宜かろうと心配のうえ、仙太郎親方が自分の伯父様の積りにして、白金の  
高野寺へお葬式とむらいなさいましたが、御門主が来て、どうも立派な御葬式ごそうしきで有ったとい  
話でござります、随分お屋敷の御葬式でも、あれには敵かなうまいという程で、立派な御供養  
がありました、仙太郎親方も貴方にお目にかゝりたいと其の事計り申してゝすが、誠に  
御親切なお方さまじやア有りませんか」

小「はい、親どもの死骸を引取つて葬式まで出して下さるとは実に恐れ入った事で、何う  
かお目にかゝつてお礼を申したいもので」

重助「時々入つしやいますが、伊皿子台町ですからお出いでなすつても造作も有りませんが、  
今に倅も帰つて参りますから、何うか今晚は私の処わたくしへお泊り遊ばして、倅に御案内致させ  
ますから、明日仙太郎親方の処へ往つてお会いになつたら宜しゅうございましょう、なか  
くおとこぎ 俠氣のお人ゆえ、またお力になる事も有りました……旦那様、此の頭巾の裏に白  
い布きれがあつて、それへ印とかゝ押してあるそうです、此の品は倅の申しますには、お屋敷

でお揃いに出来た頭巾ゆえ仇敵かたきの手掛りになるかも知れない、大旦那は組討でも成すつたものか、紐が切れたのを持つたなりでお落ちなさいましたとの事で、後日の証拠に取って置こうと、親方が取ろうとしましたが、固く握つておいでゆえ指を一本ずつ折つて、漸く頭巾を取つたというくらいでございました」

小「左様でございますか」

と慌てゝ頭巾の裏を返して見ると、白羽二重きりの布が縫付けて有りまして、それへ朱印が押してございますのを熟つく々／＼視みて、

小「誠に何うも思い掛けないことで、これは実父が突落される臨終いまわの一念で放さずに居たものと見える、あゝ天命は遁のがれ難いもので、これは分りました……ウーム彼奴あいつの所為しわざであらう」

重助「知れましたか、誰でございます」

小「これは矢張同藩でございます、大野惣兵衛という奴だが、壮年の折柄心掛けが宜しくないので、実父から一言殿様へ申し上げた処からお暇になったので、それを遺恨に心得、実父を欺いて高峯たかねから突落すとは卑怯な奴で、大野が所為と知って居たらば濃州から歸るのではなかった、大野が親族は国に在あるて」

重「悪い事は出来ないものでございますな、其の事を仙太郎親方や重三郎が聞きましたら  
懽<sup>さそ</sup>悦びましょう」

小「これが大野惣兵衛と知れましたからには、私は直<sup>わし</sup>に出立致して、遠からず大野惣兵衛  
の生首を引提<sup>ひっさ</sup>げて帰つて来たならば、其の功に依つてお屋敷へ帰参が叶うかも知れません」  
重「へえ、これはお導<sup>みちびき</sup>でございますな、何にしても今晚はお泊り遊ばせ、今に忤も帰つて  
参りましょうから」

小「イヤお前には初対面だし、重三でも居<sup>お</sup>れば厄介に成りますが、重三が遅く帰つて来る  
ようでは気の毒だから、私は是<sup>わし</sup>から万年町の岡本方へ参つて一泊致し、明朝また来て重三  
にも会いますから、いらん物は預かつて置いて下さい、これは重くてならんが、大切の釜  
だから其の積<sup>しつ</sup>りで確<sup>しつ</sup>かり預かつて置いて下さい」

重「成程初対面でございますから、それも然<sup>そ</sup>うでございましょう、万年町のお店<sup>たな</sup>へお泊<sup>は</sup>り  
遊ばすなら、重三が帰つて来ましたら、お店へ差出す事に致しましょう……これはお履<sup>は</sup>き  
難<sup>にく</sup>いかもしれませんが、此の下駄をお履きなすつて、傘をさして往<sup>い</sup>らつしやいまし」

「いいながら傘から下駄まで揃えて出しましたから、これを借り、  
小「くれ／＼も仙太郎親方にお礼を云わなければ、どうも気が済まんようで」

重助「はいく仙太郎親方がお聞きなすつたら、どんなにお悦びか知れますまい、左様な御機嫌宜う」

小「大きに御厄介になりました」

と表へ出ました。武家はメソく泣かないものだが、外へ出ると小左衛門の横死を思い出し、胸に迫つて流石に猛き氣象だが、オロく涙を落しながら、番傘を片手に持ったなりクヨくと思い詰め、高橋を渡つて霊岸の方へ曲る道へ下りにかゝると、向うから駈けて来た一人の男は仙太郎で、闇さは闇し、互に顔は知らず、間違いの出来る時には仕方がないもので、仙太郎が駈けてまいる途端に小三郎に突当りましたが、きかない氣象だから仙「ヤイ気をつけて歩け、間抜け奴、この頓痴氣」

小「何だ怪しからん奴だな、手前の方から突当つて置きながら悪口を申すとは無礼至極な奴だ、此方は避けて歩いて居るに」

仙「なにイ此の間抜けめ、下を向いてグズく歩いて居やアがるからだ」

と云いながらツカくと寄つて来て、

仙「この野郎」

と小三郎の胸ぐらを取り、五人力の拳骨で押え付けられた時には、流石小三郎も息が止

りそうになりました。通常の者なら蹠よろけて倒れるところですが、小三郎は柔術も剣術も名人な人ゆえ力ちから足あしを踏止めて、懷中より一節切を拔出し、仙太郎の利腕をモロにグツと落しますと、痛いからバラリと放すところをば、機とたんをうたしてドンと仙太郎を投げ。仙太郎は始めて投げられて口惜しいけれども暫くは起る事が出来ません。

小「斯様な無法のことをすると、暴あらい侍だと此の首を打落されるぞ、以後たしなめ」

とコツ／＼一節切で仙太郎の頭を打ち、逃げもせず急ぎも致しませんで、泰然と番下駄を履いたなり往つてしまう。仙太郎は口惜しいの口惜しくないのツて何うも我慢が出来ませんから、急いで重助の処へ駈けて参り、

仙「爺さん一寸明ちよつとけてくんな、何か手頃の棒を出しねえよ」

重「親方何んでございます」

仙「何でも宜いいやアな、早く出しながら、今喧嘩をして来たんだ」

重「喧嘩は止して下さいましよ、怪我でもするといけませんから」

仙「チョツ、エ、早く出しな」

と叱られましたから有合せた棒を出して渡すを引ツ取つて、其の儘駈出し、高橋を渡つて海辺大工町うんべだいくちようを曲り、寺町から靈岸前へ先さきまわり廻まわりをして、材木屋の処かくに匿れて居て、侍



の向う脛すねを打ぶ払はらって遣はなろうと思ひ、頻しきりと覘ねらつて居りますと、向うから小三郎がクヨクヨしながら下を向いて遣つて参ります処を覘い詰めて、いきなりに、

仙「覺えたか」

と云いながら腰車骨こしぐるまを覘つて横に払いました。是からどうなりますか。

## 三十四

仙太郎は小三郎に逢いたいと思ひ、待つて居りますが、小三郎も仙太の俠氣おとこぎに感服して逢いたいと思う二人が、知らぬ事とは申しながら、仙太郎が赤あか檜がしの半棒で打込みましたが、武辺の心得ある侍は油断のないもので、片手に番傘を持ったなり、ヒラリと四五尺ばかり飛び上つて空を打たせ、下りながら木剣作りの小脇差を引抜きますと、刃やいばの光が鼻の先へピカリと刀尖きつさきが出たから、仙太郎は驚いて棒ぼうを投り出したなりで、無茶苦茶に逃戻り、

仙「オイ爺さん明けてくんなよ」

重「ハイ私は何どんなにお案じ申したか知れませんよ、お願いだから喧嘩は止めて下さい、

私が死んでからして下さい」

と云われ仙太郎は悄々<sup>しおく</sup>と、

仙「己はもう喧嘩は止めだ、若い時分はもう少し強かったが、年を老<sup>と</sup>ると怯<sup>ひる</sup>むから、うっかり喧嘩は出来ねえ」

重助「あなたが権幕を変えて出て往<sup>いら</sup>つしやいましたから、私は跡で何んなにヒヤ／＼して居たか知れません」

仙「なに、新橋の汐留<sup>しおどめ</sup>の川岸<sup>かし</sup>から船が出ると、跡から芸者か丈助さん／＼という声がするから、其の中に丈助さんという奴が居たので、丈助と云うのは手掛りの名だから、先の奴の顔を知らねえから重三さんに見せてえと思つて、万年町のお店<sup>たな</sup>へ往<sup>い</sup>くと、此方<sup>こちら</sup>へは来ねえというから、此方<sup>こちら</sup>へ来ようと思つて高橋を渡ろうとすると、突当つた奴が有るから、ナニ此の野郎殴り付けるぞ、何んだ手前<sup>てめえ</sup>氣を付けろと、生意氣なことを云つたから、胸ぐらを取ると、小癪なことをするなツて己を抛<sup>ほう</sup>り投げて、棒で己の頭をコツ／＼やつて往<sup>い</sup>きやアがつたから、口惜しくつて堪らねえから、棒を持つて先へ廻り、車ツ骨をやろうと思つと、酷<sup>ひど</sup>い強<sup>つえ</sup>え奴で、ピヨイと頭の上まで飛上りやアがつたが、天狗を見たような奴だ、下りて来ながらスラリと抜きやアがつたから、危<sup>けんのん</sup>険だから逃げて来たが、魔がさしたん

だなア、もう喧嘩ア止めだ」

重助「お前さん、人の宅へ来て頬被りしたなりは酷いじゃアありませんか」

仙「オ、然うだつけ」

と頬被りの手拭いを脱ると、ジョキリと手拭ぐるみ髷のイチがそげて居りましたから、手を当てゝ見て、流石の仙太郎も肩から水をかけられるように、ゾツと総毛立ち、

仙「爺さん喧嘩ア止めだ……こいつは止めだ、滅法界に強え奴もあれば有るものだ、飛びながら抜きやアがツたが、刀尖が己の髷へ当って手拭ぐるみ殺ぐというのは、刀剣も善いのだろうが、何のくれえの腕前だか知れねえ」

重助「おゝ怖い事、おまえさん、もう少し下なら何うなさる」

仙「パクリと柚子味噌の蓋を見たように頭を殺がれるか、もう少し下ならコロリと首が落ちるんだ、オ、怖かねえ、喧嘩は止めだ、酷い奴が有るものだ」

重助「冗談じゃありませんよ、シタが彼の稲垣小三郎様が帰っておいでなすったよ」

仙「エ、若旦那が何うして」

重助「此の先の軒下で笛を吹いて居た修行者が有ったから、四国の心持でお泊め申し回向を願うと、仏壇に立かけて有った一節切を見てお聞きなすったから、これゝと申上げる

と男泣にお泣きなさるから、貴方は小三郎様かと云つても初まりはお隠しなすつたが、私は重三の親父でございますというと、実は己が小三郎だとお打明け下されたが、其の時は私は何うも胸が一杯になりましたね」

仙「ウン／＼<sup>さぞ</sup>嘸お力落しだつたろう……それからお前アノ何を云つてくれたか、小左衛門様の死骸を引取つて葬式<sup>とむれえ</sup>を出した事を、お侍さんを町人が無闇勝手に引取つて葬式を出したつて、滅法界<sup>めつぼうけえ</sup>に怒ると困るがなア」

重助「いえ何うして怒るどころじやア有りません、誠に御親切なお方さまだ、お目にかゝつてお礼が申したい、実に感心なお方だ、侍も及ばんと仰しやつてゞございました」

仙「然うか、シテ何処へお出でなすつた」

重「重三が居ないから、万年町へ往つて泊ると仰しやつて、もう少し先刻岡本へいらつしやいました」

仙「留めて置けば宜い<sup>い</sup>に、それにアノ頭巾を見せたか」

重助「へえ、頭巾をお目に掛けたら、何とかいう人だと仰しやつたが、チャンと目標<sup>めじるし</sup>が有つたのが解つて、仇討<sup>あだうち</sup>に出ると仰しやいましたよ」

仙「然うか、何にしても会いたかつたなア、これから万年町のお店<sup>たな</sup>へ往つて来ようか」

重助「明日の朝おいでなさると仰しやったし、忤も今に帰って来ましようから、又人に突当って喧嘩でもなさるといけませんから、今夜はお泊んなさいな」

仙「じゃア然う仕様が、何だか気色が悪くつていけねえから酒を買つて来てくれ」

とはから酒を飲んで其の晩は重助の家へ泊りましたが、翌朝早く起き、手拭を頭へ巻いて朝湯へまいりました。跡へ入違つて重三郎と稻垣小三郎が連れ立って帰つてまいりました。

重助「何うした、滅多に宅を明けた事はねえに、昨夜歸らねえもんだから大變に心配をした」

重「昨夜は万年町のお店へ泊りました」

重助「おや／＼若旦那さま、これは何うも、私は御一緒とは存じませんでした、さア／＼何うぞ此方へ」

小「昨日は図らざる事で段々御厄介に成りました、あれから万年町へ参ると重三も来合せで、段々話も尽きないゆえ、重三は親父が案じるから帰ると云ったが、どうせ明朝は私も往くから一緒に参ろうと申して無理に引留め、お前に案じさせて誠に相済みません」

重助「いえ、どう致しまして」

重「だん／＼私の不調法をお詫び申した処、お諦めの宜いお方ゆえ、皆定まる約束事だろうと仰しやって、何とも別段やかましい事も仰しやいませんで、それから店の主人も斯様なお行装みなりにお成り遊ばしてお氣の毒でと、種々お話が尽きない処から、ツイ遅くなりまして帰られませんでした」

重助「まあ然うでございましたかえ」

小「何うもね実に万年町の政七も誠に真実な男で、仮令浪人して困ろうとも、私の宅の奉公人から出来たことゆえ、あなたお一人ぐらいは何うでも致しますから、何処へも往かずに二階に居てくれると云われ、誠に忝かたじけない力を得たようなものだが、私も仇討に出立せなければならぬが、手に入つた品々は重役に預けて置き、私は一度濃州の郡上へ立越えます心得である」

重助「左様でございますか、それに重三や昨夜仙太郎親方がお前に逢いたいとおいでなすつて、間もなく跣足で駈出して、暫らく経つて帰つておいでだからお泊め申して……おや親方お帰んなさい、今親方の噂をしているところで……申し若旦那これが仙太郎親方でございます」

小「おや／＼これはお初にお目にかゝります、手前は稻垣小三郎と申す不束ふつゝかの浮浪人此

の後ごとともに幾久しく御別懇に願います」

仙「これは何うも、私わっちはいけぞんぜえ者の仙太郎と申す、通常たゞなら旦那様方にお目通りな  
んざア出来る身の上ではござえやせんが、私のような人間へお交際つきええなさるようじやア御運  
の無ねえのでござえやすが、お父様とっさんのことをお聞きなすって、嘸お力落しだろうって、あな  
たのお噂で夜よを更かし、直じきに夜が明けちまったようなことで」

小「万年町でもお前さんのお志の程を承わりまして、実に感服いたしました、御無礼な儀  
だがお身分とは違い、何うも見ず識しらずの者を助けて下さるのみならず、人のために命を  
棄てゝも刀の詮議をして遣ろうとは、実に侍も及ばん処の御氣象、如何にも珍らしいお方  
だと言つて感心して居りました、又親共の横死の折には御懇ごねんごろなる御葬式ごそうしきで、これノ  
ゝと精くわしく万年町から聞きましたが、何とももってお礼の申し上げようはありません、千  
万忝かたじけなくうございまする」

仙「何ういたしましたして、昨夜きのうも爺おやさんと話をしたんですが、無闇にお侍の死骸を引取つて、  
伯父の積りとむれえで葬式とむれえを出しましたから、若旦那わかだんなが怒おこりやアしねえかつて心配して居るんです」  
小「どう致しまして昨夜さくやも重三へ申しまするに何ともお礼の申そうようはないが、何うか  
其の伊皿子とやらの自宅へ参つて、しみ／＼お礼を申し上げたいと申して居たのですが、

幸いおいでございまして、何とお礼の申そうようは有りませんのに、若旦那などと仰しやつては却かえつて困ります、只今にては笛を吹いて修行をして歩く身の上ゆえ、乞食も同じことで、あなたの方がお身柄はずつと高いので、殊ことわたくしに私は兄弟もなく、また親戚みよりも至つて少ない身の上でございますから、此の後ごとも私を子分とも思おぼしめ召して、小三郎とお呼び捨てなすつて、末永く力に成つて下さるよう、貴方を使客おとこと見掛けて願いまする」

仙「それはどうも飛とんだ事」

と云いながら手拭で涙を拭き、

仙「誠にどうも勿もつてえ体ねえ話でござえます」

とまた手拭をねじつては涙をふきく頭あを擡あげ、

仙「こないけぞんぜえものゆえ、貴方たちにお目にかゝつても御挨拶ごええさつも出来ねえ人間だから、馬鹿な野郎と思召なりしようが、重さんに逢つてからは是れまでは随分永ながえ間の話ですが、私は其の侍なりの容恰好も知つてゐるから、岡ツ引に頼まねえで詮索をした処から遅くなつちまつて、店たなへも済まなく成つたのですが、お父様とつさまを殺した野郎は分りましたか」  
小「はい、これは大野惣兵衛といつて矢張金森家の藩中で、三百石取った奴なれども、心掛けよの善くないものゆえ、殿のお側へ置いてはお為になるまいと、一言御前ごぜん体へ親父か



ら申し上げた事が有るので、それがたれにお暇いとまになつたのを遺恨に心得、親父を欺いて殺したものでしょうが、親父も一人や二人討つて掛ろうとも無慚むざんに殺されることは有りませんが、何うかいう係わな蹄なに掛つて、左様な横死をいたしたので、誠に残念なことでございまして、私は直様すぐさま仇討に出立致し、遠からず大野の生首を提げてお屋敷へ歸つたらば、親方へはまた手前何どの様ようにも御恩返しを致しまする」

仙「お願いですが一緒に私わっちを連れてつて下さいな、私は助太刀に従ついてつて一緒に仇討を遣りてえね」

小「エ、何う致しまして」

仙「何うか供に連れてつて下さい」

小「供と仰しやつても、御家内様も子分衆しゅもあるお方が、お宅は明けられますまい」

仙「ナニ、彼奴あいつは私の居ねえ方が却つて悦びやす、私が居ると種々いろくな難儀をしている者を引摺込むので、留守の方がうゝするつてえます、それに野郎共が船え漕いでますから喰うにやア困りませんから、お願いねげですが一緒に連れてつて下せえ、助太刀に」

小「手前は誠に未熟不鍛錬の腕前でございまするなれども、大野の如き仇かたきを討ちますのに助太刀を頼んだと云われては、故主こしゅへ対して手前が済みません、又同藩の者へ外聞という

わけでも有りませんが、助太刀のことはお断り申しまする」

仙「成程これは外聞が悪かろう、船頭などに助太刀を頼んでは、お侍さんじゃアそうだろう……じゃアお供だけしてえね、途中で泥坊や追剥でも出た時にはぶん殴りてえね」

小「いや道中は却って穏やかなもので、御府内の方が却って無法な悪い奴が居ります、現に昨夜も高橋のダラ／＼下りで理不尽な奴が突当りましたが、大力な者でした、手前が其の手を振解き投げたのを遺恨に心得先へ廻って横町から突然に腰を払われましたが、あの力で打たれては堪りませんが、手前も油断なく飛び上って、威しのために小脇差を引抜いたら驚いて逃げたが、理不尽な奴もあれば有るものです」

と云われて仙太郎は心の中で驚き、両手で頭を押えながら、

仙「モシ旦那……昨夜のはあなたかね……これは何うも爺さん飛んでもねえ事をした」  
重助「それ御覧なさい」

と云われ仙太郎は頭を掻きながら、

仙「旦那何うも面目次第もねえ、だしぬけにエイと遣ったのは実は私なんです」

小「おや然うとは存じませんで甚だ御無礼を致しました」

仙「いや、此方が御無礼で、帰って見ると鬚が殺げて髪を結うことが出来ねえんだが、且

那工<sup>わっち</sup>実に私<sup>わっち</sup>ア驚きやした、あなたは華奢<sup>きゃしゃ</sup>な細<sup>ほつ</sup>そりした小さい体<sup>からだ</sup>軀だから、実はお案じ申したんですが、鬚<sup>す</sup>をジョキリと斬るくれえの腕前だから、仇が五人や十人出ても大丈夫だ」

小「あなたも中々の大力<sup>だいき</sup>でお強いことで」

仙「余<sup>あんま</sup>り強くありません、もう少しで柚子味噌になるわけで、頭を殺がれるところだつた」

小「誠に危ないことでした」

仙「私も殴<sup>ぶ</sup>たなくって好いことをいたしました」

小「手前も斬らなくって好いことを致した」

と歎<sup>なげ</sup>きの中の可笑<sup>おかし</sup>味<sup>み</sup>で、互いにドツと笑いになりました。小三郎は其の晩重助の宅へ泊つて、翌<sup>よく</sup>朝<sup>あさ</sup>早く白金の高野寺へ参り、父小左衛門の法事供養をいたし、それから家老渡邊外記にも面会致し、蘆屋の姥口の釜に一節切を預け、表向きに大野惣兵衛を附<sup>つけ</sup>覬<sup>ねら</sup>い、敵討出立のお話でございます。

### 三十五

さて稻垣小三郎は、図らずも蘆屋の釜並ならびに山風の笛が手に入りましたから、早速右二ふたし品なを渡邊外記という金森家の重役へ預け、仇討あだうちの免状を殿様より頂戴致しまして、公おも然てむき仇討むきに出立致しまして、其の後再度渡邊外記始め万年町の岡本政七、荷足の仙太郎、梨売重助等へ心に掛けて書面を送りました故に、小三郎は達者で居るといことが分りまして、仙太郎も政七も安心致して、小三郎の帰国を待つて居りますと、其の年の十一月頃から絶えて音信おとずれがございませんゆえ、何うなすった事かと皆心配致しましたが、何処どこから何処へ参ったことか、讐かたきを探して歩く身の上ゆえ、頓とんと其の行ゆくさき先が分りませんので、梨売重助も心配して、お手紙一本お寄越しなさない訳はないのだが、旅で煩いらつて在つしやるのではないかと案じられるから、売卜うらないしや者みに占て貰つたり、お伺を立てたりして居ります。其の頃向島の白髭に蟠竜軒という尼寺がございまして、それに美恵比丘尼という人が有りまして、能く人の未来の吉凶禍福を示しますので、これに帰依きえする信者も多分にございます。この比丘尼は坐禅をいたして大悟徹底たいごし、事を未然に悟みる妙智力みょうちりきを備えて居ります。智識に成りますと山で坐禅をいたして居りまして、里あきのことは明かに分るという、応驗おうげんけどき化道極さきりなく百千年の前まで看みぬくというえらいお比丘尼で、五十余歳でございしますが、年齢としよりも十歳も若く見え、でつぷりして色白く、婦人の身でありながら

種々いろくなことを致します。お弟子もいかいこと居りますが、お弟子と同じように働き、立た木を伐きりまして薪などにいたす事は労苦ことともしませんと云う、実に妙な尼でございます、重助は此れへ毎日／＼参りまして、

重「名前は出しませんが、お尋ね申しますが、或あるお方が旅へ出まして、いまだに音お信とずれが有りませんが、御無事でいらつしやいまいしょうか、お比丘さまお示しなすつて下さいまし、私は実わたくしに案じられてなりません、まだお年若ゆえ、御病氣とした処が御全快になりますれば、何とかモウお音信たよりが有ろうと存じますのに、いまだにお音信が有りませんのは何うしたのでございましょう」

と聞かれて、美恵比丘尼は暫らく考えて居りましたが、尼「いや老爺じいさん、心配おしでない、いまに音信たよりが有ろう、不図邂逅めぐりあうことが有るけれども、旅へ出て難義をなすつておいでの様子、殊に病難も見える」

と云われ、重助は力を得たから立歸つて、仙太郎や政七へも此の話を致し、何卒小三郎さま道中にて凶事のないようにと神信心を致して居りました。さて小三郎の許もとから絶えて音信おとずれの無いわけで、小三郎は不図した感冒かぜが原因で寐つくと逆上をいたし、眼病になり、だん／＼嵩じて、末には霞んで見えないどころではなくバツタリ内障眼そこひのようになりま

して、手紙一本書く事も出来ませんから、刀の詮議も仇敵かたきの探索も心に任せず、誠に残念に心得て、実に私は薄命わしの身の上であるが致し方はないから、一節切を吹いて人の軒先へ立ち一錢二錢の合ごうりよく力ちからを受けながら江戸表へ立帰ろう、もし大野惣兵衛の居処が分れば、私は盲目ゆえ迎とても仇あだは討てんから、屋敷の者を頼んで本懐を遂げよう、途中でも種々いろく能い医者いしやに聞いて手当もしたが、とんと其の甲斐がない故、此の身の上を政七や仙太郎に知らせたならさぞ心配致すであろうから手紙一本遣らないが、此の眼病では迎むかも刀の詮議も仇敵ありかの所在ありかも知れよう道理はない、世に捨てられた私の身の上なまじ、愁なまじいに生恥いきはじを搔くよりも寧いっその事一思いに割腹して相果てようか、それとも此の眼病が治る事も有ろうかと種々考えましたが、イヤ／＼迎むかも死ぬなら先祖の菩提寺へ詣で、亡父なきちちへ我身の薄命の申訳をなして、直すぐに其の場で切腹しようと、漸く心を決して、江戸表へ立帰ってまいりました。お話二つに別れまして、山口屋の音羽おとわでございます、是は稻垣小三郎の許嫁で、石川藤左衛門の娘おみゑという天下に勝れた美人でございますが、小三郎へ操を立て、他たのお客へは枕をかわせ肌を許しませんというが、誠に無理な事で、傾城けいせい遊女の身の上で、揚代あげだい金を取きんって置きながら、お客に肌を許さんとは余り理のない話でございます。能くお客が立腹致しません。只今ならば直すぐに警察署へ訴えになりまして相当の御処置が附きますが、

其の頃は初会という座敷限かぎりと云つて、顔を見ただけでお客が得心で帰り、二会目うらに馴染が付き、漸くお床と云う、それでも厭なら二度三度も振ることが有りますが、振られてもお客は人が好いから得心で帰り、あの花魁は振るから感心だ、振るといのは見識が高いからだ云つて悦んで居た方が昔は沢山有りましたが、誠に馬鹿氣たもので。遊びに往くのに妙な装なりをしたものです。天明の頃彼の千蔭ちかげという歌詠みがございましたが、此の人は八丁堀の与力で、加藤と申す方でございまして、同じ与力に吉田という人がございまして、華美はでな装をして吉原へまいりましたことがなにやらの書物にございましたが、千蔭先生は紫縮緬の紋付ついでの対で、千蔭緞子どんすの下着に広東織かんとうおりの帯を締めて遊びにまいったということが、今の目で見ると狂氣きちがいじみて居ります。吉田さんは黒縮緬の羽織ついでに對服御納おな戸縮緬んどの下着に、緋博多の帯を締めたんですが、此の上もない華美はでな扮装こしらえでございまして。其の時に千蔭先生は稲本いなもとのいなぎという名高い花魁を買って居りました。吉田さんも同じくいなぎを買って居りますが、互に知らずに居りました處、図らず互にいなぎを買っていることを聞き、ひらけて居りますから、

千「貴公も買って居るそうだが私も買って居る、これは甚だ不都合で、一人の遊女ふたりを兩人で買うのはお互に心持が宜くないから、彼は貴公に差上げよう」

吉「いや貴公に」

と互に押附おツツけ合つたが、内々ないくは惚れて居いるから、

吉「左様なら花魁に極めて貰つたら宜かろう、花魁のいゝ方を取らせよう」

と是から番頭新造しんぞへ話をいたし番頭新造から此の事をいなぎに話すと、いなぎも承知し、

二人共に仲の町の山口巴屋やまぐちともえやに並んで腰を掛けて居る処を、私が好いた人かたの手を引いて

連れて往いくのが真にいゝ人ひとぎますよ。という返事が来たので、

吉「若し私が色男もわしに取られたら何を散財しよう、黒縮緬の羽織を幫間ほうかんへ残らず出そうじや

アないか」

千「もし私わしを情いひ人ひとに取つたら紫縮緬の羽織を仕着せしよう」

と互に約束をいたし、両方とも百枚ずつ誂えまして、山口巴屋に腰を掛けて、両人りようにんとも

花魁の来るのを待つて居りまする処へ、花魁がニヤリと笑いながら来ましたから、互に己

かゝとを考えを附けて、のり出すと、花魁は千蔭先生の手を取つてスーツと茶屋へ連れて

往いきましたので、吉田さんは赤面いいたしましたが、昔の人は粹いきだから腹は立ちませんが、

何しろ仕様がな、千蔭さんは情いひ人ひとに取られたから、拵えた百枚の羽織を幫間へ総羽織

を出し、屋形船で中洲なかずへ乗り出す、花魁が中で琴を弾き、千蔭先生が文章を作り、稲舟いなふね



という歌が出来まして、二代目名人荻江露友が手をつけて唄いました。吉田さんは百枚の羽織を脊負込んで遣り場が有りません、紫縮緬が仲の町へ行渡って居りまして仕方がないから、深川へ往つて、さて斯うくいうわけで弾かれたが、百枚の羽織の遣り場がないから、深川の芸者に残らず着て貰いたい、恥を搔いて間が悪いから吉田の顔を立つて着ておくれという、お、嬉しいこと、吉田さん私が着よう、私も着ようと深川の芸者が残らず羽織を着たから、深川の芸妓を羽織衆くと称えるような事になりましたので、貰わぬ者まで自分で染めて黒縮緬の羽織を着たという、誠に華美なことで。昔は振られるのを悦ぶのが流行りましたのですが、今なら何のくらい怒るか知れません。悪くすると若衆を打擲致すなど、いう乱暴なことになります、振られて粹がつてたんですけれども、これは余り好い心持ではございません。然ういう華美な装を致しますのを、延年享年中の流行言葉で伽羅な装と云い、華美な装をする人を伽羅な人と云い、ちよつと様子の好い事を伽羅じやアないかと云い、持物が伽羅だとか、着物が伽羅だとか、男振りが伽羅だとか云いましたが、何が伽羅だか分りません、一体人間が伽羅だ了簡が伽羅だと言うんですが、何んだか少しも分りませんから、伽羅と云う事を段々聞いて見ると、贅沢という言葉であるという。其の頃「此の露で伽羅墨練らん白牡丹」と云う句が有り「吉原の

奢始めは笠に下駄」という川柳が有りますが、仙台侯は伽羅の木履を穿いて吉原へおはこびになり、水戸さまは鼈甲の笠を冠ってお通いなされたと云いますが、伽羅は大した事で、容易に我々は拝見が出来んくらい貴い物で、一木三名と申しまして、仙台の柴舟、細川の初音に大内の白梅、此の一木三名を木履に作って穿くような事は出来ませんが、お立派な下駄が脱ぎ捨てゝ有ったのを豆腐屋の亭主が拾ったが、其の頃の流行言葉で伽羅な下駄だと称えたのかも知れませんが、伽羅伽羅という言葉は誠に好い言葉でございまするな。只今ではオツと云いますが、オツというのも好い言葉でございます。其の時に伽羅大尽と云う人が華美な装をして来ましたが、紫緞子の羽織を着て緋博多の帯を締め、金造りの大小を差し、紫無地の壁チヨロの深い頭巾を冠って吉原町へ這入りますが、何時でも取巻の二人ぐらい連れて、一本差で、立派な家来が附いて参りますのだが、山口屋七郎右衛門方の抱え遊女音羽は、実に勝れた太夫で、彼を身受けしようとか手に入れようかと思つて、足を近しくまいりますが音羽は誠に厭やで、何うも虫が好きません、傍へ来られても慄つと致しまするから振ります。いくら来ても振つてゝ振り抜きますが、お客は来て来て来抜き、紋日の仕舞い何やかやまで行届かし、少しも厭らしい事を云わずに帰ります。音羽の方では振つて帰すのゆえ手当は能く致しまして、何んな事でも否とはい

いません、飲めない口だがチビく酒の相手を致し、

客「花魁茶会をしようじゃないか」

音「宜うざます」

客「花月かげつをしようか」

音「宜うざます」

客「花を活けようか」

音「宜うざます」

客「碁を打とうか」

音「宜うざます」

将碁と云えば将碁を指すのですが、真に巧いもので、双すご六ろくを振り歌を詠みます。かの伽羅大尽が筆を執ってスラくしたくと認めた歌は「音に聞く音羽の滝のことあやも見なれぬ袖に浪のかくらん」というので、笑いながら音羽もとの許へ出すを受取り、しみ／＼見て、此の歌を読んで居りましたが、

音「筆を貸してくんなまし」

と色紙を取ってスラくと筆を染め、

音「これは私の心ぎます」

と云いながら伽羅大尽へ渡すを取上げ読んで見ると「寄る辺なき袖の白波打返し音羽の滝の音も愧かし」という返歌でございますから、伽羅大尽は尚お惚れまして、

客「何うだ藤六」

藤「何うも実に感服でげすな、是に於て花魁の何うも……実に取敢ず即答の御返歌になるてえのは、大概の歌詠でも出来んこととでございますのに、花魁は歌囊俳諧囊何んでも天稟備わった佳人なんで、大夫がお通いなさるも無理はないテ、何うもこれを花魁の前でいうと太鼓を持つようでござるが、大夫が夢中になって通つても宜しいんで」

客「いや花魁は私の傍へ坐つて居るのも厭だろうが、私は嫌われても何ういうものか花魁の顔を見て居るだけでも心持が宜しい、と云つて何も厭がるものを無理に枕を並べろというは野夫、只氣に入つたものと並んで居るだけでも心持が宜しいて、なア、山田」

山田「実に手前は矢張其の通りで、貴方はお嫌いか知りませんが、男同士は是は別で、私は何んだか貴方に惚れてますよ」

客「己に貴様が惚れてるといふのか」

山田「へえ、只モウ貴方の傍に斯うやつて坐つてれば心持が宜いのですから、それがため

に何時でもお供をしてまいるわけですが……これは何うも此のお歌は花魁手前が頂戴致したいね」

音「それは真ほんに出来が悪うございます、人に見せておくんなますな、黙ってゝくんままし」

と云いながら立ち上り、ニヤリと笑ったなり次の間へ立ち、瀧たきの戸とという番頭新造とヒソ／＼話を致して居りますので、どうも仕方がない。伽羅大尽は来て／＼来抜くが、何うも虫が嗜すきませんから振るも道理、此の者は実父石川藤左衛門を三河島田圃みかわしまたんぼに待受け、鉄砲にて打殺した大野惣兵衛という者でございますが、八橋やつはし周馬しゅうまと偽名致し、伽羅大尽といわせておりますが、音羽は幼年の時は一ツ屋敷に居りましたが、大野の顔を知りませんから、近しくまいりますが、父の仇あだとも知りません、或時雪の降る日に碁を打って居りましたが、愛想だから態わざと二三目音羽が負けて対手むこうの快いように致します。

伽「ア、勝った」

と悦んで居る処へ酒を勧めたからグツスリ酔えいが廻り、伽羅大尽は碁盤の上へ俯伏うつぶしてスヤリ／＼と眠つてしまいました。隣座敷で番頭新造が、

番新「花魁え、おまはんは本当に感心じやアありませんか……あら伽羅さんは碁盤の上へ俯伏して寐てしまったよ、額あしに碁石の痕あとが付きますよ、おまはんは幾度遣つても伽羅さん

には敵<sup>かな</sup>わないのねえ、讐<sup>かたき</sup>を取<sup>と</sup>つてやんなましよ」

と云う声に驚<sup>き</sup>き、ふと目を覚<sup>さま</sup>しキヨロ／＼身<sup>あたり</sup>辺を見廻しながら溜息を吐<sup>つ</sup>き、

伽「ア、何を」

番新「おやお目が覚めましたね、厭ですよオホ、／＼、額に基石が二個<sup>ふたつ</sup>くツついてますよ」

伽「ア、大層酔<sup>よ</sup>つた好<sup>よ</sup>い心持だ、肝を潰<sup>つぶ</sup>したが今何んだか讐<sup>な</sup>を何んとか云ったが何んだ」

番「ナニ花魁がおまはんに二度負けたから、私<sup>わつし</sup>が讐<sup>な</sup>を討<sup>う</sup>つて遣<sup>や</sup>んなましと云ったんざます」

伽「そうか……ア、少し酒を飲<sup>すこ</sup>み過<sup>すこ</sup>して……山田今日は帰ろう、金吾<sup>きんご</sup>も帰ろうかな」

山田「是からですか、今晚は貴方御一泊遊ばせな」

伽「イヤ少し気分が悪いから帰ろう」

と何時になくぐず附<sup>つき</sup>かずに歸りましたが、脛<sup>すね</sup>に疵<sup>きず</sup>持ちや笹原を走れぬという比<sup>たと</sup>喩<sup>え</sup>の通<sup>と</sup>りで、音羽の親藤左衛門を殺した身の上、若し此の事が知<sup>し</sup>ればせぬかと思うからで、茶屋から番傘を借<sup>か</sup>り、山田が差<sup>さ</sup>かけ、渡を越<sup>こ</sup>えて向島の土手へかゝつてまいりますと、向うから破<sup>や</sup>れ切<sup>き</sup>つた編笠を冠<sup>かぶ</sup>り、細竹の杖を突<sup>つ</sup>き、旅慣<sup>り</sup>れた行装<sup>こうしやうえ</sup>で、脚半甲掛も汚<sup>こ</sup>れて居ります、ちら／＼と降<sup>ふ</sup>る雪の中を杖に縋<sup>すが</sup>つて來た者は稻垣小三郎でございます。

## 三十六

稻垣小三郎が江戸へ這入つて來ましたのは、白髭の蟠竜軒にいる美恵比丘尼は何でも能く<sup>あた</sup>中るが、別して病氣のことなどは功者だということを聞いたから、これへ往つて我<sup>わが</sup>業病の全快するか<sup>し</sup>為ないかを占て貰わんと、トボく遣つてまいつたもので、此方<sup>こちら</sup>は山田藤六が、

山田「さアく土手へ上りましょう」

と土手へ上る途端に突当りました。其の頃侍は威張つたもので、町人や何かを見ると無法に見下し、

山田「コレ氣を附けて歩け間拔め、氣を附けて歩け、無礼ものめ」

小「これは怪<sup>け</sup>しからん、私<sup>わたくし</sup>は盲人でございますから、斯様に路<sup>みち</sup>傍<sup>ばた</sup>へ附いてまいりますのに、お目の見えるお方でありながら、貴方の方から手前へ突当つて置き、彼は仰せられるは御無体かと心得ます」

山田「此奴<sup>こいつ</sup>、高慢なことをいうな」

とドンと突きましたから、小三郎はヨロ／＼と蹠<sup>よろ</sup>けて泥だらけの杖を彼の伽羅という結構な身装<sup>みなり</sup>へ当て、泥を附けましたので、

伽「コレ山田、なんだ目の悪いものを突転ばして、コレ見ろ」

山田「これは……怪しからん奴だ、大夫の結構な召物へ泥を附けて」

小「あなたが突飛したから私が蹠<sup>わたくし</sup>けたので、盲目でございますから何<sup>ど</sup>のようなことを致しましたか存じませんが、それを彼是仰しやつては困ります」

山田「此奴理窟ッぽいことを申して、盲目じゃアあるまい」

小「杖を突いて歩いて居<sup>お</sup>るものを、盲目でないとお疑りなさるは御無理でございましょう」

山田「まだ理窟を申すか、偽<sup>にせ</sup>盲目か改め遣る、笠を取れ」

と云いながら小三郎の冠った編笠へ手を掛け、無理に引取りましたから、小三郎は輪ばかり冠ったなりで、

小「あなた何をなさるんです」

と云いながらズツと寄って来る顔を見て、大野惣兵衛はぞつといたし、此奴己を讐と附け狙い、国表へ出立したことは先頃ほのかに丈助から聞いたが、此奴何ういう事で眼病に成ったか、内障<sup>そこひ</sup>眼<sup>め</sup>のようだが、此処で逢ったは僥倖<sup>さいわい</sup>、此奴があつては枕を高く寐ること



は出来んから、此処で討果してしまえば丈助も此方こつちも安々やすくと眠られる、幸いのことだと思ひ、雪は益々降出し、日の暮方ゆえ往来は止つて居りますから、

八橋「これく盲人」

小「ハイ」

八「手前は盲目かも知れん、また此の者が何うしたか存ぜんけれども、予が服へ斯様に泥を附けて、其の上に理窟を申し、杖を以て手向い立だてをすれば許さんぞ」

小「誰方どなた様かは存じませんが、手前は盲人でござるゆえ、誰方が側にいらつしやるか心得ません、不調法が有つたら御勘弁下すつても宜しい訳、全体侍たるものが弱いものいじめをして歩くは宜しくないこと、あまりお情ない、俄にわか盲目で感の悪いものを突つきとば飛すとはお情ない人々だ」

八「まだ口答えを致すか、此の者に何ういう事があつたか知らんけれども、手前は此れに立つて居おるのに、服へ泥を附けて置きながら彼是と無礼を申せば斬捨てるぞ」

小「さアお斬りなさい、これは面白い、さア斬られましょう、手前は盲人でございますが、何咎とがもない者を無闇に斬つて済みますか、さア斬られましょう、怪しからん事を仰しやいます、罪ない者を斬るということはありませんまい」

八「イヤ仮令<sup>たとひ</sup>盲人でも無礼があれば斬つても宜しい、許さんぞ」

と云いながらズラリと引抜く太刀の光りに、傍に居た山田藤六が恟<sup>びつく</sup>りいたしまして、

山田「大夫マアお待ち下さいまし、御立腹は御尤ですが、如何にも感が悪いと見えまして、  
変なところを覗<sup>ねら</sup>つてる様子は全く盲目に違いありませんから、お手討は余りお情ない……  
コレ謝まれ、全体手前が宜しくない、盲目滅法界に人さまのお身柄も分らんから無闇なこ  
とを申して、このお方は拙者の主人同様の大切なお方だから謝まれ」

小「イエ何も謝まる訳はありません、拙者の方では何も無礼は致しません」

八「だから許さんと申すのだ」

山「でげしようが……ア、危ない、マア、全く盲人でございますから」

と宥<sup>なだ</sup>めて居りますが、中々聴きません。

小「何をなさいます」

と云いながら古竹の杖を持つて無闇に振廻しますが、盲目<sup>もうもく</sup>でこそあれ真影流の奥儀<sup>おくぎ</sup>を極<sup>きわ</sup>めた腕前の小三郎、寄り附かんように振廻す。

山田「コレ危ない、左様なことを致すからお手討に逢うようなことになるのだ……あなた  
盲目<sup>めくら</sup>などを斬つて罪を作るでもございますまい」

八「まだ手向いをするか、もう捨て置けん、斬らんで置こうか」

と云いつゝ飛込んで一討ひとつうちにと小三郎へ斬り掛りました其の刃やいばの下へ、鼠の頭巾を冠つた人が這入つてまいり、小三郎を後うしろに囲いながら、

尼わたくし「私は通りがかりのものでございますが、何うか御勘弁なすつて下さいまし、全く盲人の様子、殊ことに感の悪いものでございます、盲目根性と云つて、なにか剛情な事を申しまして、お詫ことごとをいたす術すべも心得ませんゆえ、お腹立でもございましょうが、なり代りまして私がお詫をいたしますから何うか御勘弁を」

八「手前だちの知つて居ることじやアない」

尼わたくし「私は白髭の蟠竜軒にいる尼でございしますが出家の身の上として、今斬られるということ聞きまして、其の儘見捨てゝ往ゆくわけにはまいりません、人を助けるのは出家の役、全く盲人で、殊に感の悪いゆえ粗忽そそくをいたした上に、剛情なことを申して居りますから、御立腹は御尤もでございますが、何うか私にお免じ下さいまし」

と詫わびる。山田藤六は何うかして斬らせたくないと思つて居るところ故悦びながら、山田「能く中へ這入ってくれた、誠に忝かたじけない、大夫尼が這入りました、此奴が剛情を張るもんだから大夫がお腹をお立ちなさるのだ、コレ尼お止め申してくれ」

八「なにも手前の知つてゐる事じゃないから何も云うには及ばん、何うあつても斬らんければならん」

尼「どうぞ御勘弁を」

八「御勘弁たつて勘弁相成らん」

尼「もしもお聞濟みなく此の盲人を斬ると仰しやれば、出家の身の上で此の中へ這入り、左様でございますかと此の儘に身を引く事は出来ません、仕方がありませんから此の上は此の者の代りに私をお斬り遊ばして下さいまし……お前さんも黙つて居れば宜いのに、返し言をするから先方でも御立腹なさるのです……併しあなた私が斯う衣の片袖を此の者へ掛ければお助けなさる筈、お武家さまだけに御存じで入らっしゃいますようがな」

八「いらざる処へ飛んだ者が出てまいった、宜しい、出家が中へ這入ったこと故其の衣に免じて許してやるが、無礼者め以後たしなめ」

小「私が何時無礼を」

尼「まア、それはお前さんが善くない、然ういう性質だから眼も悪くなる、心を静かにしないで猛り狂うと、却つて逆上して眼に障る、何事も私にお任せ」

小「はい、」

山田「尼、誠に忝ない」

八「コレ盲人理窟張つたことを申すと了簡せんど、尼きッさと連れて往けい」

尼「さアくお前さん、私と一緒においで」

とはからなだれに美惠比丘尼が小三郎を連れて白髭の方へ参るのを八橋周馬が見送つて居りましたが、

八「山田」

山田「へエ」

八「白痴め何んだって取支えて詫口なんぞを利くんだよ」

山田「ですが全くの盲人をお斬り遊ばすつて常に似合わんことを仰しやいますから、大きに驚きました」

八「手前だちは何も知らんからだ、山田少し耳を貸せ」

山田「へエ」

と耳を口元に差附け、

山田「へ……左様でございますか……フーン成程」

とコソく暫く囁いて居りましたが、慾というものは怖いもので、度胸のない奴ですが、

山田「宜しい、それでは今晚蟠竜軒へ忍び込んで様子を伺いましょう」

と是れから二手に分れて八橋周馬は堀切の八ツ橋畠へ帰り、山田藤六は蟠竜軒へ躡けてまいりました。此方は左様の事とは知らず帰つてまいりますと、多勢のお弟子が、

「お帰り遊ばせ〜」

美恵比丘尼は小三郎を三疊ばかりの部屋へ通し、

尼「さア〜此処へおいで、私は彼方へ往つて看經をしまつてから緩々と話をいたしましうが、お前さん、軽はずみな事をなすつてはなりませんよ、お前さんに会いたがつて、毎日の様に当寺へお参りに来る人があるから、その話もしましようが、ひよつと私の間違つて居るか知りませんが、お前さんの眼病を酷く心配して居る様子ゆえお痛わしゆう存じます、あんな荒々しい侍に突掛ると並の身体ではないから、心を柔しく持たんとお身を果すことになりますよ」

小「千万忝のうござるが、如何にも無法で、木履を持ちまして私の肩を蹴つて、二度目にまた耳のところを蹴ましたから、捨て置かれんと存じました、仮令修行を致す身の上でも、かゝる下郎のために父母の遺体を汚されたは如何にも心外でございます」

尼「いや皆なそれは約束事でよい人も零落れる事も有れば、また心掛けの善く無い人でも

結構な暮しをして、日にち々のことに困らないのは前世の因縁であるから、何事も気を永くして時節の来るのを待たなければならない、また病も治らん事はありませんから緩ゆつくりお寝なさい、明日あしたは会いたいと云う人が屹きつと度来ましよう、其の人に逢えばお前さんの身も立ちましようからよ」

小「千万忝けない」

尼「何んぞ上げましようか、寺だからお肴も何も無いが、温あつたかいお粥でも拵えて雑炊のようなものを上げましよう、私は穀類はいけませんそばがきが蕎麦掻は喰べるから有りますよ」

小「誠に御真実に有難う存じます」

尼「お寒かろうから、もつと火を沢山持つて来て上げな」

とはから行あんどう灯を持つて参り、夜具を貸して寝かしてくれました、美惠比丘尼は居間に這入り看経を仕舞い、蕎麦掻を少し喰べてから薄い木綿の座布団を内ないぶつ仏の前へ敷き、足を組んで坐禅かんぼう観法をいたし、無心になつて頻しきりと公案をして居りますが、雪は夜よに入り深くなりますから一際しんと致しています。其の内にお弟子の尼達も昼の疲れと見えまして、皆スヤリいびきと寝附く。中には鼾いびきの強い者もあります。すると台所口から忍ながもび込んだ山田藤六は、そつと縁側伝いに来まして、破れ障子から覗いて見て、障子越しに長

物で突殺せば、大野惣兵衛から五十両褒美をくれるというので、慾張った奴で、劍術は少し心得ておりますが、至つて臆病者でございます、怖々様子を覗いますと、小三郎は何を思いましたか不図起き上り、旅荷を引寄せ、合切囊の中から取り出して、大野惣兵衛の冠った頭巾と、傍には國俊の木剣造りの小脇差を置きました、小さい位牌を恭しく飾り、実父稻垣小左衛門が最後のときに握りつめたる仇の頭巾を手探りで前へ置き、慇懃に両手を突き、

小「ア、残念でございます、お父さま誠に残念でございます、小三郎薄命にして斯る眼病に相成り、御尊父の妄執を晴らす事もお刀の詮議をいたすことも此の盲目では思いもよらず、又大野惣兵衛に出会いたす時あるとも、一刀とて怨むこともかなわぬとは、神仏にも見離されしか、斯の如き尾羽打ち枯した身の上になり、殊に盲目の哀しさには、口惜しくも匹夫下郎の泥脛に木履を持つて」

と云いかけて身をふるわせ、

小「足下にかけられ、如何にも残念に心得ます、御両親より受けました遺体を汚せし不孝の罪、いかに盲目なればとて口惜ながら手出しも出来ず、此の儘に何時まで長らえ居りましても、素より稻垣の家を興す認めはござらん、生甲斐のない我が身の果、死する時に死



せざれば死に勝るの恥あり、慙なまじいに生恥をかい、て稲垣の苗字を絶たし、殿さまの御家名を汚します不孝不忠の小三郎、只今此の処において切腹いたし相果てまする、場所も幸い尼寺、飯令仇は打ち得ずとも、悪人大野惣兵衛を組み敷いて首を掻き取ります心得で、只今この黒羅紗の頭巾を突き破り、惣兵衛の首を掻取り、直様すぐさま此の場で切腹いたし、草場へ参つた其の上で本意を遂げざるお詫をいたします、あゝ残念でございます」

といいながら、かの黒羅紗の頭巾を左の手に握り詰め、片膝へ敷据えて、右の手にて木剣作りの小脇差を引抜き、十分の怒いかりを面おもてに表わし、見えぬ眼まなこにて黒羅紗の頭巾を睨にらみつけながら、

小「吾身わが不肖にして本懷を遂げずとも、秦しんの豫讓よじょうの故事に擬なぞらえ、この頭巾を突き破るは実父の仇あだ大野の首を掻き取る心思い知れや、大野惣兵衛」

と彼の頭巾をズタ／＼に突き破り、國俊の小脇差を持ち直して我腹わがへ突立てようとする処へ、何時か忍び込んだ山田藤六が障子越しに、小三郎を突殺そうと覗ねらつておりますが、山田藤六が突かなくつても当人は腹を切るので、当人が腹を切らなくても、後うしろに突殺す奴が来て居るから、稲垣小三郎の生命いのちの助かりようは御座いません。

## 三十七

只今美惠比丘尼が坐禪觀法中、稻垣小三郎が自殺をしようとするところへ、山田藤六が忍び込んで、これを刺殺さしころそうといたします。夜はしんくよと更け渡り、雪は益々降りしきる。北窓に当る雪折竹ゆきおれだけの音サラ／＼と聞えますきこるが、物音の思うように聞えんのは、余念が有るゆえに音を聞分けることが出来ませんので、草葉ですだく虫には種々いろ／＼有りまするが一緒に啼ないて居りますると、何れが鈴虫か、松虫か、機織はたおりか、草雲雀くさひばりか、とんと分りませんけれども、余念を去つて沈着おちついて聞きますと分りますから、年を老とつた人が夜中に蟻の這うのも分るといふは、心が据すわつておりまると、細かい物でも真の闇に見えるという、これを心眼と申しまして、精神たましいが沈着おちついて無心になれば何でも速すみかに分りまするものと見えます。雪の降るのを聞いて居て、今何れどだけ積つたというのも分るそうでございます。美惠比丘尼は能く分ると見えますして、坐禪中に小三郎の自殺しようとするのも、山田藤六が後うしろから小三郎を突き殺そうとして居ることも、隣座敷に居りながらちやんと見るが如く分ると見えます。今藤六が障子越しに突込つきこみに掛る途端に大喝だいかつ一聲いっせいで、

尼「喝<sup>かア</sup>ー」

と云いました。死したるものゝ吐くを死喝<sup>しかつ</sup>といい、生きたるものが吐くを生喝<sup>しょうかつ</sup>という。この大喝一声は実に天地へ響く大<sup>たい</sup>声<sup>せい</sup>でございまして、ガーと云ったときには気の弱いものは胆<sup>きも</sup>を挫<sup>ひし</sup>がれます。獅子出<sup>いで</sup>て吼<sup>ほ</sup>ゆる時は百獣脳裂すというて、王獣が怒<sup>いか</sup>つて吼える時は小さい獣の頭が碎けるというぐらいでございます、と比喩<sup>たとえ</sup>にも申しますことで、釋迦がいう事は羅漢でさえも脳裂するくらいのが有ったといひます。今只た一<sup>たつ</sup>言<sup>ひとこと</sup>美惠比丘尼の「ガーツ」という一喝が山田藤六の耳へ響きますと、パタリと尻餅を搗<sup>つ</sup>いて氣絶致しました。と云うと嘘のようですが必ず氣絶するということです。稻垣小三郎は劍術も上手で胆力の据つた人だが、耳元を突き透した一声に思わず知らず國俊の小脇差を取落したところへ、美惠比丘尼が小さい鉄<sup>くろがね</sup>の如意を持って出て参り、小三郎に向い、美惠「まア何ういうもので其<sup>そん</sup>様な心得違いをなさるのじゃ、そんな事をするといけなから私がくれ／＼云つたのだ」

小「お道場を汚<sup>けが</sup>そうといひ誠に相済みませんが、生甲斐のない此の身の上、強<sup>し</sup>いてながらえて居りますれば家名を汚し、主名を辱かしめ、実に此の上ない大罪<sup>なにとぞ</sup>、何卒<sup>みのが</sup>お見遁<sup>みのが</sup>し下すつて、御当庵にて自殺いたし相果てますれば、手前幸いの死<sup>しにじころ</sup>処<sup>ところ</sup>でございます」

美恵「いや、いくら死にたいと云つて腹へ刀を突込んでも、死ぬ時節が来なければ死なれんものじや、また死ぬ時節が来れば何程助かりたいと思つても助かることは出来んものじやから、慌てゝ死のうとするは迷いじや、宜くない思いちがいじやゆえ、まア／＼脇差をお渡し」

と無理に取上げ、後を振向き、

美恵「知行ちこうや、妙桂みょうけいや、出ておいで、泥坊が這入つたよ、戸締りを宜くして置かないからだ、妙達みょうたつや、宗榮そうえいや」

なかと呼びましたから、お比丘さん達みんなが皆出て来て見ますと、拔身を投ほうり出し、板の間の処に眼を廻して居りまするものがありますから、

知「何うしてマア此処へ賊が這入りましたろう」

妙「拔身を持つて居ますよ」

宗「腰にもまだ差して居ります」

美恵「そつくり其の儘グル／＼巻にして藪の中へ投り出してしまいな、また這入るといからんから」

と是から多勢おおぜい寄つて集つて藤六を縛つて外へ突出しましたが、藤六は終夜凍よっぴてえるよ

うな目に逢いました、此方こちらは美惠比丘尼しきが頻りに小三郎の死を止めて居ります内に、夜も明け渡り、翌日になりますと、雪の明日あしたゆえ快晴でございます。已刻よつ半時分に参詣に來ましたのは高橋に居ります梨売重助で、図らず小三郎に巡り逢い、

重「あなたはお情ない、何故私なづかしの処をお尋ね下さいません、仙太郎親方も万年町の旦那さまも貴方の事ばかり申してお案じ遊ばして在いらつしやいますから、兎も角私わたくしの処まで入つしやいまし、何の様な事でもお力になりましょう、あなたが輕はずみな事をなすつて下さいますと、跡のもの、嘆なげきは如何ばかりか知れませんが、兎も角も」

と云うので蟠竜軒を連れ出し、高橋の宅うちへ歸つてまいり、急に仙太郎や万年町の主人を迎いにやりましたから、皆みんなな來まして驚き、情ない御眼病で有る、兎も角もお世話を致しましたよう、と其の頃の名医を頼んで段々と手当を致しました処が、お医者いしやの云うには、ナニ丹誠したら治らんことも有るまいが、余程逆上をして居るし、殊に悪い血が有るが、手当をして見ようと云うので、岡本政七が私の宅わたくしたくへ引取つて何の様にもお世話をしようと云えば、仙太郎が傍そばから斯ういう旦那ゆえ、お嬢さんやお母さんふくろがちややすると御心配でなさるといけないから、却つて別にお家うちを持たして上げる方が氣兼ねなくつて宜からうと云うので、方々探すと、深川扇町ふかがわおうぎまちに明家が有りましたから、此家これへ小三郎を移らせ、

雇い女を一人附けて氣樂に暮させ、使い早間はやまには何うせ遊んでいるからと安吉を附けて置き、政七も仙太郎も重三郎も折々来ては、小三郎の心を慰めることを申しますが、小三郎は只々鬱ふさいで居まして、何時までも厄介に成つて居るは氣の毒だと云つて、何にも商売は知らんが、少々は指田流の笛を吹くから、習いに來るものが有るなら教えてやりたいと云うので、門口へ指田流の標ひょう札さつをかけて一節切の指南を始めましたが、品の善いい芸は習う人は稀でございます。たま／＼木場辺あたりの子供衆しゅが二人三人まいますが、これを相手にして居ると、お嬢さんが稽古にまいまするので、奉公人が多勢附いてまいまするから、月々可なりに手当をしてくれるゆえ、大きに小遣取りになります。其の年も果て、翌延享三年二月二十九日の晩に、浅草馬道うまみちから出火いたし、吉原へ飛火とびひがしました。或あるいは飛火がしたのではない、吉原からも出たのだと申します。此の火事で吉原が類焼したために、深川に仮宅が出来ましたから、深川の賑にぎわいは実に大したことで、小さい女郎屋は馬道山谷辺へんの船宿の二階などを借りて、立退中たちのかちゆう稼かせがせて居ります。其の頃評判の遊女屋山口七郎右衛門の仮宅は深川仲町なかつちようで、大した繁昌でございます。仮宅の時には好よい花魁けいを買えることが有ります。只今と違つて昔は尚おゴタ／＼こぞ挙あがつてまiori、名高い花魁を買つて見たいと、身分の無いものは悪才わる覺かくをして山口屋へ登あがりまするが、立退中ゆえ

万事届きませんでどさくさして居ります。

客「何うしやアがつたんでえ、わけしゅ若え衆」

と無闇に手ばかり叩く。

若「へいく」

客「オ、若え衆」

若「へいく」

客「返事ばかりしてえやアがる、冗談じやアねえぜ、オイ若え衆、こつち此方へ這入んねえよ」

若「へい」

と障子を明けてお辞儀をする。

客「其処じやア話が出来ねえから此方へ這入んねえ」

若「へい」

と首を擡あげて恟びくり致し、

若「旦那わるいたずら悪戯をなすつては困ります、疊を残らず揚げて段々積み重ねちまつて、其の

上に乗つてらつして何う致したんでございます」

客「オ、若え衆、少しものをなくしたから疊を残らず揚げて見たが知れねえから、これか

ら天井板を引剥ひっぺがして探して見ようかと思うから、踏台か何か持つて来てくれ」

若「ハイ／＼何か紛失なくなりましたか」

客「まア此方へ這入へえんねえ」

若「でも這入はいられませんか」

客「足の親指で爪立つて這入はいんねえ」

若「ハイ」

と中へ這入りながら、

若「何が紛失なくなりましたか知りませんが、斯んな悪戯わるいたずらをなすつてはいけません」

客「先刻さっきの、番頭新造が花魁を一ちよつと寸連れて来たかと思うと、直すぐに居なくなツちまつたん

だが、慥たしかに此処へ這入へえつたのに違ちがえねえものが居なくなつて見れば、この座敷は己が借り

たもの、此処の主人が大金を出して抱えた花魁なら、大切な預り物よ、それが紛失なくなつては

己が済まねえから、畳を揚げたり天井板を引剥ひっぺがして探そうというのが分らねえか、此処に

小さい箆笥ひらびが有るから引出まで明けて探したが、何にも無なえ様だ」

若「御冗談を仰しやつては困りますナ、女郎衆しゅは継針つぎはりや二朱金では有りませんから、ピ

ヨ／＼畳の間に隠れることはありませんのに、煤掃すすはきでも始まつたような事をなすつて



は困ります、ホンの立退中の仮宅でございますから行届ゆきとどきません勝でしょう、此の通り  
 ゴタ／＼して居りますのに、悪戯わるふざけをなすつては困ります、好い花魁よわたくしは私どもの自由にはな  
 りませんので、へエ」

客「篋べらぼうめ棒奴、出されねえものなら何で客にして上げたのだ」

若「でございますが、好い花魁になりますとお初会の処は大概お座敷ざしき限りで」

客「生意気なことをいうな、仲の町の茶屋で顔を見て座敷限で帰けえるくれえな事は知つて  
 が、立退中だつて斯こんな宅うちを借りていやがッて、座敷もねえもんだ、物置き見たようなも  
 のだから叩たたつ毀こわしても宜いいんだ、何うせ錢の有る人間じゃアねえから、足を近く来るので  
 はねえや、大層てえそうな花魁だと名高いから、斯ういう時でなけりや会う事は出来ねえと思つ  
 て、態々わざ／＼来たんだのに、早く出さねえと殴うるぞ」

若「乱暴でげすな、お殴りは困ります、へイ／＼、もう今にお出でゞございましょうが、  
 花魁は御病身でげすから、お癩が痛くなることが折々有りますから、へイ」

客「なんだ、お癩が痛くなると、ヘン篋棒てめえめ、手前てめえじゃア分らねえから、もう少し訳の分  
 る奴をよこせ」

若「別に分るものは居ないので」

客「手前より些とは分るものが有るだろう」

若「些とぐらい私より分るものは居りまする」

客「分るものが有るなら其の分るものをよこせ」

若「丑刻過は不寝番の係で新助の係りではございせんから私の係りになります」

客「丑刻過は不寝番の係ぐれえの事は知つてらア、吉原の事を知らねえ人間だと思ふのかえ、おつウ指図がましい、教えるような変なことを云やアがるが、吉原の作法を知つてるか」

若「吉原に奉公致して居りますから大概の事は存じて居ります」

客「それじゃア吉原町は以前は何処に在ったか手前知つてるか、昔慶長年中の相州の浪人

で莊司甚右衛門というものが願つて、遊女三千人の御免の場所を建置かれる事になつたが、

其の前は常磐橋御門から道三橋の近辺を柳町といつて、又鎌倉河岸に十四五軒あ

つて、麴町にもあり、方々に散ばつて居たのを、今の吉原へ一纏めにしたので、吉

原というのは、其の頃葎葎の生えて居たのを埋立ったから葎原というのだが、後に江

戸繁昌を祝して吉の字を書いて、吉原と読ませるんだという事を聞いてるが、一体は花

魁に大層な装をさせては済むわけのものではねえのに、朝飯前には持上らねえような帶

を締めて、大層な装なんぞしては済むめえ、総縫金銀摺箔一切着せ申間じくとい  
 う旧時の願い立とお触出しのお書付に違つてゐるんだ」  
 若「誠に何うも心得ませんで、へい」

### 三十八

客「何にも面倒なことをいうのじゃアねえ、花魁に会わせりやア宜いんだ、己ア伊皿子  
 台町の者で、遠い処から来たものだから思いやれよ、手前の面は乙ウ青いなア」

若「へえ病身でげすから」

客「何か宜い薬でも飲んで身体をしつかりしねえ、厭にブテく肥つてやアがるナ、青  
 脹れだな」

若「どうでもようございます」

客「只花魁の身の上が聞きてえのだから、早く呼んで来てくれ」

若「中々私などの手には乗りません花魁で、何か申しても返事も致しません、主人が言葉  
 を掛けてもいけませんくらいなので、へえ、私は花魁方に使われて居る身の上でございま

すから」

客「こん畜ちきしやう生殴るぞ、腕がリュウく鳴るぜ」

若「腕なぞを鳴らしては困ります」

客「能く主人に然そう云つてくれ、これっ限きりしか来ねえお客と見くびつてるだろうが、己は花魁が来ても床いそぎのじん助とは違うから、やぼを云うのじゃアねえや、山口屋の音羽と云つちやア名高い花魁で、大したものだ、亭主のために身を売ったというから、其の身の上話を聞きてえと思つて来たんだから、一寸ちよつと会わせろ」

若「ハイ、只今直じきに、少々立込んで居りまするから、明方あけがたまでにはお廻りになりましたしやう」

客「お神輿みこしでも待ちやアしめえし、お廻りになるつてやアがる、殴るよ本当に、仲どんは止めやちまや、可愛相に青脹れで、頭髪あたまを剃すツちまいねえ、衣の勸化かんげぐれえはしてやらア」  
若「へ、何いずれまた」

と云い捨てゝ往ゆきました。

客「オイ冗談じやアねえぜ、オイ、逃げてしまやアがった」  
するとまた隣座敷で、

客「若い衆さん、ちよいと若い衆さん、其処をお通りかえ、若い衆さん、ちよつと御尊顔を拝したいね、あなた」

若「へエ、これは何うもお淋しゆうございましょう、生憎立込みまして、花魁は只今じきおいでになりましょう」

客「成程明方までにはお廻りに成りましょうから、それまで目を覚まして待つてましよう、あなたは青くはありませんね」

若「お隣ずからで聞いて居らッしやつて、おひやかしなすつては困ります」

客「誠に弱つたね、何か隣の真似をするじやアないが、我々共が花魁を買い上げて、抱こして寐んね仕ようと云つちやア些と増長した申し分だから、然うは云わないが、只花魁に一寸会つて見たいので、歌を詠んだり碁を打ったり、花を活けたりして高尚ということを聞いたが、だん／＼聞けば剣術の先生のお嬢さんだとか、お屋敷さんだとかいうことだが、何ういうわけで斯んな苦界へ沈んだかと御様子が聞きたくつて来たんで、決して何うしようの斯う為よふのという訳ではありませんが、隣でバタ／＼畳を揚げるといふので、何分にも寝られません、あの騒ぎですものを」

若「へい、誠に御迷惑な訳で、まるで煤掃き見たようで、畳を積み揚げて、御丁寧に其の

上に布団を敷いて坐つてゐるんですぜ、天井へ頭が支えて居りますので、誠に驚きました」客「あゝ云うものを相手にして無理なことを云われゝば、誰だつて虫があるから、何を云やアがる、手前ばかりがお客じやアねえと突掛りたいとこだが、青脹れといわれても何といわれても逆らわずに居て、氣の折れてるところは実に感服しやした、恐れ入りやした、これは何うしてなかゝ苦勞をしなければ出来ないわけだが、お前さんも余程苦勞をしたね、やつぱり道楽のあげく、親兄弟に見放され、抛なく斯んな処へ這入つたのでげしう、お前さんがまだね息子株の時分に、様子の好い花魁のそこへ足を近く通つた末に、花魁に乙な臭いが有つたところから病を引受けたんでげしう其の何うも青く白いののは、種々なことを御存じでしょう、親がやかましくつて勘当をされ、親類には見放され、抛なく斯んな処へ這入つて、濡雑巾を握んで板の間を這つてゝ、番頭新造や何かゞ我儘をいうことを聞いてゐるような身になりさがつたのででしょう、女のために責め殺されて死にたいという念が有りましょう、お前さんはそれが願ひでしょう」若「へゝゝゝなに願ひと云うわけではありませんが」客「何でもお前さんは沢山遊んだ人に違ひない、さん／＼親不孝をした揚句、斯ういう処へ這入つたんでしょう」

若「へへへへ」

客「然うでしよう、少し声がしやがれてるし、いっちゅうぶし一中節を習やつたろう、あのーなにを唄つたろう……あれは端物はものだがいゝねえ、英一蝶はなぶさちようえの画に其角きかくが賛さんをしたという、吉田の兼好法師の作の徒然草を」

若「へえ何方どちらさままで」

客「お耄とぼけでない、唄つたよ、お前が撥ばちを持って、花魁の三味線でお前が変な声を出して唄つたという噂が残つてるよ」

若「御冗談ばかり仰しゃいます」

客「何うもお前は本当に苦労をした人に違いないが、お前が客で遊びに来る時分には、女郎衆ていようしゆが傍そばに居た方が宜よいか居ない方が宜いいか、何方が心持が宜かつたえ」

若「ハイく」

と頭を掻き、

若「真綿で首を締めるように仰しゃいましては困ります」

客「只ちよつと花魁にお目にかゝれば宜いいで、私わたくしは伊皿子台町じゃア有りませんよ、深川万年町の先でございます」

若「ヘイく」

と云い捨てゝ出て往き、

若「花魁エく」

音羽は次の薄暗い座敷で丈助に向い、

音「丈助どん能く来なました」

丈「其の後は存外御無沙汰を致しましたが、只々お案じ申し上げるのみでございますが、何分お音信たよりさえも出来ませんと、若旦那さまも、あなたさまの事をお案じ申し上げ、日々あなたさまのお噂ばかりでございます、此の度はまた吉原町御類焼のことを承わり、お怪我がなければ宜いがとお案じでございますが、若旦那が色里へお這入りなさる事も出来ませんゆえ、早く往つて様子を見て来いと申し付けられ、吉原へ往つて見ますと、焼跡のみで分りませんから、段々聞きましたれば、当所へお立退きに成つたということを承わりましたから、取敢とりあえず罷り出しました」

音「そう、私も毎日神信心をして若旦那の事ばかりお案じ申して、お刀がお手に這入つたら、もうお屋敷へお帰りになりそうなものだと思つて居りますよ」

丈「へい、それが又あなた悪者に欺だまされてお刀を持つて往かれ、永い間旅で御苦勞をなさ



いました」

音「若旦那は嘸御難儀、それにお前方も共々難儀をしたろうね」

丈「悪者のために欺かされましたが、漸くの事でお刀はお手に這入りました、それには種々手蔓をもつていたしましたから、其の方へ遣物や、何や彼やで沢山物も掛りました、永い間あのお刀ゆえ若旦那の御辛苦というものは一通りでは御座いませんでしたが、急に当廿日までに芝のお屋敷へ御帰参に極りました」

音「それはまアお嬉しい事で、私はそればかり案じて居ましたが、それはまア何よりの事で、それに勇助は達者で居りますか」

丈「へい……勇助さんも永い間の旅で、年齢が年齢でございまして、私と違い大層苦勞をなすつたので大きに衰えました、お嬢さまにお目に懸りたいが、此の頃は持病の疝氣で腰もたゝず、そう致すことも出来んから宜しゅう申し上げてくれるとの事でございました」

音「勇助はドツと寝ているか……それで能く来なましたね」

丈「就きまして只今では高輪八ツ山の前にお漁などに往らした時分、お馴染の船宿の二階を借りて居らっしゃいまして、御帰参のお支度にかゝって居りますが、故郷へは錦を飾れの比喩ゆえ、切めてはお帰りの時には立派にしたいと若旦那さまも仰しやいまするし、

わたくしども

私共もお立派になつてお帰りになるように致したいと存じます、それに差支えますると云うは、明後日渡邊外記さまにお目に懸らなければなりませんから、お上下でお召も御紋附に致し、お大小の処もあゝいう訳で、お脇差一本でお出向きに成りましたのですから何やら彼やら差支えまするので、至急金子百兩入用に付いては、勤めの中へ再度無心をいたし、苦勞を掛けて済まんが、他に何うも頼み入れる処もないからと仰しやつてで、其の代りお屋敷へ帰参すれば直にお身受に成つて、御重役様が媒人で芽出度く夫婦になるので、これは小三郎さまからの御書面でございます」

と懷から手紙を出して音羽に渡し、

丈「右の訳ゆえ誠に恐れ入りますが、今晚の中に金子百兩だけ御才覚を願いますよう、丈助も若旦那さまに成り代つて共々にお願ひ申します」

音「あい、然うございますか」

と云いながら文を取上げて封を押切り、読んで見ますると、女房に手を下げて頼むが如き文面で、何うしても丈助の企みとは、是れまでも欺むかれて居りましたゆえ知らぬも道理でございます。其の文中に何う有つても今晚中に百兩の金子が無ければ、明後日渡邊外記に面会する事が出来ん、如何に尾羽打ち枯すとも斯る見苦しき身装で重役に対面もなら

ず、屋敷の聞えも宜しく有るまい、殊にお刀を渡邊外記へ渡して、殿様へ御覧に入れるのも、何かと何うも今の処では不都合で有り、また家来共にもそれ／＼身装の手当もせんければならんが、屋敷へ帰れば直に才覚してお前の身受をいたすから、何うぞ百両の金を調べて丈助に渡してくれろと云う文面ゆえ、貞実の音羽でございますから、

音「心配しなますな、何うか私が才覚をしようから待つて居てくんなまし、大引け過までには何うかして見ましよう」

丈「いえ明けまでゞ宜しいのでございます」

音「少し待つて居なまし」

と立上り、此の席を出て自分の座敷へ来まして、次の間の方へ番頭新造を呼んで相談致しましたが、音羽の許へ来る客は有りますけれども、二回目の返った例がないから無心という人ありませんが、此の番頭新造は親切ものゆえ、種々心配いたし、

番新「花魁無理だよ、能く考えて見なまし、おまはんは別に取り留めたお客もないのに、此の類焼の中で又してもくそうく内所へ談をした処が、おまはんが年季を増したのも幾度だか知れない、亭主のためとは云いながら、丈助さんの来る度にチビく上げたのも巨きい事じゃアないか、今度また急に百両、おいそらと云つても、斯んな立退中ざま

すもの、碌なお客はありやアしまへん、あんな乱暴もの畳を揚げたり、布団を脊負たり、廊下を駈けたりする奴ばかり来るんざいますものをそんなお客を相手にしたつても仕方がないじゃア有りまへんか」

音「何かして工夫を」

番新「エ、それだつて内所へは云えないもの……」

と暫く考えて居りましたが、やがて何かうなずきました。

### 三十九

番新「一人ねお金を沢山持つている客人があるのざんすよ、先刻私がねお召を着替なまして、広袖へ浴衣を重ねて貸したのさ、初会客だが、目の悪い二十五六の好い男の、品のいい人だが、初めて斯んな処へ来て様子を知らんから何分頼むよと云うから、今花魁に然う云いますが、着物を畳んで置くから出なましと云つたら、斯んな汚い着物だから畳まなくつても宜いと云うのを、無理に取つて寝巻と着替えさせると、お酒は飲めないと云うから甘味を出して遣つたら、斯んな甘いお菓子まで手当をされて斯んな嬉しいことはないが、

音羽の身の上は何ういうものか聞きたいと云うから、花魁はお屋敷さんのお嬢さんですが、種々いろく訳があつて亭主同様の人のために苦界に沈んでるんざいますと云ったら、能く然う云つておくれ、亭主のために斯んな辛い思いをしていることを、其の亭主が聞いたら嘸さぞ悦び、金があれば直じきに身受をするだろうつて、お前さんのことを思いやつて涙ぐんで居たが、本當に可愛相だアね、其の人が着物を着替る時に、紺縮緬の胴巻がバタリと落ちたら慌て、匿かくすから、私わつし取りやアしないつたら、ニヤリと笑わらいが顔おをして居たが、彼あれは何んでもお金をボツ／＼虎の子の様に貯めたに違いないんでしょうが、あの目の悪い客衆しゅが百両ぐらいお金を持つてるようですから、彼れあが馴染あの客ならどうでもなるがねえ」

音「無心を云つて見てくんなましよ」

番新「でも私わつしには無心は云えないわ、馴染あんなでも何でもない人だし、誠に彼様装なりをして、一生懸命にチビ／＼貯めて持つてるんですから、貸せなんぞと云ったら肝を潰して見えない眼でもまわすといけないからさ、無駄だよ、斯んな好いいお茶や甘味を食べたことはないと云うくらいだからいけまへんが、花魁無駄として、おまはん無心を云つて見なましな」

音「それ／＼中橋なかばしの繁しげさんが来ていると云うじゃアないか」

番新「あの人は色男がつて、好い装なりをして、持物に凝つてゝお金の有る振をしていて、お

金は持つてないが、私は繁はんの処へ往つて機嫌を取つて来るから、おまはん彼の目の悪い人の処へ往つて、気休めの一言も云つてやんなましよ、宜うございますか」

と瀧の戸という番頭新造は出て往きました。後で音羽が箆筒の引出から出しましたは嗜みの合口でございます。其の内に引過に成りましたから、禿も壁に寄り掛つて居寝りを致して居ります。音羽はそつと行灯の許へ来て鞘を払つて合口を見ますと、錆も出ない様子ゆえ鞘に納めて懷へ匿し、

音「どうも亭主の為には替えられない、こんな苦界へ沈んだのも稻垣様ゆえ、その稻垣さまが百両のお金が無ければ一生埋木になつて朽ち果てると、よく／＼なればこそ女房の私に手を突いて頼むような此のお文を見ては此の儘に捨て、置く事は出来ない、ふりに登つたお客なれどもお金をたんと持つて居るとの事、目の悪い客衆に会い、私の無心を諾いて下さるか、若し否と云わば仕方がないから其の目の悪い客衆を刺殺して百両のお金を奪つて丈助に渡し、若旦那さえ世に出れば私は縄に掛つて解死人に立とうとも、私の身は如何成ろうとも、如何か若旦那の世に出るように」

と良人をおつと一図意に屏風の許まで忍んで来ましたが、屏風の中に居る目の悪いお客と云うは即ち稻垣小三郎で、深川扇町に居りますが、山口屋の抱え遊女音羽というものは、

浅草田原町に町道場を出して居た石川という剣術遣いの娘だが、許嫁の亭主のために身を  
 売って、他の客には肌を触れんという名高い花魁だ、度々無心に来る毎に良人に金を送  
 るとは貞実な者だという噂を聞いたが、石川の娘で許嫁といえれば私より他に無い筈だが、  
 幼年の折に別れて顔貌を知らぬに付け込んで何者かに欺むかれ、斯る苦界に沈んで居  
 るとは如何にも不憫、盲目の身で会つても益ないが、何うかして此の金をやりたいとい  
 うので、渡邊外記から餞別に貰った百両を包み、重三郎に頼み、ちゃんと自分の名を書いて  
 渡そうと思つて登つたのでございますから、早く打明ければ宜かつたのに、それ程私を思  
 う石川の娘おみゑに、私が稲垣小三郎と云えば、斯様に盲人に成つた姿を見たら嘸嘆くこ  
 とだろうから、今晚は帰る方が宜しいと、百両の金をそつと寝巻に包んで、コソ／＼帰ろ  
 うと致しまする処へ、音羽が合口を持って、良人のために此の客衆を殺そうと思ひ、一生  
 懸命に怖々ながら屏風を明けて中へ這入り、稲垣小三郎を殺そうと致しまして、嗜み  
 の合口を取出し、鞘を払つて行灯の許へ来て見ると、まだ錆も出ぬ様子ゆゑ、ピタリと鞘  
 に納めて懷へ入れ、部屋着の服で屏風の許へ来て立つて居りました。情ないことには互に  
 顔を知りませんから、亭主の為に亭主を殺しにかゝりましたので、実に小三郎の身の上は  
 危うい事でございます。すると次の間に立つて居りましたのは番頭新造の瀧の戸で、

番新「花魁工」

音「あい……恟<sup>びつく</sup>りしたんぎます」

番「ちよいと此処へ来なまし、まア沈<sup>おちつ</sup>着いて其処へ坐つてくんなましよ」

音「あい、おまはんは中橋さんの方へ往つたんじやア有りませんか、何うして此処に居なましたの」

番新「少し気になることが有るから歸つて来たんぎますが、花魁今おまはんが懷から脇差見たようなものを出して、行灯の前で、こう鞘を払つて、おまはんが見て居たのを、私<sup>わつし</sup>は何をしなますかと思つて、廊下の障子を明け掛けたが、怖いから立つて見て居たんぎますが、おまはんそんなものを懷へ入れて往<sup>い</sup>くからには、彼<sup>あ</sup>の屏風の中の客衆を殺す気なんぎますか」

音「静かにしなましよ」

番新「沈着いてくんなましよ、能く考えて見なまし、おまはんは小三<sup>こさ</sup>さんの事というて氣違<sup>わり</sup>のようになりますが、あの目の悪い客衆を殺せば、仮令<sup>たとひ</sup>小三さんが世に出ればとて、人を殺しちやア斯う遣つて居る事は出来まへん、解死人に立たなければなりませんまい、能く考えて見なまし、亭主のために苦勞をして、幾ら添<sup>そ</sup>いたいからと云つても、人を殺しちや



ア小三郎さんと添えることは出来ないじやアありませんか、後あとさき先見ずの無分別なことをしてくんなます、逆のぼせ上がって仕舞うんぎますよ、本当に馬鹿らしいじやアありませんか、しつかりと沈着きなましよ」

といわれて音羽は沈着きはらい、言葉静かに、

音「瀧の戸はん、能く考えて見なまし、何んぼ私わっしが悪党でも、眼の悪い客衆を刃物三昧して殺そうというような恐ろしい心は有りまへんよ、ふりに登あがった客衆ゆえ無心を云つてもお金を貸してはくれまいから、若し貸さないと云つたら、今夜に迫る手詰てづめの金、迎とても生きては居られないから自害をすると欺だまかして、無心を云つて見ようかと思うんぎます」

番新「いえ、嘘を吐きなまし、そんなことを云つても、おまはんの顔色ちがが異つてるよ」

音「後生お願いだから、そんな大きな声でいうと客衆に聞えるから静かにしてくんなましよ」

番新「聞えるたつて、あの茫然ぼうとうとして居る柔やさしい人で、お酒が嫌いだというから、甘味でお茶でも飲んでゝ呉んなまし、生憎あいにくお客が立込んで花魁もおまはん煙草一服吸い附けて飲ませる間もないのだから、腹ア立つか知りまへんが、是に懲りずに又来てくんなましょと云つたら、少しも厭らしい甚助じんすけらしい事をいわないで、今日ふりに来たのは只花魁

の名高いことを聞いて来たのだが、花魁の身の上が聞きたい、以前はお屋敷さんだろうと聞くから、私ははつきり知りまへんが、種々訳があつて斯んな所へ来ているんざいます、その許嫁の亭主の為にいい掛けると、下を向いて考えてたくらい可愛相なんざいますよ、彼の人を殺す……」

音「シツ……静かにして呉んなましよ、私は人を殺すなんという事はありません」

とコソ／＼話をして居りましたが、幾ら小声でいっても大引近い頃ゆえ手に取るように屏風の中へ聞えましたから、小三郎は驚きまして、

小「此処に居ると殺される、私を小三郎と知らずに殺す心になるも、何者かに欺かれて、私のために私を殺そうという音羽の真実、寧ろ私が小三郎だと名告ろうか……イヤ／＼慰じいに打明けて身の上を話したら、是程までに思つてくれる音羽ゆえ、私が俄盲目になり、笛を吹いて修行をする身の上に零落れ果てたと聞いたたら、嘸嘆く事で有ろうから、身の上を明かさずに帰る方が宜かろう、就いては渡邊外記から餞別として貰った此の百両、盲目に在つて益ない金ゆえ、良人のために苦労する音羽にやりたい」

と思ひ、重三郎に頼んで上書まで致して有る包金、金を胴巻からこき出して、そつと寝衣にくるみ、帯を締直して屏風の中から出ながら、

「私は帰るからね、其処らに道行振みちゆきぶりが有ろうから取っておくれ」

番新「アツ、ア、出て来たよ、……お願い致します後生だから沈着いてゝくんなまし」

といい捨て小三郎の傍そばへ参り、

番新「今漸く花魁が来ましたの、今お茶を入れて何か甘味を取りますから緩ゆるくり遊んでいて呉わんなましな」

小「私は此処に居おられん用事が有つたのを頓と忘れて居たが、今思い出したから直すぐに帰ります、それから彼処あそこへ寝衣まるを円めて置きましたが、あれを能く振ふるつてね、だいなしに成つて居るだろうから、振ふるつて見れば分るけれども、大方皺しわクチャに成つて居ようから、能く畳んで置いておくんなさい」

番新「少し話が有るから待ちなましよ、おまはんは沈着いて呉わんなましよ」

音「若わしえ、おまはん生憎今夜はお客が立込んでお話もできず居たんざますが、漸々ようく今客衆も皆みんなな帰つたから、まアゝ緩ゆるくり話でもしましようから、待ちなましよ」

小「イヤゝ今夜は是非帰らんければならんが、四五日内にまた尋ねて来ますから、お前、身の上を大切に、宜いいいかえ、夜更よふかしをするしようばいだから身体に障らんようにして、宜いいいかえ」

番新「だけれども花魁も心配していなますから、今夜は泊って往きなましよ」

小「然うしちゃア居られない」

番新「じゃア何う有つても帰んなますの」

といいながら、音羽の袖を引き小声で、

番新「花魁あの事を聞いたんざますよ、うつかりした事はいえませんか」

音「あのね、おまはんは何処へ帰りなますの」

小「あい、私はあの扇町というへ帰ります」

音「扇町という処は何処なんざますえ」

小「やつぱり深川の内中で中木場を越えて四つ程橋を渡ると直に往かれます」

音「そう……それじゃア是から何処へ出て帰んなますえ」

小「是からマア私は眼が悪いので狭い道は歩き難いから、やつぱり土橋を渡って中木場の

横町を曲ると真直に出られるから、然う往く積りです」

音「屹度直に扇町へ帰んなましよ」

小「私は直に帰ります」

音「少し待つておくんなまし、いう事がありんすから……瀧の戸はん、後生お願いなんざま

すが一本爛けて来てくんなまし」

と無理に小三郎を引止めて置き、音羽はそツと抜け出して丈助の匿れて居る暗い座敷へ参りまして、

音「丈助どん」

丈「へエ、誠に何うも毎度参りましては御無心を申し上げ、御迷惑な事は若旦那さまもお察しでございますが、能々と思召して下さい、御無理なお願いでございますが遅くなりましても聊か厭いせん、夜明けまでにさえ金子が出来ますれば、若旦那さまの在らしやる高輪までは造作は有りません、船で帰つても訳はないのですが、御才覚のお手懸りがございましたか」

音「あい丈助どん、私も種々と心配したんですが、何をいうにも立退の中なり馴染の客衆は無し、何うしてもお金が出来ないんですが、今夜ふりに登った客衆は百両ばかりの金の塊を持つてゐるんですが、初会のお客に無心をいつたて貸して呉れよう道理は有るまいが、俄盲目の身の上で有りながら、私の心持でも推した様子で、急に帰るといい出したから、何処へ帰るんですがと聞いて見たら、扇町という処へ帰るんだが、中木場という処の土橋を渡れば真直に出られるという帰り道まで聞いたんですが、私は此家を出るわ

けにはいきまへんから、おまはん其の目の悪い客衆の跡をソツと躡けて往つて、人の居ない処で其の持つて居るお金を貸してくれと、私になり代つて頼んで見て呉んなまし、若し貸さないといったら仕方がありまへんから、丈助どん、殺生のようだが其の目の悪い客衆を殺しても其のお金を奪つて若旦那へ上げて呉んなまし、おまはんには決して難儀は懸けまへん、其の罪は私が引受けて解死人とやらに立とうから、何事も皆若旦那のおため、私は斯ういう因果の身の上で泥水に沈んで見れば、仮令年が明けても若旦那のお傍へ行くことも出来ないような賤しい身に落ちたのございますから、若旦那さえ世に出れば私の身の上は何うなつても厭いません、おまはんには難儀をかけないから、若し無心をいつて諾かない時は、洲崎の土手あたりの淋しい処で……なア、ようございますか、なア」

丈「へエ……宜しゆうございますが、何う致しまして、あなたにも御迷惑はかけません……ア、命を捨てゝも若旦那を世に出したいという其の御貞心を、若旦那様がお聞きなすつたらば、さぞ御落涙なされましょう……何んなお客でございますえ、盲目なら造作ア有りませんが」

音「其の内廊下へ来るだろうから少し此処に待つておいで」

丈「宜うございます」

番新「ちよいと花魁え……じゃアおまはん直に帰りますの」

音「おまはん何うでも帰りますかえ」

小「私は直に宅へ帰ります、大きにお世話になりました、また四五日内に来て緩々話を致すが、何分用事のあることを打忘れて長居を致した、また来て話をしましょうから、今夜は止めずに帰して下さい」

音「然うございますか、誠に濟まない、待ちなまし、危のうございます、さア手を曳いて上げようから」

と音羽が小三郎の手を曳いて、瀧の戸と二人で漸くに小三郎を二階から下して廊下を通るのを、丈助が暗い処から延び上り小三郎の姿を見て驚き、此奴小三郎だナ、成程眼が悪くなつて江戸へ帰つたという話を此の間大野から聞いたが、何処に居るか様子が分らねえで居たが、少せえ時分の許嫁で、互いに顔を知らねえから殺してくれろと音羽の頼みを幸い、洲崎の土手でばらしてしまい、大野の処へ往つて己が小三郎を殺したから褒美をくれろといやア、百両ぐれえ出るに違えねえ、都合二両有れば大阪へ往つて何んな商法にでも取附けると、主人と知つて主人を殺す大悪人の丈助が、しめたと腹の中で悦んで居りましたが、小三郎は神ならぬ身の左様の事とは存じません。

音「そんなら何処へも寄らずに土橋を渡つて洲崎の方へ往きなましよ、佐助さすけどん送つて上げなまし、氣を附けて往きなましよ」

小「あいゝゝ」

と出て行きました。

## 四十

瀧の戸は氣になるから跡へ取つて返して、床の上に円めて有つた寝衣を振つて見ると、ぱたりと落ちた百両の包み金、音羽も悔びくりして、

音「何なんざますえ」

番新「花魁、見なましよ、今の客衆がお金を置いて往いきなましたの、あらまア何うも可愛相じゃアありまへんか、眼の悪い身の上で虎の子の様にして貯めたお金なんだよ、ぐず／＼して此処に居て殺されては大変だ、命有つての物種だと思ひ、貯めたお金を置いてツたんざいやしようが、お氣の毒だよ」

音「どれお見せ」



と云いながら手に取上げて上書うわがきを見ると、金百両石川藤左衛門娘みゑどのへ、許嫁稲垣小三郎よりと書いて有りましたから、また恟り、エゝと呆氣あつけに取られ、オド／＼しな

がら、  
音「瀧の戸はん、見なましよ稲垣小三郎さまから私わつしのところへ届けてくんなましたお金さ  
ますよ」

番新「何を云うんざます、小三郎さまからお金がなければならねえツて、丈助どんを頼み、  
書附まで添えて無心によこし、今夜中に才覚しろというのは無理な小三さんだと思つてた、  
その小三さんが、お金を置いて往くとは何ういうわけなんざいましょう」

音「何ういうわけなんだかさっぱり分りまへんが、私わつしは大変な事をしたんざいますよ」  
番新「何うしましたの」

音「おまはんはんに云つたら叱られようが」

と云いさし、顔へ袖を宛あてゝ泣き沈み、

音「丈助どんに頼んであの客衆のあとを躡つけさせ、無心を云つて若し貸さない時には殺し  
てお金を奪とつてくんなまし、私わつしが解死人に立つツて、帰り道まで教えたんざますが、何う  
したら宜うございましょう」

番新「あらまア、可愛相に、小三さんがあの眼の悪い人を頼んでお金を持たしておまはんの様子を聞きによこしたのかも知れないよ」

音「私は少い時分に別れたから小三さんの顔は知りまへんが、品といい様子といい、誠に実の有りそうな人だったが、若しや彼の目の悪い客衆が小三さんなら何うしたら宜うございましょう」

番新「それ見なまし……あらまア、待ちなまし、何処へ駈け出しなます、藤助どんも伊助どんも寝ず番も居るから出られるもんじやアありまへん」

音「でも私が往かずに居て殺さしては済みまへんから、何うか工夫して私を遣つてくんなまし」

番新「そんなら少し待ちなまし」

と番頭新造の瀧の戸が、駈け出して他の室から持つて来て、

番新「これが丁度宜うございます」

と差出す品を見れば、仲木場の寺町辺の坊さんが内証で浮れに來た者なので、長合羽に頭巾がありましたから、音羽は櫛笄を取り、島田髻を揉み崩して山岡頭巾を冠つて両棲を高く取り、長合羽を部屋着の上に着て、おかしな身装でお客の積りで瀧の戸が音羽の手

を曳いて、そツと遣手<sup>やりて</sup>部屋の前を通る。遣手衆は枕を附け洒落本を読んで居りましたが疲れてかバタリと本を落して、スヤリ／＼と寝附いて居る様子ゆえ、音のしないように窃<sup>そ</sup>つと忍んで二階を下りてまいると、寝ずばんの藤助が居眠りをして居りましたから、これ幸いと瀧の戸が音羽の手を曳いて、跣足<sup>はだし</sup>で土間へ下りにかゝるとき藤助が目を覚まし、

藤「瀧の戸さん誰方<sup>どなた</sup>でございますか」

番新「今急に客衆がお帰りなはるんだが、藤助どん此処へ出ちやアいけないよ」

藤「客衆がお帰りになるなら茶屋を呼びに遣りましょう、何方<sup>どちう</sup>のお方で」

番新「ツベコベと何も云わねえで引込<sup>ひっこ</sup>んで居なまし……花魁の処へ往つて聞いて来なましよう」

藤「お茶屋は何方で」

と云いながら様子が訝<sup>おか</sup>しいから瞳を定めて能く見ると、透通つて見えるような真白<sup>まっしろ</sup>な足を出して、赤い蹴出<sup>けだし</sup>がベラ／＼見えしましたから、慌てゝ立上りながら、

藤「おや花魁じゃありませんか」

と云われた時には流石<sup>さすが</sup>に音羽もどつきり致しましたが、此の儘<sup>とぎ</sup>に止まれば見す／＼あの人を見殺しにしなければならぬ、仕方がないと心を決し、握り拳を固め、予て<sup>かね</sup>習い覚え

た起倒流きとうりゅうの腕前で藤助の横ツ面を殴る、殴られて藤助はアツと云つて倒れたが、

藤「何をなさいます花魁、何方どちらへお出でなさる」

と云いながら起上ろうとするる処を、

番新「藤助どん、何うしなました」

と云いながら藤助の結髪たづみを取つて引倒し、

番新「花魁早く往いきなまし」

と大戸をガラ／＼と明ける。音羽は跣足でバタ／＼と洲崎の土手の方へ駈けて参りましたが、もはや間に合いません。小三郎は左様な事とは知らず、杖に縋すがつて土橋を渡り、仲木場の方の曲り角の柵矢来さくやらいの処まで来ますと、ドブリ／＼と浪除杭なみよけぐいへ打ち附ける潮の音が聞えます。丈助は忍んで小三郎の跡を躡けてまいり、四辺あたりを見まするとパツタリ往来ゆきも絶えました様子ゆえ、後うしろから声をかけ、

丈「オ、お盲目さん、オイ其処へ往いく按摩さん」

小「ハイ、手前は按摩じゃア無い、揉療治を致すものではないが、間違いでござりましよう」

丈「ナニ山口屋の音羽に頼まれて来たんだが、お前は懷めえに金え持つてるそうだが、何うか

悉<sup>そっくり</sup>皆貸<sup>もれ</sup>して貰<sup>もら</sup>えてえ、誠に無理な無心だが、急になければならねえ金だと云つて花魁<sup>け魁</sup>も氣を揉<sup>も</sup>んでるから、オイ按摩<sup>あんま</sup>さん金を出しねえ」

といわれて小三郎はキツと身構<sup>みくま</sup>え、

小「汝<sup>てまい</sup>は何んだ、賊<sup>て</sup>だな、音羽<sup>おんは</sup>が左様<sup>さやう</sup>のことで私<sup>わし</sup>に無心をいうわけはない、また金はもとより懷中<sup>わいぢゆう</sup>には無いが、寄り附くと免<sup>ゆる</sup>さんぞ」

丈「ナニ音羽<sup>おんは</sup>に頼<sup>たの</sup>まれたのだ、若し貸<sup>か</sup>さなければ殺<sup>ころ</sup>しても金を奪<sup>と</sup>るんだ」

小「ナニ此奴<sup>こいつ</sup>が」

と云いながら柵<sup>さく</sup>矢来<sup>やらい</sup>に寄附<sup>よつ</sup>いて小楯<sup>こだて</sup>に取り、腰に差して居た木劍<sup>きけん</sup>作りの小脇差<sup>こわきさ</sup>を引抜き、

小「寄れば免<sup>ゆる</sup>さんぞ、サア寄つて見ろ」

と真影流<sup>まかげりゅう</sup>の奥儀<sup>おくぎ</sup>を極<sup>きわ</sup>めた名人<sup>めいじん</sup>に二ツ三ツ振廻<sup>ふりまわ</sup>され、此方<sup>こつち</sup>は劍術<sup>けんじゆつ</sup>も何も知りませんから中々<sup>ちやうちやうち</sup>寄り附<sup>よ</sup>くことが出来ません。

丈「生意氣な事をしやアがる、感<sup>かん</sup>の悪い癖<sup>くせ</sup>にジタバタ騒<sup>さわ</sup>ぐと叩<sup>たた</sup>つ斬<sup>き</sup>つて仕舞<sup>しま</sup>うぞ」

小「これへ参<sup>まゐ</sup>つて見ろ、己も眼<sup>め</sup>が悪いから斬<sup>き</sup>られようが、其の代<sup>て</sup>り汝<sup>てまい</sup>も殺<sup>ころ</sup>し、差違<sup>さちがひ</sup>つて死ぬ<sup>しぬ</sup>から然<sup>そ</sup>う思<sup>おも</sup>え」

丈「ナニ、此<sup>こ</sup>ん畜<sup>ちく</sup>生<sup>せい</sup>」

と閃きらめつく長いのを引抜いて振り上げたが、寄らば斬らんと小三郎が前後左右へ振廻まわして居りまするから、寄り附けません。丈助は横着者ですから刀を抜いたなり息を殺しやがして踞すわんで居りましたが、盲人めくらの哀しさに、

小「ヤイ逃げ失せたか、ヤイ何処へ参った、これへ寄って見ろ、免さんぞ」

といいながら柵矢来を離れて段々前へ出まする処を、そつと後うしろへ廻まわつて、丈助が力に任せて小三郎の右の肩口をしたゝかに斬りました。斬られて小三郎は片手にて疵口を押えながら、

小「此奴汝おのれ斬ったな、何処おに居るか」

と刀を振り廻す。丈助はまた小ちいさくなつて暫く息を殺して居たが、

小「エ、残念な、匹夫下郎の為に不覺を取つて……ウーン何処どれに匿かくれて居おるか、これへ参れ」

とまたうつかり前へ出る処を後へ廻り左の肩口へ斬りつける。

小「エ、汝おのれ」

と云つたが敵かないけません事で、劍術は上手でも胆たんが据すわつてゝも、感の悪い盲目のことゆえ、匹夫下郎の丈助の為に一一ふたかたな刀程斬られました。丈助は今度は突こうかと覗ねらつて居る処へ

バタ／＼／＼と駈けて来ましたのは山口屋の音羽でございますが、此の足音を聞き附け、人が来たかと驚き慌てゝ丈助はバラ／＼と須崎の土手を折曲おりまがつて逃げてしまう。音羽は一生懸命に駈けて来て見ると、小三郎が血に染つたなりで小脇差を振り廻して居りまするので、怖くて寄り附く事が出来ませんから、遠くにて、

音「申しえ、私わたしは山口屋の音羽ですが、おまはんがお金を百両置いてツてくんままして、書附の様子では稻垣小三郎さまから私わつしにくれたお金ですが、小三さんに頼まれて来たおまはんは何という人ぎますか、様子を聞かしてくんなまし、誠に済みまへんことだが、小三さんがお金を才覚してよこせという手詰てづめに成り、罪のようだが若旦那のためにはかえられまへんから、丈助どんに言附けて、おまはんを殺そうとしたのも私わつしですが、おまはんは小三郎さまに頼まれて来た人か、ひよつとして小三郎さまでは有りまへんか」

という声も涙に出かねて、オロ／＼泣きながらいうを聞いて、

小「エ、……お前は石川のみゑかえ、能く来てくれた、私わしは稻垣小三郎でござる」

音「エ、……小三郎さまか」

といいながら、怖いのも打忘れて傍そばに寄り添い、取り縋すがり、

音「何うしておまはんは今夜名指しで登あがつて置きながら、何故稻垣さまということを打明

けておくなはいまへん、おまはんはお金を置いて行きなはるくらいなのに、何んで丈助  
どんにお金を才覚しろという手紙を附けて遣しなました、実は私の身の上はこれ／＼で、  
若旦那が東海道藤沢の葺屋から手紙を遣し、二百両のお金がなければ、粟田口國綱のお  
刀が手に這入らんとのことゆえ、お刀のために私は苦界へ沈みましたが、丈助が再度来て  
はこれ／＼で、今までお金を才覚して送って居りましたが、あなたは御存じないことか  
と一伍いちぶしじゅう一什を語りました。

## 四十一

小三郎は音羽の話を書いて驚きましたが、

小「ア、……左様か、私は永らく旅に居て、頓と江戸表の様子は存ぜんで居たが、新参者  
に丈助という若党が居たが、其奴私の偽手紙をこしらえてお前を騙し、斯様な処へ沈めた  
のであらう、私が旅で艱難かんなん苦勞をした事や、お刀詮議のために辛苦をいたしたことを細  
やかに話したいけれど、此処は往来なり、受けた疵も幸い浅いゆえ、兎も角私の仮宅なる  
扇町まで手を曳いて往って呉れろ」



というので、音羽は手早く上締うわじめを取り、疵口を幾重にも巻き、小三郎を労いたわり、音「亭主のために亭主を殺すとは、えゝ何たる事か、私のような因果なものはない」と泣きながら漸々ようくに小三郎に聞き／＼扇町へ参りますと、表は一寸生垣ちよつとになつて居る狭い宅うちだが、小綺麗な家作で、昇夫かごかきの安吉が働きにまいって居り、留守居や何かして居ります。

○「安吉どん明けて下さい、安吉どん、ちよつと明けて下さい」

安「へエ……眼の悪い癖に夜出るからいけねえんだ……へエ只今明けます」

と云いながら立つて参り、戸を明け、

安「お帰んなせえ、何方どちらへ、お迎えに往むけきたくつても見当が分らねえから出る事が出来ねえんだ、お目が悪いから親方わりも心配してました」

小「誠に遅うなりました、今日こんにちは少々仔細あつて仮宅へ往ゆきました」

安「エゝ、仮宅なんぞへ往つちやアいけません……オヤ真赤まっかになつて何うなすつたんです」  
小「帰り路みちに洲崎の土手で賊に出会い、過あやまつて手傷を受けたので」

安「エゝ……いけませんね、私わっちやア親方に叱られやす、黙つてポイと仮宅なんぞへ往つちやアいけません、眼の悪いときには一番毒だとね、私が叱られるから困りやす」

小「イヤ／＼決して心配せんでも宜しい、傷は浅いから……お前こつち此方へお上り」

安「お連が有るんですか」

小「私わしうちの宅だから遠慮はいらん構わずズツとお上り」

音「御免なさい」

と云いながら頭巾を取つて中へ這入ると立派な花魁姿ゆえ、

安「若旦那、なんですすえ此これ女は」

小「これが其の山口屋の音羽という遊女なんだ」

安「困りますね、眼が癒りませんよ女じようろ郎なんぞ引張ひっぱり出して来て、併しかしお若いから無理

はねえが」

小「イヤ／＼左様じゃない、予かねて話をした石川の娘で、許嫁のみゑだよ」

安「エ、此のお嬢さんが、然そうでございますか、仙太郎親方も様子を聞きたいって往いきま  
したつけ」

小「エ、左様か」

音「若旦那がまた種々いろくおまはんにお世話になるといふ事を道々聞いたんですが、誠に  
有難う」

安「これは何うも思い掛けねえことで、お噂を聞いていましたが、夜中能く主人が出しましたね」

小「イヤ／＼実は廓くわを抜け出して来たのである」

安「マア兎も角疵口は大丈夫でございやすかえ」

小「イヤ決して心配はない、丁度宜よい薬が有る、先達せんだつて美惠比丘尼が負傷けがをする事があろう、其の時に此の膏薬を貼れば悪血あくちが発して眼病が癒るといつて、十二枚膏薬を貰つて来たが、仏壇の引出へ入れて有るから出してくれ」

と是れから膏薬を貼つて居る処へ仙太郎が歸つて参りました。仙太郎は音羽の身の上を聞きたいと思ひ、名指しで山口屋へ登あがりましたところ、音羽が逃げ出したという事を聞き、驚いて飛んで歸つて参り、此の始末を聞きまして何なんにしても山口屋へ掛合うまで、花魁みかくの身匿しをしくつちやアいけねえ、何うせ談はなしは面倒になり、年季を増す事になるかも知れねえが、万年町へ談をしてお身受けをすることに致しよう、大丈夫で、私わっちが呑込みやした……負傷けがアなすつたか……丈助は剣術を知らず、刃物きれものも悪かったか横に殺そいだぐれえだから心配しんぱはねえ、浅傷あさでだったは勿怪もつけの僥倖さいわい、何なんにしても此処に居ちやアいけねえから、早く船へお乗んなせえ。と固もとより荷足船が参つて居りますから、これへ小三郎音

羽の二人に安吉を乗せ、とま苦を掛けて、

仙「矢切の渡のお乳母さんの処へ往つてらつしやれば、何処へも知れず、身匿しをするには至極よ宜いが、別に心配はありますめえね」

音「何も心配は有りませんが、何なんにしても若旦那が眼が悪いんぎますから、私はかみほとけ神仏に願つて御全快を祈りましょう」

仙「お嬢さまさぞ嘸お悦びでござえやしよう」

音「実に斯んな嬉しい事はありませんよ」

仙「私わっちがお送り申したいが、人目に立たねえ方が宜いから、私は直すぐに帰りまして、万年町と相談して花魁のお身受けの相談がピッタリ極つたら、私がお迎えに出ますから、それまでコツソリ匿れていらつしやい」

安「お目を大切だいじになせえ、此処のところが肝心ですから、目には一いっ毒だというから」  
仙「余計なことを云うな」

と是から船を出して矢切の渡口へ船を繋つけ、上へあがり、おしのゝ門口へ参りました、音羽は勝手を存じて居りますから中へ這入り、

音「乳母ばあやア乳母ア、ちよいと明けてくんなまし、乳母ア山口屋の音羽ぎますよ」

しの「誰か表へ来たようだよ、恭太や明けてやれよ」

恭「あいよ」

と戸口へ立ち、

恭「さア這入<sup>へえ</sup>んねえ」

とガラ／＼と重たい上総戸<sup>かずさど</sup>を明ける。

音「アノ山口屋の音羽<sup>おと</sup>ざますよ」

恭「やア叔母さん、あのね前<sup>せん</sup>来た花魁のお嬢さんが這入<sup>こ</sup>つて来たよ」

しの「おやまア何うも能くまア、さアお上んなせえまし、私<sup>わし</sup>もハア何うかしてお目にかゝりてえと思つて心配<sup>しんぺえ</sup>して居やしたが、能くまア来ておくんなせえました、此間<sup>こねえだ</sup>は焼けた跡へ吉原へ駈けてまいりやんして探しやしたが、田舎もんだからハアさっぱり分らねえで帰<sup>けえ</sup>つて来やしたが、深川へ仮宅が出来たつてえから、ちよつくらお尋ね申すべえと思つてゐる内に、段々日が遅れやしただ、能くまア、さア何うぞ此方<sup>こち</sup>へ……お連<sup>れん</sup>が有りやすかえ、何うぞあなた此方へお上んなせえまし」

小「御免下さい……初めてお目にかゝります、手前は稻垣小三郎であるが、永らく旅をいたして居たから頓と江戸の様子が分らんが、これに乳をくれた乳母<sup>ばあや</sup>が居<sup>お</sup>ると聞きました、

態々<sup>わざ／＼</sup>お前を尋ねて来ました」

しの「おやまア何うも、なんとハア魂消<sup>たまげ</sup>ましたね、誠にハア思い掛けねえ事でござえます、これは何うも始めてお目にかゝります、私<sup>わし</sup>はおしのと申しやすやくぎ婆アでござえやす、段々丈助が御厄介になります、あんな悪党野郎で御座<sup>ごぜ</sup>えやすが、旦那さまの御丹誠で此の頃は正直に成りやして、親孝行や忠義てえ事を覚えやしたのも、みんな旦那さまの御恩だと、蔭ながら拜んで居りやすが、何んとハア貴方<sup>あんた</sup>さまゆえにお嬢さまは、相談ずくとはいいながら吉原へ這<sup>へ</sup>入<sup>い</sup>つて、誠にハア何うも心配<sup>しんぱ</sup>して居さつしやつたが、その甲斐<sup>けえ</sup>があつて、斯うやつてお兩人揃<sup>ふたり</sup>つておいでなさるてえのは誠に嬉しいことで、よくまアおいでなせえました、丈助がお供で参りましたか」

小「いや／＼、まア乳母<sup>ばあ</sup>や、いうも氣の毒な事だが、丈助はお前とは相違して悪人である」  
と是から丈助の悪事の一伍<sup>いちぶ</sup>一什<sup>じし</sup>話をしたときには、田舎氣質<sup>かたぎ</sup>のおしのは肝を潰してぶる／＼手を震わし、涙を膝へ落しまして、

しの「何んとまア、何うもまア、あの野郎魂消<sup>たまげ</sup>やしてや、嘸<sup>な</sup>まア腹<sup>はら</sup>が立つとも悪い野郎とも、実にね悪党野郎でござえまして、牛裂<sup>うしぎ</sup>にしても飽足らねえ奴の親だから、坊主が悪けりや袈裟まで悪いという譬<sup>たとえ</sup>の通りで、私<sup>わし</sup>の処<sup>ところ</sup>なんどへお兩人<sup>ふたり</sup>さまがおいでなさる訳はね

えのでござえましように、私だけを人間と思ひ、お嬢さまに乳をあげた乳母だといふので、心持を直して能くまア尋ねて来ておくんなせえました、私イはア実に魂消やした、あの野郎は若え時分に道楽をぶちまして、其の根性は中々直らねえと親父が見限つて勘当しやして、決して宅へ寄せ附けるなど遺言してなくなりましたが、大切なお嬢さまが入らしつて、詫言をなさるから、全く改心したと思つて免して遣りやしたが、あの野郎私を欺しやアがつて、皆なあの野郎の企と知らねえで、永え間お嬢さまに苦しみを掛けて、其の上に嬢様から頼まれたからつて、御主人さまのお顔を知つて居ながら、殺すべえとしたは実に狗畜生にも劣つた彼の野郎……宜うがアす、此の村にも役人も目明しも有りやすから、それを頼んであの野郎を探し廻つて、そうして宅へ引寄せて、あなたさまはお眼が悪いし、嬢様は軟弱えから又あの野郎に逃げられでもすると仕様ががんせんから、強え人を頼んで来て、あの野郎を捕めえて置き、お前さまたちの怨みの霽れるようにしますべえから、緩くり宅に居て下せえまし」

といいさして泣沈みました。

音「私も実に欺かされたが、丈助はあれ程の悪人とは思ひがけないことで」  
しの「本当に然うでござえまする、私は何の因果でござえましよう」

と話してる処へ表の戸をトン／＼。

男「御免なさい、ちよつと明けておくんなさい、お母さん明けておくんなさい」  
しの「誰だかえ」

男「エ、丈助でございます」

と云われて、おしのは低声になり、

しの「丈助が来やアがつた：今明けるだが締りイ附いてるから、もう少し待ちてろ：若旦那お嬢さま、丈助が此処へめえりやしたが、若旦那さまはお目が悪し、お嬢さまは軟弱えから、あの野郎には敵いません、何うぞ少しの間此処に匿れてゝおくんなせえよ、私イ、ハア兎にも角にもあなた方にお怪我をさせねえように為しましょうから……今明けるから待ちてろ、恭太や、ちよいと此処へ来う」

恭「エ、なんだ」

しの「今丈助が此処へ這入つて来ても、お兩人さまが泊つてるといふ事をいうじやアねえよ」

恭「ア、何んともいやアしねえや、誰も彼処に居やアしねえって」  
しの「馬鹿め、早く明けて遣んな」



「というので恭太郎が土間へ下りてガラリと戸を明けると、丈助は一本差し、羽織を着て実体らしく、

丈「お母さん誠に暫く」

と這入って参りました。

## 四十二

小三郎と音羽の二人が、反故張障子の内の二畳の部屋に隠れて居るとは知らず、丈助は母親おふくろを首尾よく騙し遂せる心得で、わざと猫なで声で、

丈「お母さん誠に御無沙汰をいたしまして、お母さん、何うも都度く書面を差上げなくつちやアならねえんでございますが、むずかしい字で書いては読めもしまいから、ちよつと様子を知らせたいと思つても、何分御主人さまに附つき切りゆえ、参る事も出来ないの、存じながら大層御無沙汰になつて、誠に相済みませんが、何時もお変りなくお健すこやかで私も満足致しました」

しの「まア何うして此処こけへ来た、誠に思おもえがけねえことで、私わしも会いてえくと汝われがの事

べえ思つてたアだが、若旦那さまやお嬢さまは何うしたアだ」

丈「へい、早速お知らせ申しますが細かい話は聞くのも御面倒でしょうが、実は若旦那小三郎さまのお手へ國綱のお刀が這入るばかりになった処、悪い奴が中へ這入りましたお刀を転買またがいを致しましたところから、それがために若旦那は九州の方へまで往いかつしやるような事で、よう／＼手に入りいりました、永い間の旅でしたが、只今では高輪の船宿で、伊勢屋と申す宅かたにおいでゝすが、此の事を御重役渡邊様へ達して、渡邊さまからお上かみへ伺いしました処が、早々召返すようにというので、御苦労遊ばした甲斐があつて、いよく御帰参になります、私も永い間辛勞致しました甲斐が有つて、若旦那さまさえ御帰参になれば此の上ない事ゆえ、どうかお悦びなすつて下さいまし」

しの「それは何なんにしても芽出度めでてえことだ、汝われも骨を折つた甲斐があり、若旦那も永ながえ間かん心配んぺえをなすつた甲斐があり、お嬢さまも吉原のような、あんな恐ろしい処へ身をいれて、苦艱くげんをなすつた甲斐が有つたアだ、おれも心配して、汝がに会いてえと思つたが、然そうかえ、若旦那が御帰参になるようになったら、汝何うする氣だ」

丈「若旦那さまの仰しやるには、手前は一方ひとかたならず骨を折ってくれたから、侍分に取立て、遣らうと仰しやつて下さいましたが、金子や品物でお礼を受けても使えなくなつてしま

いますが、侍分にお取立になりますれば、此の身の幸い、また此のお刀がお屋敷へ歸つて見れば、若旦那さまは必ず御出世でございましょう、前には五百石お取り遊ばしたお身柄ゆえ、八百石か千石にもお成りなさるに相違有りませんから、私も大した御扶持ごふちが戴けましょうから、然うしたらお母さんを斯んな処には置きません、直に屋敷へ引取つて柔らかな着物を着せ、置おきこ巨燵こたつをして樂をさせ、是まで御苦勞をかけたお埋合せに孝行をいたします」

しの「何とまあ嬉しい事だな、汝われ工はア是まで道楽ウぶつて種々心配いろ／＼しんぱえさせたけど、汝が殿さまの為に苦勞したお蔭で、侍分にお取立になれば親を引取つて坐布団の上で樂をさせえと、生れ變つたような柔やさしげな心に成つたかえと思うと、私わしイはア誠に嬉しいだよ、死んだ父さまも嘸さぞ悦ぶべえと思うと嬉し涙が出るだよ」

丈「実はお泣きなすつても宜よいくらいで、真に私も骨折甲斐が有ると思ひまして、此の上ない悦びでございます」

しの「それに就いて、勇助どんは汝われと一緒に若旦那へ従したがいて出たが、勇助どんは歸かえらねえが、なにか矢張り汝やつぱがと一緒にか」

丈「へい、勇助どんは年を老とつていますから、高輪の伊勢屋で若旦那のお傍に附いていま

して、私<sup>わたし</sup>だけ方々駈け摺り廻つてゐるんですが、若旦那がお屋敷へ御帰参になるので、実に大騒ぎというのは、お衣服<sup>みなり</sup>から、大小からお荷物まで拵えて、華やかにしてお屋敷へ御帰参になるようにしなければならず、また私も侍分に取立てると仰しやるんですから、今までと違いますれば、上<sup>かみしも</sup>下<sup>しも</sup>から小袖まで相当のものを買<sup>かい</sup>調<sup>と</sup>えなければなりません、けれども若旦那のお買物に多分に費<sup>か</sup>りますので、自分の支度金どころではありません、就きましてはお母さんは誠にお心掛けの宜<sup>い</sup>いお人ゆえ、少し金子のお貯えが有るなら私<sup>わたくし</sup>に貸して下さいな、それに親父が正月名主さまの処へ年始に往<sup>い</sup>く時に差した、あの大切にしていた脇差がありました、あれで間に合うからお父さまの形見に下さいな、能くお父様がこれだけは己も武士の果の印だと御自慢なすつた事が有りましたが、あれをお譲りを願います」

しの「あゝ譲るとも、それに己<sup>おら</sup>も心にかけて、此の畠や田地を汝<sup>われ</sup>がに譲つても額<sup>たか</sup>が知れてるから、切<sup>せ</sup>めて金でも遣るべえと思つて、己が身の上では巨<sup>え</sup>く貯めた積りだが、父様の脇差も汝より他に譲るものはねえ、今出して来て遣るから少し待ちてろよ、能くマア汝工はアそんな柔<sup>やさ</sup>しげな心になつてくれたかと思うと、己アはア実に何だか飛立つ程嬉しいだよ」  
丈「左様でしょう、これは何<sup>ど</sup>んなにお悦びなすつても宜しいので……恭太」

恭「エ、何い」

丈「己の留守中にまた何か叔母さんに世話ア焼かせやアしないか」

恭「うゝん……今お前勇助さんが何処どこかに居るつて然う云ったね」

と云われて丈助は驚き、

丈「旦那さまのお傍に居るのよ」

恭「うゝん叔母さん嘘だよ、勇助さんはね、矢切の渡場わたしばでね、この叔父さんが殺しちま  
ったんだよ」

と云われて丈助は弥々いよく驚き、

丈「コ、此ん畜生ちきしよう、ナ何を云やアがる、そんな馬鹿ア云やアがつて」

恭「ナ二本当だよ、身体へね石を巻き附けて、利根川の深え処ふけとこへ投り込んだんだよ」

丈「コ此ん畜生、ナ何を馬鹿ア云やアがる」

しの「エ、馬鹿な奴のいう事だから構うなよ」

恭「それからアノネ叔父さんが己おいらにお銭あしを四百くれて、黙つてろくツて、喜代松という  
船頭と二人で、曲金から附いて来た泥坊だから殺したんだツたが嘘なんだよ、勇助さんは  
疾とうに殺してしまつたから、生きて居やアしねえんだよ」

丈「バ馬鹿、此ん畜生何を云やアがるんだ」

しの「エ、馬鹿な奴のいう事を取上げて余計なことを云わねえが宜え、恭太もまた何もいうな……此んな愚<sup>おろか</sup>な者のいう事だから、何も汝<sup>われ</sup>が小言をいうにやア及ばねえ」

と云いながら立つて戸棚から取出して来ましたは小脇差で、

しの「さアこれを見ろ、薄錆は出たが、父さまの形見だ、また金も是だけ有るから」

丈「へえお母さまは何うも誠にお心掛けの宜<sup>よ</sup>いことで、有難う存じます」

と脇差を取上げ、

丈「中々立派なもので」

しの「少し汝<sup>われ</sup>がに云い聞かせるが、己<sup>おれ</sup>は何にも知らねえが、これは父<sup>とつさま</sup>様が御先祖さまから譲られた品だから、貧乏してもこればかりは放せねえ、貞<sup>さだむね</sup>宗とか何とかいう脇差だつて、大切<sup>でえじ</sup>にしていたから、父さまが死んで以後<sup>こつち</sup>出さねえもんだから、少し錆たアだよ」

丈「へえ」

と丈助がうつかりして居る処を、おしのは手早く小脇差の鞘を払い、丈助の横<sup>よこ</sup>腹<sup>はら</sup>を目掛け、一生懸命力に任せてウーンと突<sup>つ</sup>込<sup>こ</sup>む。

丈「ア、お母さん何をなさる」

と前へのめる。

しの「動きやアがるな此の野郎、うぬ、殺さねえで置くものか、うぬ、己ハア気も何も違わねえ、汝<sup>われ</sup>え殺すべえと思つてゐる処へヌク／＼と来やアがつて、此の野郎／＼」

丈「ウーム……お母さん、何だつて己を殺す、何の咎<sup>とが</sup>で私を殺すのだ」

しの「誠にハア何とも言いようのねえ奴の癖に、能くまア己<sup>おれ</sup>がの前で何の咎でなんてえ事が云える、汝<sup>われ</sup>のような鬼とも蛇<sup>じゃ</sup>ともいいいようの無え悪党の子を持った己は、何うもお兩人<sup>ふたり</sup>さまに済まねえからよ、よくも／＼己<sup>おれ</sup>が乳を上げた御主人さまのお嬢さまを若旦那の爲だつて欺<sup>だま</sup>かして、吉原の山口屋へお女郎に売りやアがつて、其の身の代の二百両も若旦那へ上げるてえのは嘘で、皆<sup>みんな</sup>な汝<sup>みん</sup>が費<sup>つか</sup>やアがつて、うぬ」

と刀でこじる。

丈「アイツ／＼、アイテ／＼、お母さん何うぞ免<sup>ゆる</sup>してくれ、少し手を放してくれ」

しの「手を放せツて放すものか、何うせ汝<sup>われ</sup>エ殺すべえと思つてゐるんだ……コレ汝はそればかりじゃアねえ、今聞けば勇助どんも汝が殺した／＼な、それから度々<sup>たび／＼</sup>嬢さまの処<sup>とけ</sup>へ行きやアがつて、お嬢さまを欺<sup>だま</sup>くらかして偽手紙イなんぞをこせえて、若旦那さまの入用<sup>いりよう</sup>だつて嘘べえ吐いて、金を取つて費<sup>つか</sup>やアがつて、うぬ、一昨日<sup>さきおと／＼</sup>の晩も汝え山口屋へ往つて、

お嬢さまを欺かして百両取るべえとしたアだな、其の時に若旦那さまがかく匿れてお客に登あつてゐるのを、お嬢さまは若旦那の顔を知んねえもんだから、亭主と知らずに汝がに殺してく  
んろと頼んだ時に、汝は眼まなこがあるから若旦那を知つてべえ、若旦那てえことを知つてなが  
ら跡を躡つけてつて、洲崎の土手で若旦那さまを騙し殺しに殺すべえと思つて、斬り掛けや  
アがつたとは、何んてハア何うも、呆れるとも呆れねえともいいよのねえ野郎で、其の  
上又くく〜と此処へ来やアがつて、只た一人の此の己おれの死し金しにがねまで貪むさぼり取りに能く来やア  
がつた、うぬ」

丈「ウーム…ハツ、ハ…おめえ何うしてそれを知つてゐるのだ」

しの「知つてねえかえ、汝われより前さきにお嬢さまも若旦那さまもおいでが有つて、婆ばあやお前めえと  
違つて丈助はこれく〜の悪党だが、廓やくを出て来たのだから少しの間匿れて居るんだと仰し  
やつて、おいでなすつて、汝がの企たくみの段々を聞いた時は、実に魂消たとも魂消ねえとも、  
若旦那や嬢さまに對てえしても汝を助けて置くことが出来ねえから、お役人を頼んでも汝を縛  
つて、御公儀さまの御厄介に成つて、汝をおつ殺すべえと思つてるところへ、汝が来るて  
えのは罰ばちだ、只た一人の悴を親の身として殺したんだぞ野郎、御主人さまへ刃向はむけえ立だてをし  
たんだから、汝は磔はりつけ刑にあがる程の悪党だが、親の慈悲だからまだしも此の畳の上で、



お父さまの形見の脇差で斬殺きりころして遣るから、有難ありがてえと思っておつ死ちんでしまえ……ヤア、おつ死んでしまえ……ヤア、おつ死んでしまえ……ヤア、おつ死んでしまえ」

丈「ウーム……ウームお母さん少し待つて下さい」

と云いながら片手で袖を握り溢れ出る血を押え、ハッハッと息を吐く途端に、中矢切の総寧寺の勤めの鐘がゴーン／＼と市川の流れに響いて聞えます。二畳の室へやの反故張り障子の内で、小三郎が一節切を取つて手向たむけの曲を吹きました音色が、丈助の心耳しんにへ聞えますと、アゝ悪いことをしたと、始めて夢の醒めた如く改心致し、母の手を握り詰め、ハッハッと外へ出るばかりの苦しき息をやつと遣つかう。

しの「目が醒めたか野郎、目が醒めたか、うぬ」

丈「ウーン……お母つかア少し待つてくんな、余あんまり強く遣ると己おらア死んじまう、己おれの息が止とまつちまうと、若旦那さまのお尋ねなざる仇敵かたきの匿かくれ家がもお探しなさるお刀の手掛りも分るめえ、これまでの悪事のお詫ごとに残らず己がお話し申し上げてそうして死ぬから少し手をゆるめてくれ、ちいと手をゆるめてくれ」

しの「さアいってしまえ、汝われ工知つてたらば残らずいッちまえ」

丈「ハッハッ、お母アお前めえのような正直ものゝ腹へ己のような不孝者が何うして胎やどったか

と、目が醒めて見りやア、実に何うも済まねえことをした」  
しの「済まねえ事をしたって今氣イ附いたか」

### 四十三

丈「実は稻垣さまの処へ御奉公にあがつてる内に、稻垣さまの下役に大野惣兵衛という奴  
が有つてノ、其奴そいつが石川のお嬢さまに惚れて、時々己に鼻薬をくれちやア種々いろく頼むから、  
己も種々な悪事を謀しめし合せている内に、其の大野惣兵衛はお暇いとまに成つたが、浪人しても  
己を呼び出しちやア頼むく」と云つてはくれる鼻薬に、つい目が眯くれて、粟田口國綱も己  
が手引をして盗ましたのだ、また石川藤左衛門さまを日暮ヶ岡で鉄砲で打殺させた手筈を  
したのも皆んな己、それから鴻の台の鐘ヶ淵から小左衛門さまを突落つきおとさせた手引もおれ  
がしたのだから、石川さまの仇敵かたきも矢張り大野惣兵衛だが、今は八橋周馬と名を変えて、  
田地や山を買い、堀切の傍そばの別荘に居て、金貸しをしているが、その大野惣兵衛の差料に  
している刀が粟田口國綱だから、早く其の刀を取返し、仇あだを討つて御帰参になるようにし  
て下せえ、今お前がいう通り、主人と知つて刃向はむけえ立だてをした丈助だから、磔はりつけ刑に上つて

も飽き足らねえ奴だが、畳の上でお母アの手懸つて死ぬのは親の慈悲ということ、今初めて覺えた……ア、わかつた、お前も定めて悪<sup>にく</sup>からうが、若旦那さまが此<sup>これ</sup>処へおいでになつて、己の鬢<sup>びん</sup>の毛を一本く引<sup>ひッ</sup>こ抜き、五分だめしにしてお胸を晴して下さるようにお詫<sup>わ</sup>かして下さい、誠に悪い事をしましたから、何うかお詫<sup>わ</sup>かして下さいとハラ／＼と落涙して泣き沈みました。

しの「今になつてそんなことを云やアがつて、漸く悪いことをしたと氣附いたか」  
丈「わかりました、ハツ／＼」

恭「叔母さん堪忍して遣んなよ、叔父さんが痛<sup>いた</sup>えツて大騒ぎイやつてるからよ」  
しの「エ、黙つてろ、用にやア足りねえが、汝<sup>われ</sup>も寧<sup>いづ</sup>ろ此の恭太郎見たように馬鹿にでも生れたらこんな苦勞はしめえものに、生才<sup>なまざい</sup>覺<sup>かく</sup>が有るばかりで、斯んな悪をしやアがつて」  
といいさして奥の方をふり向き、

しの「若旦那さまもお嬢さまも、只今お聞きの通りの訳でがんすから、お嬢さま何うか此<sup>こ</sup>処<sup>れ</sup>へおいでなすつて、あなたの御存分になすつて、此の野郎の鬢<sup>びん</sup>の毛を一本く引<sup>ひッ</sup>こ抜いてお胸<sup>はら</sup>を晴して下せえまし」

というのを聞き、反故張り障子を明けて出て来たのは、小三郎に音羽の二人で、

小「婆ばあや其方そちは誠に男おとこ優まさりの氣質である、現在の一人の悴せを手にかけて殺すとは、実につらい事であろうが、私わしや音羽おんに義理を立て、お前まへが手を下して斯う計らい、また丈助ぜんじも先非ぜんび後悔して、刀の在所ありか、仇敵かたきの匿家かくれがまで教えて呉れた其の功に愛めで、永く苦痛をさするも不便ふびんゆえ、この小三郎が介錯して取らせるぞ」

丈「へい／＼誠に何うも面目次第もございません、面目次第もございません」

音「乳母ばあやア始めの内は私わたしはしがみ附きたいほど悪にくらしく思ったが、またお前の心根を考え、気を取直し、今まで此の室へやに這入つてしみ／＼泣いて居たんですが、お前は嘸さぞつらい事だろうね」

しの「はい……はい、貴方がた、何うぞ御存分に此の野郎をジキ／＼斬つてやつておくんなせえまし」

小「これ丈助、手前に斬られた疵口から悪血が発したため、眼病も大きに全快の端緒こぐちに赴おもむき、少しずつは見えるように相成つたが、その八橋周馬とか申して堀切村に居いる奴は、全く仇敵かたきの大野惣兵衛に相違ないか、又國綱のお刀を差料にして居るに相違ないか」

丈「全くそれに相違有りません、実に面目次第もございません、大悪非道わたくしにくの私わたしを悪いとも思召おぼしめしませんで、若旦那さまが御介錯下さるとは有難う存じます……丈助は浮うかび上りま

す……他<sup>ほか</sup>に子供も何も無い只<sup>ただ</sup>一人の母親<sup>おふくろ</sup>でございます、私は悪い奴でございますけれども、母親は正直一箇の少しも悪気のないものでございますから、何うか不便<sup>ふびん</sup>のものと思召<sup>めが</sup>しましてお目をお懸<sup>なま</sup>けなすつて下せえまし……お母<sup>つか</sup>ア堪忍<sup>こら</sup>してくんねえ」

しの「今になつて懨<sup>なま</sup>じいにそんな事はいわねえで、黙<sup>もく</sup>つておつ死<sup>ち</sup>んでしまえ、何うぞ若旦那さま、何時までも苦痛をさせたくねえでがんすから首を打<sup>ぶち</sup>落<sup>おと</sup>して下せえまし」

小「おゝ、尤<sup>な</sup>もの事」

と小三郎は立上り、小脇差を引抜いて丈助の領<sup>えりもと</sup>元<sup>もと</sup>へあて、呼吸をはかつて、

「エゝ」

と声をかけて打落すと、丈助の首はゴロ／＼と土間へ転がり落ちました。

恭「ア、彼の叔父<sup>あ</sup>さんは酷<sup>ひど</sup>い事をする、丈助さんの首を斬<sup>き</sup>ツちやつた」

しの「静かにしろやい」

といいながら仏間に向い、おしのは念仏を唱えて居ります。これから名主へ右の次第を届けて、丈助の死骸は中矢切の法泉寺へ葬り、事<sup>こと</sup>済<sup>すみ</sup>に成りました。処へ仙太郎が小三郎音羽を迎いに参りましたから連立つて帰りましたが、音羽の身受けの相談は極つたなれども、岡本政七方に居ては人出入も多いからというので、二人とも高橋の重三郎の宅へ参

つて居ました。おしの婆は只た一人の忤が斯ような悪人に生れ附いたのも前世の約束事だろうと思ひ諦め、所持の田畠を残らず人に譲り、恭太郎を連れて向島へ参りまして、白髭の蟠竜軒の美恵比丘尼の弟子になり、恭太郎諸共くり／＼坊主になりまして、姪の若草もまた子供も然ういふことになるも皆約束事だろうと思ひ、綾瀬川の渡口へ庵室を作り、念仏を唱えながら礫を拾つて山のように積み上げるといふ、是から敵討になります。稲垣小三郎は高橋の辺なる重助方へまいり、段々療治を致して居ります内に、美恵比丘尼のいふ通り、眼病も次第／＼に全快致しましたから、逃げられん内に早く仇討をしたいが、粟田口國綱の刀を先へ取返して置き、それから大野を討ち果したいと、種々手を廻して心配して居りました、お話二つに分れて堀切の別荘に居る紀伊國屋の伊之助は、病氣全快してブラ／＼遊んで居りますところへ、幫間の正孝が侍を一人連れてまいり、

正「今日は、御免…えゝ御免」

伊「誰方が知りませんがお上んなさい、誰だえ」

といいながら出て参り、

伊「イヤ師匠か」

正「えゝ今日は」

伊「構わずつと庭から廻つて這入んなよ」

正「これは何うも、イヤお一人で……何うも好いお庭でげすな、お鉢前から下草誠に様子が好うがすな」

伊「そんなことをグズ／＼云わねえでも宜いからおあがりよ」

正「実に御様子の好いお庭で、三日ばかりお客のお供で他へ往つてましたが、斯ういう広々とした景色の好い所は見られません……お一人でげすか」

伊「みんな摘草つみくさに出かけたよ」

正「成田以来お目にかゝりませんか、彼の時に若旦那が掘出物をなすつたが、あの釜は幾らでしたつけ……然う／＼一両二分ですか、それが二百両にもなると仰しやつたから、私も何うか彼アいう釜があつて安かつたらお目に掛けて、二百両でなくとも五十両にでもなれば、幫間を廃める氣でげすから釜の有る度に買つて来ますが、碌なものは有りませんで、考えれば可笑しいなんと、昇夫かこかきに取捕とつかまつてね、あの時は、あなたも変な顔をなせえましたが、虚無僧さんが出て来て、編笠を脱つて、エ、と遣つたんですが、私は人わっちを斬るを始めて見ました、実に驚きました……フ、フ、若旦那、今日ね、仲の町の客で、何時も取巻に来て、変に分らねえ奴なんでげすが、其の人が急に売りてえ刀があるんだが、手前は

方々へ出這入るから世話アしてくれろつて言いますから、若旦那はお目が利いて、大概堀切に居らつしやると思いやしたから、一緒に連れて来たんで、三百両ぐらいの価格<sup>もの</sup>は有るんだが、即金ならば百両でも宜<sup>よ</sup>いというんですが、それが三百両とか五百両とかになれば、私も大きにお世話の仕甲斐があるんですが、何うでげしよう」

伊「刀といえども買いてえ心持が有るんだが、其処へ其の品を持って来たのか」

正「エ、彼所<sup>あそこ</sup>に変な訳の分からねえ侍が居るんですが、祝儀のくれツ振<sup>ふり</sup>が悪いもんで、すから、何処の茶屋でも忌<sup>いや</sup>がられる山田さんてえ人が持つて来ているんでげす」

伊「そんなら早く此方<sup>こちら</sup>へお入れ申せば宜<sup>よ</sup>いのに……あなた何うぞ此方へ、お構いなくお這入り下さい」

山「いや御主人はお在宅<sup>いで</sup>で、御免」

伊「さア何うぞ此方へ、お構いなく」

山「御免を蒙<sup>まう</sup>る……、これは立派なお住居<sup>すまい</sup>で」

伊「生憎<sup>あいにく</sup>誰も居りませんで……師匠菓子器の蓋<sup>ふた</sup>を明けとくと砂が這入つていけないから……あなた何うぞ此方へ、これはお初にお目に懸<sup>か</sup>ります、私<sup>わたくし</sup>は紀伊國屋伊之助と申しまする至つて不調法もので」



山「手前は山田藤六という者で、始めて会います、正孝がねえ、かね予て最眞になるコレく、  
 の主人は<sup>おおめき</sup>大目利であるから、お世話を為しようという事だから、取敢とりあえず罷り出まかたいと思  
 つても、お宅が分らんと申したら、お寮においでだろうという事で出ましたがね、此の品  
 は手前てまい上役の者が売るのが、余程価値ねうちものなれども、此の度国表たびへ帰るに就いて、是は  
 手放すのに誠に惜しいが、幾いくふり口も有るから手放すのだと申し、刀屋に見せると、差料を  
 売ったという事がばつとしては宜くないというので、心配なしにオイソレと云つて、即金  
 で買つてくれ、ば百金で手放してしまう、併しか次第に因よつて価値ねうちが有つたら、それだけの  
 事にしてくれなければ困る」

伊「私は質を取つて居りますが、小道具の方に目が届きませんけれども、番頭に目の利い  
 てるものも御座いますから、お品を拝見致しましてから御相談をいたしましょう」  
 山「品はこれへ持参致した」

伊「兎に角拝見致しましょう」

といいながら風呂敷を解くと、中に袋入りに成っておりますから、押戴き、

伊「拝見を」

と風呂敷包から取出して見ると、白茶地亀甲形古金欄の袋で、紫羽二重の裏が附いてお

りまする結構な打紐を解いて、ズーツとこき出すと、鞆は別に念の入れようは有りません  
紹色で、丸繰形身入れ白に成っており、淵頭に赤銅七子で金の二足の狂い獅子、  
目貫は横谷宗珉の一輪牡丹に、鍰は信家でございませう。鯨は占城の結構なところ、  
柄糸は煮紺三分に巻き揚げ立派な物でございませう。

伊「何うもお立派なもので」

山「我々には分らんが、売る当人は中々大した金をかけたのだらう、だが火急の事に相成  
つて値売をしている訳にはいから、あなたの目利き次第で価値が有れば、一杯に買っ  
て貰いたい」

伊「お刀身を拝見致します」

と是から鞆を払つて見ましたが、私は刀の見様などは存じませんが、先ず刀を真直に  
立つて暫くの間こう遣つて見ると、刀脊の三つ棟に相成つてゐるカサネの厚い所を見て、又  
こう袖を当てまして暫くの間、鋭尖から横手下物打から鎗、腰刃の辺を見ますと、  
腰刃みだれ深くいたして丁子乱れに成つて居りまして、二尺五寸余もありませう。

伊「誠に結構なお品のように存じますが、これは御銘は誰でございませう、作名は確と有  
りませうな」

山田「それはもう正しい銘が有ります」

伊「誰でございます」

山田「誰だつて、それは云えんが、金子を出して渡せば速かに銘を明そう」

伊「左様なら一寸おナカゴを拝見致しましょう」

山田「それはいけん、それがナカゴを何うも見せるという訳にはいかん、金子を渡してしまつてからなら何うでも宜しい」

伊「何分にもお銘が分りませんと誠に何うも困りますが、お銘を仰しやって下さるようお願いします」

山田「何うも然ういう訳にはいきません、売人に確と頼まれて居るんですから」

正「山田さん、ちよいとこれは何んてえ作銘だと仰しやいな」

山田「然ういう訳にはいかんよ、大夫から確と頼まれてるんだから、愈々買うと云つて金子を渡せば、ナカゴは見られるのだ」

伊「それでは少々お刀を拝借致しとうございます、番頭は少々心得ておりますから、番頭に見せるまで拝借を願います」

山田「然ういう訳にはいきません、直に引取るのなら格別、何うもお前の方へ預ける訳に

はいかん」

伊「能く拝見致しました上では百兩と仰しやっても、二百兩にでも三百兩にでも、五百兩にでも頂戴致します……左様なら後刻番頭を同道致しまして、お宅さまへ出ますが、何処へもお渡しなく私方へお譲りが出来ましようか」

正「そんな事をするのも億劫でげすから、云わない積りで私まで内証で、耳打で、その作銘を一寸いつて下さいな、云わねえくらい強氣と訳の分らねえ事は有りやすめえ」

山田「然うはいかねえよ、それでは金子をもつて大夫のお宅まで来て下さい」

伊「へえ、金子を持参して遅くも夕景までには頂戴に出ますが、何方さまでございます」

正「ナニ、あの、八橋畠の傍で、立派な御門が有つて、生垣に成つてゐるお宅でげす」

山田「他へお見せなさるんではいかん、金子と引替でなければならんよ」

伊「へえ畏りました、後程相違なく私が出ます……師匠お前少し跡に残つてゝくんな」

正「へい……山田さん御免蒙つてお送り申しません」

伊「誠に何うも、左様なら」

山田「それでは後刻」

と山田藤六は帰つてしまいました。

正「あゝいう分らねえ奴なんで、時々変な洒落をいうんでげすがね、忌<sup>いや</sup>な心持になる洒落  
 なんで……刀の銘を云ったつていゝじやありませんか、此方<sup>こつち</sup>で買うのだから、團十郎とか  
 菊五郎とか左團次とかいわなければ給金が打てませんのにさ」

伊「あの刀に就いて少し心に当る事があるから、師匠気の毒だが船を言付けるから一緒に  
 万年町まで往つてくれないか」

正「へえ、何処へでも往<sup>い</sup>きましよう」

とはから屋根船を逃<sup>あつら</sup>えて万年町の岡本政七方の棧橋へ船を繋<sup>つ</sup>けて上り、門口から、  
 伊「誠に御無沙汰を致しました」

政「おやゝこれは伊之助さん、能くおいでなさいました、私<sup>わたくし</sup>も一寸お尋ね申したいと存  
 じながら、種々<sup>いろく</sup>取込<sup>と</sup>が有つて、ついゝ御無沙汰をいたしました、私<sup>わたくし</sup>も彼方<sup>あつち</sup>の方へ保養  
 旁々<sup>かた／＼</sup>見舞に往<sup>ゆ</sup>きたいと思つてましたが……おや、誰かお連れが有るなら此方<sup>こつち</sup>へ」

伊「ナニ彼<sup>あれ</sup>は正孝という幫間<sup>たいこもち</sup>で、師匠此方へ上んねえ」

正「これは始めまして、私は櫻川正孝と申しまする幫間<sup>ほうかん</sup>で、春木町さまには毎々一通りな  
 りません御鼻屑を戴きます……御当家は宜<sup>よ</sup>い御商売でございますな、若旦那、此の位結構  
 な御商売は有りますまい、お店は小く<sup>ちいさ</sup>つてキチンとしていても一寸箱<sup>ちよいと</sup>の蓋を取ると金目の

物が有ったり、ちよいと立掛けて有るお品でも千両二千両ツてんでばすから、此のくらい結構な御商売は無いと思います」

政「さすが流石にしょうばい職業とはいいいながら、這入りながらお世辞は恐れ入りました」

正「いえ全く御世辞じやアないので、真から湧出したのでばす、ちよいと彼の箱の中に在る目貫を一つ取つても千両にもなるんですが、盗めば直に露顕しますから瞞かすことは出来ません」

政「恐れ入りますな……先達て心当りが有りましたから、段々と聞いて見たら、いけな

いんで」

伊「今日こんにち師匠が連れて来た侍の持つて来た品が、其れではないかと思うんですが、予てのお話とは乱れが少し違うようですが、國綱が山の内に居た時の乱れは何うとか、此の間重さんの話でしたが、刀を売りに来たから、買いましようが作銘は誰でばすと云つても云わないんですが、何うしてもそれに違いないんです」

政「誠に何うも有難うございますが、何処からまいりましたので」

伊「八橋畠に居る人なんだそうで」

政「それは何うも、早速重三を呼びに遣りましよう」

と直に手紙を認め、高橋へ小僧に持たしてやると、荷足の仙太郎も何か仲直りの交際で、自分を二人連れて重三郎の処へ来て居りましたから、重三郎が披き見て飛立つ程の悦びで、これから小三郎音羽だけは姿の見えないように屋根船に乗らせ、仙太郎も重三郎も取敢えず政七方へ出てまいりました。

## 四十四

重三「只今はお手紙ゆえ取敢ず出しました」

政「今春木町が来て知らせたから直に呼びに遣つたのだ」

重「これは春木町さま、其の後は誠に御無沙汰をいたしました、此の度はまた御親切に有難う存じます、小三郎さまの仰しやるのには、上の手をもって何んするような事では武士道が立たんと、其処に種々仔細がございまして、敵討をなさいますね、夫に相違ないので、困り事に成つて居りまするが、お刀を取つてしまわない内は踏込む訳にもいかなないので、困つて居りましたのです、誠に有難う存じます、夫に相違ないので」

伊「重三さん、お前さんが私の手代の積りで往つて下さいな、私は金子を持って往きます」

から、百両なら百両其処へ金子を出すから、お前さん其の刀を持って先へ歸つて下さい」

重「誠に有難う存じます…さア仙太郎親方お上んなさい」

仙「御免なせえ」

政「おや／＼丁度好い処へ」

仙「今ね高橋へ来てえると、此方からのお手紙でしたが、何んとも何うも今まで苦勞した

甲斐が有つて、此の上ねえ悦びで、まア何ういう手蔓で其の刀を持って来たので」

政「此処に居る正孝という幫間の世話で」

仙「お前かオイ正孝という幫間はお前か」

正「へえ」

仙「幫間なんてえものは彼方へべつたり此方へべつたりしてえやアがるから、向うの奴に

何か吐すとたゞア置かねえぞ」

といわれ正孝は仙太郎の口の利きようの暴々しいのに驚きまして、け／＼な顔附きを

して、

正「へえ、泥坊物でげすかな、係合になりやすからお世話アしなければ宜かった、驚

きやしたな」



仙「本当に冗談じやアねえぜ、向うの野郎に内通して何か云やアがると手前てめえの首をヒン捻ねじッちまうからそう思え」

正「へえ首捻りや何かは驚きやす……おや、あなたはなんだ、オゝあなた、お前さんだ、誠に何うも」

とピヨコ／＼お辞儀をするので、

仙「何んだ／＼」

正「アノそれ、いつぞやそれ四年後あとの九月の廿日はつか、吉原土手で親方が中へ這入って下すつて、侍がエーツてつて刀を引ひッこ抜いた時に助けて下すつた親方に違いねえようで」

仙「ウーン……あの時の幫間てえちめえはお前か」

正「モシ若旦那お礼を仰しやいよう」

伊「私は親方には時々お目にかゝっているから疾とうにお礼はいっちまったよ」

正「酷ひどうございますね、然そうなら早く知らせて下されば宜よいのに……その節は親方誠に有難ありがたう存じました、私は助かりましたが、あの晩に長次さんはボカリと斬られちました、

あの時の御恩は私は死んでも忘れませんあの時には誰も中へ這入って止め人てがいないところへ、親方が這入って下すつて、無法といつては済みませんが、向うで驚いて手を放したの

で私は逃げられたので、それからというものはお貴方のお顔が目について、忘れませんが、お名前が知れないから只土手さまくって、真に神の如く毎日く拝んでましたが、此方（こち）でお目に懸るとは斯んな嬉しいことはありません、親方のためなら内股膏藥どころじゃア有りません、私は按摩膏（わたくし）に成って親方の方へピッタリ粘著（くっ）いて離れませんので、お手伝いでも遣りましょう」

仙「それは有難い、何にしても斯んな結構なことはねえが、早くしなければ逃げられでもするといけねえから、早い（かえ）が宜い、正孝も一緒に往（い）きねえ、旦那は何うなさる」

政「私はまいりしても却（かえ）ってお邪魔になるばかりで、何んのお役にも立ちますまいから御免を蒙りますが、重三郎と正孝さんとを伊之さんが連れて往（い）って、お刀を先へ取っておしまいなさい、それに親方は子分を二人連れて往（い）くと仰（おほ）しやるから」

仙「ナニ大丈夫（でえい）でござえやす、遅くも今夜の亥刻（よつ）時分までに帰（かえ）って来て、芽出度（めでたく）祝い（うら）い（な）しましょう」

と仙太郎が先へ立ち、後（あと）から三人が棧橋へ出まして、これから船へ這入りました。

正「若い衆（しゅ）さんお頼（たの）み申（まう）しますよ」

伊「師匠（ししやう）此方（こち）へお這入（こち）り」

正「へえ御免下さいまし」

小「これは誠に久しゅうお目に懸りませんが、何時も相変らず御機嫌能く、どなた誰方もお変りなくつて」

伊「へえ、有難う存じます、貴方さまにも御機嫌宜しゅう」

小「これは正孝どの、久しゅう逢いません」

といわれて正孝はげんな顔をして、暫く考えて居りましたが、

正「おや、是は、成田街道で笠を冠つて、笛を吹いてた方で……旦那誠に久々でお目に懸ります、これはどうも思いがけない、若旦那、あなたホラ私達を助けて下さった旦那なんで……お礼を仰しやいよう」

伊「己は疾うにお礼は済んでるよ」

正「貴方のような皮肉なお方はありませんね、そんなら何故早く知らせて下さらないんで……あの時から何うも立派な方だと思いましたが、お大名さまでいらっしゃいますか」

伊「芝の金森さまというお大名の御重役で、稻垣小三郎様と仰しやるお方なんだが、お刀ぶんじつ紛失に就いて虚無僧のような真似をして、散々御苦勞をなすったんだが、是から其のお刀を取りに往くのだ、斯ういう芽出度い事になったのも、お前のお蔭だよ」

正「へい、道理で彼奴はお刀の銘をいいませんでした」

## 四十五

正「これは何うもお立派な奥さまで、初めましてお目通りをいたします。私は正孝と申す  
幫間でございます」

音「正孝はん、久しゅう会いまへんね」

正「おや……これは山口屋の花魁、これは驚きやした、種々な方に出会しますな、花魁  
え、何うもすつかり御様子が変りましたから間違いたんでですが、花魁ばかりは何うも只  
の花魁じゃアない、お姫さまの筋の花魁だつていつてましたが、成程これは成田街道で昇  
夫を投げた方の御新造に違えねえ」

伊「許嫁のお方々さまなんだが、互いに顔を知らず小三郎さまはお刀詮議のために遠国へ  
お出の後で、お父さまを殺した奴は大野惣兵衛というもので、其奴が矢張りお刀を盗んで  
持つてるばかりでなく、石川さまを殺した奴ゆえ両家ともに敵に成つて大野惣兵衛、然  
ういうわけだからお前と己と番頭さんと三人で先方へ往つて、価値に構わず二百両でも三

百両でも金子を投<sup>ほう</sup>り出して其の刀を取上げてしまふ、跡へ若旦那とお嬢さんが踏<sup>ふんご</sup>込んで往くという仇討<sup>かたきうち</sup>ののつけの案内がお前だよ」

正「これは恐れ入りやす、これはどうも御免を蒙りましょう」

伊「御免を蒙るつてえ奴が有るかえ」

正「だつてサ敵討なんぞに幫間の出る訳のものじゃありません、煤掃<sup>すすは</sup>きのドンパタやる時でさえ何の役にも立ちませんもの、敵討の処へ往つたら腰が抜けて這つて逃げるくらいのものでげすから御免を蒙りましょう」

仙「今若旦那や花魁の御恩は死んでも忘れねえと云つたじゃアねえか、殴るぜ」

正「これは恐れ入ります……宜うございます私<sup>わたくし</sup>は死にますく、私は蔵前の売<sup>うらない</sup>卜者に占<sup>み</sup>て貰つても、お伺いをしてても寿命が短かい、目の上に何とかいう黒子<sup>ほくろ</sup>が現われてるといいましたが、土手で斬られ損ない、成田街道でも殺されるところを助かったのでげすから、三度の神は正直で、今度は殺されるんですが、こんな事は正直でない方が宜しい」

と云つて居る内に船が著<sup>つ</sup>きましたから、

伊「師匠お前案内をしねえ」

正「宜しい」

といいながら端折はしおりを高く取りましたので、

伊「そんなに尻を端折はしよらないでも宜いいじやアねえか、さッさと這入んねえな、取次を頼みねえ」

正「えゝ、取ツ附き、取ッ附じやアねえ取次だ……お頼み申しますゝ」  
と震え声でいう。

伊「変な声をするな、しつかり云いねえ」

正「お頼み申します」

山田「どーれ」

正「オウ恟びくりした」

山「おやゝこれは何うも、大夫もお待兼だ、番頭さんを御同道かえ、正孝上んな、どうぞ此方こつちへ」

伊「へー御免を蒙ります……さア正孝往いきなよ」

と云われて正孝はかたまつてしまい、両手を合せて拝みながら、  
正「私わたくしは何うぞ御免を」

といい捨て表へ駆け出してしまふ。是から伊之助と重三郎は座敷へ通ると、お茶烟草盆

菓子などが出る内に、奥から出て来たのは八橋周馬で、何ういうことでございますか水色に染紋の帷子かたびらを着まして、茶献上の帯を締め、月代さかやきを少し生やして居ります。年齢三十七八、色白く鼻筋通り、口元の締った、眉毛の濃い、品の好い男よで、ピタリと居り著いた処は成程五百石も取る見識が有り、其の上にこやかで、横着ものゆえ猫撫声を出して、周「さア、何うぞこれへ、始めまして手前が八橋周馬で、此の度火急たびに国表へ帰らんければならので、丹誠して拵えた刀ゆえ惜しいものだが、然う、幾口いくふりもは荷になって持つて往くことが出来んに依つて、抛よんどころなく払つてしまふのだが、他へ見せれば何程いかほどでも二つ返事で金子を出そうけれども、名高いものゆえパツと致すと宜くないから、作銘の処は云わないようにと言付けて遣つたために、お前の方へ手数てかずを懸け、誠に御面倒なことで」伊「いえ何う致しまして、私わたくしにはほとんど目が届きませんから番頭を連れて参りましたが、少々其のお腰を拝見致しまして、其の上代価の所は二百両でも三百両でもお好み次第に差上げまする心得で」

周「ア、左様か」

と刀懸に懸けて有つたのを持つて来て伊之助に渡すを、受取り、又重三郎に渡す。重三郎は拵えなどは見は致しません、直すくに引抜いて見ましたなれども、粟田口國綱の刀は見る

度に乱が違たひみだれうものだから、心を静めて熟々つく／＼見ますると、疑いもない國綱なれば、刀を鞘に収め、

重「エ、これに相違ございません」

といい捨て刀を持ったなり伊之助と一緒にバラ／＼／＼と表の方へ駆け出しましたから、八橋周馬は驚き、山田藤六も恟びつくり致しました。

周「コレ待て賊」

といいながら追掛けて出る処へ、音羽小三郎の二人は襟たすきを十字に綾取り、端折はしよりを高く取り、上締うわじめをしめ、小長いのを引抜き物をも言わずツカ／＼と進んでまいり、今八橋周馬が敷台口へ下りようとする前に立塞たちふさがりました。

小「おのれ大野惣兵衛、吾は稻垣小三郎なるぞ、父の仇覚悟致せ」  
かたき

と身構えた様子を見て山田藤六は肝を潰して、玄関の長四畳の処へペタ／＼と坐つてしまふ。八橋周馬は物をもいわず奥の方へ逃げ込む。小三郎は跡から続いて追ひ掛ける。音羽は女ながらも胆たんの据すわつたもので、今腰が抜けて坐つて居る藤六を振向きながら一刀ひとかたな浴あびせる。

藤「ア」



という声諸共にパタリと倒れて息絶える。小三郎は追い掛けながら、

小「おのれ逃げるとは卑怯であろう、丈助と其の方と合体して國綱の刀を盗み取り、三ヶ年以前父小左衛門を鴻の台にて殺せし大悪人、立派に侍らしく、逃げ匿れを致さんで尋常に勝負を致せ」

音「王子権現の帰り路に、三河島の茂みに待受け、鉄砲で父を打殺したに相違有るまい、そのみならず丈助といい合せ、だまして私を廓へ沈め、のめくくと客に成り、能くも／＼のめくくと此の身を受出し女房になれと云いおつたな、云おうようなき人非人最早逃げる道はないから覚悟をしろ」

大野「オ、音羽か」

と言つたが惣兵衛も肝を潰し、大刀の鞘を払つて振り上げたが、斬込む了簡もなく、只ウーンくと云つてゐるばかり、小三郎は元より早業の名人ゆえ、

小「天命思い知つたか」

と斬り込むを、惣兵衛は一步退いてチャリくと受け止め、チャくくと二三合合せ、少しの隙を覗つて惣兵衛が庭へ飛び下り、パタくくと駈けてまいり、生垣を飛び越えて土手の方へ逃げ出す。

小「卑怯だ返せ」

音「逃げるとして逃がそうか」

と跡から追い掛ける。惣兵衛は土手伝に綾瀬の方へ逃げて往くと、ガヤ／＼多勢黒山のように人が立つて居りまして、バラ／＼礫を投りました。此の石は矢切の渡口に居りましたおしのと恭太郎が、御名号を書いては積み上げたのが、山のようになつて居ります間へ匿れて居るのは、恭太郎に昇夫の安吉、重三郎、正孝などで、バラ／＼石を投げると弥次馬も手伝つて投ります。大野惣兵衛は最早目が暗んで居りますから、先には助太刀が有ると思い、後へ帰ろうとしたが、後からは小三郎音羽が追い掛けて参るので、これは堪らんと思い、刀を持ったなりドリと綾瀬川へ飛び込むと、葎の繁った処に一艘船が繋いで居りましたが、苦を揚げて立出たは荷足の仙太郎で、楫柄を振り上げて惣兵衛の横面を殴る。

大野「アツ」

といいながら此方へ泳ぎ著き、上りにかゝる処を小三郎が飛び込んでズーンと惣兵衛の肩先深く斬り込む。

大野「アツ」

といつて倒れるところを音羽が一刀斬り附ける、小三郎は惣兵衛の髻を掴んで上へ引揚げ、

小「ヤイ大野、其の方は卑怯な奴であるぞ、何うあつても汝の首を提げて屋敷へ帰らねば武道がたゝぬ、実に悪むべき奴であるぞ」

音「天命思い知ったか」

と二人して止めを差しましたは実に立派なことでございます。小三郎は泰然として少しも騒がず後へ退く処へ、船から仙太郎も上つてまいり、

仙「お芽出度うござえます、お怪我はござえませんか」

小「仙太郎親方本懷を遂げて此の上の悦びはございません」

仙「何んとも何うも申そうようはございません、先ずまアお芽出度うござえやした、止めはお差しなすったか、私も此奴じゃア何のくれえ苦勞してえるか知れやせんから、少しばかり斬らして下さい、重さんも此処へ来ねえ」

重「ハイ、此奴でございますか、畜生め、四年以来一通りならない苦勞をさせやアがつて、此ん畜生め」

といいながら髻の毛を一本／＼引抜く、仙太郎も榮螺のような拳骨を固めポカ／＼殴り、

仙「安やい、手前も此処へ来い」

安「誠にお芽出度うござえます…此ん畜生め、人に散々こええ思えをさせやアがツて」  
と二ツ三ツ打つ。

伊「師匠此処へ来なよ」

正「私も一寸と向脛の毛を三本ばかり抜きましよう」

と云つてるところへ、向うからバラ／＼と侍が駆けて参りましたから、小三郎は血に染つた刀を提げたなり油断なく身構え、何者が来たかと思ひ、ト見ると重役渡邊外記が先へ立ち、金森兵部少輔さまの御舎弟八良五郎様がお野懸けの歸りで、稻垣小三郎の仇討ちの事をお聞き遊ばし、お出になりましたので、これから小三郎が粟田口國綱のお刀を殿さまに差上げました。金森八良五郎様もことのほかお悦びにて、稻垣小三郎は元へお召し返しに相成り、石川家も再興致しまして、音羽と小三郎とは夫婦になり、後に兩人の中子をもうけ、長男を以て石川の家を相続させまして、八百石にお取立になりました、家長く栄えましたが、伊之助は全快に相成りましたゆえ、岡本政七の妹お雪を元々に婚姻致して、これも末長く中よく栄えました。また仙太郎は金森様のお舟御用を達しますという、末お芽出度いお話でございます。これで粟田口のお話は読切に相成りました。

（拋酒井昇造速記）



## 青空文庫情報

底本：「圓朝全集 卷の三」近代文芸資料複刻叢書、世界文庫

1963（昭和38）年8月10日発行

底本の親本：「圓朝全集 卷の三」春陽堂

1927（昭和2）年1月28日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

ただし、話芸の速記を元にした底本の特徴を残すために、繰り返し記号は原則としてそのまま用いました。同の字点「々」と同様に用いられている二の字点（漢数字の「二」を一筆書きにしたような形の繰り返し記号）は、「々」にかえました。

また、総ルビの底本から、振り仮名の一部を省きました。

底本中ではばらばらに用いられている、「其の」と「其」、「此の」と「此」、「彼《あ  
の》と「彼《あの》」は、それぞれ「其の」「此の」「彼の」に統一しました。

また、底本中では改行されていませんが、会話文の前後で段落をあらため、会話文の終わ

りを示す句読点は、受けのかぎ括弧にかえました。

※底本に混在している「衛」と「衛」、「嶋」と「島」「鐘ヶ淵」と「鐘が淵」、「美恵」と「三恵」、「長次」と「長治」、「寶」と「寶」、「芦屋」と「蘆屋」、「劔」「劔」は「劍」、「姪」と「妊」は、それぞれ「衛」、「嶋」、「鐘ヶ淵」、「美恵」、「長次」、「宝」、「蘆屋」、「劍」、「妊」に統一しました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5186）を、大振りにつくっています。

入力：小林繁雄

校正：門田裕志、仙酔ゑびす

2010年10月18日作成

2011年2月13日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 粟田口霑笛竹（澤紫ゆかりの咲分）

粟田口霑笛竹（澤紫ゆかりの咲分）

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

著者 三遊亭圓朝

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>